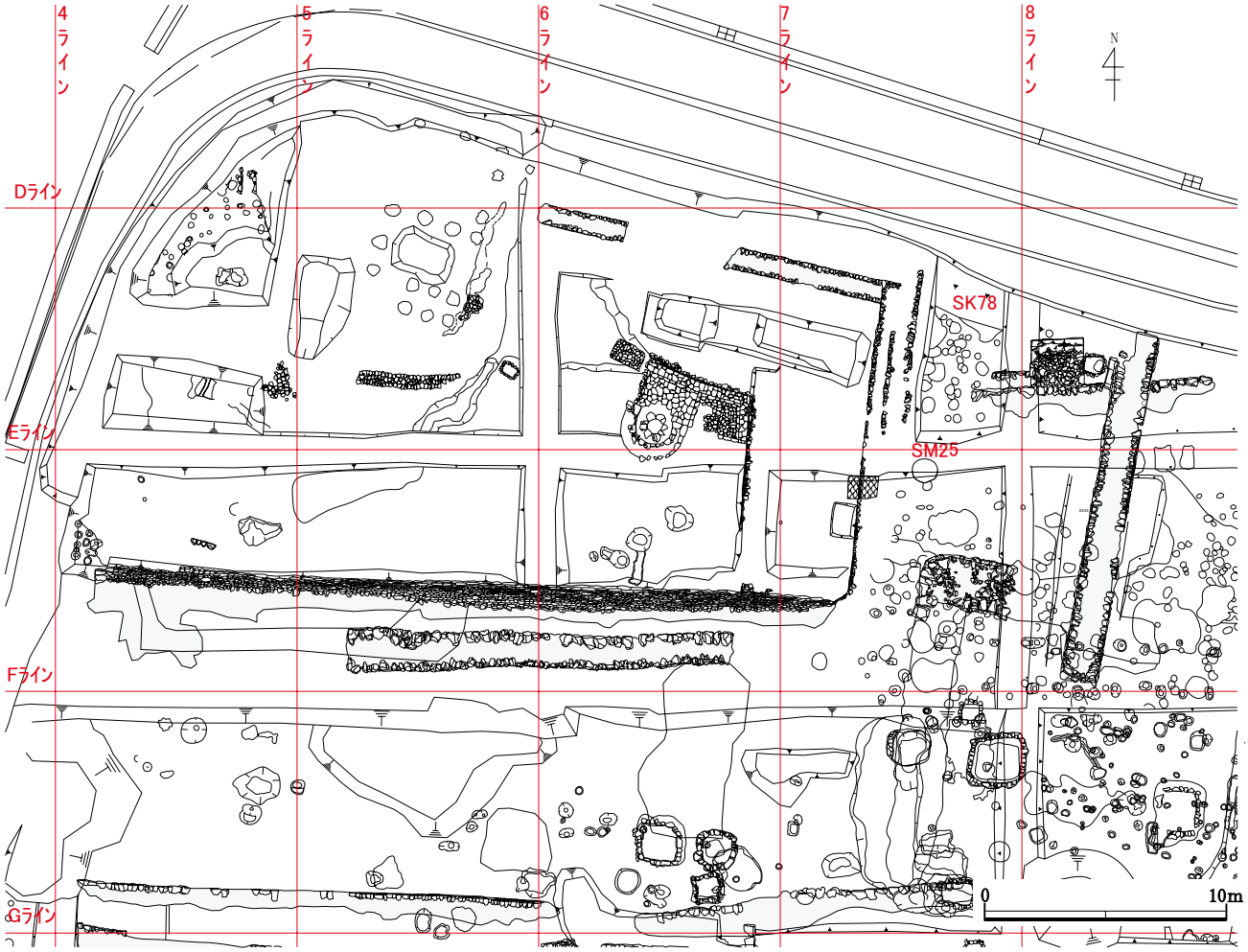
第５項　近世3（中城御殿創建～ 17世紀代）～グスク1の遺構・遺物

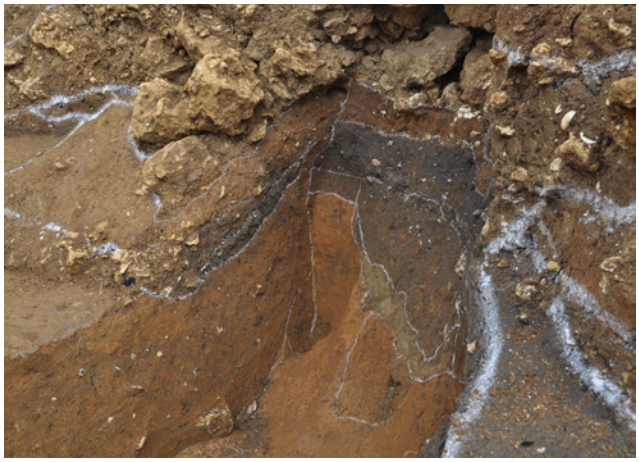
A：遺構

SK78

調査区北側で検出した素掘りの土坑で全体は不明である。上部にはSA33がある。遺構下部にはクチャブロックを含む堆積土がある。白磁壺の完形品が出土している。口縁部が下を向いた状態で単独で出土している。



第118図 近世3～グスク1の遺構1

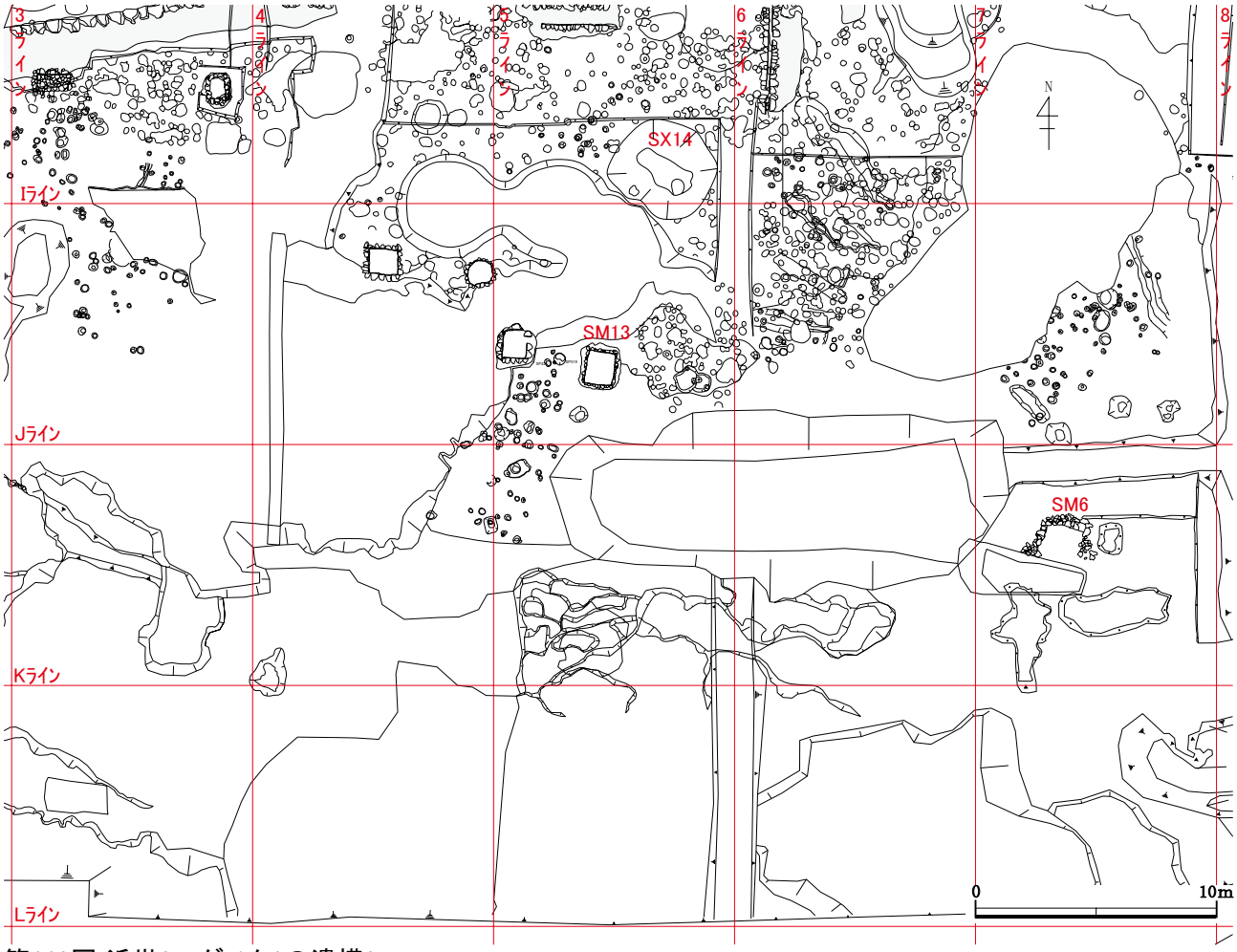


SK78 検出状況（南東から）

SK78 遺物出土状況

SM6

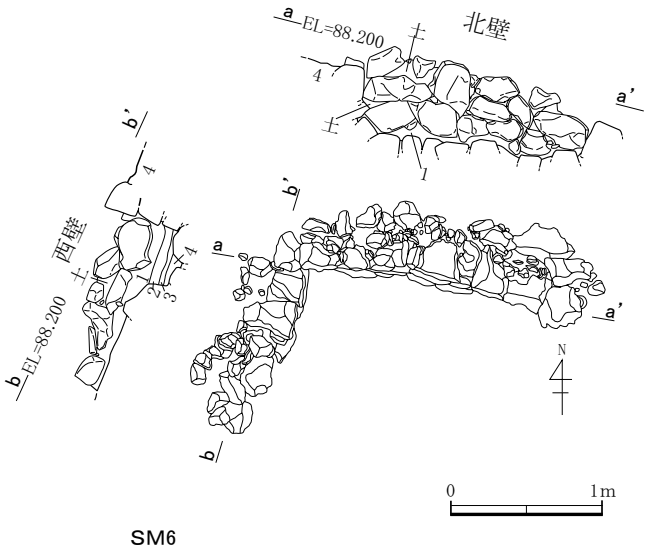
岩盤を掘り込んだ石組土坑である。岩盤上部には3枚の堆積土が薄く堆積しており、その上部にはニービ破片やタイ産褐釉陶器が出土している。これらの層は遺構の使用が終わった段階で埋められたものと考えられる。このような出土状況と近代以降の遺物が混入しないことから、遺構形成面が判然としないが、当該時期の遺構と判断した。



第119図 近世3～グスク1の遺構2

SM6 堆積状況（東から）

SM6 検出状況（南から）



第120図　近世3～グスク1の遺構3

SM6 完掘状況（東から）

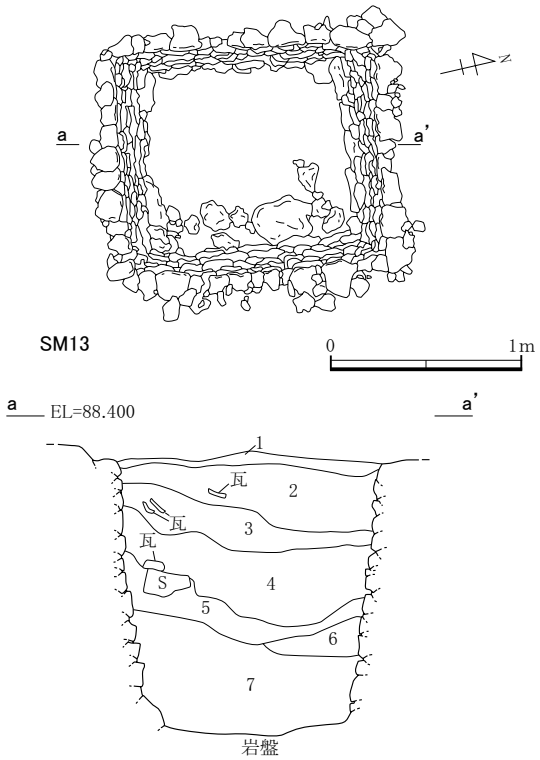
SM6 完掘状況（南東から）

SM13

造成3と地山を掘り込んだ方形の石組土坑である。小型の石で石積みがされている。遺構内の埋土に石灰岩礫などが混入している。深さは約2mある。3層部分には焼土のような赤い土が帯状に堆積している。遺構の機能が終了した際に短時間の間に埋められたと考えられ、機能していたときは、内部に堆積土はなかった可能性がある。

断ち割りを行ったところ、裏込部分が僅かにあることが確認できた。遺構の堆積状況は、近世3の項で先述したSM8と比較的類似している。底部は素掘りの状態で石灰岩の岩盤が露出している。

SM13 完掘状況（東から）



第121図 近世3～グスク1の遺構4

SM13 断ち割り状況（東から）

SM13 半裁状況（東から）

SM25

Ⅱ区で検出した円形石組土坑である。造成7及びⅣ層を掘り込んで形成されている。遺構上部には造成2が堆積していることから、18世紀代までには機能が終了した遺構であると考えられる。上部半裁で調査を終了した。内部の埋土には大きめの石灰岩礫が混入している。

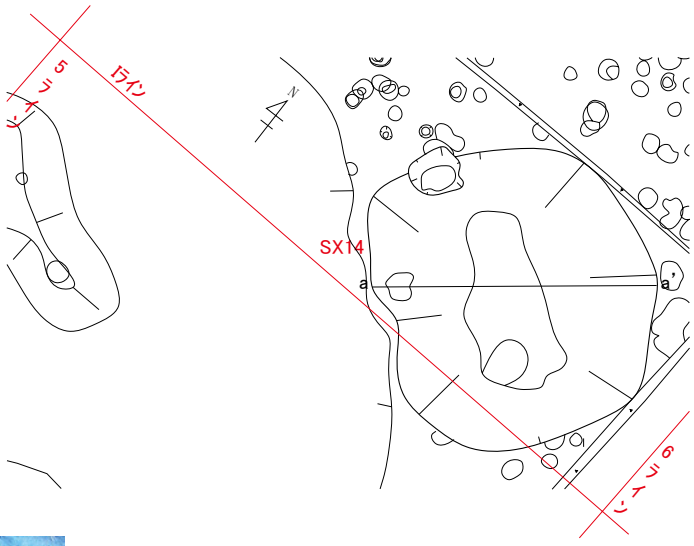
SM25 検出状況（西から）

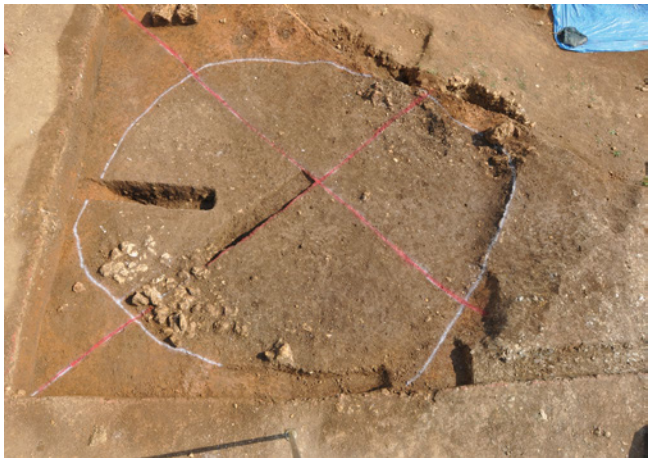
SM25 検出状況（南から）

SX14

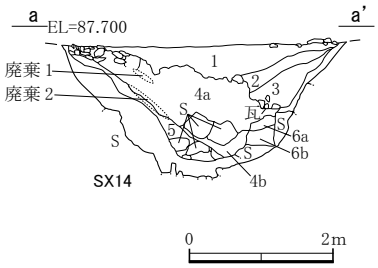
地山面で検出した大型円形土坑である。上部には僅かに石灰岩礫を混入した土が堆積しており、周辺造成土の土と似る。掘り込み面に沿うように石灰岩礫が充填されており、その上部には一部にオキ

ナワヤマタニシを中心とした巻貝が集積している部分がある。石灰岩礫を除去するとその下部には黒褐色と灰黄褐色の混ざった土が堆積しており、ここにも巻貝類の集まっている部分がある。石灰岩礫の混入や巻貝類の存在から有機物の廃棄土坑、もしくは地山面を大きく掘り込んだ土取り穴の跡かと想定したが、判然としない。





SX14 検出状況（北から）



第122図　近世3～グスク1の遺構5

SX14 半裁状況１（東から）

SX14 半裁状況２（東から）

図版17 近世3～グスク1の遺構

B：遺物

近世3～グスク1の遺構からは、後述するグスク1の遺構から出土する遺物様相と僅かに異なる。また、堆積状況や検出状況を考慮し、当該時期の遺構としている。

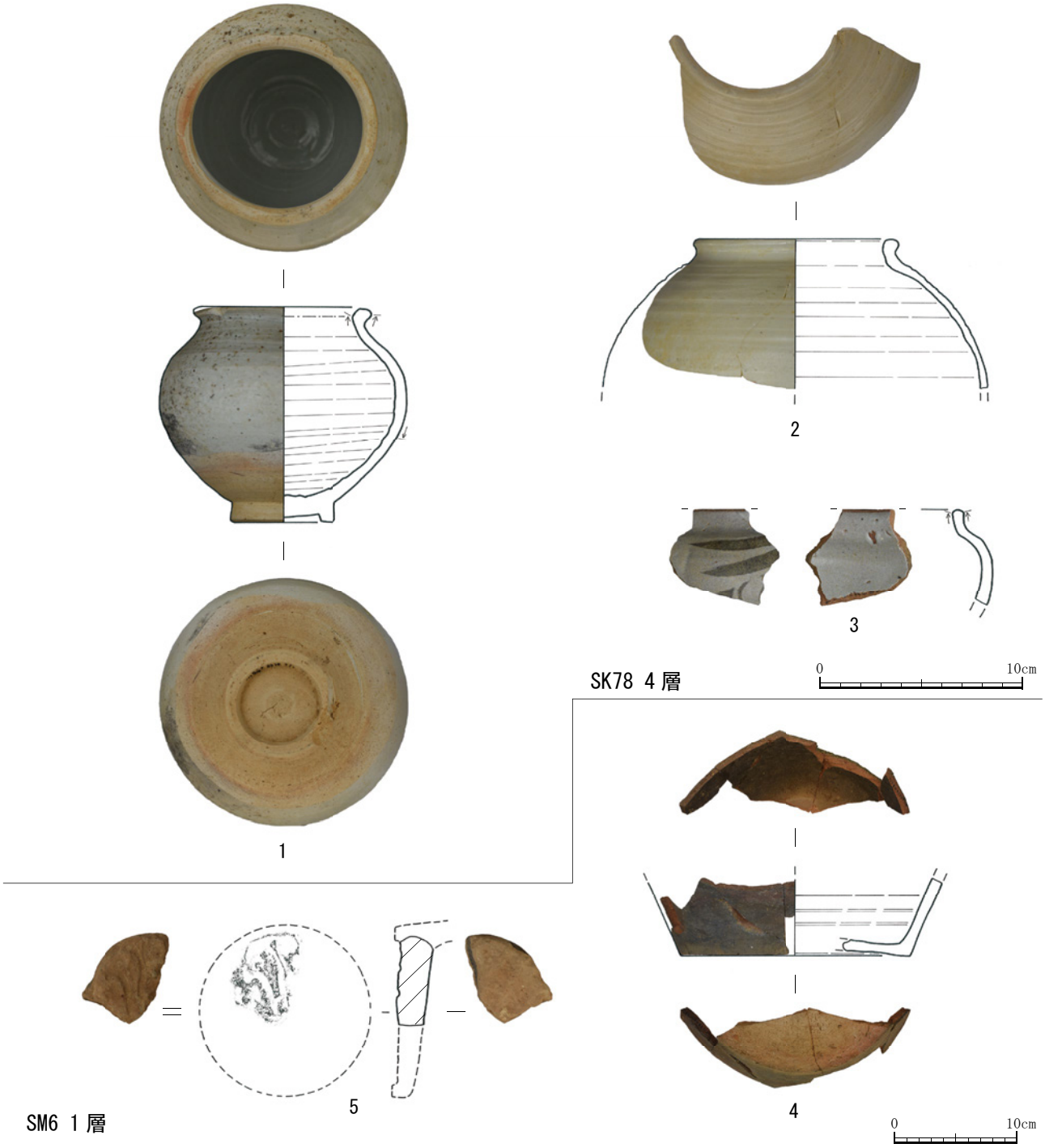
個々の遺物様相については第11表に記す。各遺物の参考文献等は本書末にまとめて記す。

第11表　近世3～グスク1　出土遺物観察一覧a

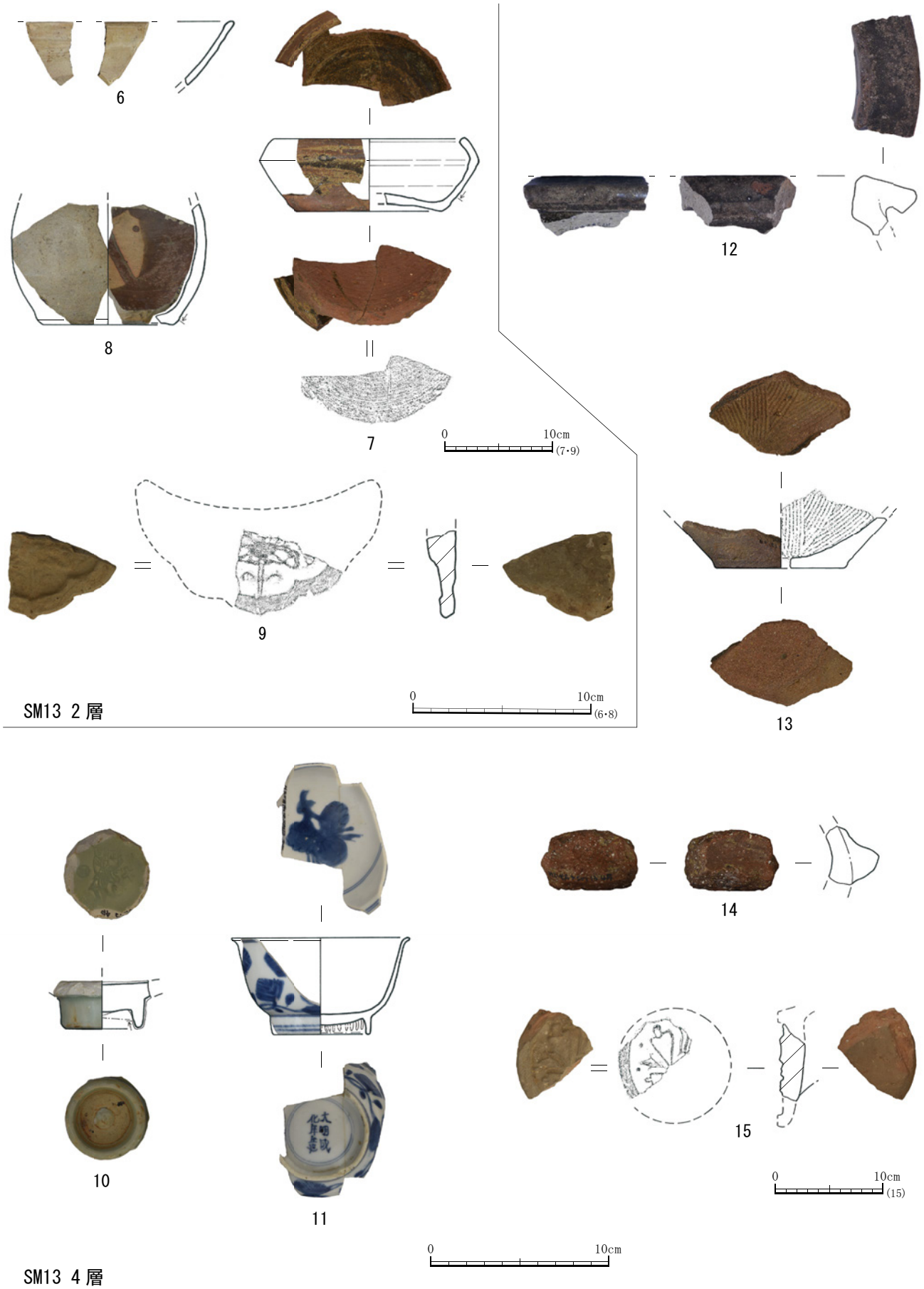
挿図番号	遺物番号	種類	器種	分類	部位	法量（cm）			観察事項	出土位置	
						口径	器高	底径		遺構	層序
第123図	1	中国産白磁	壺	－	口～底	8.7	10.6	5.1	胎土は灰白色。釉は青灰色で、口唇部は釉剥ぎされ、外面胴部下半は露胎。内面の釉は光沢あり。	SK78	4層
	2	中国産白磁	壺	－	口縁	10.0	－	－	胎土は灰白色。釉は灰白色。外面ロクロ目顕著。	SK78	4層
	3	本土産陶器	壺	－	口縁	－	－	－	肥前(唐津)産。胎土は赤褐色。口唇部を釉剥ぎ。鉄絵で外面に唐草文。	SK78	4層
	4	タイ産褐釉陶器	壺	－	底部	－	－	18.6	内外面露胎。胎土は赤褐色で白色の混入物少量あり。	SM6	1層
	5	明朝系瓦(灰色)	軒丸瓦	－	瓦当	－	－	－	上原：草花文側視1型第Ⅰ文様系B式　石井：牡丹文様Ⅱ系	SM6	1層
第124図	6	中国産白磁	皿	福建D'類	口縁	－	－	－	胎土は黄白色。釉は乳白色で貫入あり。外面にロクロ目顕著。	SM13	2層
	7	タイ産褐釉陶器	鉢	－	口～底	17.4	6.7	13.4	胴部より大きく内湾する。胎土は暗褐色で白色の混入物あり。釉は黄茶色で、外面口唇部下より露胎するが、胴部の一部には施釉される。	SM13	2層
	8	本土産陶器	袋物	－	底部	－	－	7.2	底部僅かに残存し、平底か。	SM13	2層
	9	明朝系瓦(灰色)	軒平瓦	－	瓦当	－	－	－	上原：草花文側視1型	SM13	2層
	10	中国産青磁	碗	Ⅵ類	底部	－	－	4.6	胎土は灰白色。外底面蛇の目釉剥ぎ。見込みに人物文(僧侶か)。	SM13	4層
	11	中国産青花	碗	明（Ⅲ類）	口～底	9.8	5.3	5.4	端反口縁。胎土は白色。ダミ塗りで外面に唐草文、見込みに花弁文。外底面に「大明成化年造」の銘。	SM13	4層
	12	中国産褐釉陶器	壺	5類	口縁	－	－	－	胎土は灰白色、白色粒少量含む。釉は暗オリーブ色。口唇部に焼き具の跡か。	SM13	4層
	13	本土産陶器	擂鉢	－	底部	－	－	7.2	底部平底。胎土に砂粒など多量混入。内面には櫛目が密に施される。	SM13	4層
	14	土器	鍋	－	胴部	－	－	－	鍋製品の把手。宮古・八重山産か。内面はナデ成形丁寧。外側には突起状部分あり。胎土に角をもつ粒子が多量混入。	SM13	4層
	15	明朝系瓦(褐色)	軒丸瓦	－	瓦当	－	－	－	笵バリ残る。文様鮮明。上原：浦添城ⅠBa01式　石井：浦添城C	SM13	4層
第125図	16	中国産青花	皿	漳州窯系	口～底	10.6	2.9	5.1	胎土は灰白色。釉は乳白色で外底面露胎、畳付釉剥ぎ、見込みは蛇の目釉剥ぎ。透明釉は内外面胴部途中まで施釉。内面胴部見込み付近は削りがあり、二重の圏線が施される。	SM13	6層
	17	中国産青磁	碗	Ⅳ類	底部	－	－	6.8	胎土は灰白色。外底面露胎。見込みに渦巻文。	SM13	7層
	18	瓦質土器	鉢	－	底部	－	－	－	底部平底。底部板状工具でナデ成形か。	SM13	7層
	19	中国産白磁	皿	福建D'類	口～底	11.0	3.25	4.8	胎土は黄白色で軟質。釉はオリーブ灰色で貫入あり。口唇部及び内外胴部下半より露胎。見込みは被熱を受けたと思われ赤色が目立つ。	SM13	－
	20	中国産青磁	碗	Ⅵ-1類	口縁	11.8	－	－	胎土は赤褐色で軟質。釉はオリーブ褐色。外面に線刻蓮弁文。	SM25	－
	21	中国産青磁	碗	幅広高台タイプ	底部	－	－	7.3	胎土は灰白色、露胎部は赤褐色。見込みは蛇の目釉剥ぎ、中央が盛り上がる。外底面露胎、高台は端部を抉り、畳付けは平坦。	SM25	－
	22	中国産白磁	皿	福建D'類	底部	－	－	5.6	胎土は灰白色。釉は青白色。見込みは蛇の目釉剥ぎで、外底面露胎。見込みに印花文か。高台端部を抉り、畳付を釉剥ぎ。	SM25	－
	23	中国産白磁	皿	景徳鎮窯系	口～底	10.0	2.45	5.6	端反口縁。胎土は灰白色。釉は乳白色で、畳付を釉剥ぎ。	SM25	－
	24	明朝系瓦(灰色)	軒丸瓦	－	瓦当	－	－	－	上原：首西ⅠAe03式系　石井：西のアザナH系	SM25	－
第126図	25	中国産青磁	皿	Ⅴ類	口～底	11.4	3.3	5.8	稜花皿。胎土は灰色。釉はガラス質で貫入あり。外底面を蛇の目釉剥ぎか。内面口縁下に口唇部に沿った3条の圏線、胴部に草花文。	SX14	1層
	26	中国産青磁	碗	Ⅶ類	底部	－	－	5.7	胎土は黄白色で軟質。釉は乳白色で貫入あり。畳付を釉剥ぎし、外底面は露胎。見込みに1条の圏線。	SX14	1層
	27	産地不明陶器	鉢	－	底部	－	－	9.8	胎土は乳白色。釉は黒色で外面胴部下半より露胎。畳付は幅が広く平坦。	SX14	1層下
	28	中国産白磁	皿	景徳鎮窯系	口～底	－	－	－	端反口縁。胎土は白色。釉は乳白色。畳付を釉剥ぎ。器壁が厚く、器高も深い。	SX14	4層
	29	中国産青花	皿	明（Ⅱ-2類）	口～底	9.8	2.9	2.4	碁笥底。釉は青白色。外面口縁下に波状文、胴部に芭蕉文。内面見込みに2条の圏線とその内部に梅樹文。	SX14	4層
	30	ベトナム産色絵	皿	－	底部	－	－	6.7	胎土は黄白色。畳付を釉剥ぎし、外底面は露胎。外面に圏線、見込みに赤色で菊花唐草文、緑色で雲文。	SX14	4a層

第11表　近世3～グスク1　出土遺物観察一覧b

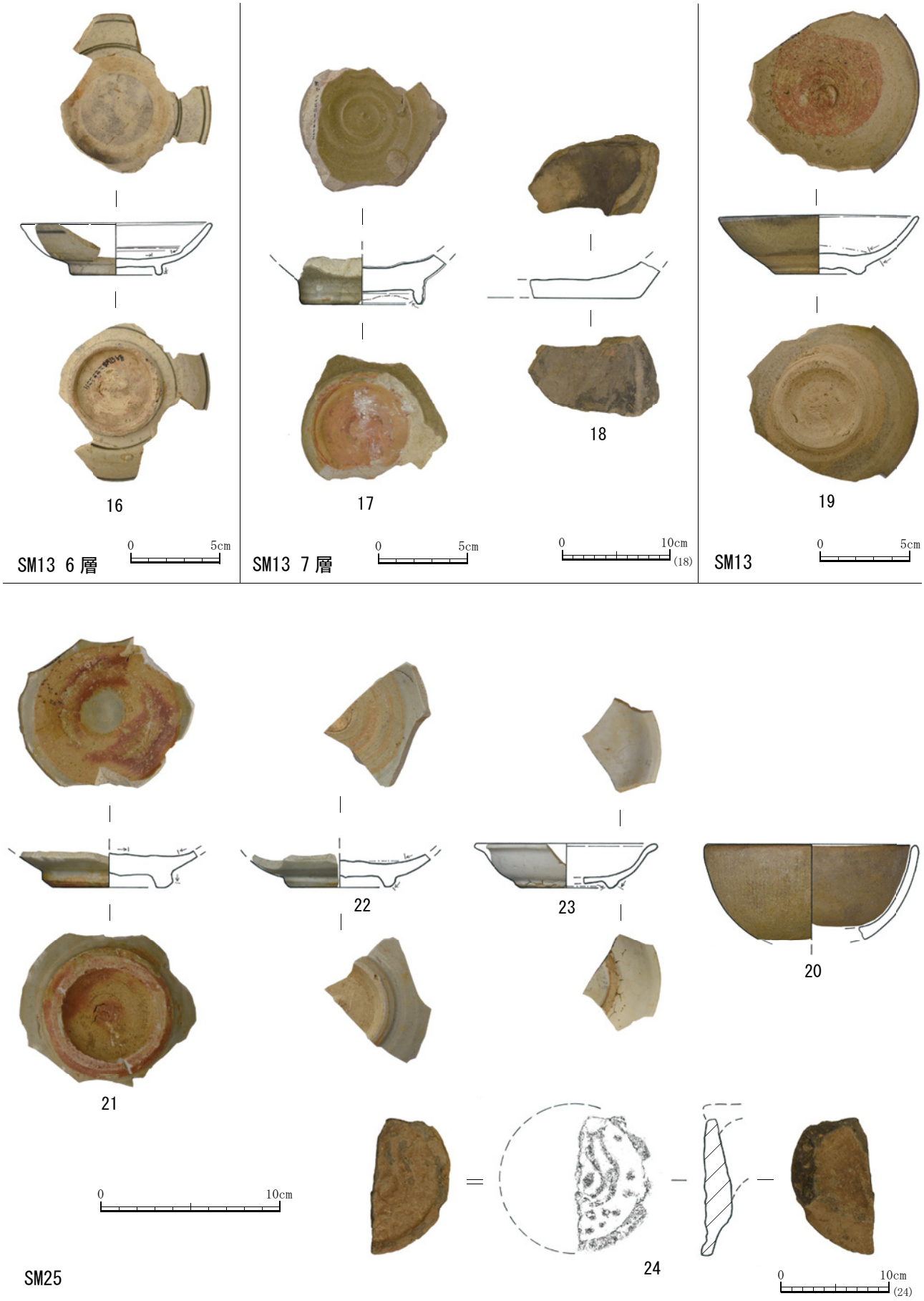
挿図番号 遺物番号		種類	器種	分類	部位	法量（cm）			観察事項	出土位置	
						口径	器高	底径		遺構	層序
第126図	31	中国産青磁	碗	Ⅵ	底部	－	－	5.6	胎土は黄灰色で軟質。釉は暗オリーブ色で貫入あり。高台外面途中より露胎、外底面の一部に釉がかかる。見込みに1条の圏線とその内側に印花文。	SX14	6層
	32	本土産陶器	蓋	－	－	11.8	－	－	ロクロ成形。胎土は灰黒色で堅緻。外面に褐釉が施釉される。	SX14	6層



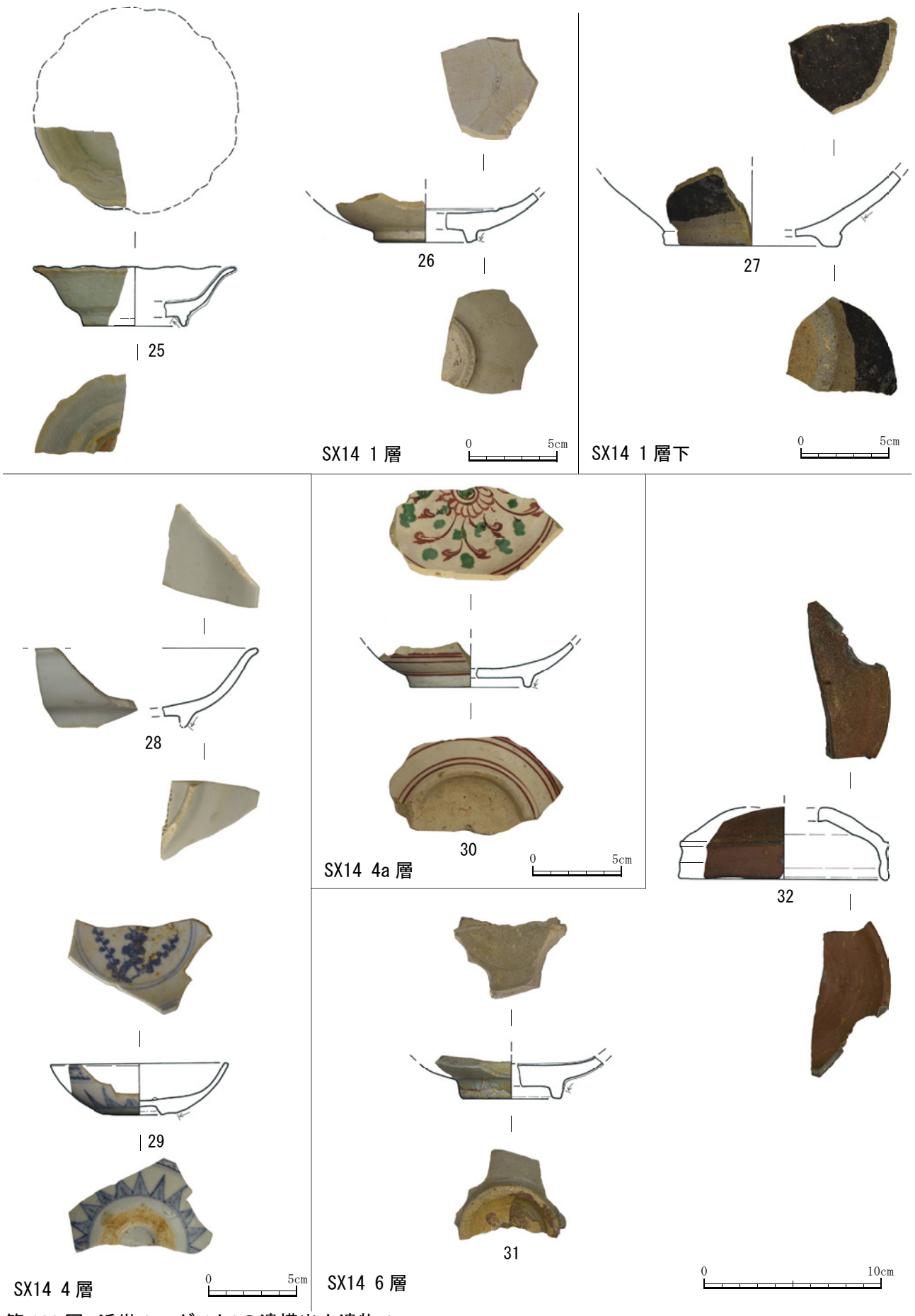
第 123 図　近世 3 ～グスク1の遺構出土遺物 1



第 124 図　近世３～グスク1の遺構出土遺物２



第 125 図　近世 3 ～グスク1の遺構出土遺物 3



第 126 図　近世３～グスク1の遺構出土遺物４

第３節　グスク時代の遺構・遺物

グスク時代の遺構は、柱穴跡や廃棄土坑などが確認された。遺構はほとんどが地山面や岩盤上で検出したものがほとんどであり、中にはグスク時代の造成土が確認できた。グスク時代の造成土に覆われるように堆積をした状態で検出した遺構もある。これらをふまえてグスク1（15 ～ 16世紀代）、グスク2（15世紀代）に大別して報告する。

第１項　グスク1の遺構・遺物

A：遺構

SJ2001

地山面で検出した素掘りの遺構で、検出時に褐釉陶器壺片が遺構の掘込面に沿うような形で検出したため、埋甕として想定して調査を行った。掘削を進めると、中国産褐釉陶器壺が埋められた状態で、上部は削平などにより残存していないことが判明した。壺内部に堆積していた土はほぼ変化に乏しいものであったため、廃棄時に埋められた土だと考えられる。堆積土の底には不明金属製品が出土した。壺の内底に密着するような形で出土したため、元々壺内に入っていたものと想定できる。周辺に柱穴跡が確認できることから、建物に伴う埋甕と想定できる。

SJ2001 検出状況（東から）

SJ2001 半裁状況（南から）

SJ2001 遺物出土状況（東から）

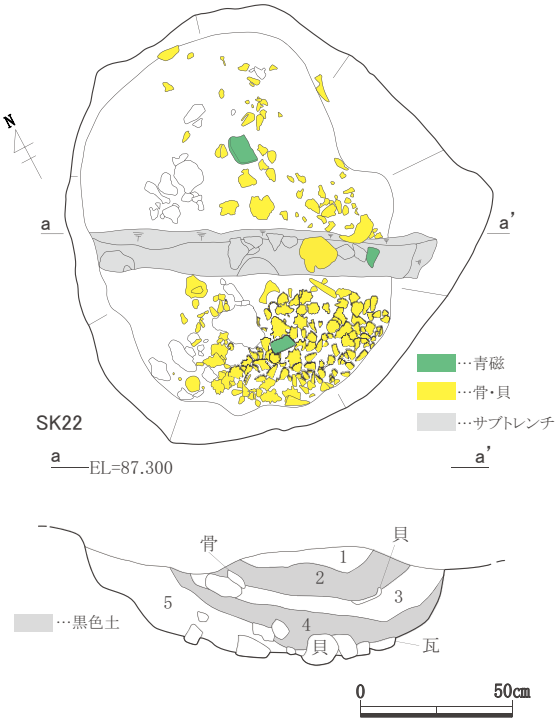
SJ2001 完掘状況（東から）

図版 18　グスク1の遺構 1

第127図 各遺構（グスク1・グスク2）

SK22

地山面で検出した素掘りの円形土坑である。遺構上部の土は上層の造成3と判別が困難で上層の遺物が混入している可能性がある。掘削を進めると、黒色を呈する土に貝、骨などの自然遺物と青磁片などが出土している。遺構内部の堆積状況を確認すると、マージ粒や炭などが混入する層が最下層にあり、その上部には黒色土が堆積している。さらにその上部には乾燥すると灰褐色になる土が交互に堆積しており、帯状になっている。黒色土には貝や骨などが混入しており、廃棄時の土と想定することができる。その上部の土には骨や貝は少なく石灰岩礫やマージ粒などが混入している土で、黒色土とは様相が異なる。これは骨や貝などの有機質の土を覆う形で埋めた土であり臭い消しの目的のため埋めたものだと考えられる。以上のことから廃棄土坑の役割をもつ遺構であると判断した。



第128図　グスク1の遺構1

SK22 検出状況（南西から）

SK22 半裁状況（南西から）

SK22 遺物出土状況（西から）

SK22 完掘状況（南から）

図版 19　グスク1の遺構 2

SK51

石灰岩岩盤と基盤層のクチャを掘り込み形成された、方形の石組土坑である。造成6掘削後、岩盤を露出した段階で遺構を検出した（図版32）。Ⅲ区で検出した当該時期の遺構はほぼ同様の出土状況を示す。岩盤上まで造成6が堆積しており、地山のマージ層などは堆積していない状況から、造成6を造成する段階で岩盤まで掘り込み、その後造成を行っている。その段階でSK51などは遺構上部の石積み等が掘削されたものと考えられ、造成6に埋められたため、初期の中城御殿にあたる時期には地表に露出した状態ではないことが想定される。

検出当初は円形土坑と想定していたが、掘削を進めると石組方形土坑であることが判明した。堆積土の状況は、最下層には暗褐色で炭や石灰岩礫が混入する土が堆積している。その上部には黒色や暗褐色の土が堆積し､その上部には黄褐色土が堆積している。これらの堆積土は色や様相などが異なり、交互に堆積する状況が伺える。これはSK22（第128図）と同様に、廃棄物上に土を覆う行為であると考えられる。堆積土は水平堆積ではなく、やや傾斜した堆積や2層及び3層、8層などでは土を回収した様子が伺える。基本的には何度も掘り返して廃棄を繰り返すわけではなく、短期間に連続した廃棄を行い、廃棄物で充填されると、廃棄をやめ、遺構使用を終了することが考えられる。

SK51からは多種多様の遺物が出土し、最下層からはガラス製品（第151図36・37）が出土した。このガラス製品は後述する第5章自然科学分析の項目で、蛍光Ｘ線分析を実施している。その結果、鉄の還元発色によって緑色を呈する可能性が高いことが判明した。

その他には、中国産青磁、ベトナム産白磁、タイ産褐釉陶器、宮古式土器などが出土した。また、ヤコウガイやシャコガイ、魚骨や獣骨が大量に出土している状況から廃棄土坑と想定できるが、形成当初の目的が廃棄目的か否かは判然としない。

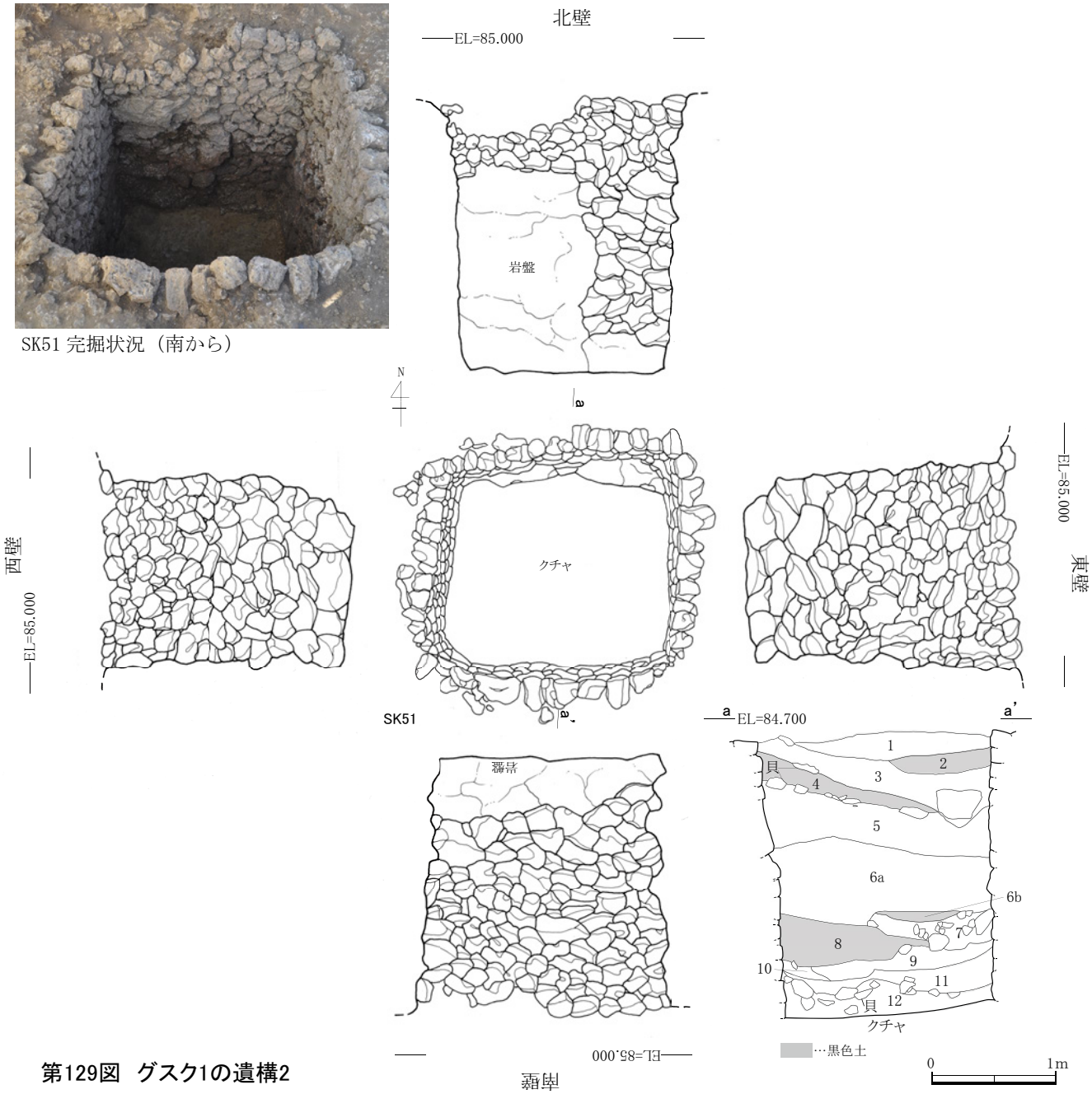
遺構上部が造成6に覆われた状況から、中城御殿が創建される以前に形成された遺構と考えられる。廃棄された陶磁器類を使用する人々や出土した貝や骨等を食することが可能な人々について検討する必要がある。今回の発掘調査ではグスク時代の柱穴跡が多く確認されているため、当該地に人が生活を営んでいたことは判明している。SK22などと比べると遺構の規模や廃棄されたものが異なる状況もあるため、各遺構には時期差や使用目的が異なることも想定できる。周囲には大美御殿もあることから、大美御殿で使用した陶磁器類や骨・貝類を廃棄するための土坑である可能性もある。今後の検討を要する。

SK51 検出状況（北から）

SK51 調査状況

図版 20　グスク1の遺構 3

SK51 完掘状況（南から）



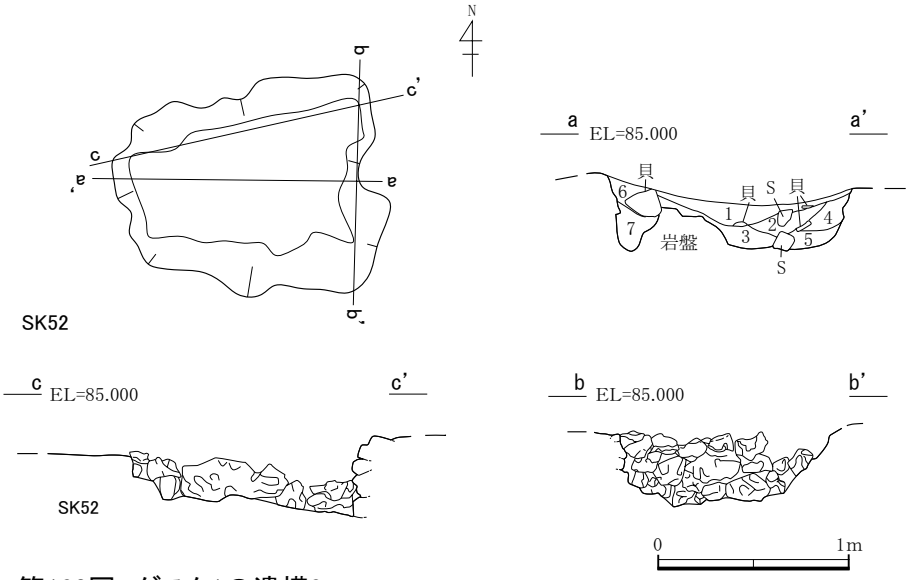
第129図　グスク1の遺構2

SK51 半裁状況 1（西から）

SK51 半裁状況 2（西から）

SK52

岩盤面で検出した遺構で、当初素掘りの土坑と考えていたが、掘削を進めると方形の石組土坑であることが判明した。一部には大型の石灰岩礫があるが、その上部に骨や貝などの混入する土が堆積していることから、使用時からこの場所にあったと想定できる。



第130図　グスク1の遺構3

SK52 半裁状況（北から）

SK52 完掘状況（北から）

SK53

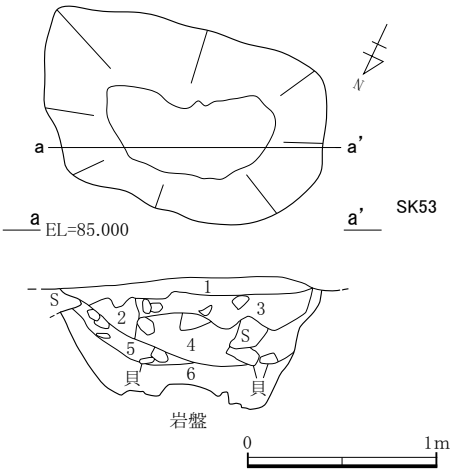
岩盤面で検出した遺構で、当初不定形の遺構だったが、円形の土坑であることが判明した。石灰岩礫や骨、貝などが混入した土が内部に堆積していた。

SK53 検出状況（北から）

SK53 半裁状況（北から）

図版 21　グスク1の遺構 4

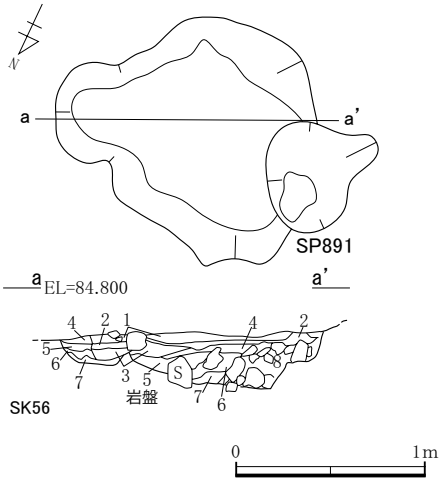
SK53 完掘状況（北から）



第131図　グスク1の遺構4

SK56

岩盤と地山が混在する部分で検出した円形の遺構。上部には炭などが混入しており、ガラス小玉が大量に出土している。周辺の廃棄土坑とは異なる様相を呈している。その下部にはマージを主体とした土や石灰岩礫が混入した土が堆積しており、遺物などの混入は少ない。



第132図　グスク1の遺構5

SK56 検出状況（北から）

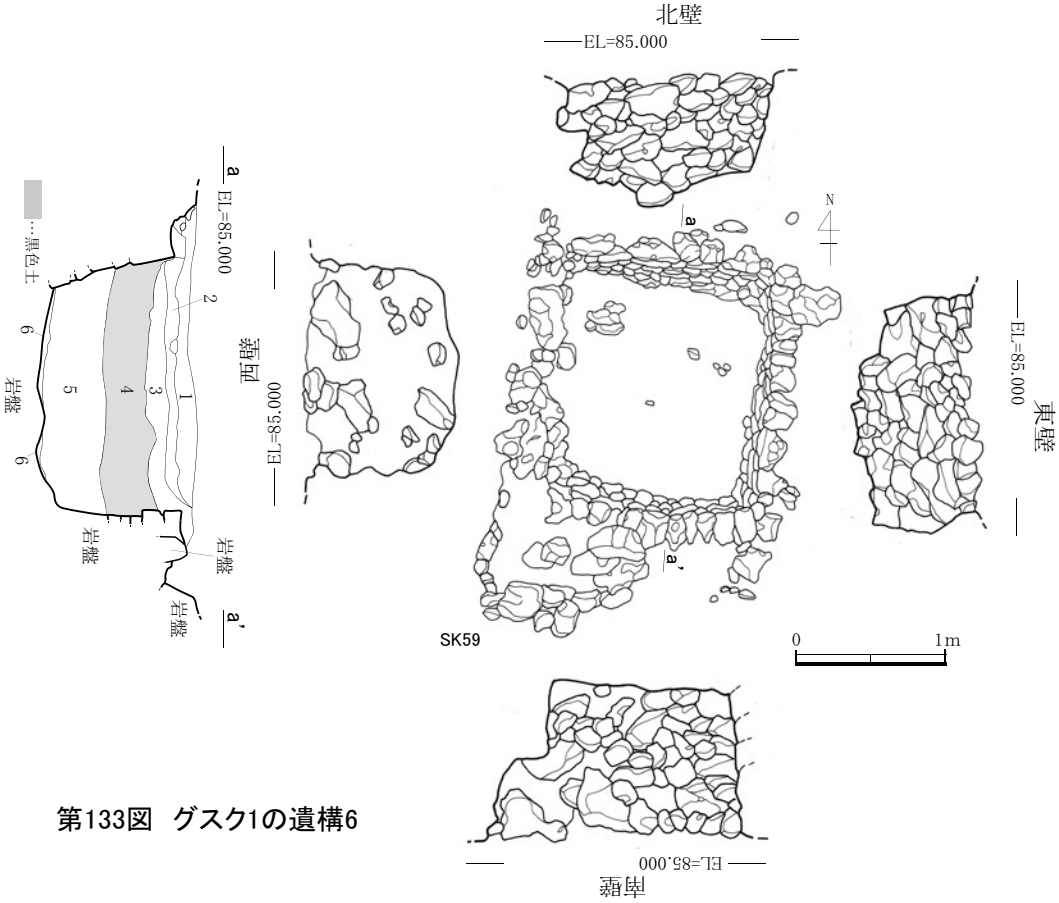
SK56 遺物出土状況

SK56 半裁状況（北西から）

図版 22　グスク1の遺構 5

SK59

地山と岩盤面で検出した遺構で、検出当初は方形の土坑と考えていたが、掘削を行うと方形の石組土坑であることが判明した。最下層には石灰岩礫の小片などが混じる層が堆積している。その上部には黒色の土が堆積している。骨や貝などが大量に出土することから廃棄時の土だと想定される。その上部には炭や焼土、石灰岩礫の小片などが混入した土が堆積している。これはSK51などと同様に廃棄したものを覆う目的で埋めた土だと想定できる。堆積状況はほぼ水平を保った状況であるため、掘り返しなどは行わず、連続して土を埋めて、いっぱいになると使用を終えた遺構であると考えられる。



第133図　グスク1の遺構6

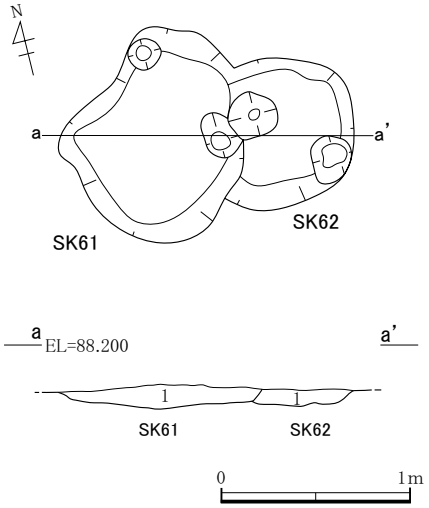
SK59 検出状況（東から）

SK59 半裁状況（西から）

SK59 完掘状況（北から）

SK61・62

地山で検出した素掘りの円形土坑で堆積は薄い。周辺に柱穴跡などがあるが、関係性などは不明である。



第134図　グスク1の遺構7

SK61・62 半裁断面（南から）

SK61・62 完掘断面（北から）

図版 23　グスク1の遺構 6

SK72

地山面で検出した素掘りの方形土坑である。レンズ状に堆積しており、上部の土には炭、マージ粒、焼土などが確認できる。貝や骨などの出土が少なく廃棄土坑の可能性もあるが様相は判然としない。

SK73

地山面で検出した素掘りの楕円形土坑である。堆積土は薄く、上部は削平されている可能性がある。様相は判然としない。

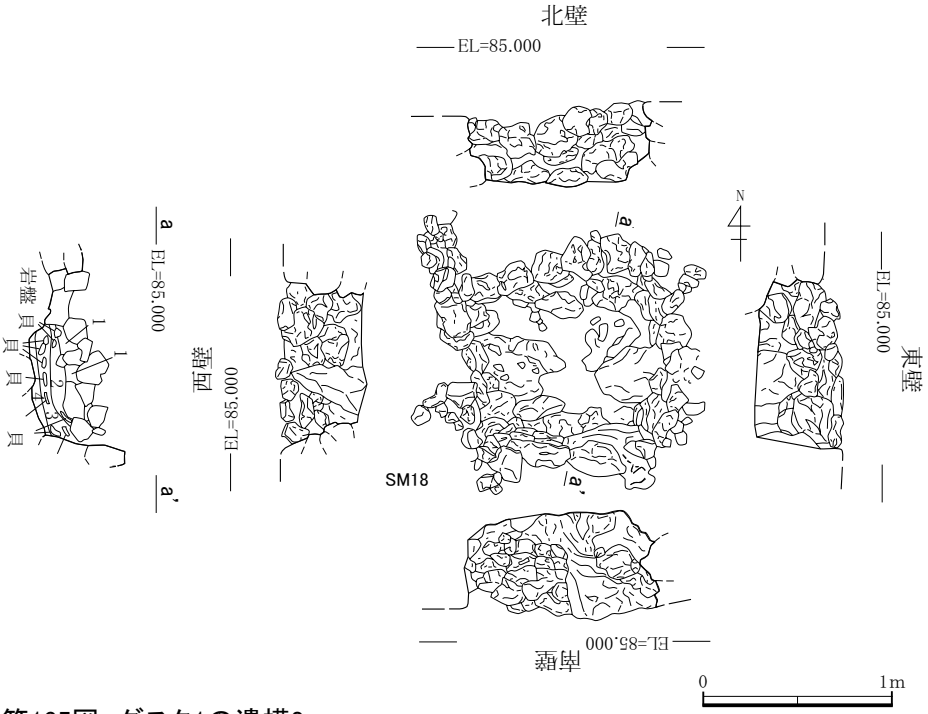
SK72 半裁状況（北から）

SK73 半裁状況（南から）

図版 24　グスク1の遺構 7

SM18

岩盤を掘り込んだ方形の石組土坑である。堆積土にはヤコウガイの蓋が大量に出土している。その上部には石灰岩礫が入っている状況が確認できた。廃棄土坑であるが、周辺遺構とわずかに様相が異なる。



第135図　グスク1の遺構8

SM18 検出状況（北から）

SM18 遺物出土状況（北から）

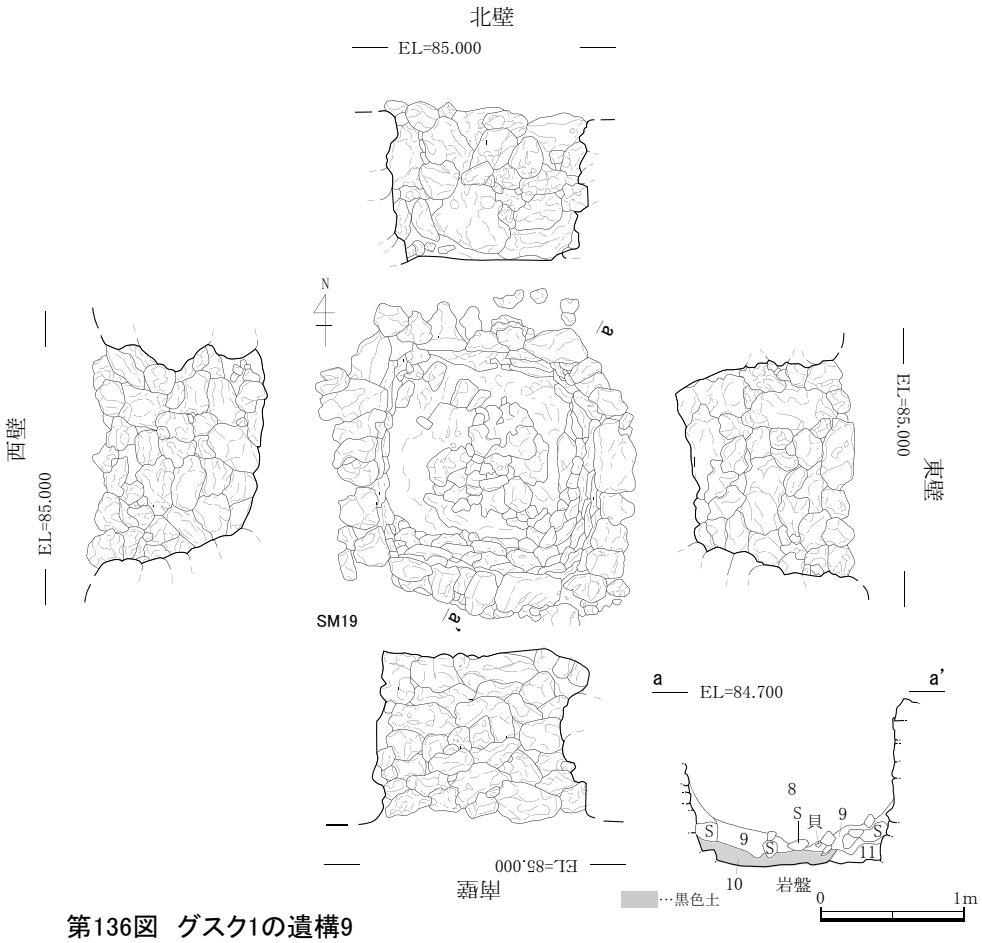
SM18 半裁状況（西から）

SM18 完掘状況（西から）

図版 25　グスク1の遺構 8

SM19

岩盤を掘り込んだ方形の石組土坑である。第5層までは、大き目の石灰岩礫が混ざる土が堆積しており、一度に埋められた痕跡があることから、遺構使用が終了した後に堆積した土と判断した。5層以下では8層及び10層が黒色土で貝や骨などが大量に混入している。その前後の層にはそれらがあまり入らない暗褐色や黄褐色の土が堆積しており、廃棄物を覆う形で被せた土だと想定できる。



第136図　グスク1の遺構9

SM19 検出状況（北から）

SM19 完掘状況（北から）

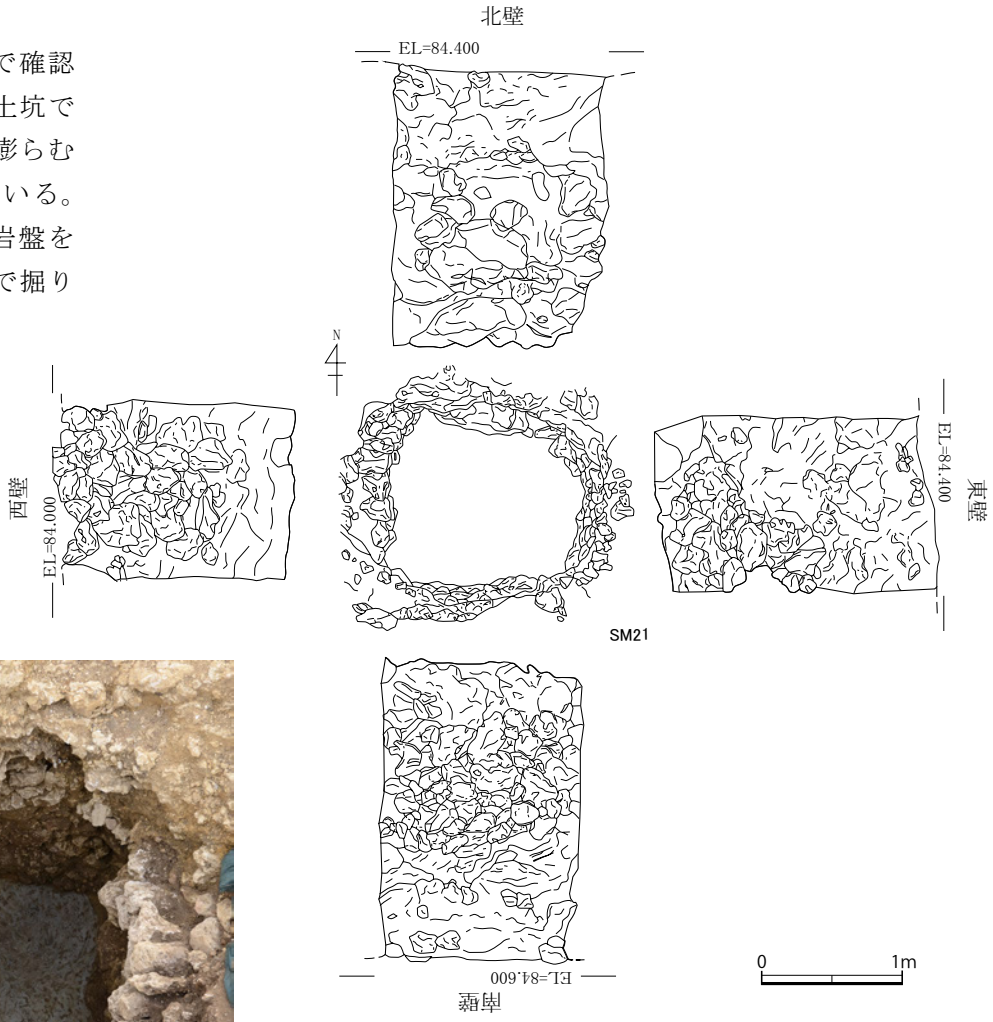
SM19 半裁状況 1（北西から）

SM19 半裁状況 2（北西から）

図版 26　グスク1の遺構 9

SM21

SK51に隣接する場所で確認できたほぼ方形の石組土坑である。遺構の中間部が膨らむやや袋状の構造をしている。この遺構はSK51同様、岩盤を掘り抜き、クチャ層まで掘り込まれている。周辺にある遺構とはやや異なる堆積状況を示しており、廃棄土坑以外の用途が考えられるが、用途は不明である。



第137図　グスク1の遺構10

SM21 完掘状況（北から）

SM24

岩盤を掘り込んだ方形石組土坑であるが、やや小型の遺構である。北側部分は岩盤壁を利用し、それ以外は石積みを行っている。遺構内部の堆積は上部には暗褐色や黄褐色の土が堆積している。その下部には石灰岩礫が多く混入している。

SM24 半裁状況（北から）

SM24 検出状況（東から）

図版 27　グスク1の遺構 10

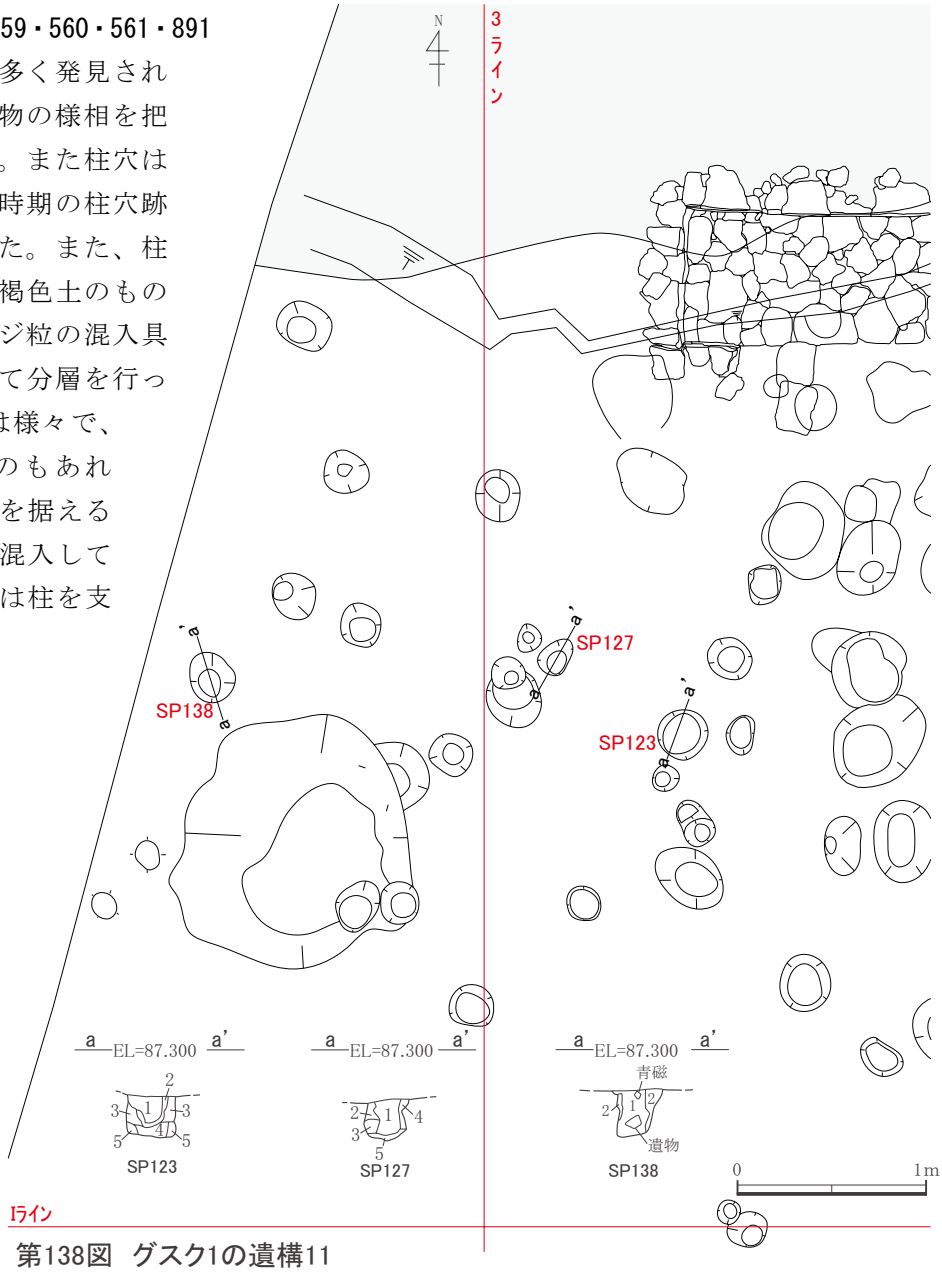
SM24 遺物出土状況１（北から）

SM24 遺物出土状況２（北から）

図版 28　グスク1の遺構 11

SP123・127・138・313・410・559・560・561・891

柱穴跡は調査区全域で数多く発見された。密集して確認され、建物の様相を把握することは困難であった。また柱穴は数多く確認されたが、この時期の柱穴跡には柱痕跡が多く確認できた。また、柱穴内の埋土は暗褐色土や黄褐色土のものが多かった。その中でマージ粒の混入具合や炭粒の混入具合に応じて分層を行った。その結果、柱のたて方は様々で、柱穴中央に柱を据えるものもあれば、柱穴壁にそうように柱を据えるものがあった。石灰岩礫が混入しているものもあり、その一部は柱を支えるものであるものもある。このような柱穴跡で遺物が混入しており、特徴的なものを抽出して図化する。SP123は柱痕跡が4層と1層で確認した。1層は柱を抜く際に外側に開いている。SP127、138、410は遺構中央で柱痕跡が確認できた。SP313・561・559・560・891は柱痕跡が明確ではないが、掘り込みが確認できたので柱穴跡と判断した。



第138図　グスク1の遺構11

SP123 半裁状況（南東から）

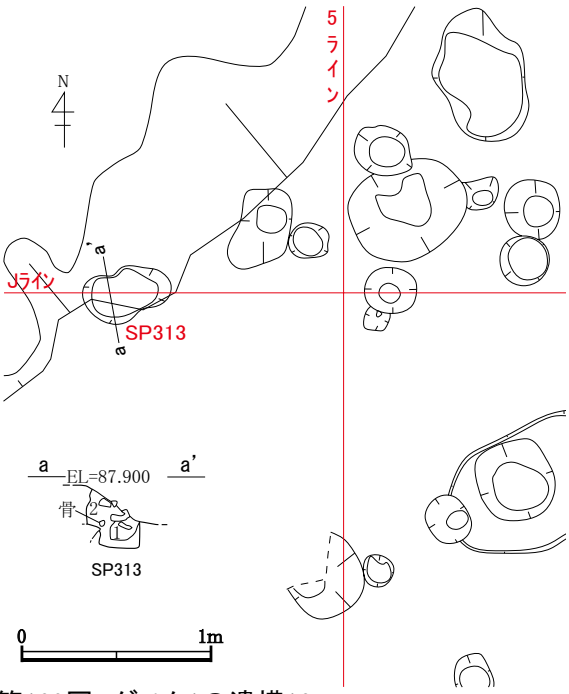
SP123 検出状況（東から）

SP127 遺物出土状況

SP127 半裁状況（南東から）

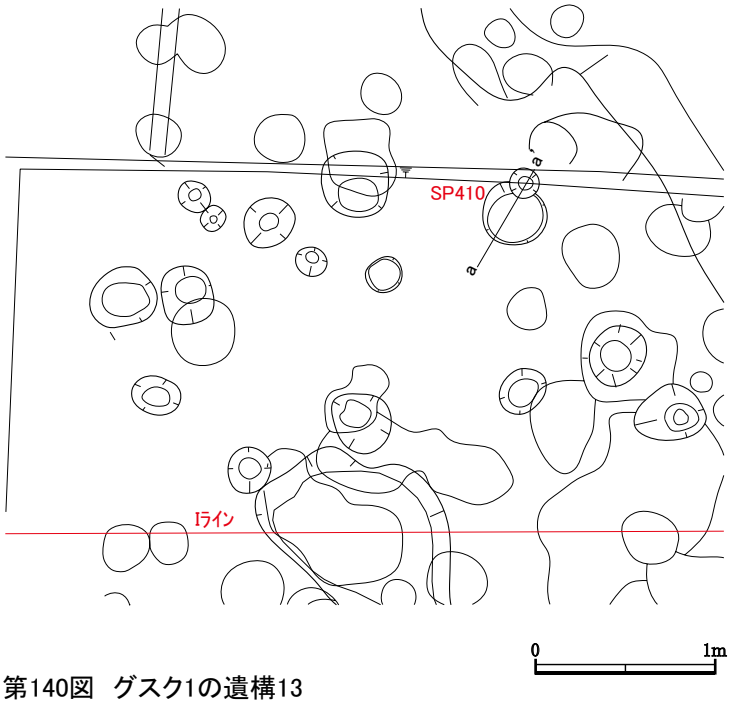
図版 29　グスク1の遺構 12

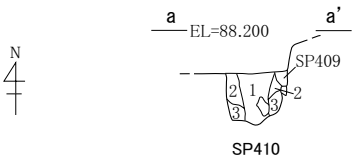
SP138 半裁状況（北東から）



第139図　グスク1の遺構12

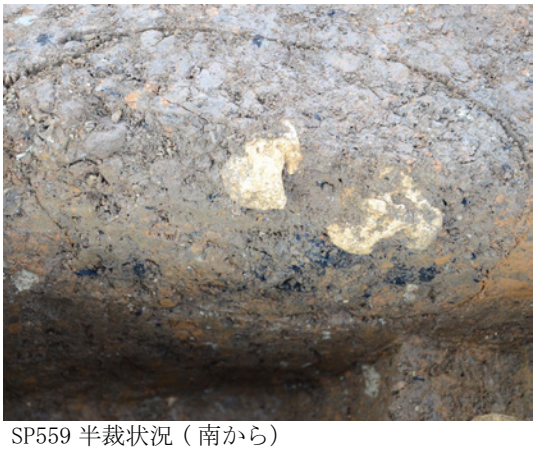
SP313 半裁状況（東から）





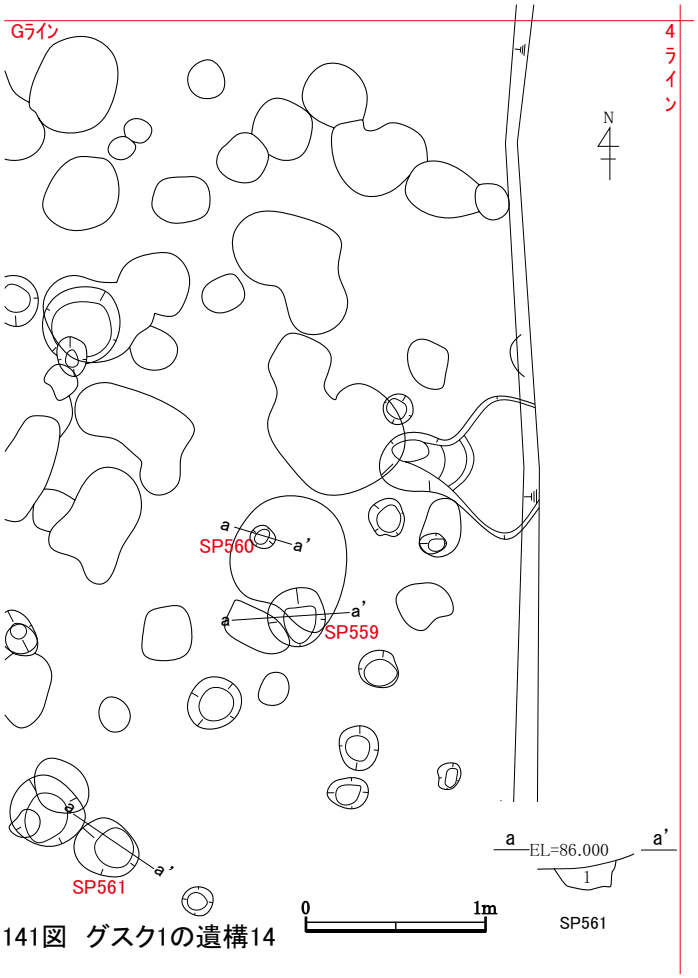
第140図　グスク1の遺構13

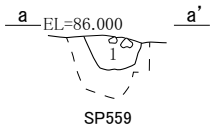
SP410 半裁状況（南東から）

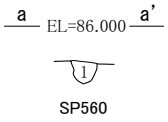


SP559 半裁状況（南から）

SP560 半裁状況（南西から）



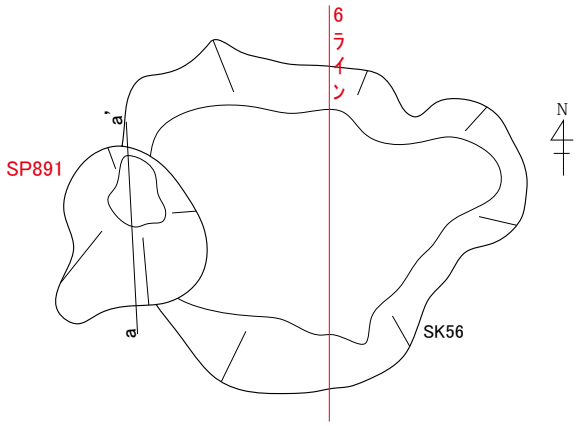


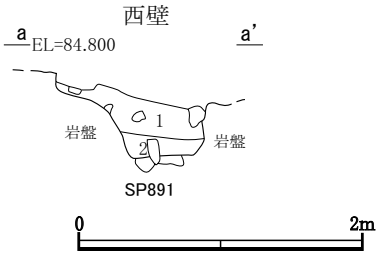


第141図　グスク1の遺構14

SP561 半裁状況（南から）

SP891 半裁状況（東から）

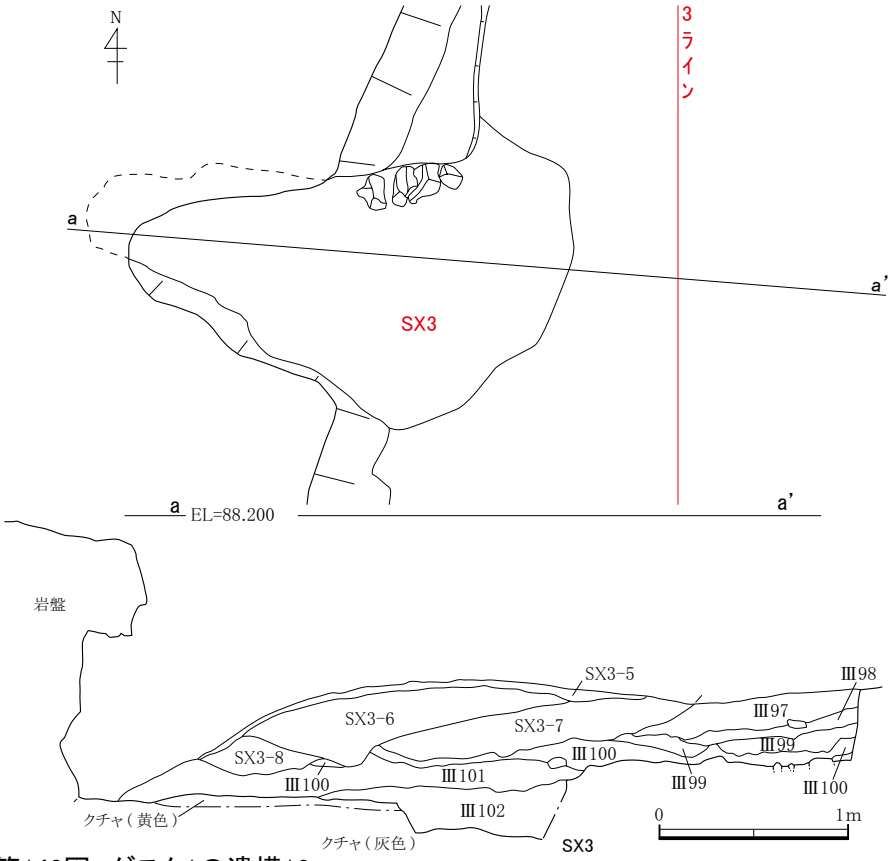




第142図　グスク1の遺構15

SX3

岩盤の隙間で落ち込んでいる部分に形成されている。堆積土が岩盤奥へ流れ込むように堆積している。一部では石灰岩礫小片が敷き詰められているような層もある。この部分はクチャ層まで掘り込まれ、その上部には石灰岩礫を含む土が多く堆積しており、造成土である可能性が高い。これらの土が堆積するなかで岩盤奥へ流れ込むような形で堆積したのかは判然としない。堆積した年代などが不明であったが、出土遺物の組成から当該時期の可能性が高いと判断した。



第143図　グスク1の遺構16

SX3 検出状況 1（南東から）

SX3 検出状況 2（南東から）

SX3 堆積状況 1（東から）

SX3 堆積状況 2（南東から）

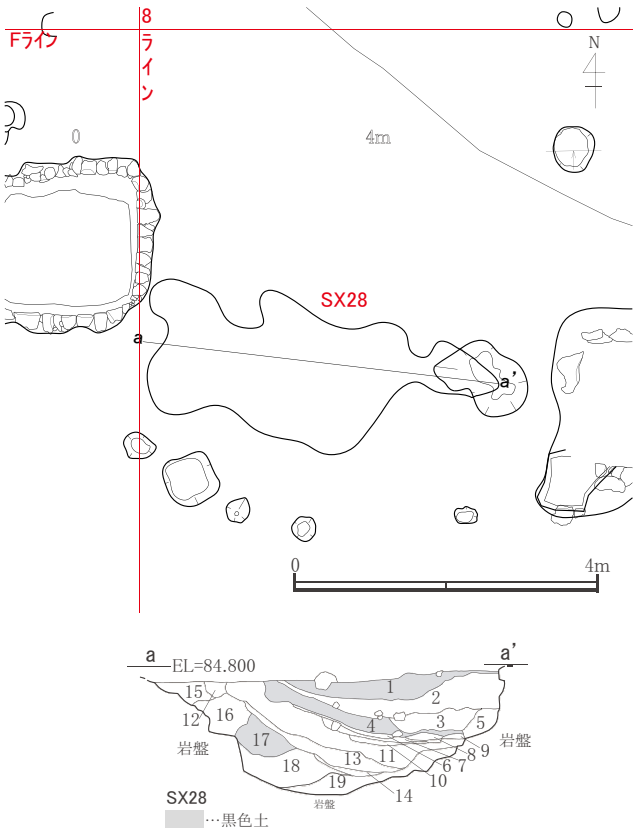
図版 30　グスク1の遺構 13

SX28

SK51に隣接して形成された遺構。平面系は楕円形状で、岩盤を大きく掘り込み形成されている。遺構上部に黒色の土が堆積している。これは周辺遺構でみられる骨や貝などを含む黒色土と同様である。その下部には赤褐色土や石灰岩礫が多く混入している土があり、黒色土と交互に堆積している。このような堆積状況から廃棄土坑と考えられる。

周囲に石組の廃棄土坑があるなかでSX28は素掘りの遺構で、形状などの構造が異なる点が特徴的である。上部と下部の堆積土の間には石灰岩礫が多く混入する層がある。この層を境にして2段階にかけての使用が伺える。

全体的にレンズ状堆積をしており、何度か土を掘り返した可能性もあるため、繰り返し使用した廃棄土坑である可能性が高い。



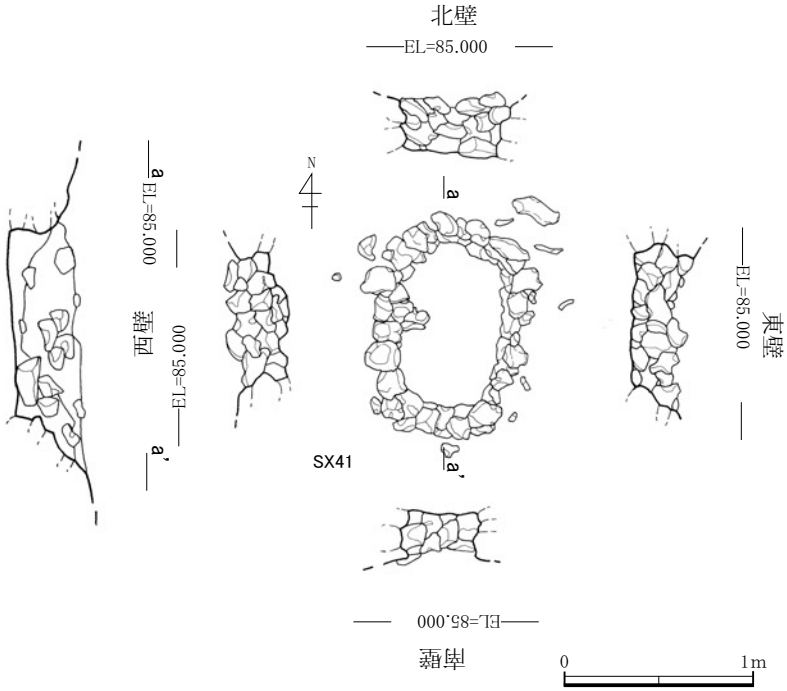
第144図　グスク1の遺構17

SX28 半裁状況１（南西から）

SX28 半裁状況２（南東から）

SX41

検出した当初は遺構の形態などが不明であったが、掘削を進めると遺構の角となる部分はなだらかに石積みがされていることから、隅丸方形状の石組土坑であることが判明した。石灰岩礫を含みつつ、貝や骨などが多く混入する土が堆積している。廃棄土坑であると考えられる。



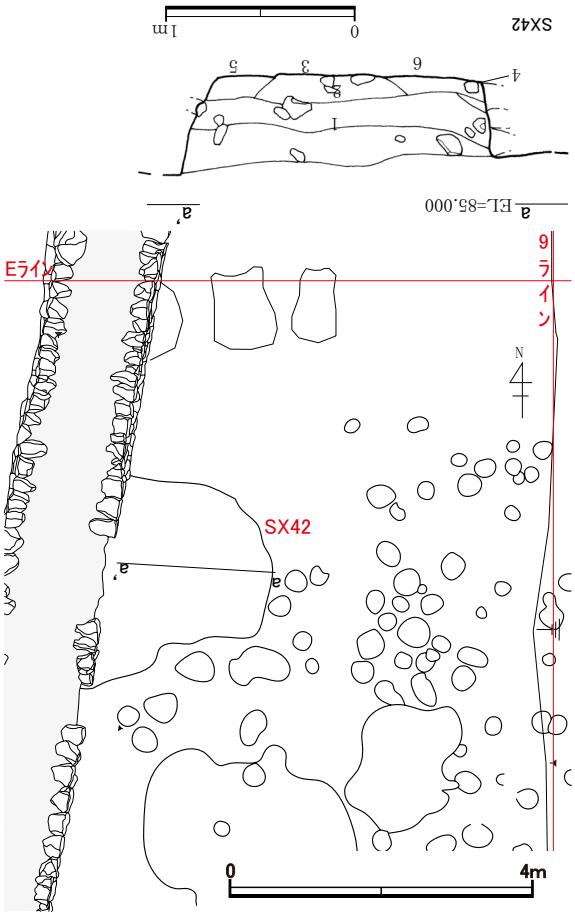
第145図　グスク1の遺構18

SX41 完掘状況（西から）

SX41 半裁状況（東から）

SX42

地山を掘り込んだ方形の石組土坑で、遺構の一部はSA23下部の造成7に覆われている。堆積状況をみると、貝や骨などを多く含む土が堆積しており、下部には掘り込みなども確認できるため、何度か掘り返した痕跡がある。ここまでの特徴は廃棄土坑の特徴を示すが、SX42は北側部分の石積みに空洞部分が存在する。その部分の調査を行うと、遺構外へ抜ける溝のようなものがあると判明した。また外側に延びるとみられる石列も確認した。このことからこの遺構は当初、排水溝状のものがあり、遺構外へ水や何らかのものを排出していた遺構であると考えられる。その後、廃棄土坑として使用され、遺構の使用が終了したものと考えられる。



第146図　グスク1の遺構19

SX42 完掘状況（東から）

SX42 半裁状況（北から）

SX42 排水溝状遺構平面（南から）

SX42 排水溝状遺構完掘状況（南から）

SX42 排水溝状遺構堆積状況（南から）

図版 31　グスク1の遺構 14

図版 32　グスク1の遺構 15　（石組土坑）（西から）

B：遺物

グスク1の遺構は、ほとんどが中城御殿を形成していたと考えられる造成土に覆われており、この造成土を掘り進めると石組土坑を初めとする各遺構が検出された。そのため、グスク1の遺構は比較的パックされた状況で検出したものが多い。特にSK51、SM19からは多種多様な遺物が出土している。ここではそれらの遺物様相について第13表に記す。

SK51では、他遺構の規模に比べ、深度や平面形の大きさなどが異なる。Ⅲ区で検出した廃棄土坑群のなかで中心となる遺構である。中国産青磁を中心として、中国産青花、中国産白磁、中国産色絵、中国産褐釉陶器、タイ産褐釉陶器などが出土している。これらの遺物に加え、ベトナム産白磁や染付も出土している。沖縄産と考えられる瓦質土器や宮古式土器も出土しており、各遺物の出土状況が非常に良い。

また、グスク時代の遺構を発掘している際、調査期間の関係と遺構の検出状況から検出作業のみを実施した遺構がある。これは特に柱穴に多く、Ⅳ区やⅡ区に主に集中している。これらは建物のプランを組むことができなかったものである。検出写真撮影の記録を行い、その際便宜的に2000番代からの遺構番号を付与した。2000番代の遺構番号のものは出土位置の記録を実施することも困難な状況であった。報告を行ったSJ2001も上記と同様な遺構であるが、検出当初から埋甕遺構を想定したため、こちらは完掘までの調査を実施した。

ガラス玉

SK56において、409点のガラス玉がまとまって出土した。これらを『中城御殿跡Ⅱ』（沖縄県立埋蔵文化財センター 2011）による分類方法を用いて、

Ⅰ類：楕円形
Ⅱ類：薄型方形
Ⅲ類：螺旋状
Ⅳ類：複数溶着
Ⅴ類：被熱により変形

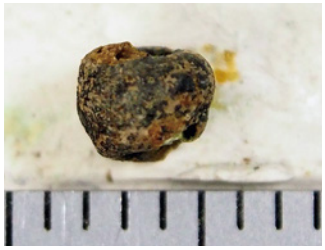
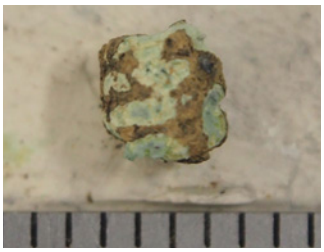
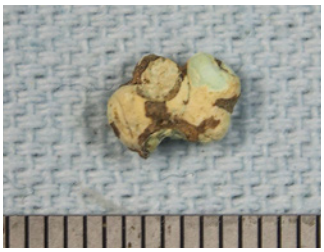
の5類に大別し、さらに色調ごとに細分を行った。

その結果は第12表のとおりである。Ⅲ類をはじめ、各ガラス玉には製作時の巻付痕が残るものが多い。また、SK56出土ガラス玉の特徴として、被熱した資料が極めて多いことが挙げられ、熱により表面塗装の融解及び剥落が生じている。これら被熱個体は、SK56上層で34点（94.4％）、それ以外で292点（80.0％）に及んでいる。ガラスの融点は一般的に1200 ～ 1500℃程度であることから、SK56形成前において火災等の災害が生じた可能性が挙げられる。

第12表　SK56ガラス玉集計表

	Ⅰ類	Ⅱ類	Ⅲ類	Ⅳ類	Ⅴ類	不明	小計	計
赤							0	39
	15	23	1				39	
赤（熱）		2					2	19
	5	11				1	17	
青（熱）			2				2	29
	6	10				11	27	
黄							0	5
	2	2				1	5	
黄（熱）	1	3					4	29
	17	7	1				25	
緑							0	11
	4	7					11	
緑（熱）			1				1	34
	20	2				11	33	
緑（光沢）							0	8
	8						8	
緑（光沢）（熱）							0	17
	8	9					17	
紫（熱）		1	1				2	2
							0	
黒（熱）	5						5	5
							0	
金							0	2
	1		1				2	
半透明	1						1	9
	2	2				4	8	
熱（青ガラス）		8	1				9	77
	32	22	4	3		7	68	
熱（半透明）	3	4					7	88
	43	30	4	2		2	81	
スス付（原色不明）		2					2	34
	24	5	1	1	1		32	
不明				1			1	1
							0	
計	10	20	5	1	0	0	36	409
	187	130	12	6	1	37	373	
	197	150	17	7	1	37	409	

上段　SK 56上層
下段　SK 56
被熱

図版33　ガラス玉（左・中：S=1000%、右：S=500%）
左：Ⅰ類（スス付着）　中：Ⅲ類（熱（青ガラス））　右：Ⅳ類

第13表　グスク1　出土遺物観察一覧a

挿図番号	遺物番号	種類	器種	分類	部位	法量（cm）			観察事項	出土位置	
						口径	器高	底径		遺構	層序
第147図	1	中国産褐釉陶器	壺	6類	底部	－	－	23.0	胎土は灰色で薄手、白色粒を少量含む。釉は黒褐色で、底部は露胎。上げ底となる。内面に敲き目あり。	SJ2001	1層
	2	中国産青花	皿	明Ⅲ類	口～底	9.4	2.9	5.2	直口口縁。畳付を釉剥ぎ。外面に牡丹唐草文、内面見込みに蓮池水禽文。	SK22	上部
	3	沖縄産施釉陶器	壺	－	胴部	－	－	－	胎土は赤褐色で、貼付の文様は灰白色。釉は内面に飴釉、外面は無釉で、文様は緑色や黄色の釉で施釉されている。	SK22	上部
	4	中国産青磁	皿	Ⅵ-0類	口～底	14.0	高 3.3 低 3.15	6.0	稜花皿。胎土は灰色。内面口縁下3条の波状文、見込みに印花文。	SK22	1層
	5	中国産青磁	碗	Ⅵ-1類	口～底	13.4	6.8	5.2	胎土は灰色。外底面露胎。外面に弁先の揃わない線刻蓮弁文、見込みに印花文か。	SK22	4層
第148図	6	中国産青花	皿	明Ⅱ-1類	口～底	19.6	4.2	11.5	端反口縁。畳付を釉剥ぎ。外面に宝珠唐草文、見込みに花弁文。	SK51	上層
	7	中国産色絵	皿	－	口～底	9.1	2.15	5.1	端反口縁。畳付を釉剥ぎ、砂が少量付着。外面に唐草文、内面胴部に折枝文、見込みに牡丹草花文。	SK51	上層
	8	ベトナム産白磁	瓶	－	頸部	－	－	－	胎土は灰白色。白化粧後に掻き落としで牡丹唐草とその下に唐草文が施されている。	SK51	上層
	9	タイ産褐釉陶器	壺	シーサッチャナライ	底部	－	－	27.0	胎土は暗褐色で精緻だが、底部はやや粗い。見込みの一部が露胎。	SK51	上層
	10	石製品	砥石	－	－	－	－	－	石材：頁岩。残存する3側面に成形加工時の擦切痕残。表裏面側縁側は使用により擦り減り凹状。	SK51	上層
	11	中国産青花	小碗	－	底部	－	－	4.4	胎土は灰白色。畳付を釉剥ぎ。見込みに二重の圏線と花弁文。外底面に銘あり。	SK51	3層
	12	中国産色絵	碗	－	口縁	－	－	－	端反口縁。外面に唐草文、内面口縁下に四方襷文、胴部に花唐草文。	SK51	3層
	13	瓦質土器	鉢	－	底部	－	－	21.0	平底で外底中央が僅かに窪む器形。胴部に縄状突帯を巡らせる。内外面ﾅﾃﾞ調整が行われ、細かい線状痕が残る。外面に煤付着。	SK51	3層
	14	鉄製品	鏃？	－	軸部	－	－	－	両端が破損しているが先端が撥状に広がるタイプの鏃と思われる資料。矢柄に差し込む部分も扁平に造形。	SK51	3層
第149図	15	中国産青磁	碗	Ⅴ-1類	口縁	13.4	－	－	胎土は灰白色。釉はオリーブ色、ガラス質で貫入あり。外面にヘラ描きの蓮弁文。	SK51	5層
	16	中国産青磁	碗	Ⅵ類	底部	－	－	5.4	畳付は平坦。胎土は灰色。畳付から外底面露胎。見込みに印花文。	SK51	5層
	17	中国産青磁	瓶	－	口縁	2.6	－	－	胎土は灰白色。釉は青緑色で厚く施釉される。	SK51	5層
	18	中国産青磁	器台	－	胴部	－	－	－	胎土は灰白色。釉は明緑色で貫入あり。器台の透かし部分か。	SK51	5層
	19	宮古式土器	壺	－	口～底	11.5	20.5	7.6	口縁外反し、頸部がしまる。縦耳が3つ残存。底部は平底。外面は磨き。黒色を呈し、光沢あり。内面はﾅﾃﾞ成形。内底付近に煤付着。胎土に白色粒が混入。	SK51	5層 ・6層
	20	中国産青花	小碗	－	口～底	9.2	高 5.4 低 5.3	4.0	胎土は灰白色。畳付を釉剥ぎ。外面中央の段より上は花鳥文、下は如意頭文、見込みに花弁文。	SK51	6層
	21	ベトナム産白磁	碗	－	口縁	12.8	－	－	口禿、端反口縁。胎土は灰白色で軟質。内面は白化粧し、胴部に型押しの唐草文。外面は白化粧無しか。	SK51	6層
	22	ベトナム産染付	碗	－	口～底	12.9	高 4.8 低 4.6	6.2	外反口縁。胎土は黄白色で軟質。見込みを蛇の目釉剥ぎ、高台外面を釉剥ぎ、外底面露胎。内面口縁下に連点文、見込みに点文。外面胴部に花唐草文。	SK51	6層
第150図	23	ベトナム産染付	碗	－	底部	－	－	6.2	胎土は黄白色で軟質。見込みを蛇の目釉剥ぎ、畳付を釉剥ぎし、外底面は鉄釉を施釉。外面に花唐草文か。	SK51	6層
	24	中国産褐釉陶器	壺	5類	底部	－	－	14.3	胎土は灰赤色、白色粒が少量混じる。釉は外面が暗オリーブ色、内面は灰オリーブ色で、外底面及び見込みが露胎。底部は上げ底となる。	SK51	6層
	25	中国産青花	碗	明Ⅱ-1類	口縁	13.5	－	－	胎土は灰白色。外面口縁部下に波濤文、胴部に芭蕉文。	SK51	6b層
	26	中国産青花	皿	明Ⅱ類	口～底	9.5	高 2.95 低 2.9	6.0	胎土は乳白色。畳付を釉剥ぎ。外面に花唐草文、見込みに草花文。	SK51	7層
	27	石製品	石製鉢か	－	口～底	27.8	11.6	21.0	石材：輝石安山岩か。被熱のため変質。加工痕に、外面全面及び片口部に敲打痕、片口部除く口唇部・底部・内面研磨。片口部あり、片口部外面に底部へ流れるように炭化物付着。	SK51	11層
	28	中国産青花	皿	明Ⅱ-2類	口～底	11.2	2.2	7.0	碁笥底、外底面が広い。胎土は灰白色。畳付を釉剥ぎ。見込みに草花文。	SK51	12層
	29	中国産青磁	碗	Ⅵ-1類	口～底	11.9	7.1	5.0	胎土は灰白色。釉は明緑色でやや厚く施釉され、ガラス質で貫入あり。外面に幅の狭い線刻蓮弁文、弁先はほぼ揃う。見込みに印花文と字款。外底面は蛇の目釉剥ぎ。	SK51	最下層
	30	中国産白磁	皿	景徳鎮窯系	底部	－	－	6.6	胎土は灰白色。畳付が釉剥ぎ。	SK51	最下層

第13表　グスク1　出土遺物観察一覧b

挿図番号	遺物番号	種類	器種	分類	部位	法量（cm）			観察事項	出土位置	
						口径	器高	底径		遺構	層序
第150図	31	中国産青花	碗	明Ⅰ-1類	口縁	14.4	－	－	端反口縁。胎土は灰白色。外面に草花文。	SK51	最下層
第151図	32	中国産青花	碗	明Ⅱ-1類	底部	－	－	6.1	胎土は灰白色。釉は青白色、ガラス質で貫入あり。畳付を釉剥ぎ。外面に宝珠唐草文、見込みに十字花文。	SK51	最下層
	33	中国産青花	碗	明Ⅰ-1類	底部	－	－	6.1	胎土は灰白色で薄手。高台は高く、畳付を釉剥ぎ。外面腰部に蓮弁文、見込みに十字花文。	SK51	最下層
	34	中国産青花	皿	－	口～底	13.6	3.05	8.8	菊花皿。胎土は灰白色。畳付を釉剥ぎ。見込みに二重の圏線と菊花唐草文。	SK51	最下層
	35	産地不明土器	蓋	－	－	－	－	－	胎土は泥質で赤褐色。赤色の粒がわずかに混じる。	SK51	最下層
	36	ガラス製品	器種不明	－	口縁	－	－	－	外反する口縁資料だが、傾き不明のため断面のみ実測。内面に黄色の楕円文様があり、文様上部にはガラスが覆う。気泡が多く入る。	SK51	最下層
	37	ガラス製品	器種不明	－	胴部	－	－	－	胴部資料だが、傾き不明のため断面のみ実測。線状に黄色文様があり、文様上部にはガラスが覆う。気泡が多く入る。	SK51	最下層
	38	中国産青磁	碗	Ⅵ-0類	口縁	13.0	－	－	胎土は灰色。釉は暗オリーブ色で薄くガラス質。	SK51	－
	39	中国産青花	碗	明Ⅱ-2類	口縁	12.8	－	－	胎土は灰白色。外面口縁下に波濤文、胴部に如意頭唐草文、見込みに十字文か。	SK51	－
	40	中国産青花	皿	明Ⅱ-1類	口～底	9.4	2.4	4.4	焼成が悪く胎土は灰白色だが一部は黄白色。また文様も発色が悪い。外面に牡丹唐草、見込みに十字文。	SK51	－
	41	中国産青花	蓋	－	－	大 3.7 小 2.7	3.15	－	胴つなぎにより成型。胴部下半より露胎。外面に芭蕉文。	SK51	－
	42	ベトナム産白磁	瓶	－	口縁	3.2	－	－	胎土は灰白色で軟質。肩部に白化粧後に掻き落としで蓮弁文。	SK51	－
第152図	43	タイ産褐釉陶器	壺	3類	口縁	18.6	－	－	胎土は赤褐色で、赤褐色粒、白色粒が少量混じる。釉は暗オリーブ色で頸部下より施釉。肩部に横耳がつく。	SK51	－
	44	瓦質土器	茶釜？	－	底部	－	－	7.0	羽釜型。やや丸底器形。内面は外面の羽より下部は下から上へナデ成形を行い、その上部は横方向のナデ調整を行う。外面底部から羽部分には煤が付着。	SK51	－
	45	ガラス製品	ボタン状製品	－	－	－	－	－	ボタン状製品で表面は丸みをもって膨らみ、内面は平坦に成形される。内面に接着時の痕跡？。	SK51	－
	46	中国産褐釉陶器	壺	5類	口縁	17.0	－	－	胎土は褐色で白色粒が少量混じる。釉は暗オリーブ色で内面は一部露胎。	SK52	上層
	47	タイ産褐釉陶器	壺	メナムノイ短径Ⅱ類	口縁	18.0	－	－	胎土は荒く赤褐色、赤色粒と白色粒を少量含む。無釉か。	SK52	上層
	48	中国産青磁	碗	Ⅵ-1類	口～底	13.8	7.9	5.3	胎土は灰色。釉は明緑色。高台内側より露胎。外面に弁先の揃う線刻蓮弁文。畳付は平坦。	SK53	上層
第153図	49	中国産青磁	碗	Ⅵ-3類	口縁	15.2	－	－	胎土は灰色。釉は暗オリーブ色でやや厚手、ガラス質で貫入あり。劣化のためか気泡あり。外面口縁下に雷文と波濤文、胴部にヘラ描きの草花文、胴部に雷文及び波状文とラマ式蓮弁文。	SK53	上層
	50	中国産青磁	盤	－	口縁	－	－	－	鍔縁口縁。胎土は灰白色。内面に蓮弁状の櫛描文。	SK53	上層
	51	青銅製品	飾り金具？	－	－	－	－	－	中央に方形の孔があり、輪花型の製品。中央の孔は内側に押し込むように穿孔される。	SK53	上層
	52	タイ産半練土器	蓋	－	－	13.0	3.0	－	胎土は荒く赤褐色。赤褐色、白色粒を少量含む。	SK53	1層
	53	中国産青花	皿	－	口～底	32.6	5.8	16.8	端反口縁で口錆。底部は碁笥底で露胎し、腰部に砂が付着。胎土は白色。外面に牡丹唐草、内面胴部と見込みに花弁文。碁笥底だが、文様はⅡ-1類に類似する。	SK53	－
	54	玉	ガラス玉	Ⅰ～Ⅴ類	－	－	－	－	色ガラス・透明ガラス塗色。各種形状・色あり。いずれも螺旋状の巻付痕あり。被熱資料多数。	SK56	上層
	55	玉	ガラス玉	Ⅰ～Ⅴ類	－	－	－	－	色ガラス・透明ガラス塗色。各種形状・色あり。いずれも螺旋状の巻付痕あり。被熱資料多数。	SK56	－
第154図	56	中国産青花	皿	明Ⅱ-1類	口～底	20.2	3.9	11.6	端反口縁。胎土は灰白色。畳付を釉剥ぎ、砂が付着。外面胴部に宝珠唐草、見込みに玉取獅子文。	SK59	1～4層
	57	瓦質土器	鉢	－	底部	－	－	17.6	平底製品で外底は凹凸している。内面も破損しており、調整痕など不明瞭。	SK59	1～4層
	58	中国産褐釉陶器	壺	5類	口縁	19.5	－	－	胎土は黄灰色、白色粒を少量含む。釉は黄オリーブ色で内外面に施釉。肩部をめぐるように等間隔で焼き具が付着。	SK59	4層
	59	中国産青磁	盤	－	口縁	24.8	－	－	稜花口縁。胎土は灰白色。釉は劣化している。内外面胴部に蓮弁状の櫛描文、内面口縁下に口唇に沿った2条の波状文。	SK59	5層
	60	中国産青花	小碗	－	口～底	9.4	4.5	3.9	端反口縁。胎土は灰白色。釉は青白色でガラス質。畳付を釉剥ぎ、一部に砂が付着。見込みに虫文か。呉須がにじんでいる。	SK59	5層

第13表　グスク1　出土遺物観察一覧c

挿図番号	遺物番号	種類	器種	分類	部位	法量（cm）			観察事項	出土位置	
						口径	器高	底径		遺構	層序
第154図	61	中国産青花	碗	明Ⅱ-1類	口～底	13.0	6.0	5.6	端反口縁。胎土は灰白色。外面胴部に亀甲文、腰部に蓮弁文、見込みに十字花文。	SK59	5層
第155図	62	中国産青花	碗	明Ⅰ-1類	口縁	13.6	－	－	端反口縁。胎土は灰白色。外面胴部に果樹文。	SK59	5層
	63	中国産青花	皿	明Ⅱ-1類	口～底	17.6	3.5	10.4	端反口縁。胎土は灰白色。畳付を釉剥ぎ、砂がわずかに付着。外面口縁部下に雲文、胴部に宝珠唐草文、見込みに花弁文。	SK59	5層
	64	中国産青花	皿	明Ⅱ-1類	口～底	12.2	2.5	6.2	端反口縁。胎土は灰白色。畳付を釉剥ぎ、砂が付着。外面胴部に宝珠唐草文、見込みに玉取獅子文。	SK59	5層
	65	中国産褐釉	壺	5類	底部	－	－	12.2	胎土は灰色、白色粒が少量混じる。釉は暗オリーブ色、内面まで施釉。底部に焼き具が付着。	SK59	5層
	66	タイ産褐釉陶器	壺	シーサッチャナライ	口縁	11.6	－	－	胎土は精緻で灰黒色。釉はオリーブ黒色、内面の頸部より露胎。肩部に把手の跡あり。	SK59	5層
	67	中国産青花	碗	明Ⅱ-1類	底部	－	－	5.8	胎土は灰白色。畳付外面を釉剥ぎ、外底面露胎。見込みに捻花文、外面胴部に草花文か。	SK61	－
	68	中国産青磁	碗	Ⅵ類	底部	－	－	6.2	胎土は灰色。釉は暗オリーブ色でガラス質。外底面を蛇の目釉剥ぎ。見込みに字款。	SK72	－
	69	本土産陶器	擂鉢	－	底部	－	－	14.5	内面櫛目は6本前後。櫛目の幅が広い。胎土や焼成具合は沖縄産無釉陶器に非常に類似している。	SK72	－
第156図	70	高麗系瓦	平瓦	高麗系	－	－	－	－	凸面に羽状打捺。凹面には布目痕。布継ぎ合わせ目が残る。	SK73	－
	71	中国産青磁	碗	Ⅵ-0類	口～底	13.8	高 7.7 低 7.6	5.5	胎土は灰色。釉は暗オリーブ色。外底面露胎。見込みに印花文と「玉」の字。	SM18	－
	72	中国産青磁	瓶	－	底部	－	－	6.8	胎土は灰白色。釉は明緑色で、内側の一部にも釉がかかる。畳付を釉剥ぎ。	SM18	－
	73	銭貨	－	天○通○	－	－	－	－	天啓通寶（初鋳1621年）か。背面無文。	SM19	上層
	74	本土産陶器	擂鉢	－	底部	－	－	14.0	備前か。内面櫛目は6本前後。櫛目の幅が広い。胎土に白色及び黒色粒子が混入している。	SM19	3層
	75	産地不明土器	蓋	－	－	－	－	－	胎土は赤褐色で泥質。赤褐色及び黒色粒が少量混じる。	SM19	3層
	76	銭貨	－	崇■■寶	－	－	－	－	崇禎通寶（初鋳1528年）か。表面摩耗しており不鮮明。背面無文。	SM19	3層
	77	銭貨	－	永樂通寶	－	－	－	－	永樂通寶（初鋳1408年）背面無文。	SM19	3層
	78	鉄製品	鏃？	－	軸部	－	－	－	両端が破損しているが先端が撥状に広がるタイプの鏃と思われる資料。矢柄に差し込む部分は錆膨れのため形状不明。	SM19	3層
	79	鉄製品	釘	－	完形	－	－	－	頭部を一方へ折る角釘。断面は方形。	SM19	3層
第157図	80	玉	ガラス玉	管玉、緑色	－	－	－	－	色ガラス製。表面に螺旋状の巻付痕残。	SM19	3層
	81	青銅製品	輪状製品	－	－	－	－	－	指輪か。一部に分胴型部分があり、接着部と考えられる。	SM19	3層
	82	中国産青磁	碗	Ⅵ-3類	－	－	－	－	胎土は灰色。釉はオリーブ色でやや厚手、ガラス質で貫入あり。劣化のためか気泡あり。外面口縁下に雷文と波濤文、胴部にヘラ描きの草花文、内面口縁下に雷文、胴部に波状文。	SM19	4層
	83	中国産青磁	碗	Ⅵ類	底部	－	－	5.4	胎土は灰白色。高台畳付より内側は露胎。見込みに渦巻状の文様。	SM19	4層
	84	中国産青花	碗	明Ⅰ-1類	口縁	11.6	－	－	端反口縁。口錆。胎土は灰白色。外面に渦状唐草文か。	SM19	4層
	85	中国産青花	鉢	景徳鎮窯系	口縁	20.0	－	－	端反口縁。胎土は灰白色。外面に花唐草文、内面口縁下に四方襷文。	SM19	4層
	86	中国産青花	鉢	景徳鎮窯系	口縁	－	－	－	端反口縁。胎土は灰白色。外面に花唐草文、内面口縁下に四方襷文。	SM19	4層
	87	中国産陶器	茶入	－	口縁	2.8	－	－	胎土は灰色。鉄釉が内面口縁下まで施釉され、底部は露胎か。	SM19	4層
	88	タイ産半練土器	蓋	－	－	9.0	－	－	胎土は精良で赤褐色、灰色粒を少量含む。	SM19	4層
	89	銭貨	－	朝鮮通寶	－	－	－	－	朝鮮通寶（初鋳1423年）。背面無文。	SM19	4層
	90	青銅製品	小札？	－	－	－	－	－	半分に折れ曲がっている。穿孔箇所が1か所、割れ面にも2か所穿孔か。	SM19	4層

※銭貨：破損している部分の銭文は○で示し、判読不明なものは■で示した。

第13表　グスク1　出土遺物観察一覧d

挿図番号	遺物番号	種類	器種	分類	部位	法量（cm）			観察事項	出土位置	
						口径	器高	底径		遺構	層序
第157図	91	鉄製品	釘	－	完形	－	－	－	断面方形の角釘。頭部は一方へ折るタイプか。	SM19	4層
	92	鉄製品	釘	－	－	－	－	－	断面方形の角釘。全体的に錆膨れ。	SM19	4層
	93	鉄製品	釘	－	－	－	－	－	頭部を一方へ折る角釘。断面は方形。	SM19	4層
第158図	94	中国産青磁	碗	Ⅴ-0類	口～底	14.0	高 8.0 低 7.8	5.8	胎土は灰白色。釉は明緑色、外面に釉が定着せず露胎する箇所がある。外底面蛇の目釉剥ぎ。見込みに印花文。	SM19	5層
	95	中国産青磁	碗	Ⅵ-1類	底部	－	－	5.2	胎土は灰色。外底面蛇の目釉剥ぎ。外面に線刻蓮弁文、見込みに印花文。	SM19	5層
	96	中国産青磁	皿	Ⅴ類	口縁	8.6	－	－	直口口縁。胎土は灰白色。釉は明緑色で厚手。	SM19	5層
	97	中国産色絵	碗	－	口縁	－	－	－	古色絵。端反口縁。胎土は灰白色。外面に唐草文。内面口縁下に四方襷文か。	SM19	5層
	98	中国産青磁	碗	Ⅵ-1類	胴部	－	－	－	胎土は灰色。釉は青緑色。外面に削りの深い線刻蓮弁文。	SM19	5層
	99	銭貨	－	宣徳通寶	－	－	－	－	宣徳通寶（初鋳1433年）。背面無文。	SM19	5層
	100	銭貨	－	洪武通寶	－	－	－	－	洪武通寶（初鋳1368年）。背面無文。	SM19	5層
	101	銭貨	－	永樂通寶	－	－	－	－	永樂通寶（初鋳1408年）。背面無文。	SM19	5層
	102	銭貨	－	－	－	－	－	－	無文銭。	SM19	5層
	103	銭貨	－	熙寧元○	－	－	－	－	熙寧元寶（初鋳1068年）か。背面無文。銭文欠損。	SM19	5層
	104	青銅製品	不明	－	－	－	－	－	薄く平面形が三角形状で、折れ曲がっている。	SM19	5層
	105	青銅製品	不明	－	－	－	－	－	模様に沿って孔が開く部分と3か所の穿孔が確認される。花文様とまわりには小点文様が施される。花の中央に穿孔。	SM19	5層
	106	鉄製品	釘	－	－	－	－	－	断面方形で頭部を一方へ折るタイプか。全体的に錆膨れ。	SM19	4層
第159図	107	中国産青磁	擂鉢	－	底部	－	－	5.8	胎土は灰白色。釉は薄く明緑色、高台外面より露胎。	SM19	－
	108	中国産青磁	皿	Ⅴ類	口～底	11.4	3.1	5.8	稜花皿。胎土は灰白色。釉は明緑色で厚手、一部に釉が定着せず露胎する箇所がある。口縁部下に口唇に沿った2条の圏線、胴部にヘラ描きの草花文か。	SM19	－
	109	中国産青磁	碗	Ⅵ-1類	口縁	13.8	－	－	胎土は灰色。釉は暗オリーブ色で貫入あり。外面に弁先の揃う線刻蓮弁文。	SM19	－
	110	中国産青磁	碗	Ⅵ-1類	底部	－	－	5.0	胎土は黄白色で、一部は黒色。釉は明緑色で貫入あり。外面に線刻蓮弁文。外底面を蛇の目釉剥ぎ。	SM21	－
	111	中国産青磁	袋物	－	底部	－	－	7.2	胎土は灰白色。釉は暗オリーブ色で、見込みの一部に釉が厚くかかる。畳付を釉剥ぎ。外面に線刻蓮弁文。	SM21	－
	112	中国産白磁	皿	福建D'群	底部	－	－	3.6	胎土は乳白色で硬質、薄手。釉は灰白色。内外面胴部途中より露胎。	SM21	－
	113	中国産白磁	皿	景徳鎮窯系	口～底	15.8	高 3.65 低 3.6	9.0	端反口縁。胎土は白色で硬質。釉は灰白色。畳付は釉剥ぎされ、砂が付着。	SM21	－
第160図	114	中国産白磁	皿	景徳鎮窯系	口～底	11.2	2.7	6.1	端反口縁。胎土は乳白色で硬質。釉は白色。畳付を釉剥ぎ。	SM21	－
	115	中国産白磁	皿	景徳鎮窯系	底部	－	－	3.2	碁笥底。胎土は白色で硬質。釉は灰白色で、内外面胴部途中より露胎。	SM21	－
	116	中国産白磁	皿	景徳鎮窯系	口～底	8.3	高 2.5 低 2.05	4.3	平底。胎土は灰色で硬質。釉は灰白色で、内面口縁より下のみに施釉。外底面は糸切り後に回転削りか。口唇部にススと思われる黒色の付着物あり。	SM21	－
	117	中国産青花	碗	漳州窯系	口縁	13.2	－	－	胎土は黄白色で軟質。釉は灰白色。外面口縁下に波濤文、胴部に点文か。	SM21	－
	118	中国産青花	小碗	－	口縁	12.2	－	－	直口口縁。胎土は灰白色。外面に梅樹文か。	SM21	－
	119	中国産青花	碗	明Ⅲ類	口～底	12.2	5.8	5.2	饅頭心。胎土は灰色で薄手。見込みがやや膨らむいわゆる饅頭心。外面に山水文、見込みに鹿文か。	SM21	－
	120	中国産青花	皿	明Ⅱ-1類	口～底	15.5	3.9	8.9	端反口縁。胎土は黄白色。外面に牡丹唐草文、見込みに草花文、外底面に「大明年造」の銘。	SM21	－

※銭貨：破損している部分の銭文は○で示した。

第13表　グスク1　出土遺物観察一覧e

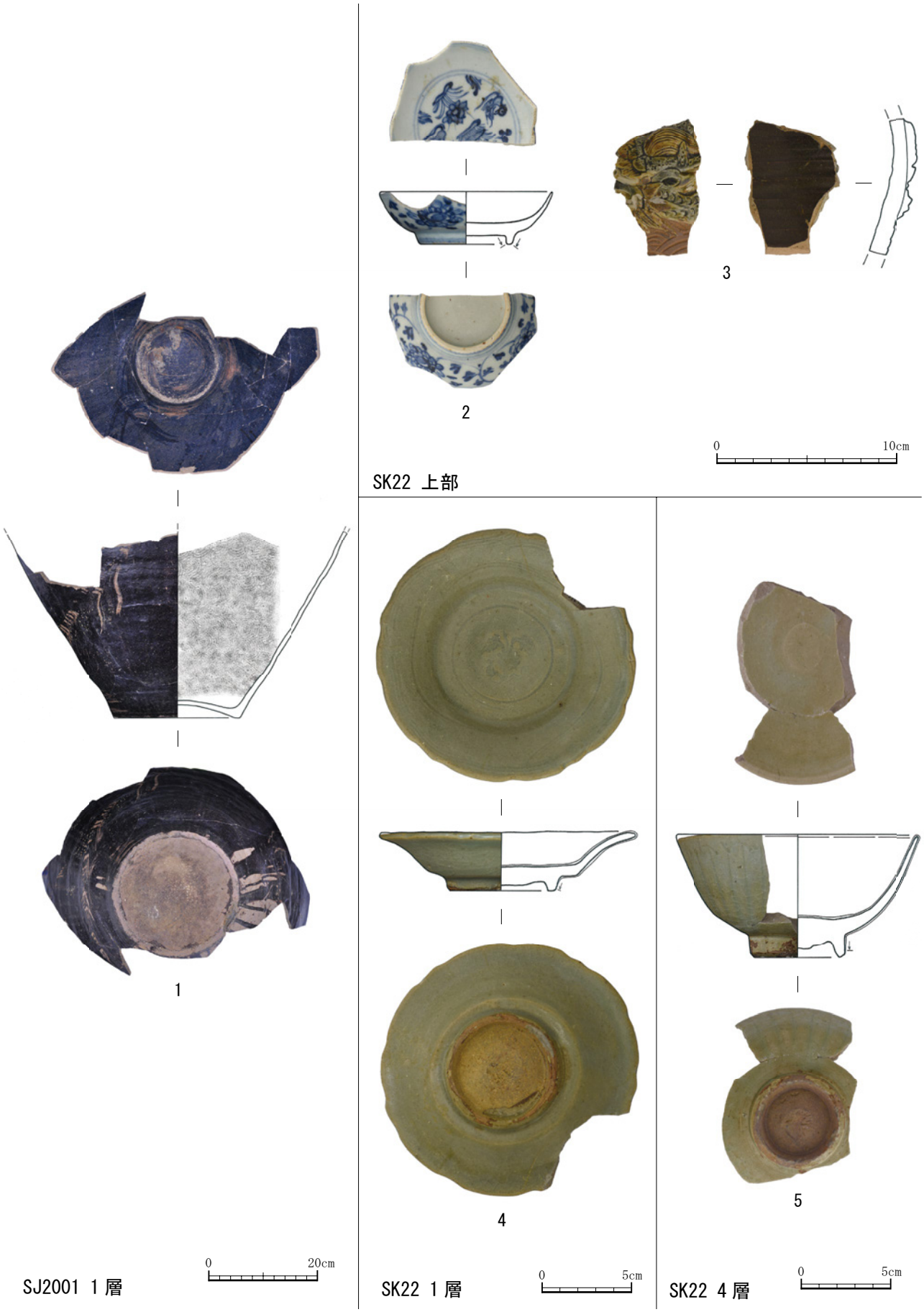
挿図番号	遺物番号	種類	器種	分類	部位	法量（cm）			観察事項	出土位置	
						口径	器高	底径		遺構	層序
第160図	121	中国産青花	皿	明Ⅱ-1類	底部	－	－	6.0	胎土は黄白色。畳付を釉剥ぎ。見込みに草花文。外面に波濤文か。外底面に「宣徳年製」の銘か。	SM21	－
第161図	122	中国産青花	皿	漳州窯系	底部	－	－	4.8	胎土は乳白色で硬質。外面胴部下半より露胎。見込みに点文。	SM21	－
	123	中国産青花	皿	明Ⅱ-2類	口～底	10.0	高 2.4 低 2.3	3.0	碁笥底。釉は青灰白色。焼成が不良のため呉須の発色が悪い。外面口縁下に波濤文、胴部に芭蕉文、見込みに草花文。	SM21	－
	124	中国産青花	鉢	漳州窯系	口縁	17.8	－	－	口縁は受け口状。胎土は黄白色で軟質。釉は黄灰色で貫入あり。内面口縁下に四方襷文。	SM21	－
	125	タイ産褐釉陶器	壺	メナムノイ短径Ⅱ類	底部	－	－	16.3	胎土は荒く灰黒色。釉は赤褐色、内面及び底部の一部、外底面露胎。	SM21	－
	126	タイ産染付	合子	－	口縁	7.4	－	－	胎土は灰色で硬質。釉は灰オリーブ色。口唇部と内面口縁下を釉剥ぎ。内面胴部の一部が露胎。外面に鉄絵で格子文とその下部に4条の圏線。	SM21	－
	127	ベトナム産白磁	碗	－	口～底	11.4	5.3	5.6	端反口縁。胎土は白色で硬質、薄手。釉はやや緑色がかる。口唇部及び畳付を釉剥ぎ。内面胴部に型押しの花唐草文、見込みに印花文。	SM21	－
	128	石製品	石杵	－	端部	－	－	－	石材：砂岩。表面全面に敲打成形痕。端部使用により磨滅。	SM24	1層
第162図	129	中国産青花	皿	明Ⅱ-2類	口縁	12.6	2.9	4.6	碁笥底。畳付を釉剥ぎ。高台内面及び外底面に砂が付着。見込みに魚文か。	SM24	2層
	130	中国産青花	小杯	景徳鎮窯系	口縁	6.4	－	－	直口口縁。外面口縁下に雲文、胴部下部に蓮弁文。	SM24	2層
	131	中国産瑠璃釉	瓶	－	底部	－	－	7.6	胎土は灰白色。外面に瑠璃釉を施釉。畳付を釉剥ぎ。外底面の一部が露胎。	SM24	2層
	132	中国産青磁	碗	幅広高台タイプ	口縁	19.4	－	－	胎土は灰白色。釉は明緑色で貫入あり。	SM24	3層
	133	中国産白磁	小杯	景徳鎮窯系	口～底	6.8	4.1	3.2	外反口縁。胎土は白色。畳付を釉剥ぎ、外底面露胎。	SM24	3層
	134	中国産青花	碗	明Ⅱ-2類	底部	－	－	5.4	胎土は黄白色。釉はやや青みがかる。畳付を釉剥ぎ。外面に波濤文と如意頭唐草文。見込みに蓮花文か。	SM24	3層
	135	中国産青花	皿	明Ⅱ-1類	口～底	9.4	2.3	4.4	端反口縁。胎土は白色。外面に宝珠唐草文、見込みに十字花文。見込みの一部に砂が付着。	SM24	3層
	136	中国産青花	皿	明Ⅱ-2類	口～底	11.7	3.2	3.8	碁笥底。畳付を釉剥ぎ、砂が付着。釉はやや青みがかる。外面に花唐草文、見込みに寿の十字文。	SM24	3層
	137	中国産色絵	皿	景徳鎮窯系	底部	－	－	7.2	胎土は白色で硬質。畳付を釉剥ぎ。見込みに黒釉で鳥文か。	SM24	3層
	138	ベトナム産染付	碗	－	底部	－	－	5.8	胎土は灰白色で軟質。見込みを蛇の目釉剥ぎ。畳付を釉剥ぎし、外底面露胎。見込みに点文、外面に草花文か。	SM24	3層
第163図	139	中国産法華	蓋	－	－	大 19.7 小 11.8	－	－	胎土は灰白色。全体的に瑠璃釉を施釉し、文様箇所に青釉を施釉。外面上部に雲文、胴部に如意頭文。	SM24	3層
	140	中国産青磁	碗	Ⅵ-1類	口～底	12.4	高 7.1 低 6.9	4.7	胎土は黄白色で軟質。高台内面途中より露胎。外面に弁先の揃わない線刻蓮弁文、見込みに印花文と字款。	SM24	－
	141	中国産青磁	碗	Ⅵ-1類	口縁	12.6	－	－	胎土は黄白色で軟質。釉は明オリーブ色でやや厚手、貫入あり。外面に弁先の揃わない線刻蓮弁文。	SM24	－
	142	中国産青磁	碗	幅広高台タイプ	底部	－	－	6.8	胎土は灰白色。露胎部は赤褐色。見込みは蛇の目釉剥ぎ。高台外面途中より露胎。高台は端部を抉り、畳付けは平坦。	SM24	－
	143	中国産白磁	小杯	景徳鎮窯系	底部	－	－	2.3	胎土は灰白色。釉は白色。畳付を釉剥ぎ。見込みを蛇の目釉剥ぎ。	SM24	－
	144	中国産白磁	壺	福建系	口縁	11.0	－	－	いわゆる安平壺。胎土は灰白色で硬質。釉は青緑色で貫入あり。口唇部を釉剥ぎ。	SM24	－
	145	中国産青花	碗	明Ⅱ-1類	口縁	13.4	－	－	胎土は白色。外面口縁下に波濤文、腰部に芭蕉文。	SM24	－
	146	中国産青花	碗	明Ⅱ-1類	底部	－	－	5.0	胎土は白色。畳付を釉剥ぎ。外面腰部に芭蕉文、見込みに蓮花文か。	SM24	－
	147	中国産青花	碗	明Ⅱ-1類	口縁	14.0	－	－	直口口縁。胎土は白色。外面口縁下に花文と如意頭文。呉須の発色が悪い。	SM24	－
	148	中国産青花	碗	明Ⅱ-1類	口縁	12.2	－	－	直口口縁。胎土は白色。釉はやや青みがかる。外面口縁下に波濤文、胴部に唐草文か。	SM24	－
	149	中国産青花	碗	漳州窯系	口縁	15.0	－	－	端反口縁。胎土は灰色で硬質。外面に草文。	SM24	－
	150	中国産青花	碗	明Ⅱ-1類	底部	－	－	5.6	胎土は灰白色。釉はやや青みがかる。呉須の発色が悪い。畳付を釉剥ぎ。外面胴部に如意頭唐草文、見込みに蓮華文。	SM24	－

第13表　グスク1　出土遺物観察一覧f

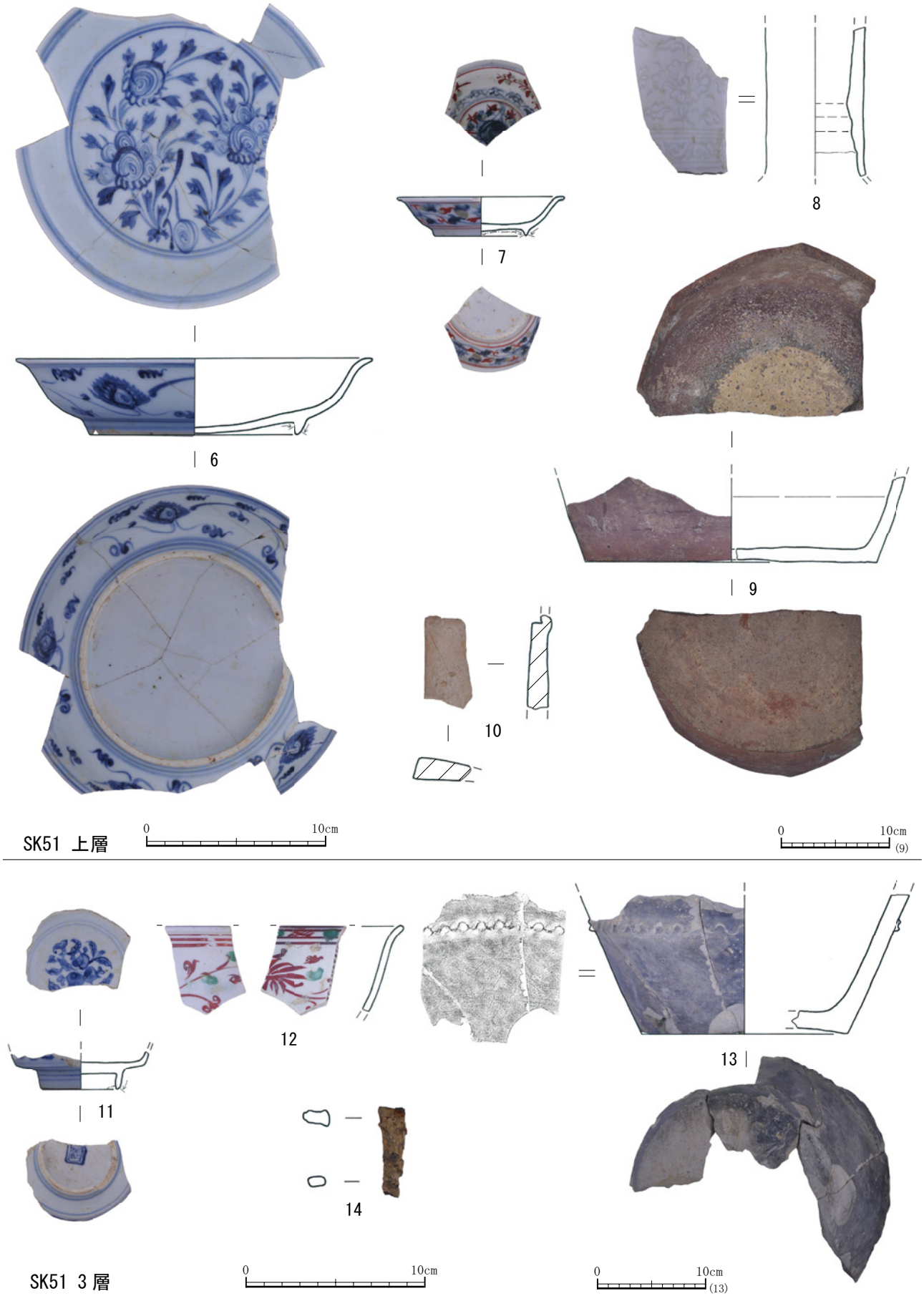
挿図番号	遺物番号	種類	器種	分類	部位	法量（cm）			観察事項	出土位置	
						口径	器高	底径		遺構	層序
第164図	151	中国産青花	碗	明Ⅲ類	底部	－	－	4.4	饅頭心。胎土は白色。畳付を釉剥ぎ。見込みに見込みに十字花文、外底面に「大明年造」の銘か。	SM24	－
	152	中国産青花	皿	明Ⅱ-2類	口～底	11.4	3.2	3.3	碁笥底。釉はやや青みがかる。畳付を釉剥ぎ。見込みに花弁文。	SM24	－
	153	中国産青花	皿	明Ⅱ-2類	底部	－	－	－	碁笥底。釉はやや青みがかる。畳付を釉剥ぎ。外面に芭蕉文、見込みに芭蕉文か。	SM24	－
	154	中国産青花	壺	－	胴部	胴径11.0	－	－	胎土は白色。内面も施釉される。外面胴部に唐草文とその下部に圏線、腰部に蓮弁文。	SM24	－
	155	中国産青花	小碗	－	口縁	－	－	－	直口口縁。胎土は白色。外面口縁下に唐草文、胴部に如意頭文。	SM24	－
	156	中国産青花	瓶	－	口縁	8.0	－	－	胎土は白色。口唇部に2条の圏線、外面に芭蕉文か。	SM24	－
	157	中国産瑠璃釉	碗	－	口縁	12.4	－	－	直口口縁、胎土は白色。外面に瑠璃釉。	SM24	－
	158	中国産色絵	瓶	－	胴部	胴径6.8	－	－	胎土は乳白色。赤・緑・黄で文様を施す。外面に蓮弁文と蓮弁内に青海波文、その下部に唐草文、上部に草花文か。	SM24	－
	159	中国産色絵	瓶	－	胴部	胴径9.0	－	－	胎土は乳白色。赤・緑・黄で文様を施す。外面胴部に草花文、その下に蓮弁文。	SM24	－
	160	中国産翡翠釉	小皿	景徳鎮窯系	口縁	8.8	－	－	端反口縁。胎土は灰色で硬質。内外面に青釉を施釉。	SM24	－
	161	中国産翡翠釉	皿	景徳鎮窯系	底部	－	－	－	胎土は黄白色で硬質。畳付は露胎。見込みに貼付の花唐草文で瑠璃釉が施釉される。	SM24	－
	162	中国産三彩	水注	福建系	底部	－	－	－	胎土は乳白色で軟質。外面に緑釉が施釉される。	SM24	－
第165図	163	中国産褐釉陶器	壺	5類	口縁	18.2	－	－	胎土は黄灰色、白色粒が少量混じる。釉は暗オリーブ色。	SM24	－
	164	中国産褐釉陶器	壺	5類	底部	－	－	13.8	胎土は外面側は灰黒色で内面は黄白色、白色粒が少量混じる。釉は外面が暗オリーブ色、内面は明オリーブ色。外底面露胎。	SM24	－
	165	タイ産施釉陶器	蓋	－	－	9.6	－	－	胎土は黄褐色で軟質。内面は露胎。外面は青灰色の釉を施釉。鉄釉で区画文とその内側に格子文。	SM24	－
	166	タイ産褐釉陶器	壺	メナムノイ短径Ⅱ類	底部	－	－	21.2	胎土は黄灰色で粗く、白色、赤褐色、黒色粒が少量混じる。釉は外面が赤褐色、内面は黄褐色。	SM24	－
	167	タイ産褐釉陶器	壺	－	底部	－	－	11.2	胎土は赤褐色で堅緻、白色粒が多く混じる。釉は外面が暗褐色、内面は外底面に赤褐色、内面胴部及び外底面露胎。	SM24	－
	168	瓦質土器	小皿	－	口縁	10.2	－	－	胎土は灰色、赤褐色粒と黒色粒が少量混じる。直口しながら外側へ開く器形。	SM24	－
	169	瓦質土器	鉢	－	口縁	－	－	－	ロクロ成形。口縁が逆くの字状になる器形。口唇平坦に成形。	SM24	－
	170	石製品	砥石	－	－	－	－	－	石材：琉球石灰岩。全面研磨成形。表裏面中央部は使用により擦り減り凹状。	SM24	－
	171	青銅製品	不明	－	－	－	－	－	指輪の飾り部分か。	SP123	－
	172	中国産青磁	碗	Ⅳ類	口縁	18.0	－	－	弱い玉縁口縁。胎土は灰色。釉は暗オリーブ色で貫入あり。	SP127	柱痕
	173	瓦質土器	香炉？	－	底部	－	－	－	脚付の香炉か。脚は片側には段差がある。脚の片側に被熱痕か。内面にも被熱痕。	SP138	柱痕
	174	中国産青磁	碗	Ⅵ-2類	口縁	14.6	－	－	直口口縁。胎土は黄灰色でやや軟質。釉は明オリーブ色で貫入あり。外面口縁下にヘラ描きの雷文。	SP313	柱抜き後
第166図	175	中国産青磁	碗	Ⅴ類	底部	－	－	8.2	胎土は灰白色。釉は明緑色で厚く施釉される。外底面蛇の目釉剥ぎ。見込みに印花文か。	SP410	－
	176	銭貨	－	洪武通寶	－	－	－	－	洪武通寶（初鋳1368年）。背面無文。	SP559	－
	177	鉄製品	釘	－	－	－	－	－	断面方形か。頭部は錆ふくれが激しく、形状不明。	SP560	－
	178	中国産褐釉陶器	壺	5類	底部	－	－	13.0	胎土は暗赤褐色で堅緻。釉は外面は暗オリーブ色、内面は黒オリーブ色。内外底面の一部が露胎。	SP561	－
	179	中国産青磁	碗	Ⅵ-1類	口縁	12.2	－	－	胎土は灰白色。釉は明オリーブ色。外面に幅の狭い弁先の揃う線刻蓮弁文。	SP891	－
	180	中国産青磁	碗	－	口縁	16.8	－	－	外反口縁。胎土は灰色。釉は暗オリーブ色。外面口縁下より露胎。泉州窯系か。	SX3	Ⅲ97・99層

第13表　グスク1　出土遺物観察一覧g

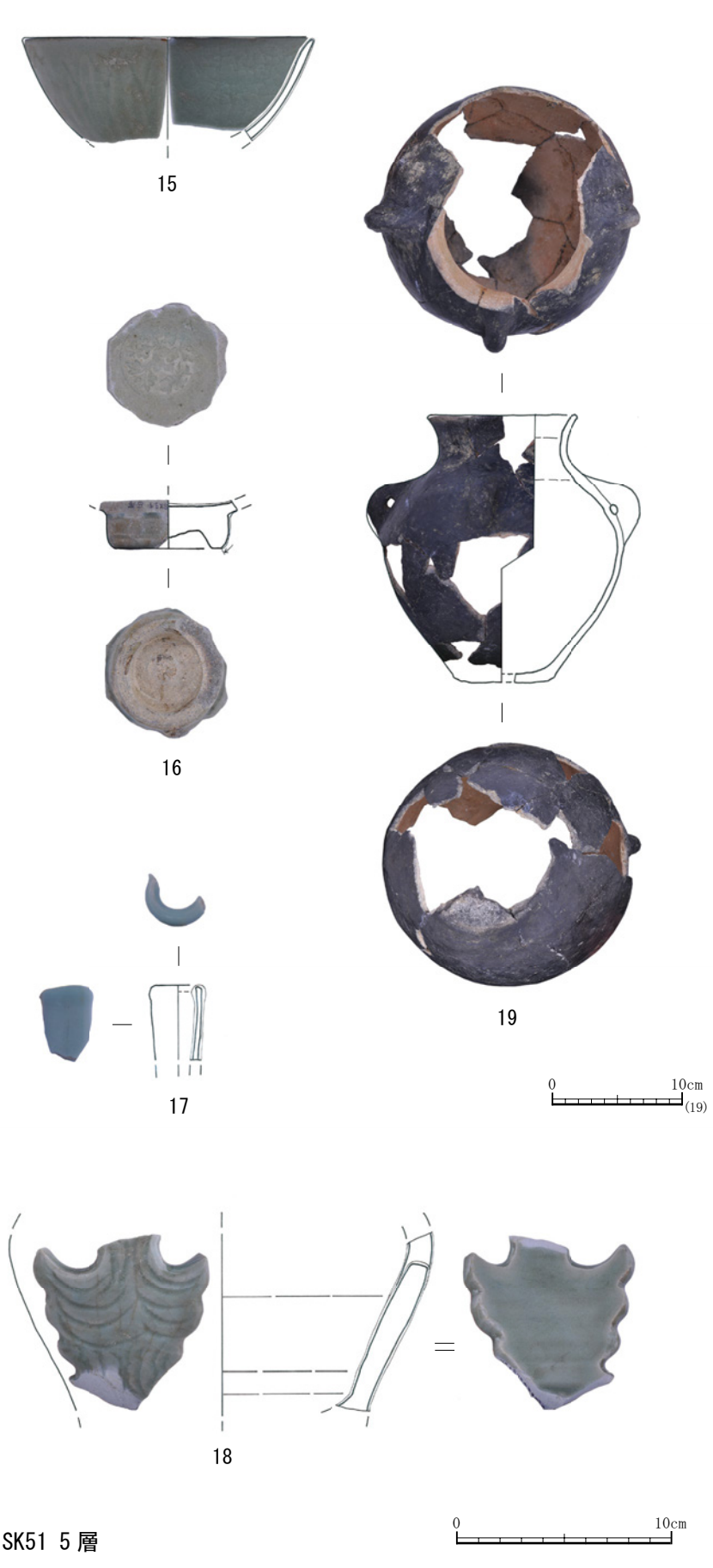
挿図番号 遺物番号		種類	器種	分類	部位	法量（cm）			観察事項	出土位置	
						口径	器高	底径		遺構	層序
第166図	181	中国産青磁	碗	Ⅵ-1類	底部	－	－	4.4	胎土は灰白色。外面に線刻蓮弁文。外底面及び高台内面途中より露胎。	SX3	Ⅲ97・99層
	182	タイ産土器	壺	－	口縁	12.6	－	－	胎土は灰赤色で白色、赤褐色粒を少量含む。口唇部は内面口唇部下に1条の圏線。	SX3	Ⅲ99層
	183	中国産青磁	碗	Ⅵ類	底部	－	－	4.6	胎土は灰白色。釉は暗オリーブ色でガラス質、貫入あり。外底面に焼き具が付着。	SX28	－
第167図	184	中国産青磁	盤	稜花	口～底	23.8	高 5.2 低 4.9	10.0	胎土は灰白色、釉は明緑色だが焼成が悪く釉の発色は鈍い。外底面を蛇の目釉剥ぎ。内面口縁下に口唇に沿った波状文、見込みに印花文、外面に蓮弁文。	SX41	1層
	185	中国産青花	碗	明Ⅰ-1類	口～底	12.8	高 5.9 低 5.8	5.2	端反口縁。胎土は白色。畳付及び高台内面下半を釉剥ぎ。外面に梅樹草花文、内面胴部及び見込みに花弁文。	SX41	1層
	186	中国産青磁	碗	Ⅵ-1類	口～底	11.5	7.4	4.8	胎土は灰白色。釉は暗オリーブ色でやや厚手。外底面を蛇の目釉剥ぎ。外面に幅の狭い弁先の揃う線刻蓮弁文、見込みに捻花文。	SX41	－
	187	中国産白磁	皿	福建D群	底部	－	－	3.8	胎土は黄白色で軟質。釉は乳白色で貫入あり。外底面露胎。高台は角型、抉りは無い。	SX41	－
	188	タイ産褐釉陶器	壺	メナムノイ短径Ⅱ類	口縁	16.4	－	－	胎土は黄灰色で堅緻、赤褐色粒、暗褐色粒を少量含む。釉は暗オリーブ色。内面頸部下より露胎。	SX41	－
第168図	189	中国産青磁	碗	Ⅵ-1類	底部	－	－	5.7	胎土は灰白色。釉は明オリーブ色。外底面露胎で、高台内面の一部を釉剥ぎ。外面に線刻蓮弁文。	SX42	1層
	190	中国産青花	皿	明Ⅲ類	口～底	9.6	2.3	5.0	直口口縁。口唇部に口錆。胎土は灰白色。畳付を釉剥ぎ。見込みに花文か。	SX42	1層
	191	中国産白磁	皿	福建D群	口縁	8.1	－	－	胎土は黄白色軟質。釉は乳白色だが黒く変色している箇所あり。	SX42	1層
	192	本土産陶器	擂鉢	－	口縁	－	－	－	胎土は灰白色、口の部分は赤褐色。白色、黒色粒を少量含む。櫛目は4本前後で幅広。	SX42	1層
	193	産地不明土器	蓋	－	－	13.6	－	－	胎土は赤褐色、白色粒を少量含む。外面に植物の繊維と思われる白色物あり。	SX42	1層
	194	中国産褐釉陶器	壺	5類	口縁	20.6	－	－	胎土は外面側は黒灰色、内面側は灰色、白色粒を少量含む。釉は暗オリーブ色。	SX42	－
	195	タイ産半練土器	蓋	－	－	13.6	－	－	胎土は灰色で粗い、白色粒、黒色粒を少量含む。	SX42	－



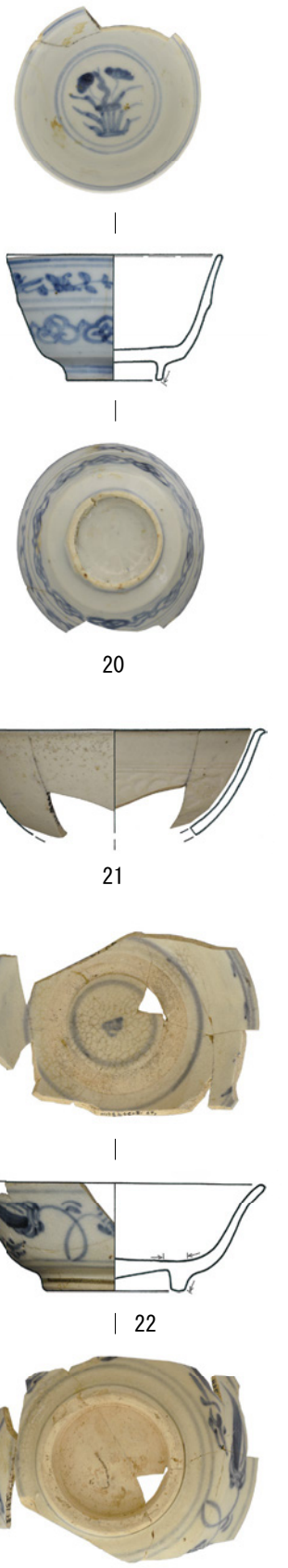
第 147 図　グスク1の遺構出土遺物 1



第 148 図　グスク1の遺構出土遺物 2



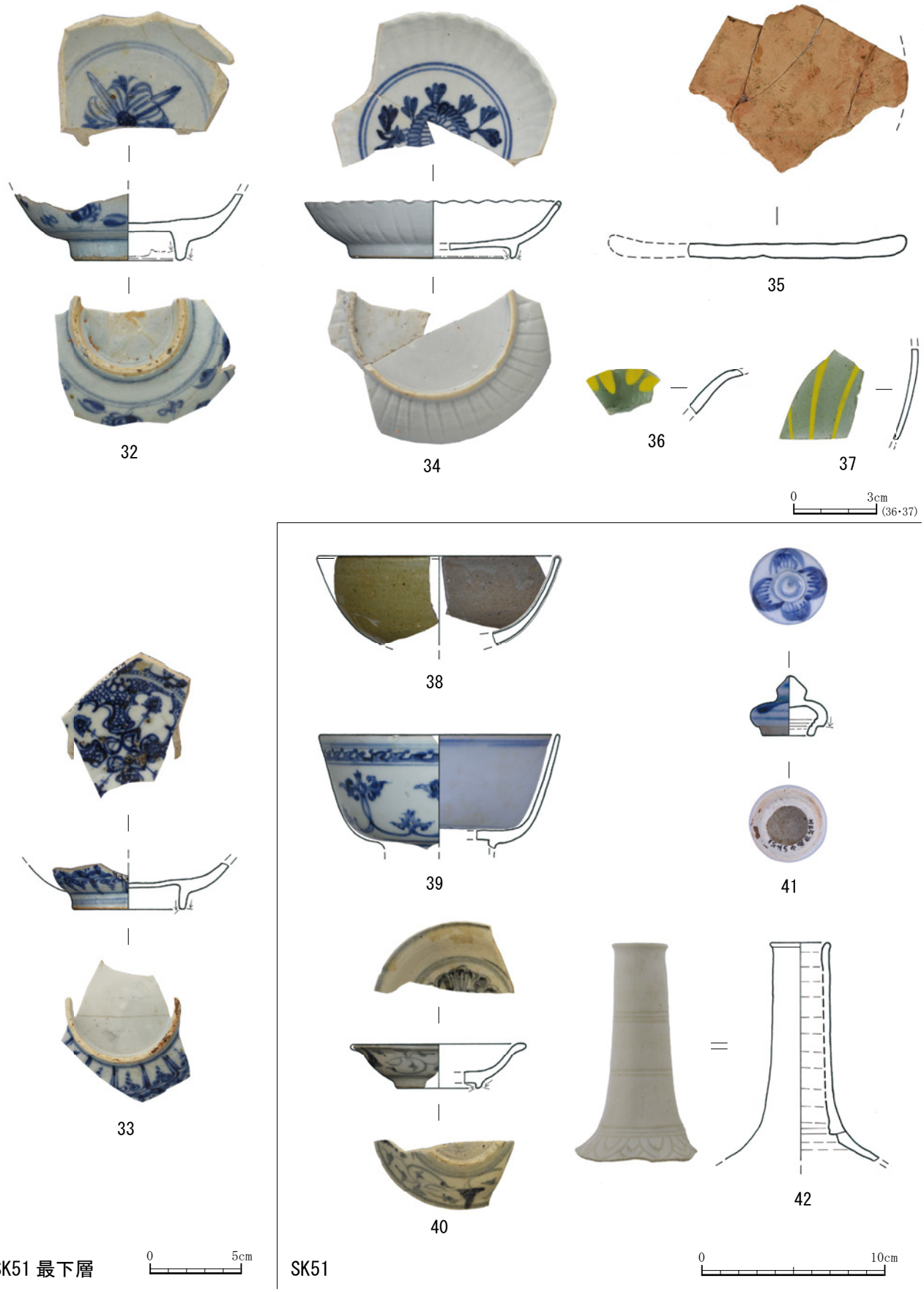
SK51 5 層



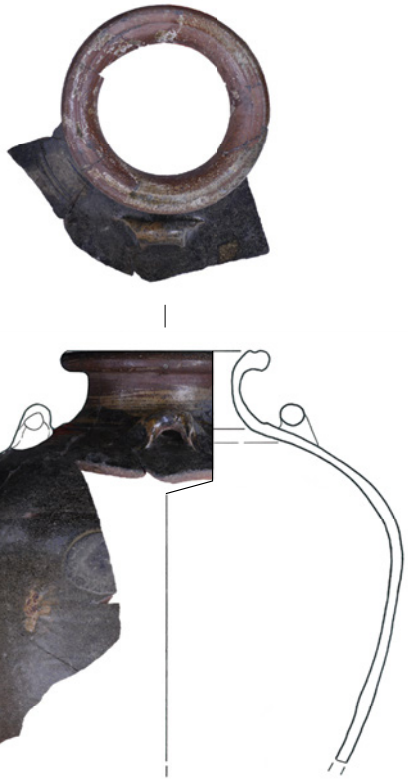
SK51 6 層

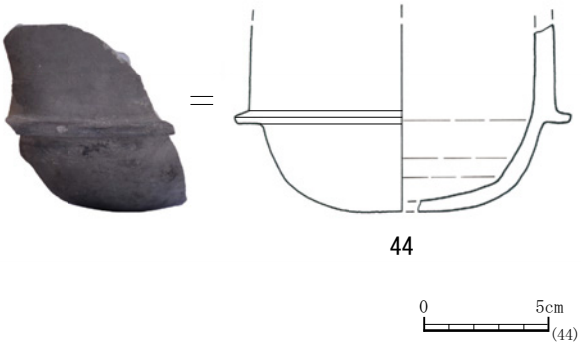
第 149 図　グスク1の遺構出土遺物 3

第 150 図　グスク1の遺構出土遺物 4



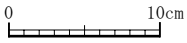
第 151 図　グスク1の遺構出土遺物 5



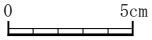


SK51

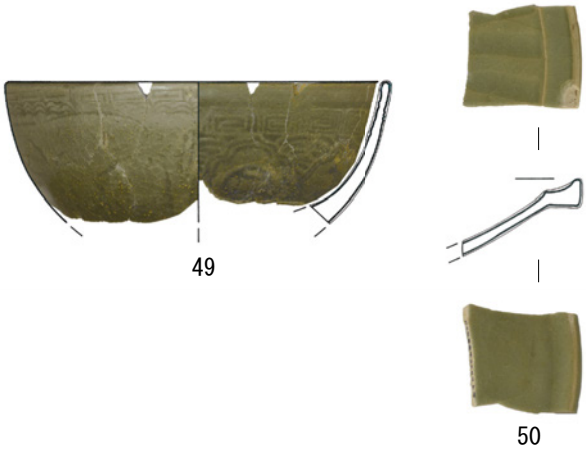
SK52 上層

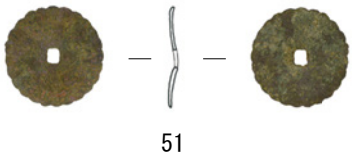


SK53 上層

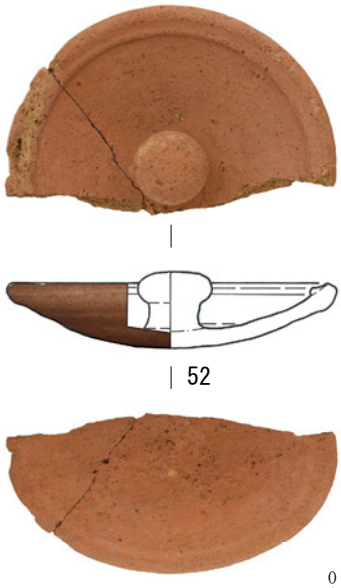


第 152 図　グスク1の遺構出土遺物 6



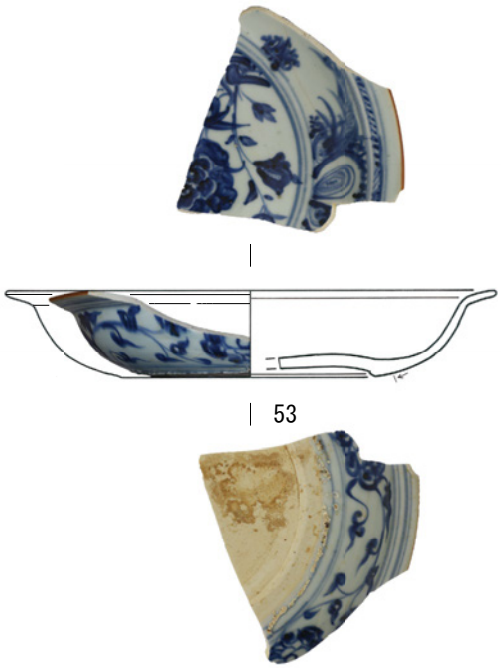


SK53 上層　0　5cm



SK53 1 層　0　5cm

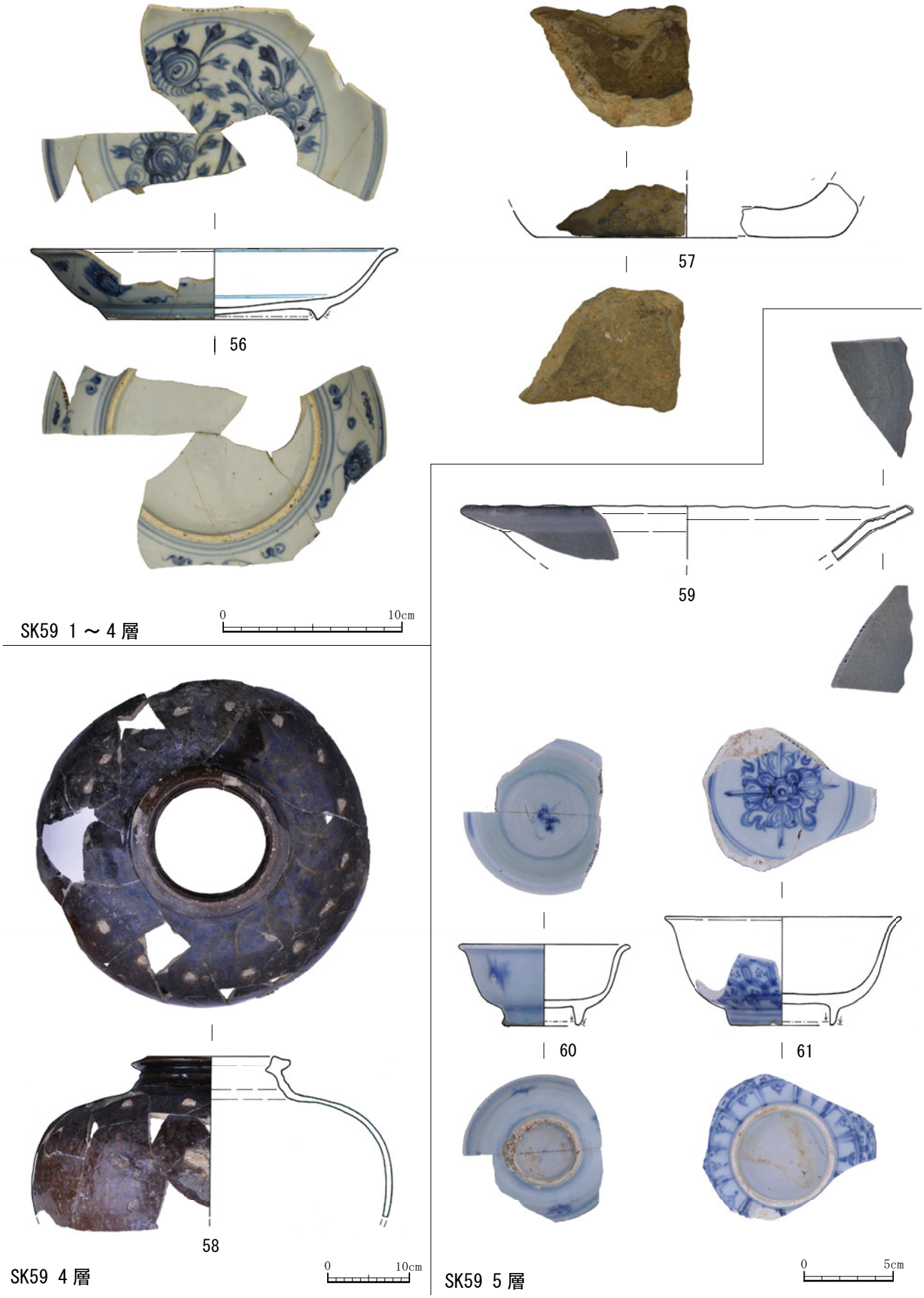
SK56 上層　0　2cm



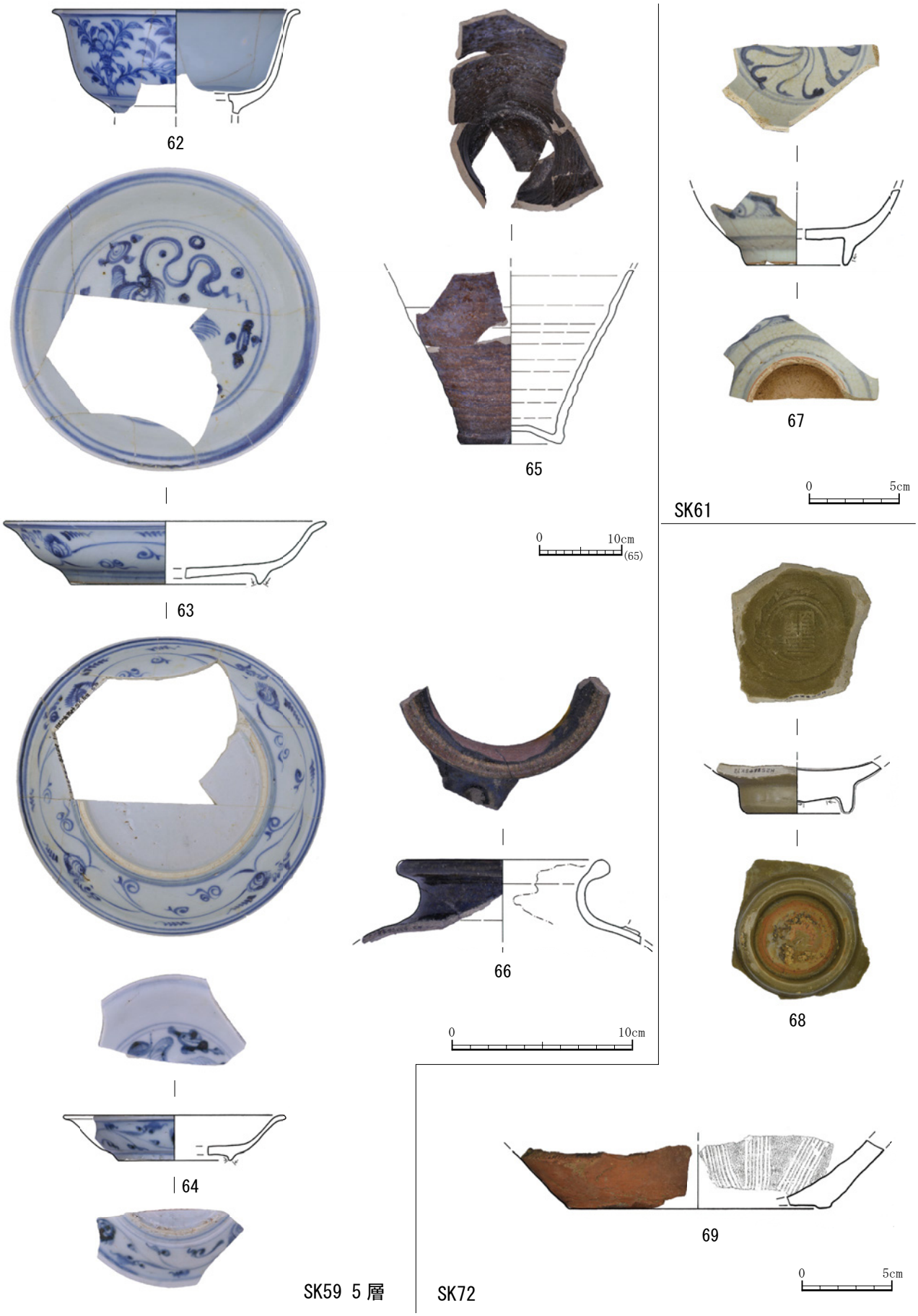
SK53　0　10cm

SK56　0　2cm

第 153 図　グスク1の遺構出土遺物 7



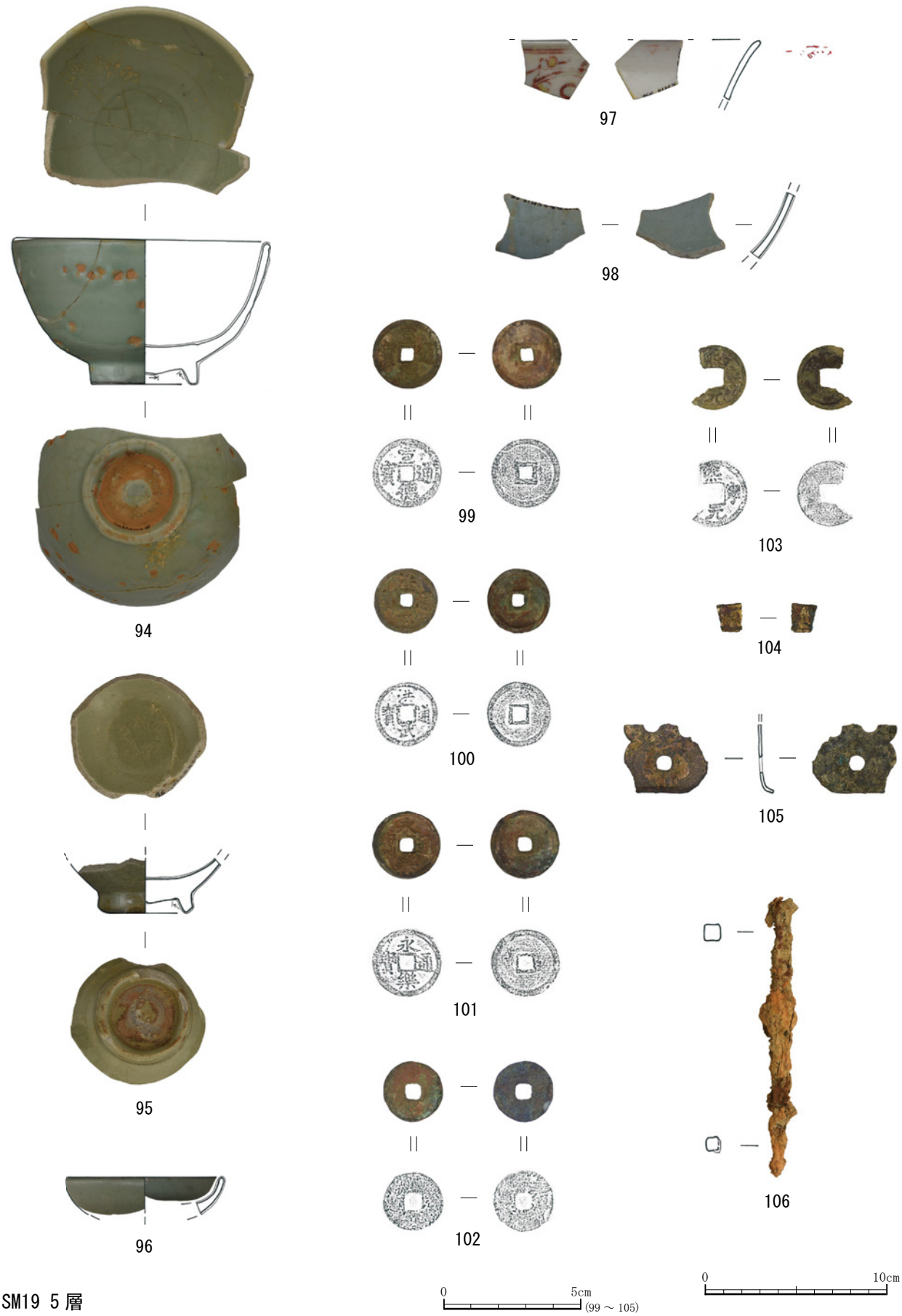
第 154 図　グスク1の遺構出土遺物 8



第 155 図　グスク1の遺構出土遺物 9

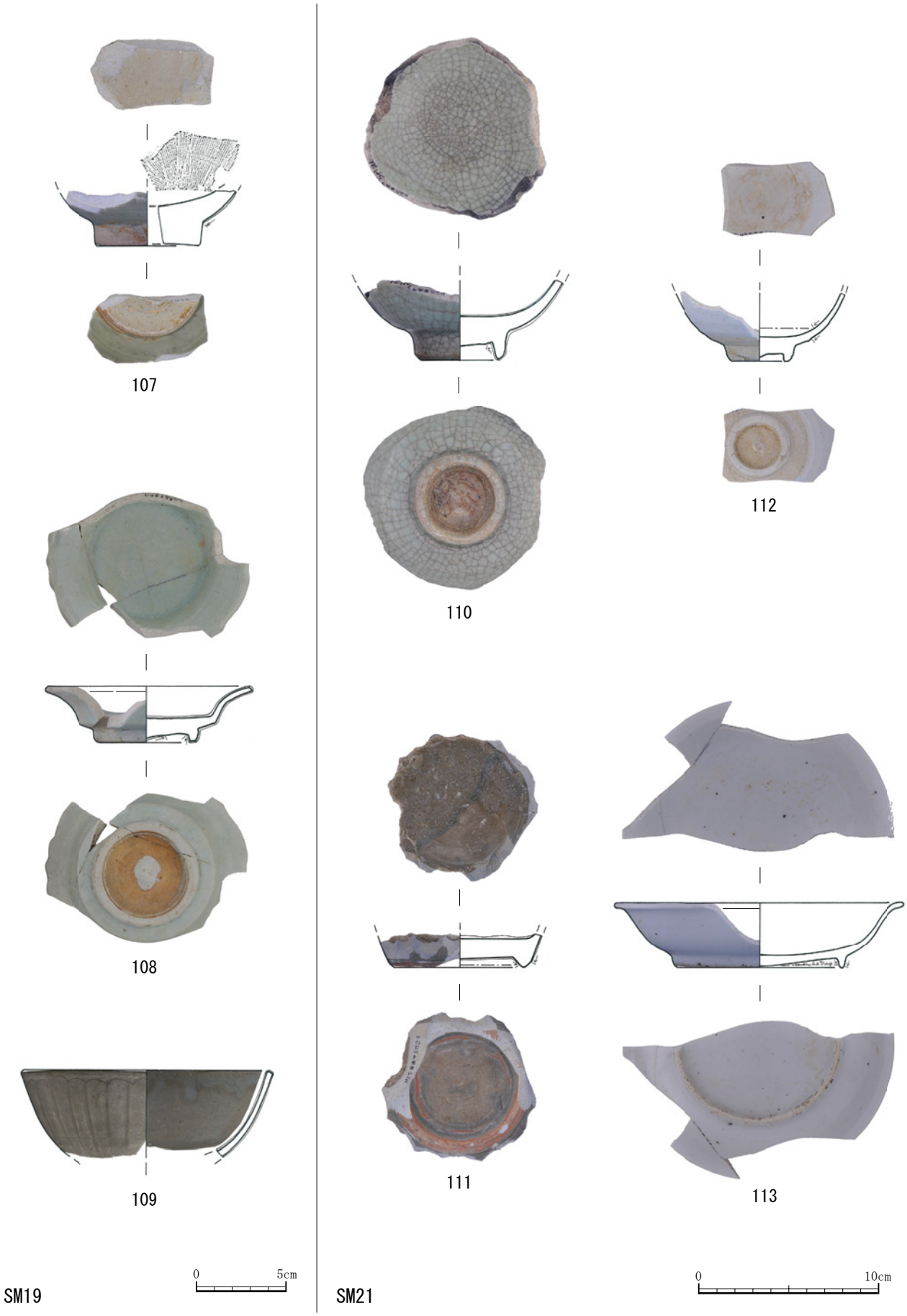
第 156 図　グスク1の遺構出土遺物 10

第 157 図　グスク1の遺構出土遺物 11

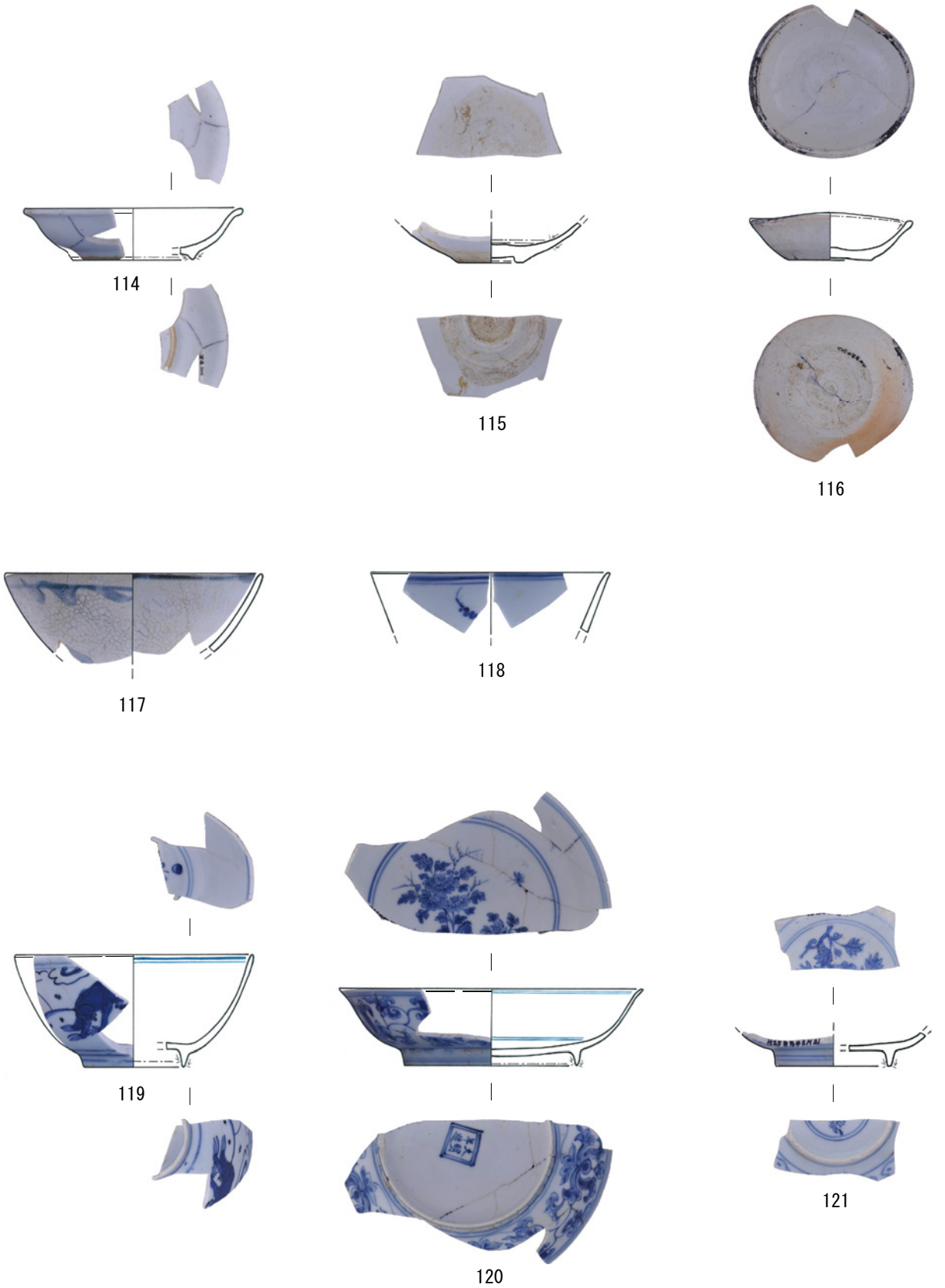


SM19 5 層

第 158 図　グスク1の遺構出土遺物 12

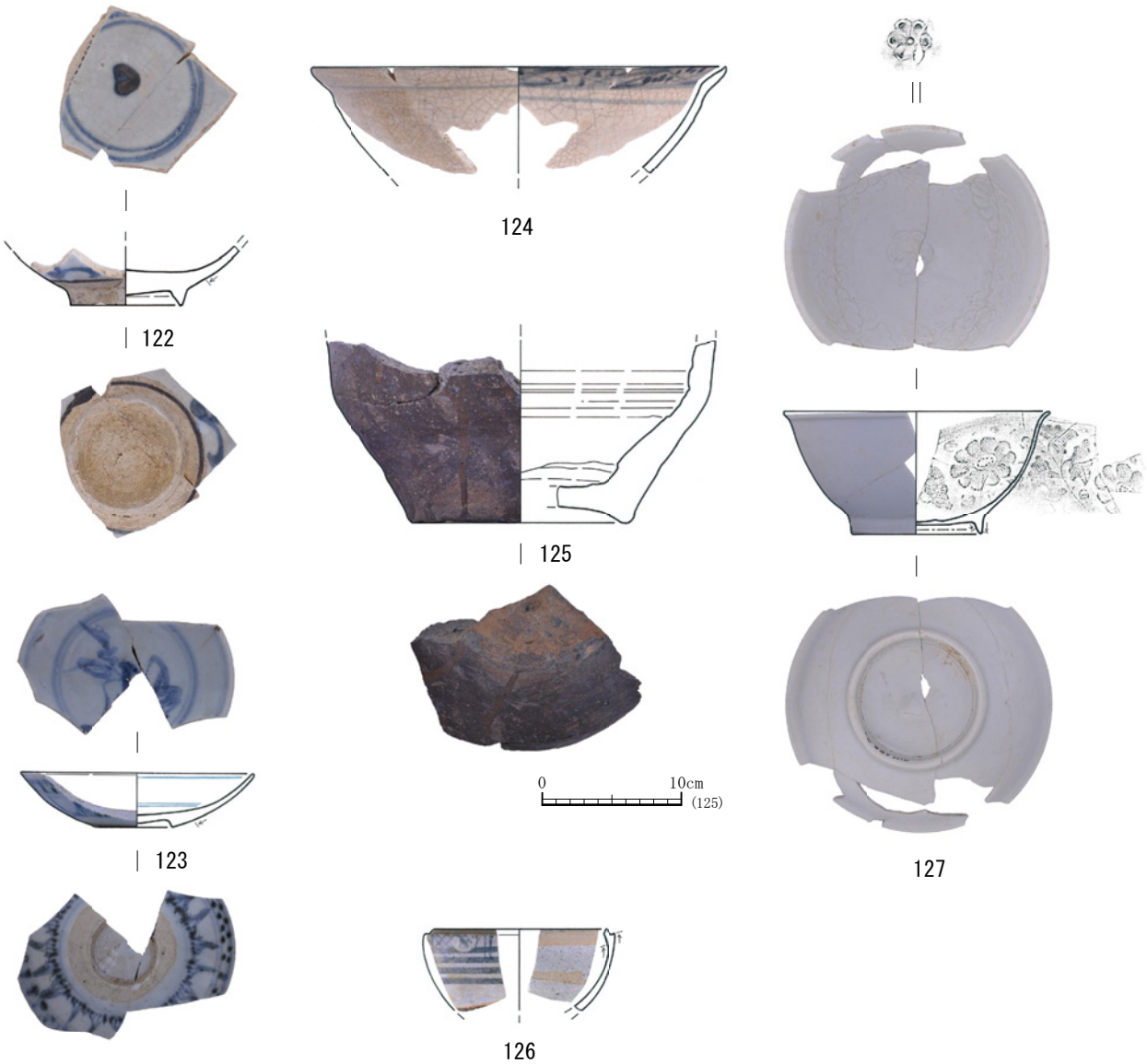


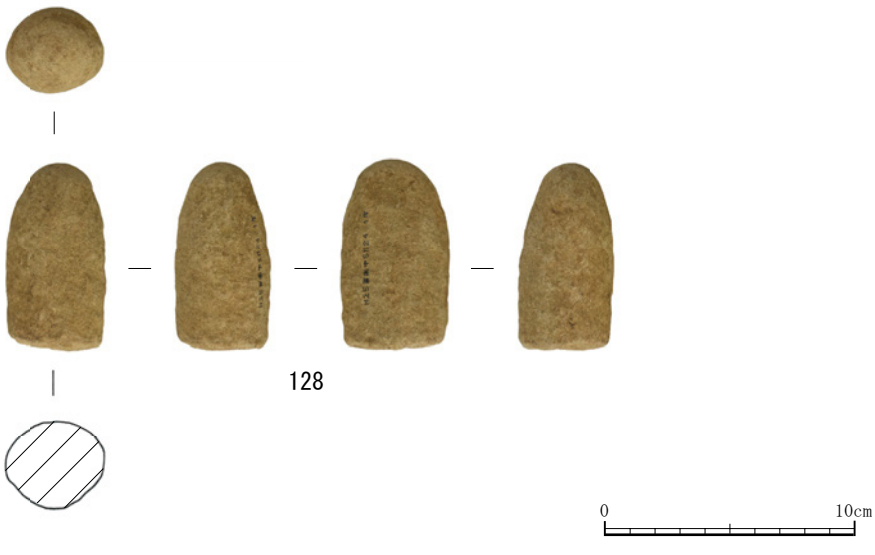
第 159 図　グスク1の遺構出土遺物 13



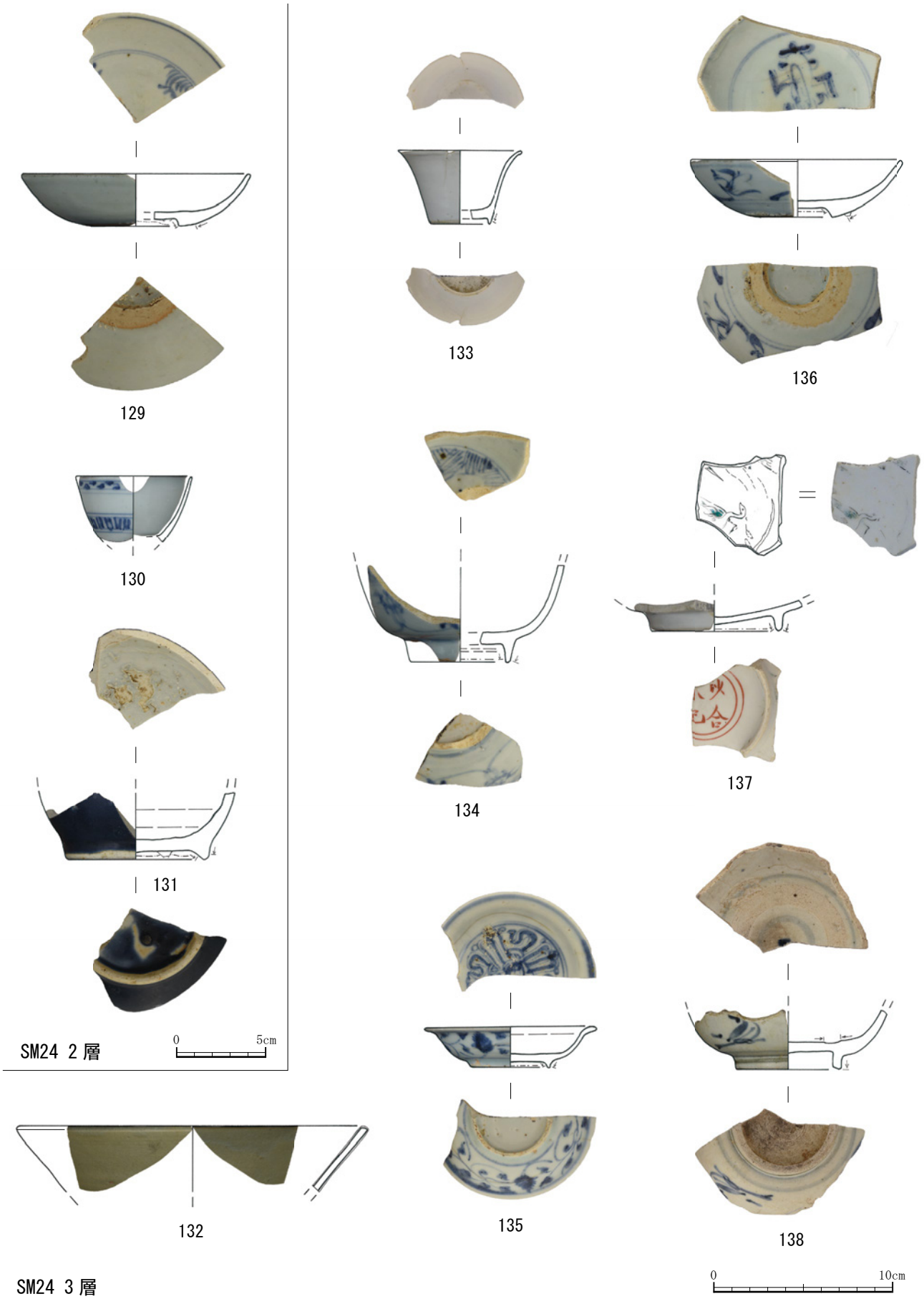
SM21

第 160 図　グスク1の遺構出土遺物 14





第 161 図　グスク1の遺構出土遺物 15

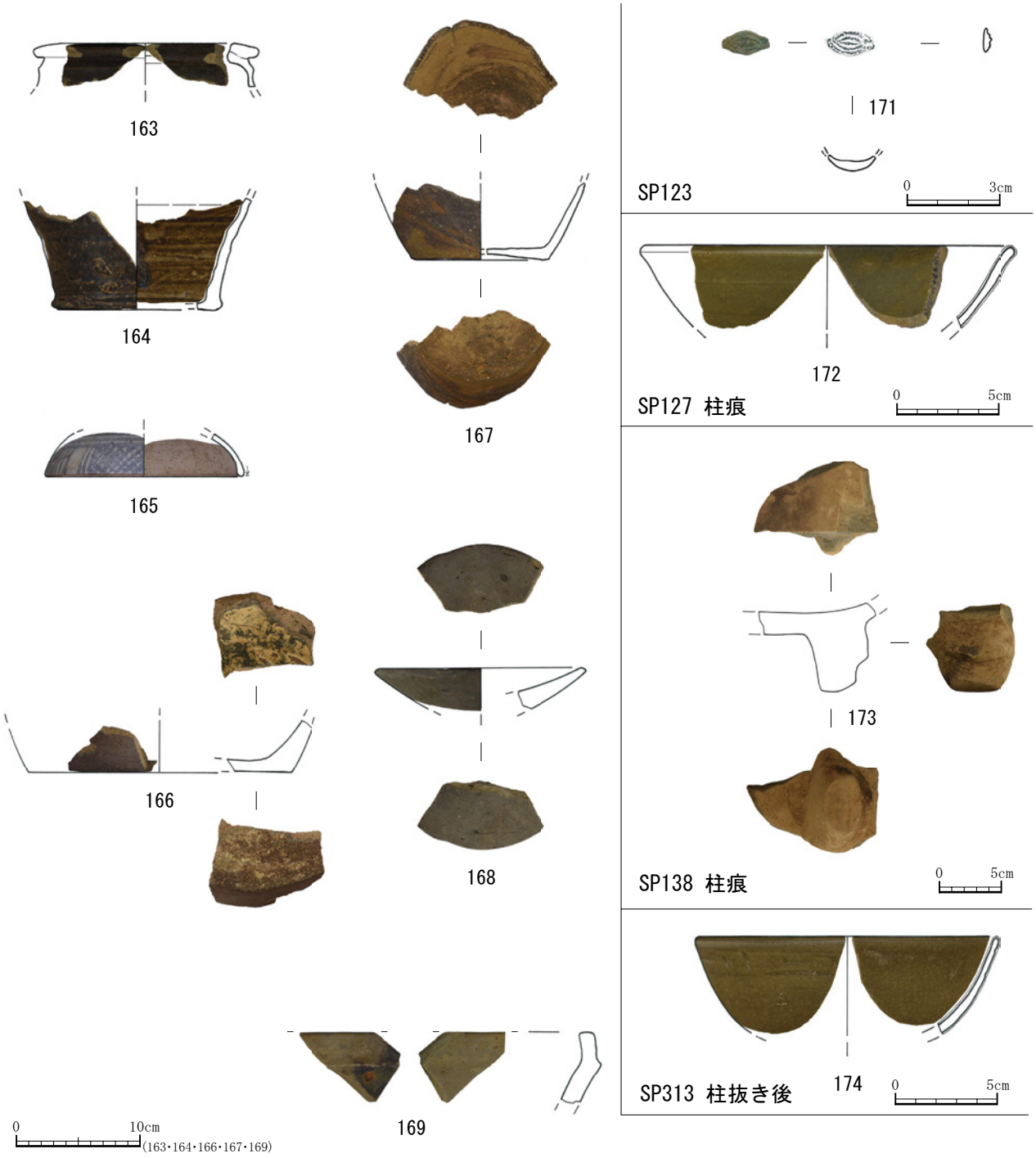


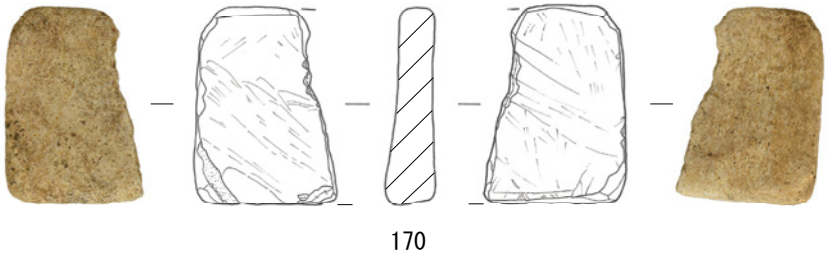
第 162 図　グスク1の遺構出土遺物 16

第 163 図　グスク1の遺構出土遺物 17

SM24

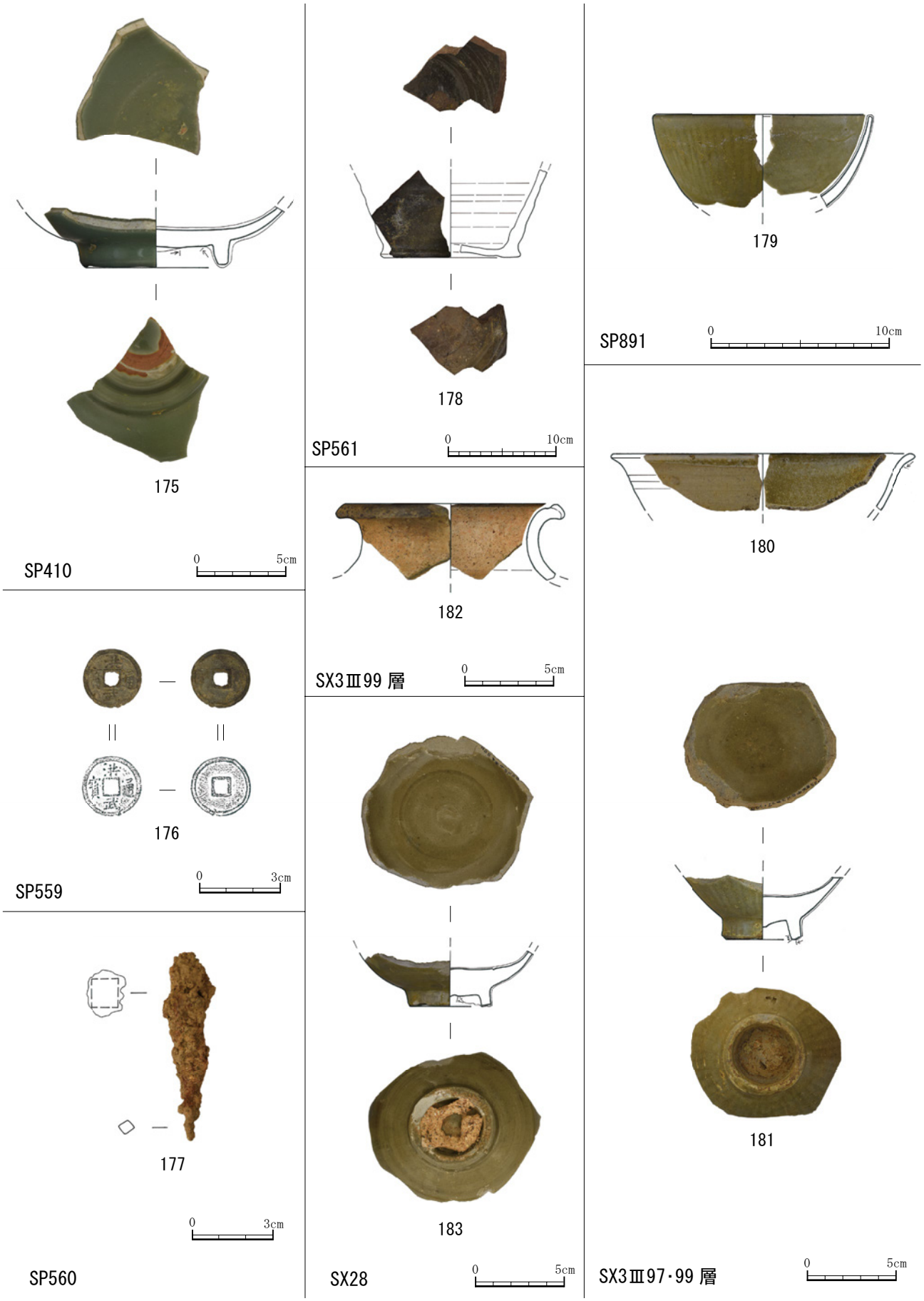
第 164 図　グスク1の遺構出土遺物 18



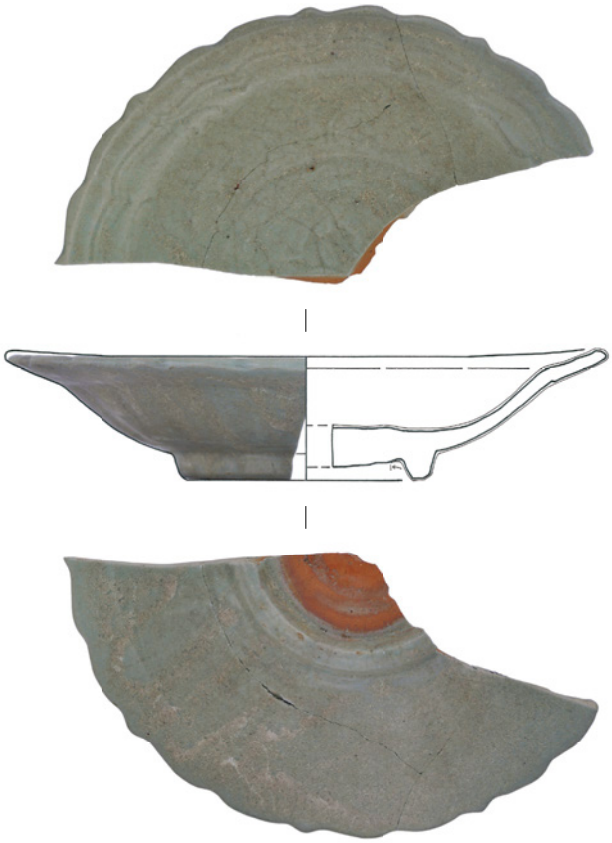


SM24

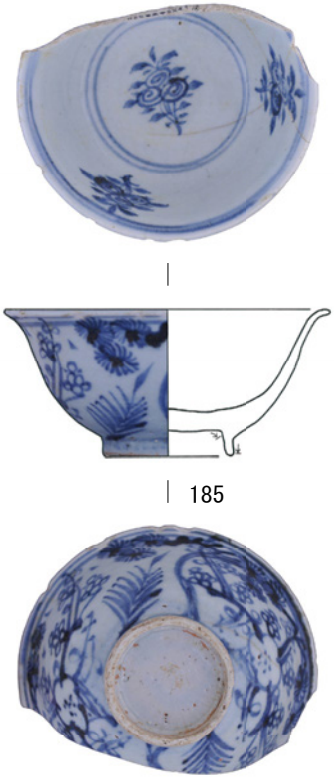
第 165 図　グスク1の遺構出土遺物 19



第 166 図　グスク1の遺構出土遺物 20



184

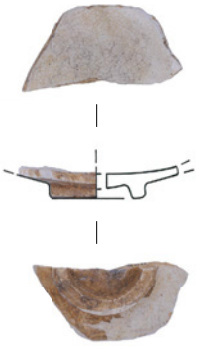


185

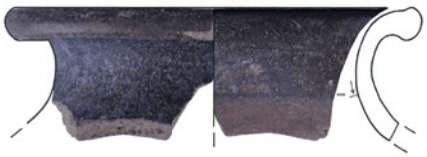
SX41 1 層

0　10cm

186



187

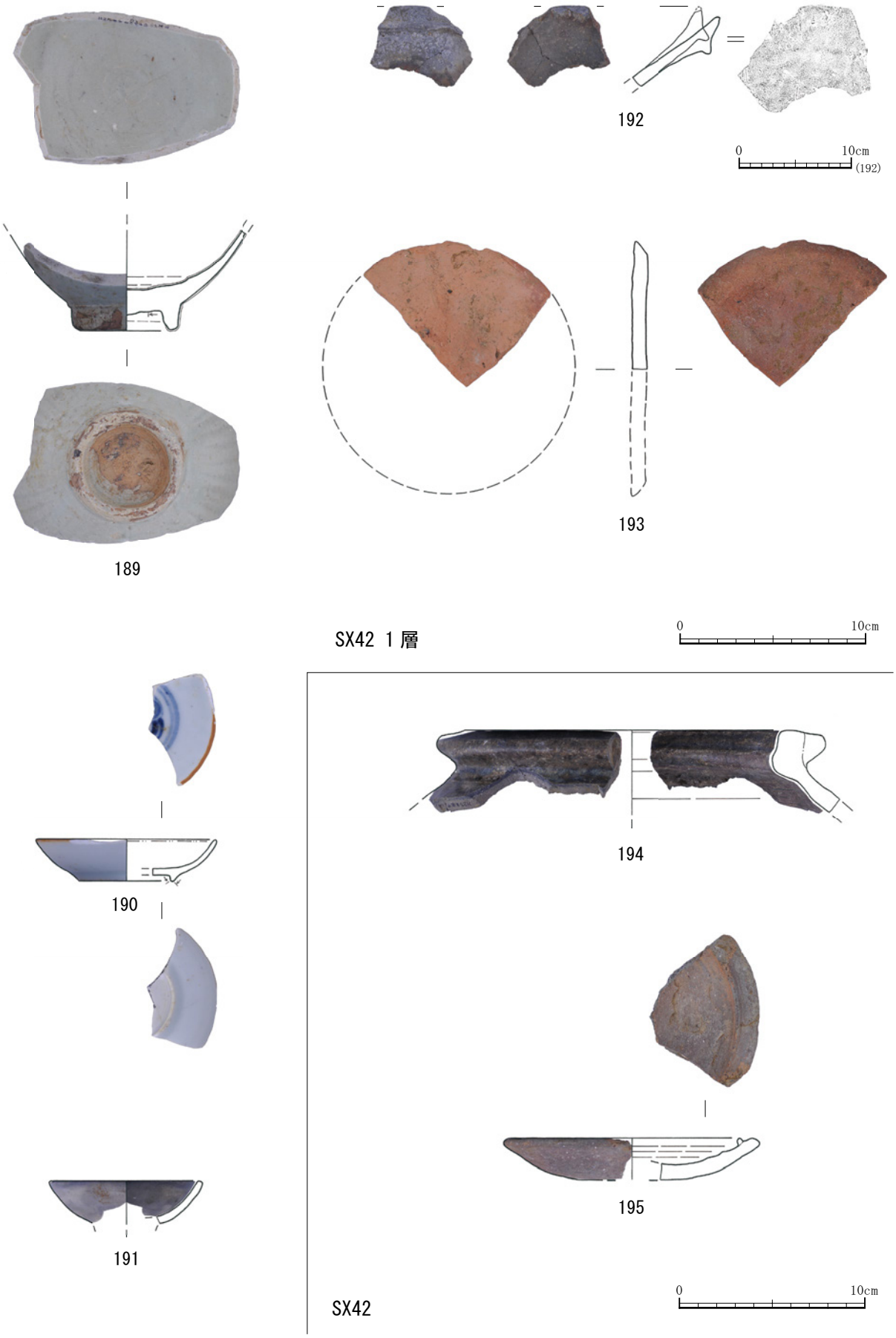


188

SX41

0　10cm

第 167 図　グスク1の遺構出土遺物 21



第 168 図　グスク1の遺構出土遺物 22

第２項　グスク2の遺構・遺物

A：遺構

SA31・32・35

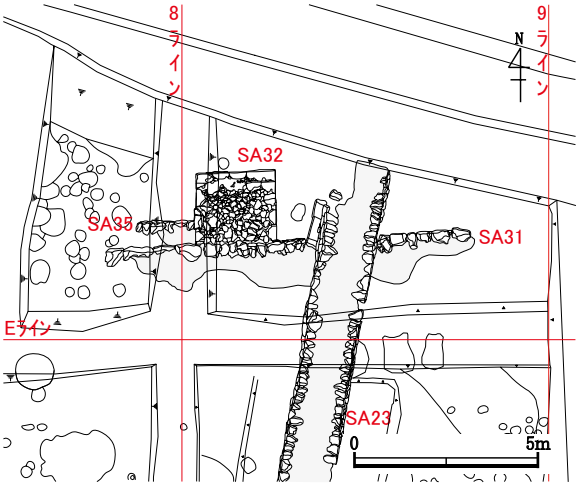
Ⅱ区の北側で検出した複数の石積み遺構である。SA31は東西に広がり、SA23の下やⅣ層に埋もれている。このような堆積状況から、本遺跡で最も古い時期の遺構であると想定される。SA31の前面にSA32が作られ、その周囲にSA35が形成されている。その後、Ⅳ層が堆積し、その上部には石灰岩礫が多く堆積している。その後は造成7に覆われることから、中城御殿が機能していた時期には、露出した状態ではないと考えられる。

SA32は階段状の構造をしているが、2段目までしか残存していない。また、上段と下段の幅が狭いことから、階段としての機能を考えることは困難である。全体的な様相は判明しないが、廃棄土坑などをこの場所で作っていた時期には、少なくとも同じ地域にあり、このような石積みを伴う施設があったことが想定される。

これらの石積み遺構から出土した遺物で特徴的な2点を図化して報告する。いずれもSA31・32・35を覆っていたⅣ層からの出土である。

第170図1は、中国産青磁の碗で口径13.0cmの口縁部片である。胎土は灰黒色だが、焼成が悪いせいか一部が赤褐色。釉は暗オリーブ色、ガラス質で貫入あり。外面に線刻蓮弁文。青磁Ⅵ-1類と考えられる（瀬戸ほか2007）。

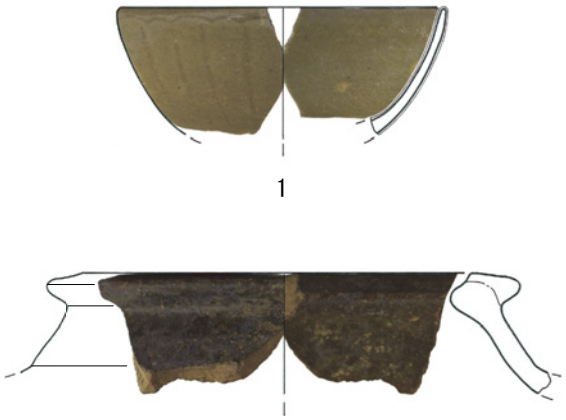
第170図2は、中国産褐釉陶器の壺で口径18.6cmの口縁部片である。胎土は灰色で白色粒が混じる。釉は暗オリーブ色で、内面にも施釉される。中国産褐釉陶器の壺5類と考えられる。（瀬戸ほか2007）。



第169図　グスク2の遺構1

SA31・32・35 検出状況（北西から）

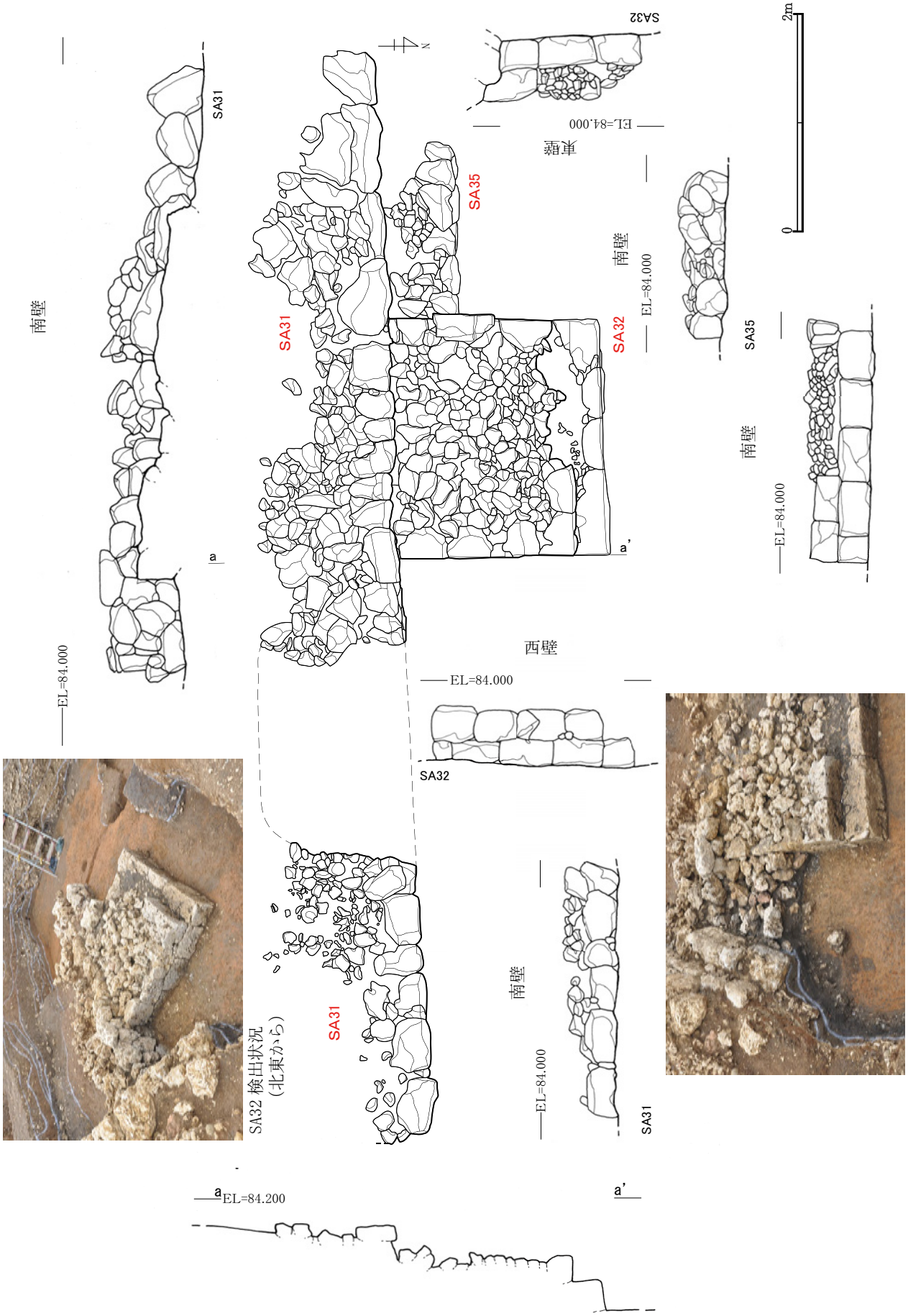
SA31・32・35 検出状況（北から）



SA31･32･35 間　Ⅳ層

0　10cm

第 170 図　グスク2の遺構出土遺物



第171図　グスク2の遺構2

第４節　骨製品・貝製品

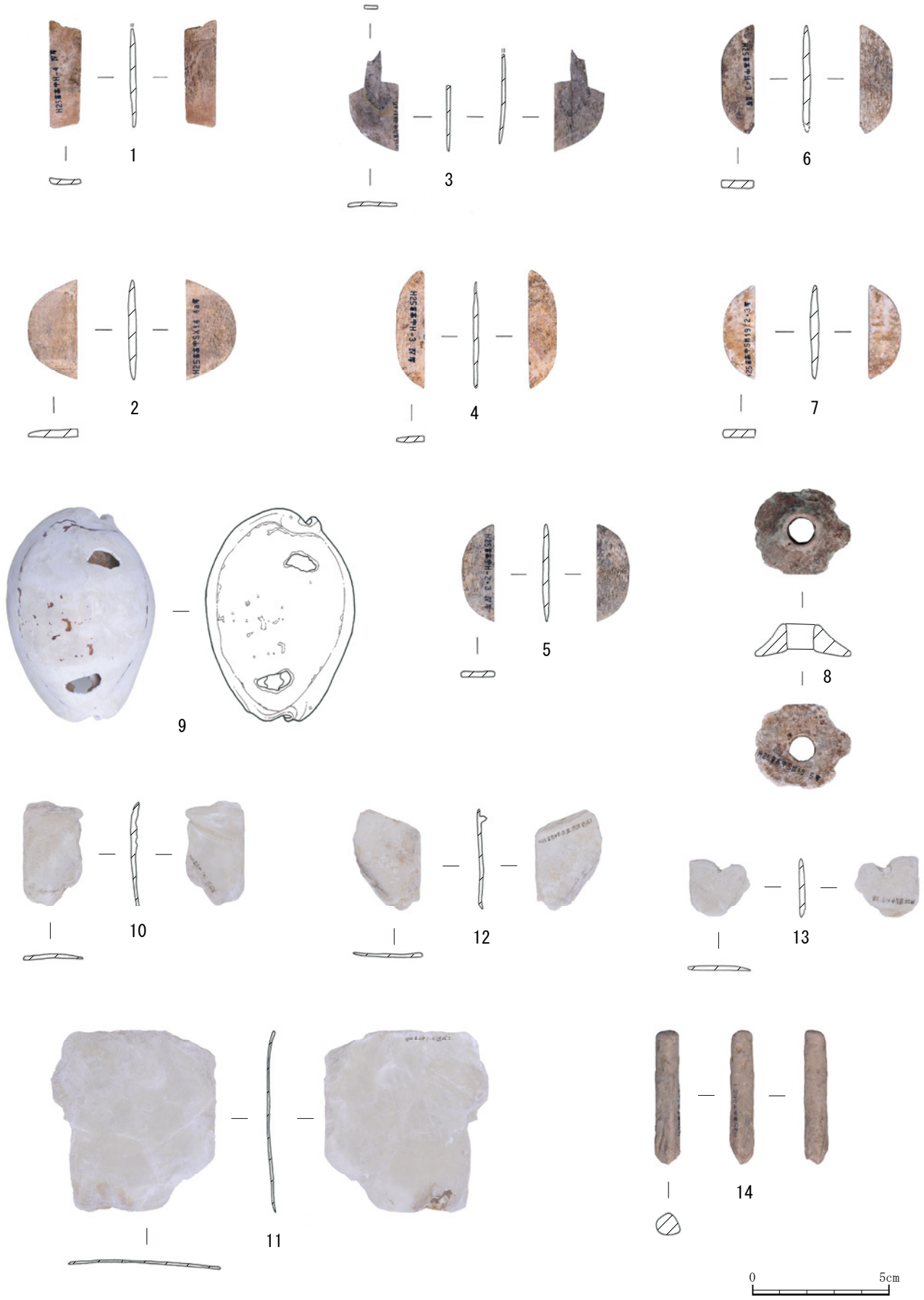
骨製品及び貝製品は、今回の発掘調査で18点出土している。その中でも特徴的な14点を図化して報告する。骨製品及び貝製品は他報告遺物と異なり、遺構外出土も合わせて報告を行っている。詳細については個々の観察表に記入する。

骨製品　骨製品で特徴的な製品は、第172図1 ～ 7の箆状製品で、長方形と半円形の2種類のタイプがある。半円形のものは、短軸の長さが1.8㎝前後と、1.2㎝前後のものがある。製作方法は概ね共通しているが、第172図2、5は中央部～端部で長軸方向の線状痕が1本残る。これは端部成形時の目安線の可能性があるが、判然としない。第172図7は片面の中央部に2条の太沈線が残存しており、意図的に施されたものである。現在のところ、用途や機能は不明だが、類例資料が増加している状況や、県外でも類似製品の出土が相次いでいる状況もご教示いただいた。今後はこのような製品の機能や用途について検討を行う必要がある。これらの骨製品は、主にグスク時代と考えられる層から出土している。明確な出土状況としては、第172図2、3の資料で、遺構内から他遺物と共伴して出土している。このことから、15 ～ 16世紀相当の製品であることが確認された。

貝製品　貝製品で特徴的な製品は、第172図10 ～ 13のマドガイを加工した貝窓である。破片資料が多いが、第172図11は加工した辺が3辺残存している。これらのことから方形状に加工されたものであることが確認できた。他製品も方形状であった可能性が高い。これらの製品は、移転後の中城御殿跡（沖縄県立埋蔵文化財センター　2012）などで出土している。用途としては各種文献や移転後の中城御殿跡を撮影した古写真から、窓格子の縦枠に並べて嵌め込み、玄関やトイレの灯りとりとして使用されている。第172図10はSA1の関連する造成土から出土しており、他製品は造成土や表土層からの出土である。出土地点は、第172図10、11はⅠ区からの出土で、出土層位と照らし合わせても、水場遺構周辺のSQ群での使用が想定できる。上記のことから、18世紀代に相当する製品で、それより古くなる状況については今回確認することが出来なかった。

第14表 骨製品･貝製品 出土遺物観察一覧

挿図番号	遺物番号	種類	器種	材質	残存	法量（㎝）			観察事項	出土位置	
						長軸	厚さ	短軸		遺構	層序
第172図	1	骨製品	箆状	骨	破片	3.85	0.05～0.2	1.1	長方形状の板状製品で全面研磨される。端部以外は長軸方向に線状痕が残る。端部にかけて薄くなり、両面に短軸方向に線状痕が多く残る。	－	Ⅳ層
	2	骨製品	箆状	骨	完形	3.7	0.05～0.3	1.8	半円形の板状製品で全面研磨される。端部以外は長軸方向に線状痕が残る。端部にかけて薄くなり、両面に短軸方向に線状痕が多く残る。中央～端部にかける部分に短軸方向に1本の線状痕が残る。	SX14	4a層
	3	骨製品	箆状	骨	破片	3.4	0.05～0.1	1.8	半円形の板状製品で全面研磨される。端部以外は長軸方向に線状痕が残る。端部にかけて薄くなり、片面のみ短軸方向に線状痕が多く残る。被熱。	SK51	6層
	4	骨製品	箆状	骨	完形	4.0	0.05～0.2	0.95	半円形の板状製品で全面研磨される。端部以外は長軸方向に線状痕が残る。端部にかけて薄くなり、両面に短軸方向に線状痕が多く残る。	－	Ⅳ層
	5	骨製品	箆状	骨	完形	3.6	0.05～0.2	1.2	半円形の板状製品で全面研磨される。端部以外は長軸方向に対して斜状に線状痕が残る。端部にかけて薄くなり、両面に短軸方向に線状痕が多く残る。中央～端部にかける部分に短軸方向に1本の線状痕が残る。	－	Ⅳ層
	6	骨製品	箆状	骨	完形	4.0	0.05～0.25	1.15	半円形の板状製品で全面研磨される。端部以外は長軸方向に対して斜状に線状痕が残る。端部にかけて薄くなり、片面に短軸方向に線状痕が多く残る。	－	Ⅱ層
	7	骨製品	箆状	骨	完形	3.5	0.05～0.3	1.2	半円形の板状製品で全面研磨される。端部にかけて薄くなり、両面に短軸方向に線状痕が多く残る。片面中央部に2状の太沈線が施される。	SM19	2・3層
	8	貝製品	－	貝？	－	3.6	0.2～1.0	3.0	中央部が穿孔された製品。両面研磨されるが、一部表面が剥落している。穿孔内部も磨滅している部分としていない部分がある。	SM19	5層
	9	貝製品	－	タカラガイ	－	7.8	孔部0.1～0.2	5.5	タカラガイ製。二か所に穿孔。全体的に剥落している。	SM24	－
	10	貝製品	貝窓	二枚貝	破片	3.8	0.1	2.1	マドガイ製。直線状に加工された面が1辺残存。	SA1	造成2
	11	貝製品	貝窓	二枚貝	破片	6.7	0.1	6.0	マドガイ製。扁平な二枚貝を方形に加工。加工面が3辺残存。	－	造成2
	12	貝製品	貝窓	二枚貝	破片	3.9	0.1～0.15	2.6	マドガイ製。扁平な二枚貝を方形に加工。加工面が1辺残存。	－	Ⅲ19層（造成1）
	13	貝製品	貝窓	二枚貝	破片	2.4	0.05～0.2	2.2	マドガイ製。扁平な二枚貝を方形に加工。加工面が1辺残存。	－	Ⅰ層
	14	棘研磨製品	－	パイプウニ棘	－	4.8	0.8	0.8	ウニの棘を研磨し、断面三角形状に加工した製品。全面各部にV字状の溝があり、刃物を研ぐための製品である可能性がある。	SK51	－



第 172 図　骨製品・貝製品

第５節　自然遺物

今回の発掘調査では、多種多様な自然遺物が出土した。貝類遺体をはじめとして、脊椎動物遺体が多量に出土した。また、分析作業を進めるなか、調査中に回収した土壌サンプル内から炭化物等を含めた微細遺物が確認された。

貝類遺体　貝類遺体については、種の同定及び分類作業を埋蔵文化財センター及び受注業者の株式会社アーキジオの職員及び資料整理員で行った。その後、千葉県立中央博物館の黒住耐二氏に確認作業を依頼した。その後、集計作業を実施した。今回、膨大な量の貝類遺体が出土している。平成25～26年度に出土した貝類遺体全ての集計作業を行っている。

集計表　報告書内ではその集計結果をすべて掲載することが困難であったため、各遺構の集計表を掲載し、詳細な集計表は付属のCD内に所収している。

貝類遺体の出土状況の分析結果の詳細については、次項の第1項貝類遺体で黒住耐二氏に玉稿をいただいた。

脊椎動物遺体　脊椎動物遺体も貝類遺体と同様に膨大な量が出土した。東海大学の丸山真史氏、浦添市文化財課の菅原広史氏に協力をいただきながら、これらの種同定作業や集計作業を実施していたが、同定作業や、集計作業などに時間を要し、報告を行うことが困難な状況があった。そのため、脊椎動物遺体の詳細な報告は次回報告書へ譲ることとした。そのため、脊椎動物遺体については、出土状況の概要を述べたいと考えている。

動物遺体　出土した動物遺体は、ウシ、ブタもしくはイノシシ、ウマ、ニワトリの骨が多く出土している。この他にもイヌなどの骨が見られた。出土状況としては、造成土や遺構内からの出土が見られる。また、骨に残された傷跡はカットマークと判断でき、人工的につけられたものと考えられる。細い線状のものから破砕した痕跡まであり、傷のつき方に差がある。これらのことから動物利用については様々な方法が想定できる。

魚類遺体　魚類遺体も多種多様な種類が出土している。中心となるのは、ハタ科、ブダイ科、フエフキダイ科、ベラ科といった種類である。これらの種類は、首里城跡内の各地区や移転後の中城御殿跡からの出土に見られる主要な種類となっている。特に、ハタ科のなかには大型個体も混入していることが判明した。これらの種同定や集計など詳細な調査成果は次回報告書と合わせて報告することとしたい。

小結　今回の発掘調査では、良好な状態で遺構の検出及び調査を実施することができた。そのため遺構内に廃棄されたこれらの自然遺物を多量に回収することができた。これらの種同定や集計作業を行い、出土時期での組成差や当時の食生活について検討することができる資料であると考えられる。

第15表　貝類の生息場所類型

大区分	底質等
Ⅰ　外洋－サンゴ礁域	a　岩礁
Ⅱ　内湾－転石域	b　転石
Ⅲ　河口干潟－マングローブ域	c　砂/泥
Ⅳ　淡水域	d　河川礫底
Ⅴ　陸域	f　植物上
Ⅵ　その他	

小区分	
0　潮間帯上部	5　止水
Ⅰ－0 ノッチ	6　流水
Ⅱ－0 マングローブ	7　林内
1　潮間帯中・下部	8　林内・林縁部
2　亜潮間帯上縁部	9　林縁部
Ⅰ－2 イノー内	10　海浜部
3　干瀬	11　打ち上げ物
4　礁斜面	12　化石

第１項　中城御殿跡（首里高校内）から得られた貝類遺体

黒住耐二（千葉県立中央博物館）

首里城とその周辺では、これまで多くの発掘が行われ、貝類遺体の分析も詳細に報告されてきた。その多くは城内の遺構面までの調査で後代に撹乱を受けたものも多かったが、河口干潟のアラスジケマンや内湾のカンギクが優占し、ヤコウガイも目立つことが報告されており（大城,1988; 山本,2007; 黒住,2010a 等）、他のグスクと類似することが指摘されてきた（黒住,2013）。また、銭蔵東地区ではヤコウガイ等の螺鈿加工残滓が集中するという遺構も確認されている（瀬戸他,2016）。

今回、琉球国王の世子（王位継承者）の生活場所である中城御殿跡の発掘調査が行われ、15世紀のグスク時代から近世にかけての様々な遺構を中心に、膨大な数の貝類遺体が発掘された。時代変遷および世子という特異な階層という面から、本遺跡出土の貝類遺体は興味深いものである。今回、本遺跡の貝類遺体を検討する機会を与えて頂いたので、ここに報告したい。報告に先立ち、お世話になった沖縄県立埋蔵文化財センターの亀島慎吾氏と、困難な分類・カウントを行って頂いた資料室の方々にお礼申し上げる。

貝類遺体の内容と処理方法

現場でピックアップ法によって得られた膨大な量の貝類遺体は、沖縄県立埋蔵文化財センターの方々によって一次の同定・カウントが行われ、黒住はほとんどの種の再同定を行った。各種の遺構ごとに出土部位別に集計され、このデータを元に解析を行った。また、主な遺構内の土壌もサンプリングされていた。これまでの首里城および周辺の遺跡の土壌サンプルの結果から（例えば黒住,2010a, 2016）、食用貝類遺体の包含量は少ないと考えられたので、微小貝類遺体とともに炭化穀類等の抽出も想定して、異なった時代で炭化物を多く含む土壌を、6遺構から8サンプルを選択した。土壌は乾燥の後に、1mm メッシュまでの沈殿部分（HF）と0.5mm 未満のメッシュでの浮遊部分（LF）の回収を行うという筆者のこれまでの方法（黒住,1997）で処理した。

本遺跡の層序と遺構の年代表記は、本報告書第3章に詳細に記載されているが、簡単に採録しておきたい。グスク1:15 ～ 16世紀、近世3:17世紀前半の中城御殿跡創建～ 17世紀代、近世2:18世紀代、近世1:18世紀末～ 1875年の中城御殿移転まで、の4つの時代とされている。

結果および考察

今回のピックアップ法では、海産腹足類31科136種、海産二枚貝類20科58種、淡水産腹足類2科3種、陸産腹足類6科6種、その他1分類群が確認された（第18・19表）。これ以外にも、土壌サンプルから陸産種を中心に、上記に含まれていない微小種が50種程度抽出された。

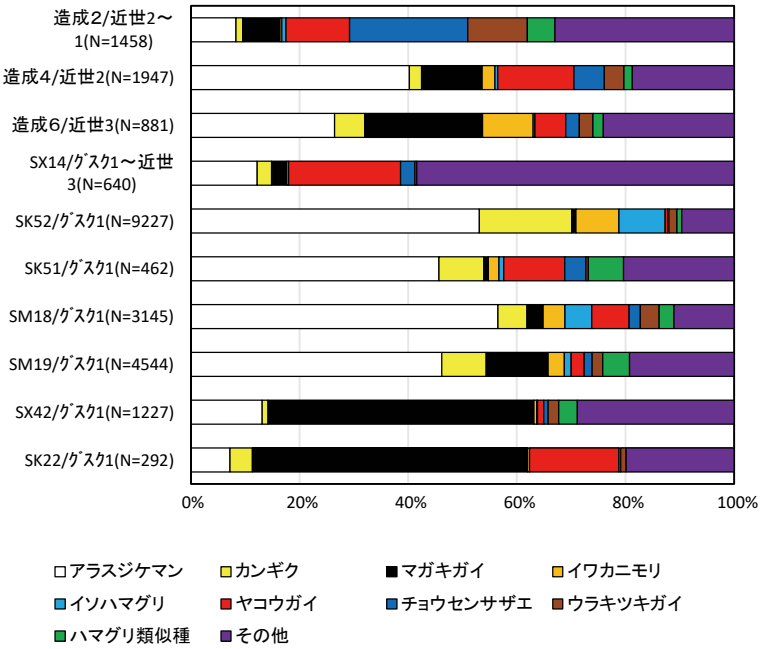
1. ピックアップ法による全体の組成と廃棄のパターン

第18・19表に基づいて、出土数がおよそ100個体を越える遺構と土壌サンプルを処理した遺構および異なった時代の造成層から、優占種（およそ1% を超える種）の同定標本数（NISP）の出土状況を第16表に示した。第16表では、破片の多いヤコウガイや二枚貝で優占するアラスジケマンの出土パターンを強調することもあり、最少個体数（MNI）ではなく、同定標本数（NISP）の値として表してある。ここに挙げた12種で、各遺構等の80% 以上となっていた。また、この第16表に基づいて、約2.5% 以上の優占種の時代別変遷を第173図に示した。

ア）全体の組成変化：今回の結果、SK22と SX42では、マガキガイが約半数を占める程多く、SK22ではヤコウガイも20% 近い割合となっていた。他のグスク1の時代の SM18･19と SK51･52の4遺構では、アラ

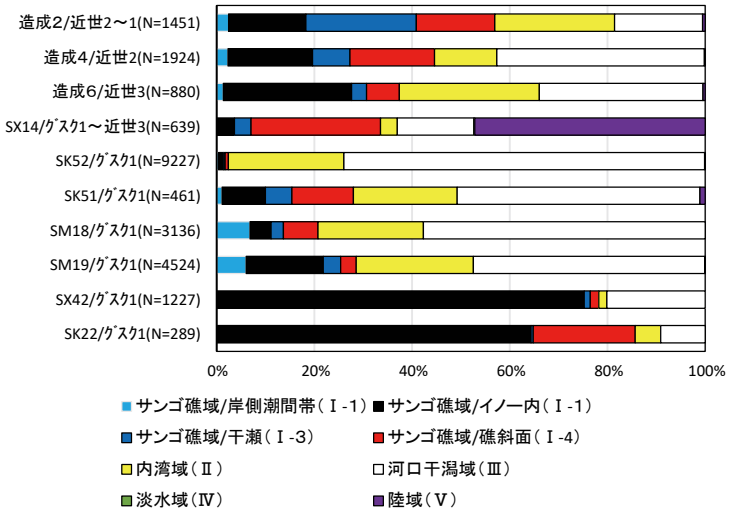
第16表　土壌サンプル分析遺構や主な遺構等の優占種の同定標本数（NISP）

遺構等		SK22		SX42		SM19	SM18	SK51		SK52		SX14				SM13	SM12	造成6	造成4	造成2	SM9	
時代		グスク1		グスク1		グスク1	グスク1	グスク1		グスク1		グスク1～近世3				グスク1～近世3	近世3	近世3	近世2	近世2～1	近代	
分割単位等		上部(1-2層)	下部(3-4層)	上部(1-3層)	下部(4-7層)			上部(1-6層)	下部(7-最下層)	上部(1-2層)	下部(3-4層)	廃棄1	廃棄2	上部(1-4層)	下部(5-6層)							合計
貝類	生息地																					
アラスジケマン	Ⅲ-1-c	11	10	128	33	2099	1778	211	0	4783	117	0	46	19	13	10	0	233	783	121	2	10395
カンギク	Ⅱ-1-b	6	6	12	1	371	167	38	0	1567	3	0	12	2	3	1	0	49	44	18	1	2300
マガキガイ	Ⅰ-2-c	80	68	572	29	519	94	1	3	67	3	0	1	15	2	2	0	191	217	100	0	1964
イワ(ウミニナ)カニモリ	Ⅱ-1-a	0	1	5	1	134	126	8	1	716	14	0	1	0	1	0	0	82	46	5	0	1141
イソハマグリ	Ⅰ-1-c	0	0	1	1	58	156	4	0	779	6	0	0	0	0	0	0	3	10	11	0	1029
ヤコウガイ	Ⅰ-4-a	28	20	13	1	109	216	45	7	44	1	2	4	109	17	24	10	50	273	171	0	1144
チョウセンサザエ	Ⅰ-3-a	1	0	7	3	66	65	4	14	18	2	0	1	14	2	2	2	22	109	317	1	649
ウラキツキガイ	Ⅱ-2-c	1	2	19	5	89	109	2	0	131	3	0	0	0	0	0	0	22	70	160	0	613
ハマグリ類似種	Ⅱ-2-c	0	0	39	3	224	86	28	2	81	2	0	1	1	0	0	4	17	30	74	1	592
ホソスジイナミ	Ⅱ-1-c	0	0	6	1	111	84	1	0	50	1	0	0	0	0	0	0	9	9	7	0	279
オキナワヤマタニシ	Ⅴ-8	0	0	0	0	3	0	5	0	8	0	0	230	2	3	0	0	0	3	8	0	262
シレナシジミ	Ⅲ-0-c	0	1	88	10	27	20	4	2	6	0	0	0	5	0	0	0	47	16	2	0	228
総出土数		164	128	1110	117	4544	3145	424	38	9058	169	16	304	258	62	43	16	881	1947	1458	7	23882



第173図 優占種の組成変化

スジケマンが約半数を占め、マガキガイ・ヤコウガイ・カンギクが10%程度になるものもあるものの、他の優占種の割合はいずれも低かった。グスク1～近世3のSX14では、その他が全体の60%を占め、ヤコウガイが20%、アラスジケマンが10%とそれまでのグスク1のものと大きく異なっていた。近世3の造成6と近世2の造成4では、アラスジケマンとヤコウガイの増加、マガキガイの減少が認められた。近世2～1の造成2も、他の遺構等と大きく異なり、チョウセンサザエが最も多く、ヤコウガイ・ウラキツキガイも10%以上であった。



第174図 生息場所類型組成変化

第174図には、種レベルまで同定でき生息場所類型を示した全種での生息場所類型組成の変化を表した。当然、優占種の類型と類似するものの、いくつかの点を指摘することができる。SK22と SX42では、サンゴ礁のイノー内のものが60%以上と他のものとは全く異なっていた。アラスジケマンの優占していた SM18･19と SK51･52の4遺構は、河口干潟域が半数程度で、内湾域も20%になり、かなり類似した組成であった。種組成で大きく異なっていた SX14では、陸域（オキナワヤマタニシ：第16表）が半数近くを占めていたことが示され、礁斜面も40%程度と極めて高率であった。近世の造成6と造成4では、サンゴ礁のイノー内や礁斜面・内湾域も多かった。近世2 ～ 1では、岸側潮間帯を除く5つの海域の類型が概略等しい割合であった。

イ）時代変化と想定される内容：第18・19表で明らかなように、中城御殿跡では、食用貝類遺体に時代変化が認められた。15 ～ 16世紀とされるグスク1の間で、マガキガイの優占する SK22と SX42のタイプと、アラスジケマンの優占する SM18･19と SK51･52のタイプに大別できる。このうち、SK22は「素掘」土坑であったのに対し、SM18･19や SK51･52は「石組」土坑であり（本報告書　第4章第3節）、SX42は調査者の所見で、“他のグスク1の遺構よりもわずかに古い可能性がある”とのことである。後述の2つの情報から、マガキガイの優占するタイプの方が古い可能性が高いと考えられる。そして、SK22と SX42は中城御殿の東西の縁に位置しており（本報告書　第4章　第3節）、遺跡の中央寄りに位置する他のものとは異なっていることも時代差と関連しているのかもしれない。

一方で、貝塚時代後期からグスク時代にかけて、グスク本体での出土貝類はサンゴ礁の貝類から内湾・河口干潟域のものへ変化する傾向を指摘してきた（例えば黒住 ,1991）。今帰仁城跡では、15世紀には内湾域等の貝類が優占するようになっており（黒住 ,1991）、首里城が確実に成立した15世紀中頃には内湾域等の遺体群がほとんどを占め、この場所の貝類を権力者へ供給するシステムが確立していたと考えた（黒住 ,2013）。本遺跡のグスク1の年代は15 ～ 16世紀とされ、サンゴ礁域から内湾等の貝類への変化の時代を含んでいる。そのため、SK22等のサンゴ礁の貝類と SM18等の内湾等の貝類への利用の変化は、時代差とも考えられる。ただ、その場合、他遺跡よりも変化が遅かったこともあったのかもしれない。

グスク1 ～近世3とされる SX14では、遺構上部の廃棄2から陸産貝類のオキナワヤマタニシが集中して得られており、食用と考えるよりも本種の死後の流入・堆積と考えられよう。また、この遺構ではヤコウガイの割合が図示した中では最も高く、他とは異なった利用の存在も想定されており、廃棄土坑もしくは土取り穴等と想定されている。首里城の銭蔵東地点では、15世紀後半～ 16世紀前半のヤコウガイを中心に、サラサバテイラ・チョウセンサザエも多い螺鈿加工残滓と考えられる貝類遺体群が確認されており（瀬戸他 ,2016）、もしかすると本遺構のヤコウガイもこのような利用の可能性も否定できないのかもしれない。

近世3（造成6）と近世2（造成4）の時代には、アラスジケマンの優占する SM19等の組成に類似するものの、他の生息場所類型の割合も高い。食用とする貝類の利用に何らかの変化が生じたようにも考えられる。そして、近世2 ～ 1の造成2では、チョウセンサザエが多くなり、内湾のウラキツキガイと

ハマグリ類も目立っていた。筆者はアラスジケマン優占のタイプから近世3・2の時代を経て、造成2は多様な環境からの貝類を食用とした変化を示していると考えたい。宮古島では、近世～近代の役所跡等からはチョウセンサザエの優占する遺体群を報告し、これらは“宴会残滓”が多いと考えられている（黒住,1999,2010c)。もしかすると、造成2の組成は同様な“宴会残滓”なのかもしれない。首里城で､およそ同時期の貝類遺体の知られている御内原北地区（黒住,2010a）や淑順門西地区（黒住,2013）では、造成2のような多様な生息場所由来の遺体群は確認できず、想像でしかないが、国王と世子という違い（食用種の選択や廃棄様式の相違等が想定されよう）を反映した結果なのかもしれない。なお、土壌サンプルを処理した近世以降の遺構（第16表:SM12・13と SM9）からは貝類遺体は極めて少なく､近世以降では遺構内からの貝類の出土は他の遺構でも決して多くなかった（第18･19表)。これは、近世以降は遺構に貝類を廃棄することが減少したという貝類廃棄形態の違いを表しているものと考えたい。

一方で、この時代には、中城御殿は存在していたわけであり、チョウセンサザエやシャコガイ類等のサンゴ礁の中大形貝類が食用に供されなかったとは考えにくい。これらの中大形貝類の食用後の殻は、黒住（2010a）の首里城御内原北地区でも想定したように、意図的に遺跡外へ搬出されるということは、首里城と同様であった。

ウ）廃棄のパターン：一部の遺構では、分層されてサンプリングされており、第16表には5遺構で、上部と下部からの出土詳細を示した。その結果、SK22を除き、他のものでは下部で少なく、上部は下部の10倍以上というものが大半であった。また、後述する土壌サンプルで陸産貝類を抽出できなかったものが2つ存在しており（SK22/4層と SM12/3層［ウスイロオカチグサが1個体抽出されたが、現生個体であり発掘中の混入と考え、対象としなかった])、このことは両サンプルの土壌が極めて短時間で堆積したことを示している可能性が高い。

2. 出土数が稀な貝類に関するコメント

今回も、膨大な数の貝類遺体が発掘され、詳細に同定された。この中の興味深い種等について簡単にコメントしておきたい。

テングガイ：サンゴ礁の礁斜面に生息する大形巻貝で、ゴホウラの“貝交易”を行っている遺跡で僅かに出土する例が知られているが、今回は近世3の造成6から1個体得られている。

アンボイナ：猛毒を持つイモガイとして著名な貝で、破片が SM19の4層から得られている。

モクハチアオイ・クロスジグルマ等：沖縄の遺跡からほとんど出土例のない種で、この2種以外にもマンジュウガイ・イタヤガイ破片が主にⅠ・Ⅱ層から出土しており、標本の質感と種のセット関係から、工事用の砂として利用されている錦江湾の海底堆積物由来（榎屋他,1976も参照）のものと思われる。持ち込まれた時代は、復帰以降であろう。

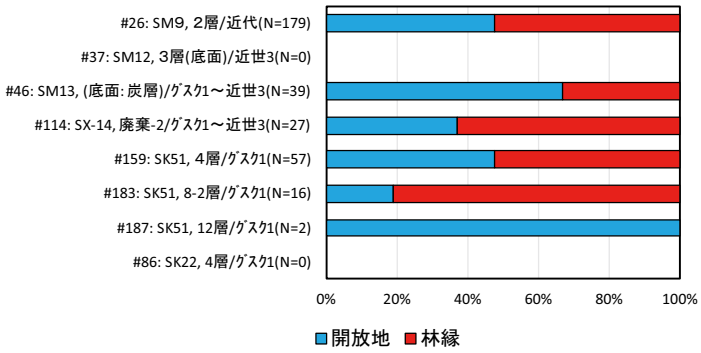
マクラザル：この種も遺跡からの出土は極めて稀で、沖縄県内（チービシ）の工事用の砂に由来するものと考えられた。

美麗種の未出土：上述した種は、いわゆるコレクションアイテムの美麗種を含んでいるが、これら以外には、収集対象になるような種は認められなかった。イモガイ・タカラガイでも、稀な種は存在していない。これまでにも指摘してきたが、首里城でも搬入品の美麗種は認められず（黒住,2010a)、貝類収集に興味を示さなかった中国の影響（黒住,2015, p.224）と考えられる。マドガイ製品のような稀な貝製品が本遺跡からも出土しており（本報告書 第4章 第4節)､食用貝類遺体でも上述のように、近世期には首里城と少し異なった組成を示す本遺跡であるので、“貝類のコレクション行為”の可能性も想定したが、全く認めることはできなかった。

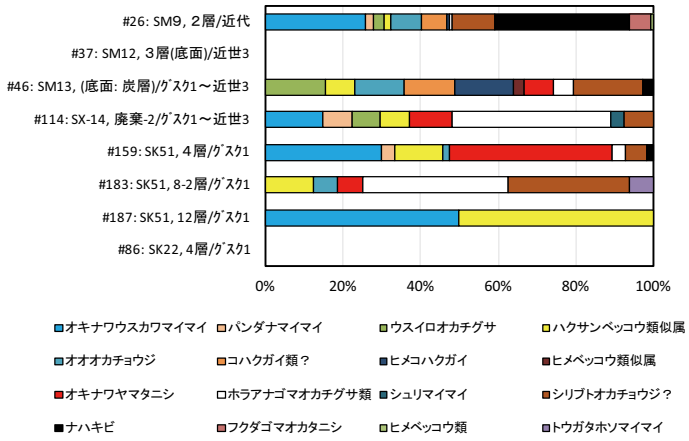
化石：本遺跡からは、タコノマクラ類等の完全な化石が少数確認されているが、今回は周辺の石灰岩由来のものであり、意図的な収集等ではないと考えた。

小形タカラガイ類等：小形タカラガイ類やタマガイ類はグスク時代以降に“おはじき様の遊具”となったのではないかと考えているが（黒住，1993）、今回の出土数は極めて稀であり（6個体程度）、女官の居住域であった御内原北地区の出土数（黒住，2010a,b）よりも少なかった。

第175図 近代のSM9から抽出された卵殻？



第176図 土壌サンプルから抽出された
陸産貝類の生息場所類型組成変化



第177図 土壌サンプルから抽出された
陸産貝類の種組成変化

3. 土壌サンプルの情報

今回は、前述したように異なった時代で炭化物を多く含む土壌サンプル、合計8サンプルを処理した。その結果が、第17表である。いくつかの点に関して、興味深い事象を記しておきたい。

ア）食用遺体：当初から予想されたように、貝類遺体はかなり少なく、前述の中大形貝類と共に遺跡外に運び出されたものも多かったと考えられる。一方、首里城御内原北地区のシーリ遺構と同様に、魚骨は比較的多く遺構内に残されているようであった。シーリ遺構（黒住，2010b）で多く抽出されたヤスデ類とウリ類？種子がグスク1の時代の SK51/12層からまとまって抽出された。この SK51は深さ2m 程もあり、また魚骨の出土量は少なく、御内原地区のシーリと同じ機能を有していたかどうかは不明である。

やはり17世紀前半のシーリ遺構から卵殻？としたものと同様なものが、近代の SM9からのみ大量に得られた（第175図）。専門家による詳細な同定を経ていないので、卵殻であるとの確定は出来ていないが、これまでに余り注意の払われてこなかった遺物であると考えられる。

イ）微小陸産および淡水産貝類遺体からの遺跡周辺の環境復元：今回、土壌サンプルから少なくとも9科16種の陸産種と4科5種の淡水産種が抽出された（第17表）。陸産貝類は開放地と林縁に生息する種のみで、林内生息種は得られなかった（第176図）。本遺跡が15世紀以降の世子の居住域であることから、鬱蒼とした森が存在していなかったと容易に想像され、そのことが陸産貝類から証明された訳である。ただ、林縁生息種もかなり多く、樹木の存在と完全な草地的な管理のなされていなかったこともわかった。

一方、陸産貝類の種組成変化を第177図に示した。SK51では下部から上部に3サンプルを選択し、周辺の環境変化が示されると予想した

第17表　土壌サンプルから得られた貝類遺体等の組成1a

サンプル名		土86				土187						土183						土159					
遺構名，時代		SK22，グスク１				SK51，グスク１																	
層序等		４層				F7、Ⅲ区、12層						F7，Ⅲ区，8-2層［灰層］						F7，Ⅲ区，４層					
サンプル重量等		5700cc/5394g				3300cc/2916g						2100cc/1318g						5600cc/3296g					
メッシュサイズ等		9.5	4	LF	MNI	9.5	4	2*	1*	LF	MNI	9.5	4	2	1	LF	MNI	9.5	4	2*	1*	LF	MNI
容量(cc)		650cc				850cc	320cc					240cc	100cc					300cc	650cc				
重量(g)		642g				752g	280g					189g	70g					317g	484g				
貝類		1g	4g			10g	5g					12g	6g					54g	19g				
食用／内湾系	アラスジケマン	0/1u	0/2u,2f			1cv,1u/1u	3f					1uB/0	1uB/0,7fB					3/0	10f				
	カンギク		3b,1f				2b,2(1B)co,8f					6(5B)	2fB					5	3b,1u,1co,3f	1b			
	カンギク／フタ		1			2	4(1B)						5B	1B					9				
	クワノミカニモリ		?1w									1B											
	イワ(ウミニナ)カニモリ																	1					
	ハマグリ類																	1u/1ju,1f					
	ウラキツキガイ																						
	マルアマオブネ																						
食用／外海	ハナマルユキ																						
	イソハマグリ																	1/0					
	ミドリアオリ																	1j/2,1u,3f	12u/8(2j)u,47(1B,1h)				
	マガキガイ																	1					
食用or砂利	リュウキュウウミニナ																		1mLe?B				
	ウミニナ類													1uB						?1u			
	フジツボ類							1															
	海産二枚貝/同定不能		1f																0/1u,2f				
	海産巻貝/同定不能																		1fB				
	海産貝類/同定不能		7f				2f						10fB						9f				
砂利由来	ムラサキサンショウスガイ																						
	カワリボリチョウジ類																						
	ヘビガイ類																						
	ニッポンレイシダマシ？																						
	キイロツノマタモドキ？																						
	エガイ類																						
	ヤサガタミミエガイ																						
	カニモリ類																						
	テンガイ類																						
	コオニノツノ																						
	ヒメクワノミカニモリ																						
	ゴマフニナ																						
	ネジヒダカワニナ																						
	スズメガイ																						
	フトコロガイ																						
	サザエ類																						
	マンジュウシタダミ																						
	ウネウキツボ																						
	コキザミハマツボ																						
	ゴマフカニモリ																						
	ヒメムシロカニモリ																						
	チビカニモリ																						
	オガサワラリソツボ類																						
	キリコチョウジ																						
	ヌノメチョウジ類																						
	キリオレ科																						

第17表　土壌サンプルから得られた貝類遺体等の組成1b

サンプル名		土86				土187						土183						土159					
遺構名，時代		SK22，グスク１				SK51，グスク１																	
層序等		4層				F7，Ⅲ区，12層						F7，Ⅲ区，8-2層［灰層］						F7，Ⅲ区，４層					
サンプル重量等		5700cc/5394g				3300cc/2916g						2100cc/1318g						5600cc/3296g					
メッシュサイズ等		9.5	4	LF	MNI	9.5	4	2*	1*	LF	MNI	9.5	4	2	1	LF	MNI	9.5	4	2*	1*	LF	MNI
容量(cc)		650cc				850cc	320cc					240cc	100cc					300cc	650cc				
重量(g)		642g				752g	280g					189g	70g					317g	484g				
砂利由来	ケシカニモリ類																						
	カワチドリ																						
	ウネナシノミニナ																						
	クロフコウシツブ																						
	トマヤガイ																						
	クロフトマヤ																						
	ナガウニ類																						
化石	キンチャクガイ類						1f																
	ホウズキチョウチン類						1cv,1hv						1hv										
	底生有孔虫														1化石?								
陸産／開放地	オキナワウスカワマイマイ						?1f				1								1ab ,4lj,3u ,1w,18f	?1b			17
	ウスイロオカチグサ																						
	ハクサンベッコウ類似属									1mj	1					1ljc? ,1mj	2					3lj ,1mj ,3sj	7
	オオオカチョウジ															1uB	1					1sj	1
	コハクガイ類？																						
	ヒメコハクガイ																						
	ヒメベッコウ類似属																						
陸産／林縁	オキナワヤマタニシ			陸貝ナシ								1lj					1		1ab ,5lj ,1mj ,3u,22f		1u	12a ,1u	24
	パンダナマイマイ																			?1b	?1u		2
	ホラアナゴマオカチグサ類															2lj ,4mjc?	6					1a ,1mj	2
	シュリマイマイ																						
	シリブトオカチョウジ？															1a ,3sj,1u	5				2u	?1sj	3
	ナハキビ																					1u ,1w	1
	フクダゴマオカタニシ																						
	ヒメベッコウ類																						
	トウガタホソマイマイ															1lj	1						
陸／他	ﾊﾟﾝﾀﾞﾅ/ｳｽｶﾜ																						
	陸産貝類/同定不能																		44f				
	陸産貝類/卵(ｵｶﾁｮｳｼﾞ類？)																					7	
淡水産	ヒメモノアラガイ？																						
	ヌノメカワニナ																						
	オキナワミズゴマツボ																						
	ヒラマキモドキ																						
	ハブタエヒラマキ類																						
骨/哺乳類		2g (1f)										1g (1fB)	±0g (4fB)					1g (2f)					
骨/魚類		1g (3f)	2g (22f)			2g (3f)	2g (25f)						±0g (2fB)						4g (42[1B]f)				
卵殻？																							
炭>5mm				62						42						201						79	
炭化穀類>3mm				4					1f							2						5	
マメ類？				1																			
ウリ類?/種子/未炭化										1													
根>5mm				37																			

第17表　土壌サンプルから得られた貝類遺体等の組成1c

サンプル名	土86				土187						土183						土159					
遺構名，時代	SK22，グスク１				SK51，グスク１																	
層序等	4層				F7，Ⅲ区，12層						F7，Ⅲ区，8-2層［灰層］						F7，Ⅲ区，4層					
サンプル重量等	5700cc/5394g				3300cc/2916g						2100cc/1318g						5600cc/3296g					
メッシュサイズ等	9.5	4	LF	MNI	9.5	4	2*	1*	LF	MNI	9.5	4	2	1	LF	MNI	9.5	4	2*	1*	LF	MNI
容量(cc)	650cc				850cc	320cc					240cc	100cc					300cc	650cc				
重量(g)	642g				752g	280g					189g	70g					317g	484g				
昆虫サナギ/殻														1f								
アリ/頭部																						
陶磁器					12g (2f)																	
瓦																						
鉄片		±0g (2f)			6g (3f)	12g (23f)					8g (5f)	2g (8f)					2g (1f)	1g (2f)				
焼け土	4g (2f)										448g (15f)						6g (2f)					
漆喰？																						
パミス>3mm									2													
造礁サンゴ片																	1g (1f)					
非石灰岩					20g (5)																	
石灰岩	502g (68)				702g (122)						280g (20[1B])						253					

メッシュサイズの＊は全体の1/2からの抽出，＊＊は1/4からの抽出．a:成貝，B:焼け，b:体層，c:色彩残り，
cv:合弁，e:摩滅，f:破片，h:捕食孔，mj:中形幼貝，mL:殻口欠，lj:大型幼貝，u:殻頂，w:螺層．

第17表　土壌サンプルから得られた貝類遺体等の組成2a

サンプル名		±114						±46						±37				±26					
遺構名，時代		SX14，グスク1～近世3						SM13，グスク1～近世3						SM12，近世3				SM9，近代					
層序等		廃棄－2						底面（炭層）						3層（底面）				SM9，2層					
サンプル重量等		5100cc/4054g						3800cc/3568g						4800cc/4018g				1250cc/1174g					
メッシュサイズ等		9.5	4	2*	1**	LF	MNI	9.5	4	2*	1*	LF	MNI	9.5	4	LF	MNI	9.5	4	2*	1*	LF	MNI
容量(cc)		388cc	450cc					750cc	350cc					600cc	150cc			50cc	320cc				
重量(g)		550cc	342g					682g	332g					656g	125g			44g	280g				
貝類		13g	8g					3g	3g						±0g			0g	6g				
食用／内湾系	アラスジケマン	2(1j)/0,2f	0/3u,5(1B)f						2(1B)u/0,7f														
	カンギク	2,1b	5b,1co,4f					1,1b	2f						1b				1u				
	カンギク／フタ		2						2														
	クワノミカニモリ																						
	イワ(ウミニナ)カニモリ																						
	ハマグリ類似種								1f														
	ウラキツキガイ																		1ju/0				
	マルアマオブネ																						
食用／外海	ハナマルユキ	?1ilu																					
	イソハマグリ																						
	ミドリアオリ																						
	マガキガイ																						
食用or砂利	リュウキュウウミニナ		1be						1mLe,1be,1ue										1mL,5(4e)j,1be,1u				
	ウミニナ類			?1u						2je,1ue	1j									3ue	1sj		
	フジツボ類																						
	海産二枚貝/不能	0/1	3(1B)f																				
	海産巻貝/不能									1ue									2be	1jbe,4ue	1je,2ue		
	海産貝類/不能		8f						2f														
砂利由来	ﾑﾗｻｷｻﾝｼｮｳｽｶﾞｲ									1e													
	ｶﾜﾘﾎﾞﾘﾁｮｳｼﾞ類									1e													
	ヘビガイ類									1je													
	ﾆｯﾎﾟﾝﾚｲｼﾀﾞﾏｼ？									1be									1be				
	ｷｲﾛﾂﾉﾏﾀﾓﾄﾞｷ？									1jbe													
	エガイ類									1fe	1jfe												
	ヤサガタミミエガイ									1j/0													
	カニモリ類																		3be,1w	2e,1be	2ue,1jbe		
	テンガイ類																		1ue				
	コオニノツノ																		1je				
	ヒメクワノミカニモリ																		1e				
	ゴマフニナ																		1ue				
	ネジヒダカワニナ																		1				
	スズメガイ																		1je				
	フトコロガイ																		2e				
	サザエ類																				1j,2b		
	マンジュウシタダミ																				1e		
	ウネウキツボ																				1b		
	コキザミハマツボ																				1a		
	ゴマフカニモリ																			1e			
	ヒメムシロカニモリ																				1j,2b		
	チビカニモリ																				2we		
	ｵｶﾞｻﾜﾗﾘｿﾂﾎﾞ類																				1		
	キリコチョウジ																				1be		
	ヌノメチョウジ類																				1e,1be		
	キリオレ科																				2e		
	ケシカニモリ類																				2we		

第17表　土壌サンプルから得られた貝類遺体等の組成2b

サンプル名		土114						土46						土37				土26					
遺構名，時代		SX14，グスク1～近世3						SM13，グスク1～近世3						SM12，近世3				SM9，近代					
層序等		廃棄－2						底面（炭層）						3層（底面）				SM9，2層					
サンプル重量等		5100cc/4054g						3800cc/3568g						4800cc/4018g				1250cc/1174g					
メッシュサイズ等		9.5	4	2*	1**	LF	MNI	9.5	4	2*	1*	LF	MNI	9.5	4	LF	MNI	9.5	4	2*	1*	LF	MNI
容量(cc)		388cc	450cc					750cc	350cc					600cc	150cc			50cc	320cc				
重量(g)		550cc	342g					682g	332g					656g	125g			44g	280g				
砂利由来	カワチドリ																			1jd			
	ウネナシノミニナ																				1e		
	クロフコウシツブ																				1e		
	トマヤガイ																			1j/0			
	クロフトマヤ																		1fe				
	ナガウニ類																			2f卜ゲ			
化石	キンチャクガイ類		2f																				
	ホウズキチョウチン類																						
	底生有孔虫																						
陸産／開放地	オキナワ ウスカワマイマイ	1a,1lj	2b,12f				4												1ab,1lj,5ljb,7mj,9mjb,2u	?1mj,1mjb,4u	?3sj,7u	5lj,13mj,7sj	46
	ウスイロオカチグサ			1a			2			1a,1ab	1ljb		6			1ac	0			2a		1lj	5
	ハクサンベッコウ類似属					1mj,1sj	2					2mj,1sj	3								?1ljb	1sj	3
	オオオカチョウジ										1lj	2sj,1u	5							1ab	1ljb,1mjb	2lj,2mj,6sj,1u	14
	コハクガイ類？											4(2c?)lj,1mj	5									3lj,7mj,2sj	12
	ヒメコハクガイ											4mj,2sj	6									1mj	1
	ヒメベッコウ類似属											1ljc?	1										
陸産／林縁	オキナワヤマタニシ	1a,1lj	1ab,1u,4f	?1u			3		1lj,2u,2f				3										
	パンダナマイマイ		1ab		?1u		2												1mjb,2f			2mj,1sj	4
	ホラアナゴマオカチグサ類					4a,5(2c?)lj,1mjc?,1sjc?	11					1lj,1mjc?	2									1lj	1
	シュリマイマイ			?1u			1																
	シリブトオカチョウジ？					?1sj,1u	2				1ljb	1mj,4sj	7								1u	3lj,4mj,11sj	20
	ナハキビ											1a	1								1lj	6a,1ab,19lj,19mj,13sj,3u	62
	フクダゴマオカタニシ																				3a	2a,1lj,1mj	10
	ヒメベッコウ類																					1lj	1
	トウガタホソマイマイ																						
陸／他	パンダナ/ウスカワ																					4sj,1u	
	陸産貝類/同定不能																						
	陸産貝類/卵											2											
淡水産	ヒメモノアラガイ？											1u											
	ヌノメカワニナ																		1j				
	オキナワミズコマツボ																			1mjb			
	ヒラマキモドキ																				1ljb		
	ハブタエヒラマキ類																					1a	
骨/哺乳類		4g (1f)	1g (1f)																±0g(?2f)				
骨/魚類		59g (63f)	33g (187 [9B]f)					4g (8 [1B]f)	4g (49 [9B]f)						1g (15f)			±0g (1f)	2g (?30f)				
卵殻？																		±0g (2f)	26g (1382f)				
炭>5mm						51						88				80						97	
炭化穀類>3mm												?1				1							
マメ類？																							
ウリ類?/種子/未炭化																							

第17表　土壌サンプルから得られた貝類遺体等の組成2c

サンプル名	土114						土46						土37				土26					
遺構名，時代	SX14，グスク1～近世3						SM13，グスク1～近世3						SM12，近世3				SM9，近代					
層序等	廃棄－2						底面（炭層）						3層（底面）				SM9，2層					
サンプル重量等	5100cc/4054g						3800cc/3568g						4800cc/4018g				1250cc/1174g					
メッシュサイズ等	9.5	4	2*	1**	LF	MNI	9.5	4	2*	1*	LF	MNI	9.5	4	LF	MNI	9.5	4	2*	1*	LF	MNI
容量(cc)	388cc	450cc					750cc	350cc					600cc	150cc			50cc	320cc				
重量(g)	550cc	342g					682g	332g					656g	125g			44g	280g				
焼け土	10g (2f)						16g (7f)															
漆喰？	4g (2f)																					
パミス>3mm					17																5	
造礁サンゴ片							7g (2f)	4g (7f)									±0g (1f)	58f (32g)				
非石灰岩																						
石灰岩	161g (52)						598g						650g				43g					

が、この遺構を含め、全体としても明瞭な傾向を認められなかった。これは、上述したように、樹木が存在しておりながら､各地点の管理方策が一定ではなく､地点ごとに生息／残存していた種が異なっていたことによるものと考えている。

淡水産貝類5種はいずれも止水環境に生息するもので、グスク1の時代には認められず、グスク1～近世3と近代の2サンプル（SM13と SM9）で確認された。ヌノメカワニナを除き、他の種は成貝でも5mm未満程度の種である。SM13と SM9は、必ずしも池や水路等の遺構ではないようであり、比較的短期間に存在した小さな水体の存在を示しているようにも思われる。ただ、オキナワミズゴマツボを除いた4種は最近でも水草を入れた屋外水槽で見られることもあり､首里城の奉神門の埋甕のような状況（黒住，2013も参照）の可能性も想定されよう。後述する“砂利敷き”が､奉神門の埋甕で想定したように、この両遺構で認められたことも、この考えを補強するものかもしれない。

ウ）砂利敷き：今回、新しい時代の SM13と SM9の土壌からは、摩滅した海産微小貝類と造礁サンゴ片が多く得られた。これらは海岸の砂利を敷いていたものに由来すると考えており、上述の首里城奉神門（黒住，2013）や銭蔵東地区（黒住，2016）でも確認されている。今回、グスク1の遺構からは砂利由来の微小貝が抽出できなかったので、庭園としての造成意図等に関連する時代等を考える素材になりえると思われる。

エ）海藻利用の検証：海藻上に生息する葉上性微小貝類の出土から、海藻の直接的な利用（食用等）や製塩に関連した藻塩焼き等を検証する研究も進められている（加納，2001；黒住，2014）。奄美・沖縄においては、これまでのところ、葉上性貝類から海藻利用を検証できた例はなく（黒住，2002)、筆者は、沖縄における地元産の海藻利用はかなり新しいのではないかと考えて、データを蓄積中である。今回も、フトコロガイやウネウキツボ等の葉上性種が得られたものの、前述の砂利由来の摩滅したものであった。本遺跡が権力者の居住域であり、地元産の海藻利用が行われていても、事前の洗浄処理が終わっているものを利用している可能性が高く、海産微小貝の出土は認められないことも十分に考えられる。ただ、地道に土壌サンプルを処理するしか、葉上性貝類からの海藻利用を検証することはできないであろう。

引用文献

榎屋節子・木佐貫厚子・橋口まさ・坂下泰典 1976「鹿児島県本土採集地案内 (3) 鹿児島南港建材用砂揚場」『九州の貝』(5･6):76-79

加納哲哉 2001「微小動物遺存体の研究」pp227　國學院大學大学院研究叢書　文学研究科7

黒住耐二 1991「貝類遺存体」『今帰仁城跡発掘調査報告書 Ⅱ』今帰仁村文化財調査報告書 第14集 340-351

黒住耐二 1993「貝類遺存体」『玉代勢原遺跡』北谷町文化財調査報告書 第13集 287-293

黒住耐二 1997.「1996年の用見崎遺跡調査でコラムサンプルから得られた貝類遺存体」『用見崎遺跡 Ⅲ』考古学研究室報告 (32) : 35-41 熊本大学考古学研究室

黒住耐二 1999「貝類遺存体」『住屋遺跡（Ⅰ)』平良市埋蔵文化財調査報告書　第4集 294-317

黒住耐二 2002「貝類遺体からみた奄美・沖縄の自然環境と生活」In 木下尚子（編）『先史琉球の生業と交易－奄美・沖縄の発掘調査から－』pp.67-86 熊本大学文学部

黒住耐二 2010a「貝類遺体」『首里城跡－御内原北地区発掘調査報告書（Ⅰ）－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書　第54集 440-451

黒住耐二 2010b「貝類遺体（シーリ遺構内)」『首里城跡－御内原北地区発掘調査報告書（Ⅰ）－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書　第54集 472-476

黒住耐二 2010c「宮古島外間遺跡出土の貝類遺体」『外間遺跡』宮古島市埋蔵文化財調査報告書 第3集　117-125

黒住耐二 2013「首里城淑順門西地区および奉神門地区の発掘調査で得られた貝類遺体」『首里城跡－淑順門・奉神門埋甕地区発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書　第68集 186-200

黒住耐二 2014「化石貝と微小貝からみた資源利用」『季刊考古学別冊』(21):149-153

黒住耐二 2015「ステータスとして貝を好むヨーロッパ文化」In 山喜多佐知子（編）『 美しすぎる世界の貝』p.224 誠文堂新光社

黒住耐二 2016「首里城跡銭蔵東地区から得られた貝類遺体」『首里城跡－銭蔵東地区発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書　第80集 220-238

大城聖子 1988「貝殻」『首里城跡－歓会門・久慶門内側地域の復元整備事業にかかる遺構調査－』沖縄県文化財調査報告書　第88集 111, 121-128

瀬戸哲也･新垣 力･大堀皓平･宮城淳一･大谷匡史（編）2016『首里城跡－銭蔵東地区発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書　第80集 1-340

山本正昭（編）2007『首里城跡－御内原西地区発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書　第44集 1-212, 4 pls.

第18表　貝類出土状況　巻貝a

			出土地	SA			SD			SE			SG			SJ			SK			SL		
番号	科名	貝種名	生息地	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片
1	ヒザラガイ科	ヒザラガイの一種	Ⅰ-1-a																					
2	ツタノハ科	オオベッコウガサ	Ⅰ-1-a																		1			
3	ユキノカサ科	リュウキュウウノアシ	Ⅰ-1-a																2		1			
4		ニシキウズ	Ⅰ-2-a	10		5	1	1										1	12	8	19			
5		ムラサキウズ	Ⅰ-3-a	2																				
6		ギンタカハマ	Ⅰ-4-a	2		2											1	1	6	9	4			
7	ニシキウズ科	サラサバテイラ	Ⅰ-4-a	5	9	16			1			1							9	14	21			1
8		オキナワイシダタミ	Ⅱ-1-b																6	3	12			
9		ニシキウズ科不明																						
10		リュウテン	Ⅰ-4-b																					
11		ヤコウガイ	Ⅰ-4-a	2	27	109	3	4	15		3	5			3		1	11	9	73	159			
12		ヤコウガイの蓋	Ⅰ-4-a	26	22	44	1	3	6	1	1			2	1			2	103	15	39		1	
13		チョウセンサザエ	Ⅰ-3-a	69	28	8	26	10	3		1	1	3	3	2	4	1		59	23	15	2		
14	リュウテン科	チョウセンサザエの蓋	Ⅰ-3-a	15			1						1						42		1			
15		コシダカサザエ	Ⅰ-2-a														1		11					
16		カンギク	Ⅱ-1-b	16	7	7	2				1	1				1			1595	528	210	23	12	1
17		カンギクの蓋	Ⅱ-1-b	4	1														103					
18		オオウラウズ	Ⅰ-2-a																					
19		ヒメイシダタミアマオブネ	Ⅰ-0-a																7	1	6			
20		マングローブアマガイ	Ⅲ-0-a	1															1					
21		キバアマガイ	Ⅰ-0-a																		1			
22	アマオブネ科	マルアマオブネ	Ⅱ-1-b																56	5	17			
23		アマオブネ	Ⅰ-1-b	2															11		1			
24		ニシキアマオブネ	Ⅰ-1-c																2			1		
25		アマオブネ科不明																			10			
26		オニノツノガイ	Ⅰ-2-c	2	16			1	1		1								8	29	4			
27		コオニノツノガイ	Ⅰ-2-a																2					
28		メオニノツノガイ	Ⅰ-4-c																					
29	オニノツノガイ科	カヤノミカニモリ	Ⅰ-1-b																61	9				
30		イワ(ウミニナ)カニモリ	Ⅱ-1-b	6	9	4								1					744	209	161			
31		クワノミカニモリ	Ⅰ-1-b	3	6	4		1	1								1		37	52	5	1	3	1
32		オニノツノガイ科不明																						
33	ゴマフニナ科	ゴマフニナ	Ⅰ-0-a																1					
34	ウミニナ科	リュウキュウウミニナ	Ⅱ-1-c																7	26	3			
35		イボウミニナ	Ⅲ-1-c																1	1				
36		フトヘナタリ	Ⅲ-0-d																					
37		ヘナタリ	Ⅲ-1-c																2					
38	ヘナタリ科	カワアイ	Ⅲ-1-c																3	11	2			
39		キバウミニナ	Ⅲ-0-c																					
40		センニンガイ	Ⅲ-0-c																					
41		オハグロガイ	Ⅱ-2-c	10	1	1	2			1			2	1					6	2	3			
42		ムカシタモト	Ⅰ-2-c																					
43		ネジマガキ	Ⅰ-2-c																	1				
44		マガキガイ	Ⅰ-2-c	138	74	6	6	8			8	2	3	2		3	1		277	407	29			
45	スイショウガイ科	スイショウガイ	Ⅱ-2-c																					
46		イボソデガイ	Ⅰ-2-c	1																1				
47		クモガイ	Ⅰ-2-c		3															4	3			
48		スイジガイ	Ⅰ-2-c					1							1				1					
49		スイショウガイ科不明				1													2		2			
50	スズメガイ科	アツキクスズメ	Ⅰ-3-a																1	1				
51		スズメガイ科不明	Ⅰ																					
52		ヤクシマダカラ	Ⅰ-2-a		1														1	1				
53		ホソヤクシマダカラ	Ⅱ-2-a																2					
54		ホシダカラ	Ⅰ-2-a			1															1			
55		クチムラサキダカラ	Ⅰ-2-c				1																	
56		ウスムラサキ(リュウキュウ)ダカラ	Ⅱ-2-b																					
57		ホシキヌタ	Ⅰ-2-a																		1			
58		ヤナギシボリダカラ	Ⅰ-2-a				1																	
59		ナツメモドキ	Ⅰ-2-a																					
60	タカラガイ科	エダカラ	Ⅰ-2-a																					
61		タルダカラ	Ⅰ-2-a																					
62		コモンダカラ	Ⅰ-1-a	1																				
63		ハナビラダカラ	Ⅰ-1-a	2															14	23	27	1		
64		キイロダカラ	Ⅰ-1-a																1	3				
65		ハナマルユキ	Ⅰ-3-a	2	2	2													3	5	6			
66		サメダカラ	Ⅰ-2-a																					
67		コゲチドリダカラ	Ⅰ-4-a																					
68		チドリダカラ	Ⅰ-2-a																					
69		タカラガイ科不明							2											1				
70		マンジュウガイ	Ⅵ(1-4-c)																					
71		トミガイ	Ⅰ-2-c																					
72	タマガイ科	ヘソアキトミガイ	Ⅰ-2-c																1					
73		リスガイ	Ⅰ-2-c																					
74		ホウシュノタマガイ	Ⅱ-1-c																4					
75	オキニシ科	オキニシ	Ⅰ-3-a		1	1													2	3				
76		オキニシ科不明																						
77		イワカワトキワガイ	Ⅰ-2-c	1																				
78	ヤツシロガイ科	ウズラガイ	Ⅰ-2-c																	1				
79		スクミウズラガイ	Ⅰ-2-c		1																			
80		シノマキ	Ⅰ-4-a																					
81		ミツカドボラ	Ⅰ-2-a		1			1																
82	フジツガイ科	シロシノマキ	Ⅰ-2-a																1					
83		シオボラ	Ⅰ-2-a																1					
84		ホラガイ	Ⅰ-4-a																					

	SM			SP			SQ			SS			SX			階段状遺構			Ⅰ層			Ⅱ層			Ⅱ層～造成3			造成		
番号	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片
1	1																					1								
2	1																		1											
3	7																		1			1						2		
4	10	10	14		2								17	6	24				3	6	7		2	5				12	5	13
5	4		1											1														1	1	
6		6				1							1	8	3					5	4	1	6	3				5	24	14
7	1	11	24	1	1	5						1	3	50	43		1	1	5	25	36	6	27	32				13	75	91
8	1		1																1			1								1
9			1																										1	5
10													1																	
11	2	21	83		1	25		1	5		7	15	1	63	250				2	56	327		41	230				6	96	459
12	176	28	128	1	4	9			3	3	3	11	105	54	70	1		1	53	67	224	61	40	161				146	77	250
13	46	27	27	6	1	2	1		1	3	3		46	49	36		1		99	170	68	96	83	32				345	211	77
14	83			5			2			3			20	1		1			74	14	4	54	1	2				52	3	
15	11	4	2		1								2						1				1					5	2	
16	337	107	41	24	16	5	8			6	2	2	85	43	35				108	33	10	92	29	11				161	61	67
17	63			2	1								1						1			1						2		
18	1																							1					2	
19	1																											1		
20	2																		2									3		
21																														
22	5			2						3									1			3						2		
23	10									1				1	1				1			3						7	2	1
24				1																								4		
25	1		1																											1
26	5	15	6		3					1	5	1	21	72	4				3	27	9		13	2		2		12	75	19
27	2										1																	1		
28		1																												
29	2	4								1									1		1							1		
30	185	76	1	8	31	9				2	13	9	11	12	1				14	32	12	13	29	4				103	131	41
31	71	43		1	13	7				3	8		3	3	2				3	16	2		15	2				11	47	11
32																					1									1
33																						1								
34	2	12		3	4						1		1	8									3					1	2	
35	1	6																	1				1					1	8	1
36			3		1	1														1	3		1						1	
37		4		1							1												2					1		
38		1			1								3	4					1	13	8		4	1					7	4
39																							1							
40														1						4			2							
41	12	6	1	3						1	1		1	3	1				31	11	3	33	7	2				14	8	3
42	1																		1	1										1
43		1											4							1									1	
44	299	290	38	6	12	1		7		9	9	4	910	493	17				55	201	10	15	124	8		13		377	565	40
45																							1							
46	1																											1		
47		1	1											6	1					2	1		1	1				2	5	
48																														
49			3						2		1									1	1		1	2						
50	1	1		2																		2								
51																			1	1		1								
52	1	1	1										1		1				1									1		
53	2																					1		1				2		
54															1					2	1			1				1	1	2
55													1						1											
56				1															1											
57	6	1												1					2		1		1					2	2	
58	1																											1		1
59	1	2																										1		
60																												1		
61	1	2																												
62	3	1											1									3						2		
63	31	39	8	1	5	1	1						4	4					7	3		14	9					19	11	2
64	7	2			1															2		1	1					4	2	
65	32	19	4	2	32	2	1			1			1	12	7				8	15	3	11	11	3				11	37	8
66																						1						1		
67																						1								
68													1																	
69			1			2			1			1			1				1		5	1	1	2				1	1	11
70																			1											
71		1																												
72	1																													
73	2																					1								
74	3					1																								
75	4												9	3						1	1	2	1					1		2
76																														1
77																														
78																														
79																														
80		1																												
81				1									2		2							1	1						2	
82																														
83	3	2	1																					1				1	1	
84												4																	1	2

	Ⅲ層			Ⅳ層			Ⅳ層～地山			穴			瓦溜まり			枡形			ライン			ブロック			8の字池			洞穴部			漆			合計			個体数
番号	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	
1																																		2	0	0	2
2																																		2	0	1	2
3																																		13	0	1	13
4				1		3											1						2	1										66	43	92	109
5										1																								8	2	1	10
6											1													1										15	60	33	75
7						7				1		2		2	2	1	2	2		2	2		3	10		1	3							45	223	301	268
8				1																1														10	4	14	14
9																																		0	1	6	1
10																																		1	0	0	1
11		3	10		4	41					1	5			9		2	19	1	8	26		14	58		4	17							26	430	1881	456
12			1	6	8	7						1		5	3	5	3	11	6	1	10	14	7	15	6		2	1						715	341	999	1056
13	1	1		4	4				1		7	1	4	8	1	5	6	3	11	5	1	1	2		2		1				1			834	644	280	1478
14	1			2						1			1			1			3		1													362	19	8	381
15																																		30	9	2	39
16				187	58	22				1								1	3			2		2										2651	897	415	3548
17				1																														178	2	0	180
18																																		1	2	1	3
19																																		9	1	6	10
20																																		9	0	0	9
21																																		0	0	1	1
22																																		72	5	17	77
23				3																														38	3	3	41
24																																		8	0	0	8
25																																		1	0	12	1
26	1			1	3										1					1			5	1										54	268	48	322
27																																		5	1	0	6
28																																		0	1	0	1
29																																		66	13	1	79
30				79	18	2											1			2				1										1165	564	245	1729
31					2	1											1																	133	211	36	344
32																								1										0	0	3	1
33																																		2	0	0	2
34																																		14	56	3	70
35																																		4	16	1	20
36																																		0	4	7	4
37																																		4	7	0	11
38																																		7	41	15	48
39																																		0	1	0	1
40															1																			0	7	1	7
41				1															5	2														122	42	14	164
42																																		2	1	1	3
43																																		4	4	0	8
44		2		8	19	2				1				2			3		1	10			9	5										2108	2259	162	4367
45																																		0	1	0	1
46																																		3	1	0	4
47																																		2	22	7	24
48																																		1	1	1	2
49																																		2	3	11	5
50																																		6	2	0	8
51																																		2	1	0	3
52																																		5	3	2	8
53												1																						7	0	2	7
54						1																												1	3	8	4
55																																		3	0	0	3
56																																		2	0	0	2
57																																		10	5	2	15
58																																		3	0	1	3
59																																		2	2	0	4
60																																		1	0	0	1
61																																		1	2	0	3
62																																		10	1	0	11
63				3															1															98	94	38	192
64																				1														13	12	0	25
65													1			1			1			1		1										76	133	36	209
66																																		2	0	0	2
67																																		1	0	0	1
68																																		1	0	0	1
69						1															2		1	5										3	4	34	7
70																																		1	0	0	1
71																																		0	1	0	1
72																																		2	0	0	2
73																																		3	0	0	3
74																			1															8	0	1	8
75					1																			5										18	10	9	28
76																																		0	0	1	1
77																																		1	0	0	1
78																																		0	1	0	1
79																																		0	1	0	1
80																																		0	1	0	1
81																																		4	5	2	9
82																																		1	0	0	1
83																																		5	3	2	8
84			1																															0	1	7	1

第18表　貝類出土状況　巻貝b

			出土地	SA			SD			SE			SG			SJ			SK			SL			SM			SP			SQ			SS			SX		
番号	科 名	貝 種 名	生息地	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片
85		テングガイ	Ⅰ-4-a																																				
86		コガンゼキ	Ⅰ-2-a																																				
87		ガンゼキボラ	Ⅰ-4-a				1												2						1						1						2	1	
88		ヒロウネレイシダマシ	Ⅱ-1-b																5	1	1				1												1		
89		シロレイシダマシ	Ⅰ-2-a																																				
90		ハナワレイシ	Ⅰ-3-a																								1												
91		ムラサキイガレイシ	Ⅰ-3-a	2															2						1														
92		アカイガレイシ	Ⅰ-3-a		1														2						3														
93	アッキガイ科	キイロイガレイシ	Ⅰ-3-a																																		1		
94		ツノレイシ	Ⅰ-3-a	3	1	1	2												18	3					12		1	1						1			17		
95		ツノテツレイシ	Ⅰ-1-a	1															4	1					1						2						21	1	
96		コイボテツレイシ	Ⅰ-3-a																						1														
97		シラクモガイ	Ⅰ-3-a	5			1												33																		2		
98		テツレイシ	Ⅰ-1-a																						1												1		
99		コイワニシ	Ⅱ-1-b																3	1						1													
100		カブトサンゴヤドリ	Ⅰ-2-a																																			1	
101		アッキガイ科不明																																					
102		オニコブシ	Ⅰ-3-a																6	2					3			1									1		
103	オニコブシ科	コオニコブシ	Ⅰ-3-a	9	1	2	1		1										34	4	3				19	5	2	4		1	1					1	116	4	3
104		オニコブシ科不明				1																																	
105	フトコロガイ科	フトコロガイ	Ⅱ-2-d																																				
106		オビニナ	Ⅰ-2-b																																				
107	オリイレヨフバイ科	カニノテムシロ	Ⅲ-1-c																																				
108		アツムシロ	Ⅰ-1-c																																				
109	バイ科	ウスイロバイ	Ⅱ-2-c																								1										1		
110	エゾバイ科	シマベッコウバイ	Ⅱ-1-c	2															172	17	19				24	2	2								3	2	5		1
111		イトマキボラ	Ⅰ-2-a	20	6	3	7						2			3		2	6	1					1	1				2							7	2	
112		ナガイトマキボラ	Ⅰ-2-a																																				
113	イトマキボラ科	リュウキュウツノマタガイ	Ⅰ-3-a																1						2														
114		ツノマタモドキ	Ⅰ-3-a	2															2	3					2									1			4		
115		チトセボラ	Ⅰ-2-c													1																					1	1	
116		イトマキボラ科不明																																		3			
117	マクラガイ科	サツマビナ	Ⅰ-2-c																1																				
118		チョウセンフデ	Ⅰ-2-c																																		1		
119	フデガイ科	シロオビヤタテ	Ⅰ-2-b																						1														
120		ツムガタイモフデ	Ⅰ-4-c																						1														
121	ミノムシガイ科	オオミノムシ	Ⅱ-2-c		1																																		
122		ハマヅト	Ⅱ-2-c																																				
123		ナンヨウクロミナシ	Ⅱ-2-c																2						1	1											2	1	
124		ミカドミナシ	Ⅰ-2-c																1																				
125		アンボンクロザメ	Ⅰ-2-c	3															2	1					1	1													
126		クロフモドキ	Ⅰ-2-c																	1																		1	2
127		クロザメモドキ	Ⅰ-2-c																																		1	1	
128		マダライモ	Ⅰ-1-a	3			1												9	1	1				18						1			2			8	1	
129		コマダライモ	Ⅰ-1-a																1						2									1			1		
130		サヤガタイモ	Ⅰ-1-a	1	1														20	4					11	2									1		4		
131		ジュズカケサヤガタイモ	Ⅰ-1-a																																		1	1	
132		ゴマフイモ	Ⅰ-2-c																						2			1											
133		コモンイモ	Ⅰ-2-c																																				
134		アラレイモ	Ⅰ-3-a																																				
135		アカシマミナシ	Ⅰ-2-c																																		3	1	1
136	イモガイ科	サラサモドキ	Ⅰ-2-c																1						1														1
137		ユキゲイモ	Ⅰ-2-c																						1												4		
138		ヤキイモ	Ⅰ-2-c																																				
139		サラサミナシ	Ⅰ-2-a																																				
140		カバミナシ	Ⅰ-4-b		1																																		
141		ヤナギシボリイモ	Ⅰ-2-a		1														2	2	1				3	9	4										4	5	1
142		ヤセイモ	Ⅰ-2-a			1																				1			1								2		
143		キヌカツギイモ	Ⅰ-2-a	1	1														2						2	2			1								5		
144		イボシマイモ	Ⅰ-2-a	1	2														3						4	4											4		
145		ベニイタダキイモ	Ⅰ-4-b																						1														
146		アンボイナ	Ⅰ-2-c																								4												
147		ニシキミナシ	Ⅰ-2-c																																				
148		アジロイモ	Ⅱ-2-c																																				
149		イモガイ科不明		1	1	2								1						2	4				2	3	5			1					3			3	1
150	クルマガイ科	クロスジグルマガイ	Ⅵ(1-4-c)																																				
151	トウガタカワニナ科	トウガタカワニナ	Ⅳ-5・6																									1											
152		スグカワニナ	Ⅳ-6																																				
153	ブドウガイ科	ブドウガイ類																									1												
154	ナツメガイ科	コナツメガイ	Ⅰ-2-c																																				
155		ナツメガイ	Ⅰ-2-c																																				
156	カワニナ科	カワニナ	Ⅳ-5・6																																			1	
157		カワニナ科不明	Ⅳ																																				
158	ヤマタニシ科	オキナワヤマタニシ	Ⅴ-8	1	1		1												427	39	84				3		1	6			2		1			1	202	41	69
159	キセルガイ科	ツヤギセルガイ	Ⅴ-8																2																				
160	アフリカマイマイ科	アフリカマイマイ	Ⅴ-9																																				
161	ナンバンマイマイ科	シュリマイマイ	Ⅴ-8		1														3	1	5																3		
162	オナジマイマイ科	オキナワウスカワマイマイ	Ⅴ-9																																				
163	カワザンショウガイ科	ウスイロヘソカドガイ	Ⅴ-9																						5														
164		巻貝不明				11			2					1	1					2	6						10		1	6			2			6			
		合 計		375	228	232	58	30	32	2	15	10	11	11	8	12	6	17	3983	1555	888	28	16	3	1574	778	423	85	133	81	20	8	15	42	62	61	1681	964	579

	階段状遺構			Ⅰ層			Ⅱ層			Ⅱ層～造成3			造成			Ⅲ層			Ⅳ層			Ⅳ層～地山		
番号	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片
85													1											
86								1																
87				1									2	2	1	1								
88													2		1									
89							1																	
90																								
91													2		1									
92				3									3		1									
93																								
94				7	3	3	8						34	4	1				2					
95				5	1		3						10	1	4									
96																								
97				3		1	2						11	1					1					
98							1						9	1										
99													1											
100																								
101				2											1									
102				2	1		2						4	2					1	1				
103				11	2	1	9		1				48	8	4				2					
104									2															
105				1																				
106							1																	
107				1																				
108							1																	
109																								
110				6	1	2	7	1	2				15	4	4				6					
111				38	21	12	21	3	9				97	30	10				1	1				
112				2			1						3											
113				1					1				2	1						1				
114				1			1						5											
115				1										3										
116						6			1															
117																								
118					1																			
119																								
120																								
121																								
122							1																	
123					1								2											
124																								
125																								
126					1										2									
127							1																	
128				10	1		17	2	1				8		4									
129				1									3		1									
130				3	2		4	1					5	6										
131														1										
132					2								1											
133													1	1										
134													1											
135																								
136					2																			
137					1	3							2											
138																								
139													1											
140																								
141					5			1	1				3	6										
142				1			1						1	1										
143							1	2					4	6						1				
144				2			2						6	1	2				1					
145																								
146																								
147						1																		
148				2																				
149				2	8	5	3	7	3				2	11	3					1	1			
150								1																
151				3			1						1											
152							2												1					
153																								
154				1																				
155													1											
156					2									1										
157														1										
158				8			8	2	3				25	3	11		1		6	4	1			
159														1										
160				2																				
161									4						4									
162				1																				
163																								
164					1	4		2	9				1	1	16						1			
合計	2	2	2	607	766	780	521	483	544	0	15	0	1658	1565	1200	4	7	12	318	126	90	0	0	1

	穴			瓦溜まり			枡形			ライン			ブロック			8の字池			洞穴部			漆			総合計			個体数
番号	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	
85																									1	0	0	1
86																									0	1	0	1
87																									11	3	1	14
88																									9	1	2	10
89																									1	0	0	1
90																									0	0	1	1
91										1															8	0	1	8
92										1															12	1	1	13
93																									1	0	0	1
94				1										4	2										106	15	8	121
95																									47	4	4	51
96																									1	0	0	1
97																									58	1	1	59
98																									12	1	0	13
99																									4	2	0	6
100																									0	1	0	1
101																									2	0	1	2
102										1															21	6	0	27
103										1															255	24	19	279
104																									0	0	3	1
105																									1	0	0	1
106																									1	0	0	1
107																									1	0	0	1
108																									1	0	0	1
109																									1	0	1	1
110																									237	28	32	265
111			1	4	2	1				1						3		2							211	67	42	278
112								1																	6	1	0	7
113																									6	2	1	8
114																									18	3	0	21
115																									3	4	0	7
116												1													0	0	11	1
117																									1	0	0	1
118																									1	1	0	2
119																									1	0	0	1
120																									1	0	0	1
121																									0	1	0	1
122																									1	0	0	1
123																									7	3	0	10
124																									1	0	0	1
125																									6	2	0	8
126																									0	3	4	3
127																									2	1	0	3
128																									77	5	6	82
129																									9	0	1	9
130																									48	17	0	65
131																									1	2	0	3
132																									4	2	0	6
133																									1	1	0	2
134																									1	0	0	1
135																									3	1	1	4
136																									2	2	1	4
137																									7	1	3	8
138										1															1	0	0	1
139																									1	0	0	1
140																									0	1	0	1
141										1															13	29	7	42
142																									5	3	1	8
143													1												16	13	0	29
144																									23	7	2	30
145																									1	0	0	1
146																									0	0	4	1
147																									0	0	1	1
148																									2	0	0	2
149										1					1										11	40	26	51
150																									0	1	0	1
151																									6	0	0	6
152																									3	0	0	3
153																									0	0	1	1
154																									1	0	0	1
155																									1	0	0	1
156																									0	4	0	4
157																									0	1	0	1
158										1	1	1													690	92	172	782
159																									2	1	0	3
160																									2	0	0	2
161																									6	2	13	8
162																									1	0	0	1
163																									5	0	0	5
164												2			7										1	8	83	9
合計	5	9	11	11	19	18	13	20	36	42	34	46	19	47	116	11	5	25	1	0	0	1	0	0	11084	6904	5230	17988

注　完形と殻長の数を足した合計を個体数とした。（破片でのみ出土した貝種については、最少個体数「１」として数えた）

第19表　貝類出土状況　二枚貝・頭足網・ウニ網出土表a

種名 ＼ 出土地・層序				SA					SD					SE					SG					SJ					SK					SL					SM					SP					SQ					SR					SS					SX					階段状遺構				
				完形		殻頂		破片	完形		殻頂		破片	完形		殻頂		破片	完形		殻頂		破片	完形		殻頂		破片	完形		殻頂		破片	完形		殻頂		破片	完形		殻頂		破片	完形		殻頂		破片	完形		殻頂		破片	完形		殻頂		破片	完形		殻頂		破片	完形		殻頂		破片	完形		殻頂		破片
番号	科名	貝種名	生息地	L	R	L	R		L	R	L	R		L	R	L	R		L	R	L	R		L	R	L	R		L	R	L	R		L	R	L	R		L	R	L	R		L	R	L	R		L	R	L	R		L	R	L	R		L	R	L	R		L	R	L	R		L	R	L	R	
1		エガイ	Ⅰ-1-a		1																								3	3									1	1					1			1												1				1	2								
2		カリガネエガイ	Ⅱ-1-a		1																																																																			
3	フネガイ科	ベニエガイ	Ⅰ-2-a																										4	3	4	2																																	1	1							
4		リュウキュウサルボオ	Ⅱ-2-c																										2																																				1		1						
5		フネガイ科不明																																																																			1					
6	タマキガイ科	ソメワケグリ	Ⅱ-2-c																																																																							
7		ウチワガイ	Ⅱ-2-c																																																																							
8	ウグイスガイ科	ミドリアオリ	Ⅰ-1-a																										2																																												
9		クロチョウガイ	Ⅰ-4-a																														1																																								
10	ミノガイ科	ミノガイ	Ⅰ-2-a																																				1	1																																
11		キンチャクガイ（化石）	Ⅵ－12																																												1																									
12	イタヤガイ科	イタヤガイ	Ⅵ(Ⅰ-4-c)																																																																						
13		イタヤガイ科不明																												1																																	1											
14	ウミギク科	メンガイの一種		1	1																								3	3			1						4	2			2						1																	1	1	3						
15		オハグロガキ	Ⅰ-1-a																																																																							
16	イタボガキ科	ノコギリガキ	Ⅱ-2-a																										1				1																																								
17		オハグロガキモドキ	Ⅲ-1-a																																																																							
18		カキの一種																																																																								
19		クチベニツキガイ	Ⅰ-2-c																																					1																																	
20	ツキガイ科	ウラキツキガイ	Ⅱ-2-c	6	7	2	4	2		3		1		1					1								1		152	159	3	8	4	1					94	92	3	8	1	14	19	4	4	8	1			1								2	2	2	1	31	36	7	4	3			1		
21		ヒメツキガイ	Ⅰ-2-c		1																																																															1						
22		ツキガイ科不明																																																																								
23	カゴガイ科	カゴガイ	Ⅱ-2-c																																																																							
24		シロザル	Ⅰ-4-a																											1																																		1									
25	キクザル科	キクザル類																																																																								
26		キクザル科不明																												1																																			1								
27		リュウキュウザル	Ⅱ-2-c																										2	2									9	7			1				1	1																3	2		1						
28		カワラガイ	Ⅱ-2-c	3	4	1	2	2		1										2									5	6									4	6	5	3	1							1									1					8	11		1						
29	ザルガイ科	モクハチアオイ	Ⅵ(Ⅰ-4-c)																																																																						
30		マクラザル	Ⅰ-4-c																																																																							
31		ザルガイ科不明																																														1																									
32		シャゴウ	Ⅰ-2-c																																						1																																
33		ヒメジャコ	Ⅰ-2-a																										4	4			3								1																							3	4	1		1					
34	シャコガイ科	ヒレジャコガイ	Ⅰ-2-c	1	1	2	2	14					6												1				10	10	2	1	23						3		1	1	19																			1	5	3	2	4	4	23					
35		オオシラナミ(シラナミ)	Ⅰ-2-a																						1			3	1	1	0	1							1	4			11					2		1	1														2			4					
36		ナガジャコ(トガリシラナミ)	Ⅰ-2-a																											2									2	1																								3	2	1	1	2					
37		シャコガイ科不明					2	4																														1		4	3		11					3																				1					
38	バカガイ科	リュウキュウバカガイ	Ⅱ-2-c																										3	3	3	3	1								1	4			1			1		1																4	4	1	2	1					
39	チドリマスオ科	イソハマグリ	Ⅰ-1-c	3	4					1										1									450	483	21	20	17		1				101	97	4	6	3	2	2		2	1												2	1			8	7								
40		ナミノコマスオ	Ⅰ-1-c																										9	8	1								1	2	1				2																			2	1								
41	フジノハナガイ科	リュウキュウナミノコ	Ⅰ-1-c																										1			1							1	1	1	2		1	1																												
42		ニッコウガイ	Ⅱ-2-c																														2																																								
43		サメザラ	Ⅰ-2-c																										2											1																																		
44	ニッコウガイ科	リュウキュウシラトリ	Ⅱ-1-c																										1			1								1		1	1		1			1																				1					
45		モチヅキザラ	Ⅰ-2-c																										132	124	9	4	15																																								
46		ニッコウガイ科不明																																																																								
47	イソシジミ科	マスオガイ	Ⅱ-1-c																										7	4	10	14	10						1	1	1		1																					21	16	4	4	1					
48		リュウキュウマスオ	Ⅱ-1-c																																				2	3		1		1				1														1			1	1							
49	フナガタガイ科	タガソデモドキ	Ⅱ-1-a																																																																							
50	シジミ科	シレナシジミ	Ⅰ-1-a	1		1						1																	2	4	6	7	6						7	14	3	11	14										1										1	73	71	13	9	8					
51		アラヌノメ	Ⅰ-2-a																										1	1															1																			1		1							
52		ヌノメガイ	Ⅱ-1-c	1	1	1		2																					6	20			2						11	7	6	5	2	1				1																7	11	2	1	7					
53		アラスジケマン	Ⅲ-1-c	68	60	24	21	6	25	23	3	4								2				2	7	1	2		4423	3568	174	189	378	17	10	15	16	3	1634	1605	149	168	177	109	95	29	25	36	3	5	1	2				2		1	10	12	8	6	3	312	337	58	54	36					
54		ホソスジイナミ	Ⅱ-1-c	1	1	1				1														1	1				41	49		3							79	98	9	5	3	1	3		1			1														9	11	1							
55		ユウカゲハマグリ	Ⅱ-2-c	1																									41	49	15	7	2						23	26	3	2		5	4		1	1																12	14	1	3	1					
56		マルオミナエシ	Ⅰ-2-a																										1										7	9																									2									
57		オイノカガミ	Ⅱ-2-c																										5	9	1	3	1						2	2	1	1	1																					1	1								
58	マルスダレガイ科	リュウキュウアサリ	Ⅱ-2-c																																																														1									
59		ヒメリュウキュウアサリ	Ⅱ-2-c																										4	3	1	1																																			1						
60		ヒメアサリ	Ⅱ-2-c																											1										2	1																																
61		スダレハマグリ	Ⅱ-2-c		1				2																				9	7	3	3	3													1	1			2																						
62		オキナワワスレ	Ⅰ-4-c																																			7	12	2	4			1																			15	14	8	9	1					
63		イオウハマグリ	Ⅱ-1-c																										69	64	4	3	2						7	5	1	2																					6	4	1		1					
64		ハマグリの一種	Ⅱ-2-c	9	4	10	7	2	2		2	2							2			3	1		1			58	62	26	37	29	3	2	1	1		77	68	55	65	44		2	2	4	4																29	40	16	21	1					
65		ダテオキシジミ	Ⅲ-1-c	2	6	1		1	5	3	1	1	1						1	2									11	6	1	1	2						7	8	4	5	4		1		1	1											1			1		2	1	7	1	1					
66		マルスダレガイ科不明																																																																								
67	二枚貝不明							4					2					1										2					5							2			5	1	1			3															5					2					
合計				97	93	43	38	37	34	32	6	9	9	1	0	0	0	1	4	9	0	0	3	4	10	2	3	5	5465	4661	284	309	508	21	13	16	17	4	2086	2083	256	294	301	135	135	35	41	67	5	9	4	3	1	0	0	2	0	1	12	17	11	11	16	558	598	129	121	96	0	0	1	0	0
68	コウイカ科	コブシメ	Ⅰ-2																																																																								
69	ナガウニ科	パイプウニ	Ⅰ-3-a										3																													2																														
70	タコノマクラ科	タコノマクラ類	Ⅵ－12																																																																							
合計				0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

注　完形と殻頂の右同士･左同士を足して、多い方を個体数とした。（破片でのみ出土した貝種については、最少個体数「１」と数えた）

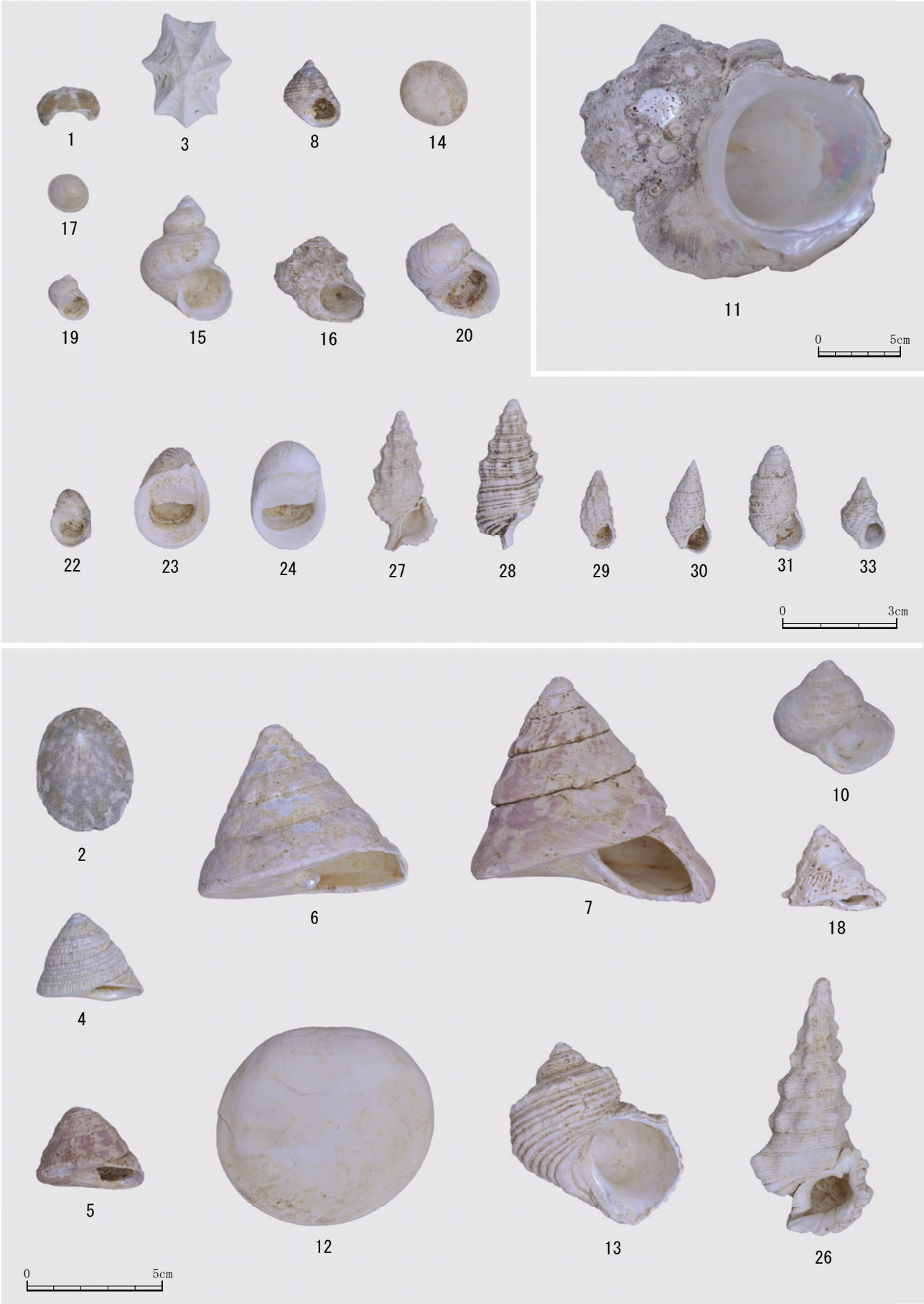
第19表　貝類出土状況　二枚貝・頭足綱・ウニ綱出土表b

番号	科名	貝種名	生息地	Ⅰ層					Ⅱ層					Ⅱ層～造成3					造成				
				完形		殻頂		破片	完形		殻頂		破片	完形		殻頂		破片	完形		殻頂		破片
				L	R	L	R		L	R	L	R		L	R	L	R		L	R	L	R	
1		エガイ	Ⅰ-1-a		1					1	1	1								2			
2		カリガネエガイ	Ⅱ-1-a																				
3	フネガイ科	ベニエガイ	Ⅰ-2-a																				
4		リュウキュウサルボオ	Ⅱ-2-c		1			2	1										2	2			1
5		フネガイ科不明																					
6	タマキガイ科	ソメワケグリ	Ⅱ-2-c		1																		
7		ウチワガイ	Ⅱ-2-c																1				
8	ウグイスガイ科	ミドリアオリ	Ⅰ-1-a																		1	1	1
9		クロチョウガイ	Ⅰ-4-a																				
10	ミノガイ科	ミノガイ	Ⅰ-2-a					1															
11		キンチャクガイ（化石）	Ⅵ－12		1														1				
12	イタヤガイ科	イタヤガイ	Ⅵ(Ⅰ-4-c)									1	1										
13		イタヤガイ科不明		1			1	2															2
14	ウミギク科	メンガイの一種		2	1	1		1		1		1	1						4	5	1	1	1
15		オハグロガキ	Ⅰ-1-a										1										
16		ノコギリガキ	Ⅱ-2-a																				
17	イタボガキ科	オハグロガキモドキ	Ⅲ-1-a					1															1
18		カキの一種						1															1
19		クチベニツキガイ	Ⅰ-2-c																				
20		ウラキツキガイ	Ⅱ-2-c	60	55	34	25	12	40	44	11	11	5						135	164	50	52	24
21	ツキガイ科	ヒメツキガイ	Ⅰ-2-c	1					3	5										3			
22		ツキガイ科不明																					
23	カゴガイ科	カゴガイ	Ⅱ-2-c																				
24		シロザル	Ⅰ-4-a																				
25	キクザル科	キクザル類							1														
26		キクザル科不明								1													
27		リュウキュウザル	Ⅱ-2-c	2	1	1			3	2									8	10	2	1	6
28		カワラガイ	Ⅱ-2-c	8	8	6	8	11	15	12	5	5	5						35	33	12	5	4
29	ザルガイ科	モクハチアオイ	Ⅵ(Ⅰ-4-c)							1													
30		マクラザル	Ⅰ-4-c				1																
31		ザルガイ科不明																					
32		シャゴウ	Ⅰ-2-c			2		1					1										
33		ヒメジャコ	Ⅰ-2-a			1					1		1							2	2	2	2
34	シャコガイ科	ヒレジャコガイ	Ⅰ-2-c	2		5	5	42		1	4	6	24						3	4	8	4	15
35		オオシラナミ(シラナミ)	Ⅰ-2-a			2	3	28		2		1	9						3	1	1	2	38
36		ナガジャコ(トガリシラナミ)	Ⅰ-2-a		2								1							1			
37		シャコガイ科不明				1		27					9							1		2	46
38	バカガイ科	リュウキュウバカガイ	Ⅱ-2-c	1		2		5											1	2	2		1
39	チドリマスオ科	イソハマグリ	Ⅰ-1-c	32	49	3	5		22	19	4	3							20	18	2		1
40		ナミノコマスオ	Ⅰ-1-c	1	1	2			2	1													
41	フジノハナガイ科	リュウキュウナミノコ	Ⅰ-1-c		1				1	1									2		1		
42		ニッコウガイ	Ⅱ-2-c		1																		
43		サメザラ	Ⅰ-2-c																1				1
44	ニッコウガイ科	リュウキュウシラトリ	Ⅱ-1-c																				
45		モチヅキザラ	Ⅰ-2-c																				
46		ニッコウガイ科不明																					1
47	イソシジミ科	マスオガイ	Ⅱ-1-c				1												11	10	5	3	2
48		リュウキュウマスオ	Ⅱ-1-c		1					1									1	1	1		
49	フナガタガイ科	タガソデモドキ	Ⅱ-1-a																				
50	シジミ科	シレナシジミ	Ⅰ-1-a	2	1	5	4	3		2			1						20	17	9	9	29
51		アラヌノメ	Ⅰ-2-a			1		2					1							2			2
52		ヌノメガイ	Ⅱ-1-c	3	2	5	1	10	3	3	2	3	3						12	8	3	4	7
53		アラスジケマン	Ⅲ-1-c	293	315	158	137	47	205	175	60	43	12						748	773	246	255	190
54		ホソスジイナミ	Ⅱ-1-c	11	19	2			5	6	2	1							23	22	5	2	4
55		ユウカゲハマグリ	Ⅱ-2-c						1		1		1						9	12	2	4	4
56		マルオミナエシ	Ⅰ-2-a																1				
57		オイノカガミ	Ⅱ-2-c			1			2										5	2		2	
58	マルスダレガイ科	リュウキュウアサリ	Ⅱ-2-c																				
59		ヒメリュウキュウアサリ	Ⅱ-2-c																	1	1	1	
60		ヒメアサリ	Ⅱ-2-c				1													1			
61		スダレハマグリ	Ⅱ-2-c	1	2	1	1	2		2									4	5	3	4	6
62		オキナワワスレ	Ⅰ-4-c																				
63		イオウハマグリ	Ⅱ-1-c	1	2	2													3	2			1
64		ハマグリの一種	Ⅱ-2-c	14	16	22	32	17	11	16	23	20	28						49	54	28	31	16
65		ダテオキシジミ	Ⅲ-1-c	22	24	11	13	16	14	11	13	10	8						68	76	15	18	9
66		マルスダレガイ科不明									1												1
67		二枚貝不明				1	1	19	1	1			14					1	1		1	3	31
		合計		457	505	269	239	250	330	308	130	106	126	0	0	0	0	1	1171	1234	401	406	448
68	コウイカ科	コブシメ	Ⅰ-2																				3
69	ナガウニ科	パイプウニ	Ⅰ-3-a					1					1										
70	タコノマクラ科	タコノマクラ 類	Ⅵ－12																1				
		合計		0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1		0	0	3

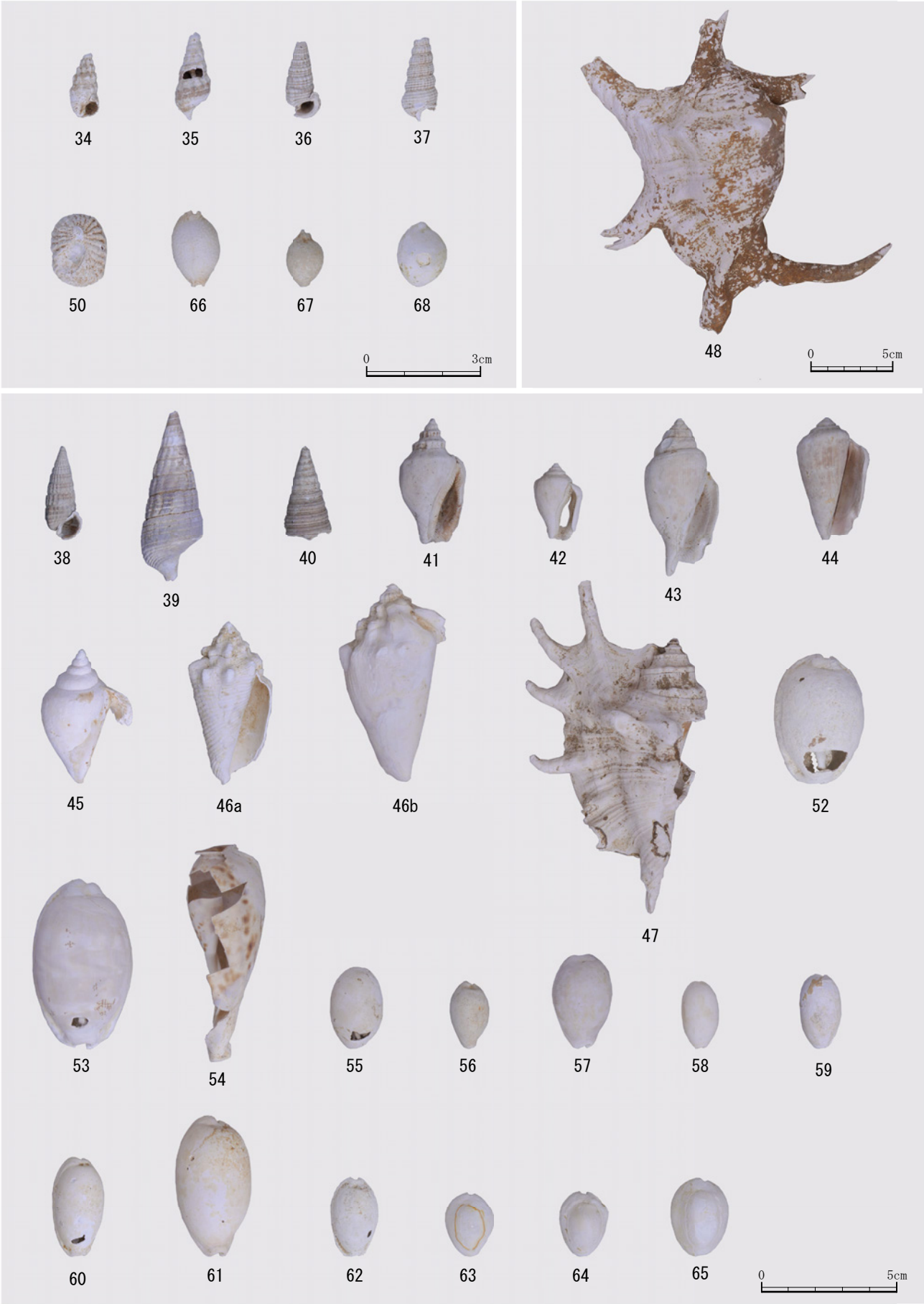
番号	科名	貝種名	生息地	Ⅲ層不明					Ⅲ・Ⅳ層					Ⅳ層					穴					瓦溜まり				
				完形		殻頂		破片	完形		殻頂		破片	完形		殻頂		破片	完形		殻頂		破片	完形		殻頂		破片
				L	R	L	R		L	R	L	R		L	R	L	R		L	R	L	R		L	R	L	R	
1		エガイ	Ⅰ-1-a																									
2		カリガネエガイ	Ⅱ-1-a												1													
3	フネガイ科	ベニエガイ	Ⅰ-2-a																									
4		リュウキュウサルボオ	Ⅱ-2-c												1													
5		フネガイ科不明																										
6	タマキガイ科	ソメワケグリ	Ⅱ-2-c																									
7		ウチワガイ	Ⅱ-2-c																									
8	ウグイスガイ科	ミドリアオリ	Ⅰ-1-a																									
9		クロチョウガイ	Ⅰ-4-a																									
10	ミノガイ科	ミノガイ	Ⅰ-2-a																									
11		キンチャクガイ（化石）	Ⅵ－12													1												
12	イタヤガイ科	イタヤガイ	Ⅵ(Ⅰ-4-c)																									
13		イタヤガイ科不明																										
14	ウミギク科	メンガイの一種													1			1										
15		オハグロガキ	Ⅰ-1-a																									
16		ノコギリガキ	Ⅱ-2-a																									
17	イタボガキ科	オハグロガキモドキ	Ⅲ-1-a																									
18		カキの一種																										
19		クチベニツキガイ	Ⅰ-2-c																									
20		ウラキツキガイ	Ⅱ-2-c			1								4	6	2	2				2				2			
21	ツキガイ科	ヒメツキガイ	Ⅰ-2-c											1					1									
22		ツキガイ科不明																										
23	カゴガイ科	カゴガイ	Ⅱ-2-c																									
24		シロザル	Ⅰ-4-a																									
25	キクザル科	キクザル類																										
26		キクザル科不明																										
27		リュウキュウザル	Ⅱ-2-c																									
28		カワラガイ	Ⅱ-2-c											1	1	1			1									
29	ザルガイ科	モクハチアオイ	Ⅵ(Ⅰ-4-c)																									
30		マクラザル	Ⅰ-4-c																									
31		ザルガイ科不明																										
32		シャゴウ	Ⅰ-2-c																									
33		ヒメジャコ	Ⅰ-2-a												1													
34	シャコガイ科	ヒレジャコガイ	Ⅰ-2-c				1	2								1		2										6
35		オオシラナミ(シラナミ)	Ⅰ-2-a																									
36		ナガジャコ(トガリシラナミ)	Ⅰ-2-a																									
37		シャコガイ科不明																										
38	バカガイ科	リュウキュウバカガイ	Ⅱ-2-c												1	1		1										
39	チドリマスオ科	イソハマグリ	Ⅰ-1-c		1									1														
40		ナミノコマスオ	Ⅰ-1-c												1													
41	フジノハナガイ科	リュウキュウナミノコ	Ⅰ-1-c																									
42		ニッコウガイ	Ⅱ-2-c																									
43		サメザラ	Ⅰ-2-c															1			1							
44	ニッコウガイ科	リュウキュウシラトリ	Ⅱ-1-c																									
45		モチヅキザラ	Ⅰ-2-c																									
46		ニッコウガイ科不明																										
47	イソシジミ科	マスオガイ	Ⅱ-1-c											2	1		1						4					
48		リュウキュウマスオ	Ⅱ-1-c												1			1										
49	フナガタガイ科	タガソデモドキ	Ⅱ-1-a																									
50	シジミ科	シレナシジミ	Ⅰ-1-a													1	1	2										
51		アラヌノメ	Ⅰ-2-a																									
52		ヌノメガイ	Ⅱ-1-c												1	2	1											1
53		アラスジケマン	Ⅲ-1-c		2	1	2	1	1					64	53	12	12	3	5	9	1			1				
54		ホソスジイナミ	Ⅱ-1-c											2	2	1			1									
55		ユウカゲハマグリ	Ⅱ-2-c																									
56		マルオミナエシ	Ⅰ-2-a																									
57		オイノカガミ	Ⅱ-2-c												1													
58	マルスダレガイ科	リュウキュウアサリ	Ⅱ-2-c																									
59		ヒメリュウキュウアサリ	Ⅱ-2-c																									
60		ヒメアサリ	Ⅱ-2-c																									
61		スダレハマグリ	Ⅱ-2-c											2	1		1											
62		オキナワワスレ	Ⅰ-4-c																									
63		イオウハマグリ	Ⅱ-1-c																									
64		ハマグリの一種	Ⅱ-2-c			1								3				1		1			1					
65		ダテオキシジミ	Ⅲ-1-c												2	1		1	1		1							
66		マルスダレガイ科不明																										
67		二枚貝不明						1										5										
		合計		0	3	3	3	4	1	0	0	0	0	80	75	23	18	18	9	10	5	0	5	1	2	0	0	7
68	コウイカ科	コブシメ	Ⅰ-2																									
69	ナガウニ科	パイプウニ	Ⅰ-3-a																									
70	タコノマクラ科	タコノマクラ 類	Ⅵ－12																									
		合計		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

番号	科名	貝種名	生息地	枡形					ライン					ブロック					8の字池					合計					個体数
				完形		殻頂		破片	完形		殻頂		破片	完形		殻頂		破片	完形		殻頂		破片	完形		殻頂		破片	
				L	R	L	R		L	R	L	R		L	R	L	R		L	R	L	R		L	R	L	R		
1		エガイ	Ⅰ-1-a																					5	13	1	1	1	14
2		カリガネエガイ	Ⅱ-1-a																					0	2	0	0	0	2
3	フネガイ科	ベニエガイ	Ⅰ-2-a																					4	4	5	2	0	9
4		リュウキュウサルボオ	Ⅱ-2-c																					5	5	0	1	3	6
5		フネガイ科不明																						0	0	0	0	1	1
6	タマキガイ科	ソメワケグリ	Ⅱ-2-c																					0	1	0	0	0	1
7		ウチワガイ	Ⅱ-2-c																					1	0	0	0	0	1
8	ウグイスガイ科	ミドリアオリ	Ⅰ-1-a																					2	0	1	1	1	3
9		クロチョウガイ	Ⅰ-4-a																					0	0	0	0	1	1
10	ミノガイ科	ミノガイ	Ⅰ-2-a																					1	1	0	0	1	1
11		キンチャクガイ（化石）	Ⅵ－12																					1	1	1	1	0	2
12	イタヤガイ科	イタヤガイ	Ⅵ(Ⅰ-4-c)																					0	0	0	1	1	1
13		イタヤガイ科不明																						1	1	0	1	5	2
14	ウミギク科	メンガイの一種												1										16	15	3	5	7	20
15		オハグロガキ	Ⅰ-1-a																					0	0	0	0	1	1
16		ノコギリガキ	Ⅱ-2-a																					1	0	0	0	1	1
17	イタボガキ科	オハグロガキモドキ	Ⅲ-1-a																					0	0	0	0	2	1
18		カキの一種																						0	0	0	0	2	1
19		クチベニツキガイ	Ⅰ-2-c																					0	1	0	0	0	1
20		ウラキツキガイ	Ⅱ-2-c	2	2	2	1	1	1	1	1		2	2										545	592	125	124	63	716
21	ツキガイ科	ヒメツキガイ	Ⅰ-2-c																			1		6	9	0	2	0	11
22		ツキガイ科不明											1											0	0	0	0	1	1
23	カゴガイ科	カゴガイ	Ⅱ-2-c													1								0	0	1	0	0	1
24		シロザル	Ⅰ-4-a																					1	1	0	0	0	1
25	キクザル科	キクザル類																						1	0	0	0	0	1
26		キクザル科不明																						0	3	0	0	0	3
27		リュウキュウザル	Ⅱ-2-c							2	1													27	26	4	3	8	31
28		カワラガイ	Ⅱ-2-c								2	1	2			1								81	85	33	25	25	114
29	ザルガイ科	モクハチアオイ	Ⅵ(Ⅰ-4-c)																					0	1	0	0	0	1
30		マクラザル	Ⅰ-4-c																					0	0	0	1	0	1
31		ザルガイ科不明																						0	0	0	0	1	1
32		シャゴウ	Ⅰ-2-c												1									0	1	3	0	2	3
33		ヒメジャコ	Ⅰ-2-a																					7	11	6	2	7	13
34	シャコガイ科	ヒレジャコガイ	Ⅰ-2-c				1	3					3	1		1		1						23	19	28	26	188	51
35		オオシラナミ(シラナミ)	Ⅰ-2-a										1	1			1	1						6	12	4	8	97	20
36		ナガジャコ(トガリシラナミ)	Ⅰ-2-a																					5	8	1	1	3	9
37		シャコガイ科不明						1										7						0	5	4	4	110	9
38	バカガイ科	リュウキュウバカガイ	Ⅱ-2-c																					9	12	10	9	10	21
39	チドリマスオ科	イソハマグリ	Ⅰ-1-c		1																			639	686	35	36	22	722
40		ナミノコマスオ	Ⅰ-1-c																					15	16	4	0	0	19
41	フジノハナガイ科	リュウキュウナミノコ	Ⅰ-1-c																					6	4	2	3	0	8
42		ニッコウガイ	Ⅱ-2-c																					0	1	0	0	2	1
43		サメザラ	Ⅰ-2-c																					3	1	1	0	2	4
44	ニッコウガイ科	リュウキュウシラトリ	Ⅱ-1-c																					1	2	0	2	3	4
45		モチヅキザラ	Ⅰ-2-c																					132	124	9	4	15	141
46		ニッコウガイ科不明																						0	0	0	0	1	1
47	イソシジミ科	マスオガイ	Ⅱ-1-c																					42	32	20	23	18	62
48		リュウキュウマスオ	Ⅱ-1-c																					4	8	2	2	2	10
49	フナガタガイ科	タガソデモドキ	Ⅱ-1-a																					0	0	0	0	0	0
50	シジミ科	シレナシジミ	Ⅰ-1-a				1									1	2	2						105	109	39	45	67	154
51		アラヌノメ	Ⅰ-2-a																					2	4	2	0	5	4
52		ヌノメガイ	Ⅱ-1-c																					44	53	21	15	35	68
53		アラスジケマン	Ⅲ-1-c	2	1	1	4	3	16	7	5	5		5	4	1	1	3	1			1		7944	7063	949	947	899	8893
54		ホソスジイナミ	Ⅱ-1-c											1	1									175	215	21	12	7	227
55		ユウカゲハマグリ	Ⅱ-2-c																					92	105	22	17	9	122
56		マルオミナエシ	Ⅰ-2-a																					11	9	0	0	0	11
57		オイノカガミ	Ⅱ-2-c																					15	15	3	6	2	21
58	マルスダレガイ科	リュウキュウアサリ	Ⅱ-2-c																					1	0	0	0	0	1
59		ヒメリュウキュウアサリ	Ⅱ-2-c																					4	4	2	3	0	7
60		ヒメアサリ	Ⅱ-2-c																					0	4	1	1	0	5
61		スダレハマグリ	Ⅱ-2-c																					18	18	9	10	12	28
62		オキナワワスレ	Ⅰ-4-c																					22	27	10	13	1	40
63		イオウハマグリ	Ⅱ-1-c																					86	77	8	5	4	94
64		ハマグリの一種	Ⅱ-2-c	1	2			1	3		4	1	3				1				1			260	269	192	222	150	491
65		ダテオキシジミ	Ⅲ-1-c	1						2	2											1		135	142	57	52	44	194
66		マルスダレガイ科不明																1						0	0	1	0	2	1
67		二枚貝不明																1						3	4	2	4	101	8
		合計		6	6	3	7	9	20	12	15	7	12	11	6	5	5	16	1	0	1	3	0	10507	9821	1642	1640	1945	12418
68	コウイカ科	コブシメ	Ⅰ-2																					0	0	0	0	3	1
69	ナガウニ科	パイプウニ	Ⅰ-3-a																					0	0	0	0	7	1
70	タコノマクラ科	タコノマクラ 類	Ⅵ－12																					1		0	0	0	1
		合計		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1		0	0	10	3

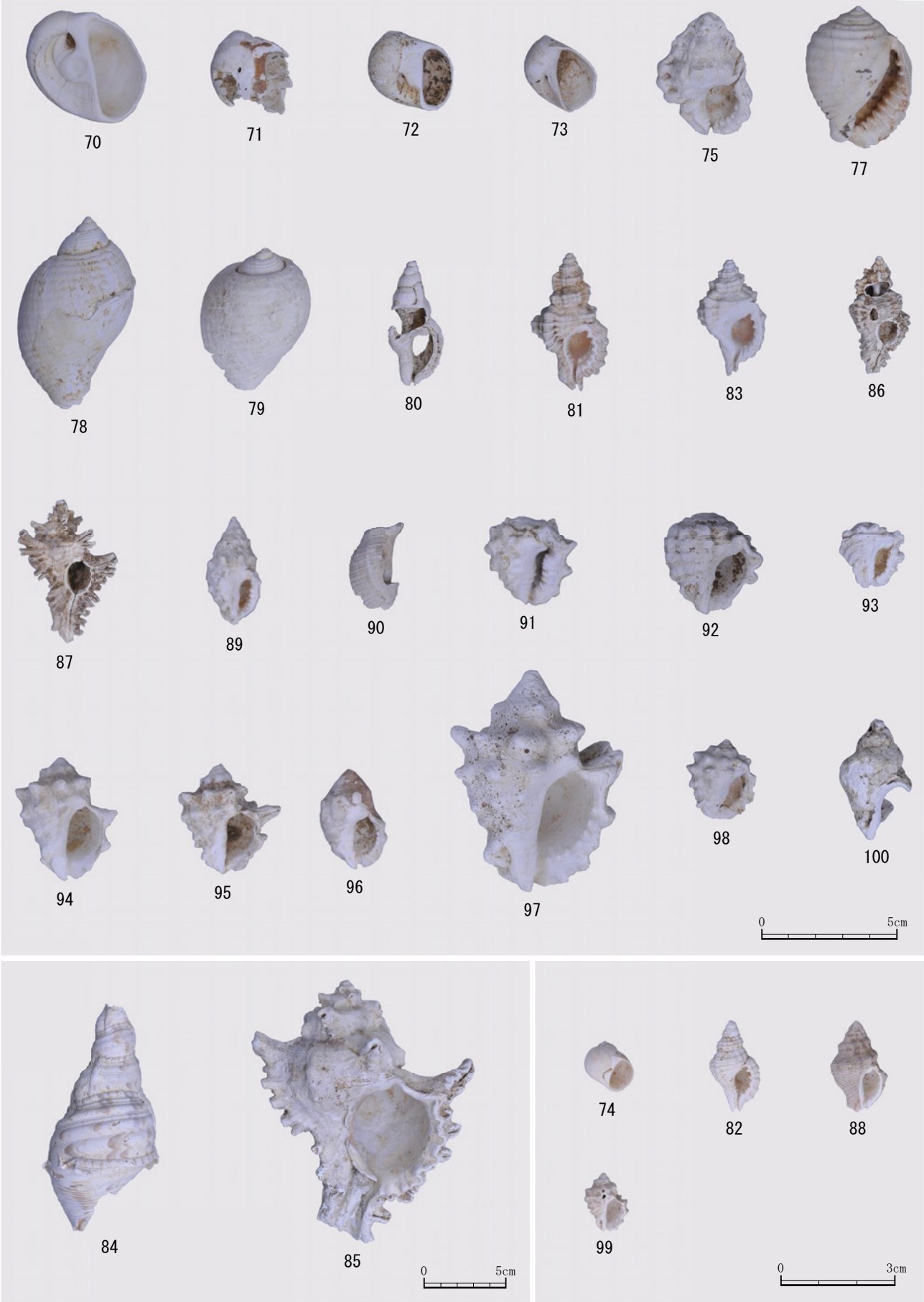
注　完形と殻頂の右同士･左同士を足して、多い方を個体数とした。（破片でのみ出土した貝種については、最少個体数「１」と数えた）



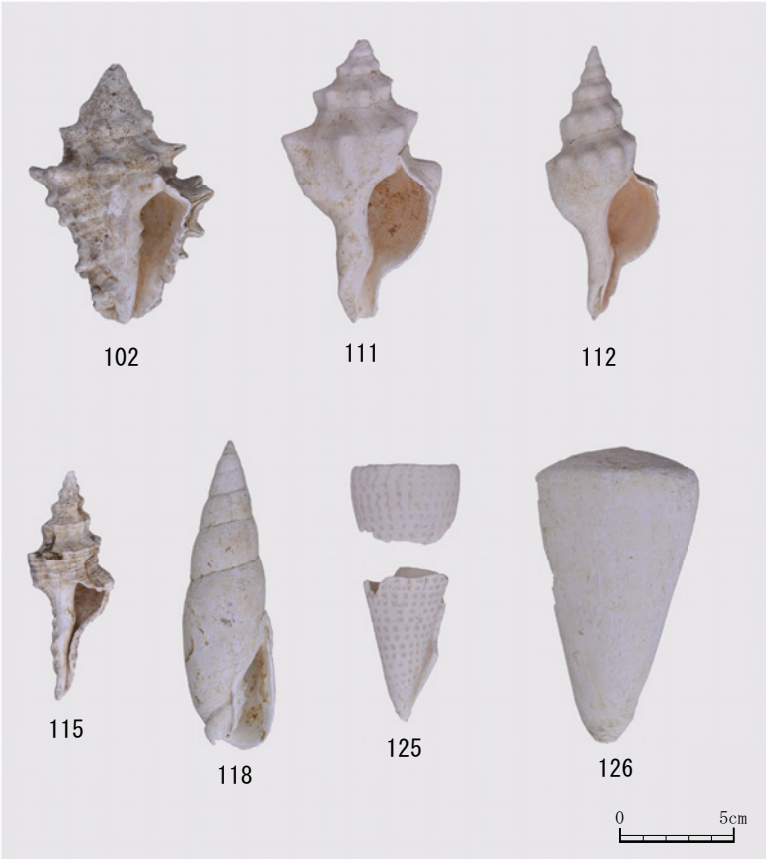
図版 34　貝類遺体　巻貝 1（番号は第18表と一致）

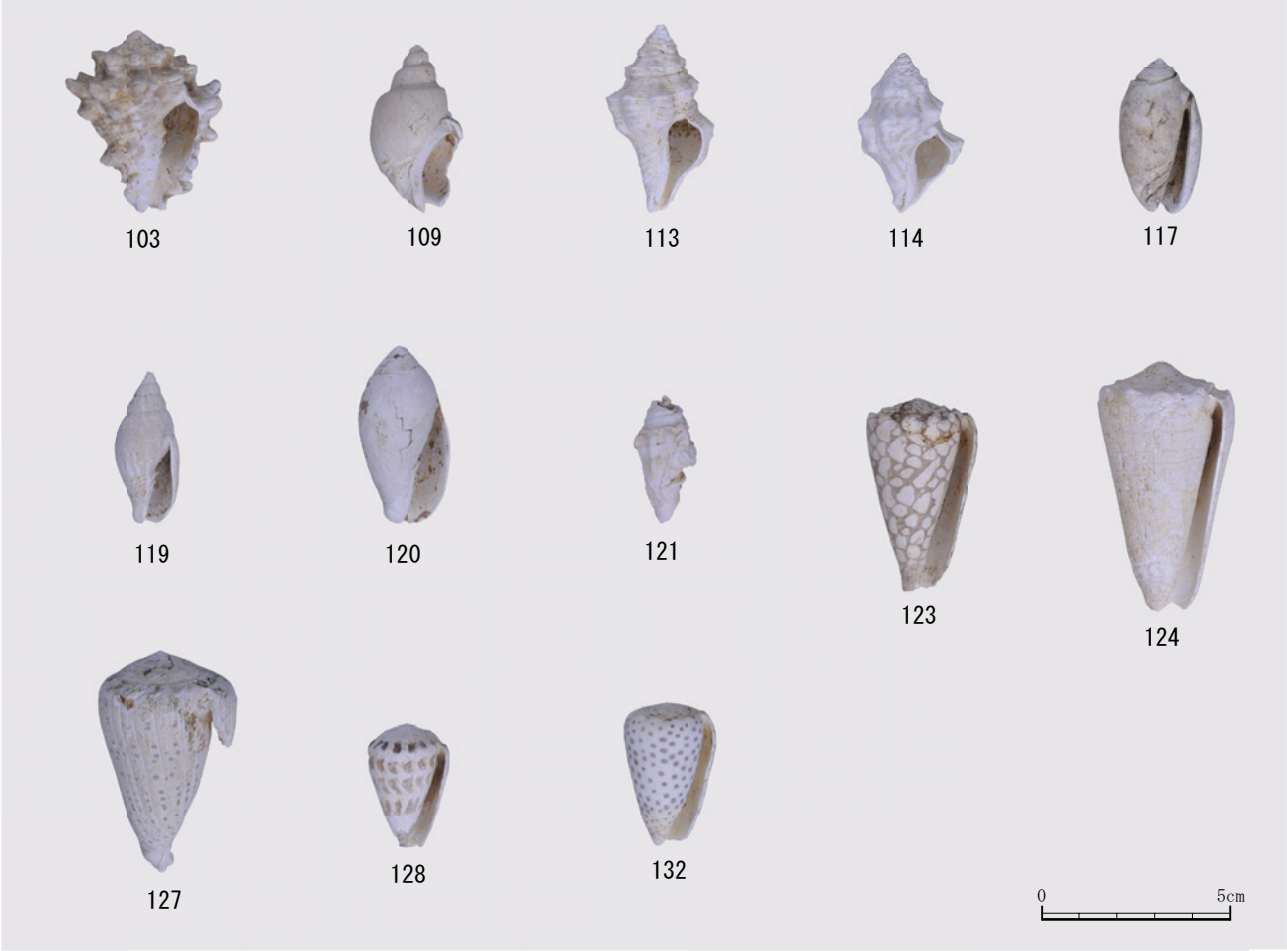


図版 35　貝類遺体　巻貝 2（番号は第18表と一致）

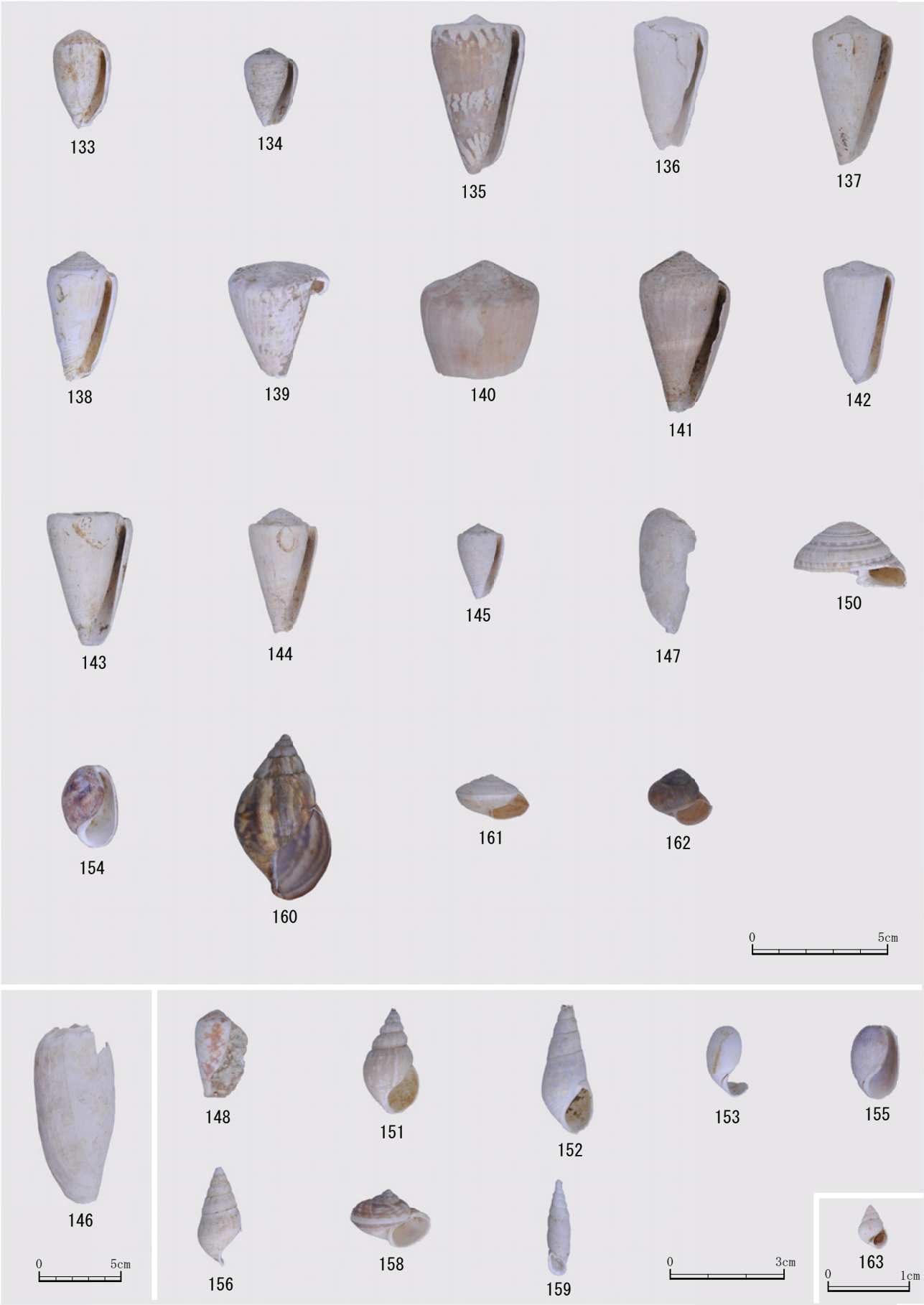


図版 36　貝類遺体　巻貝 3（番号は第18表と一致）

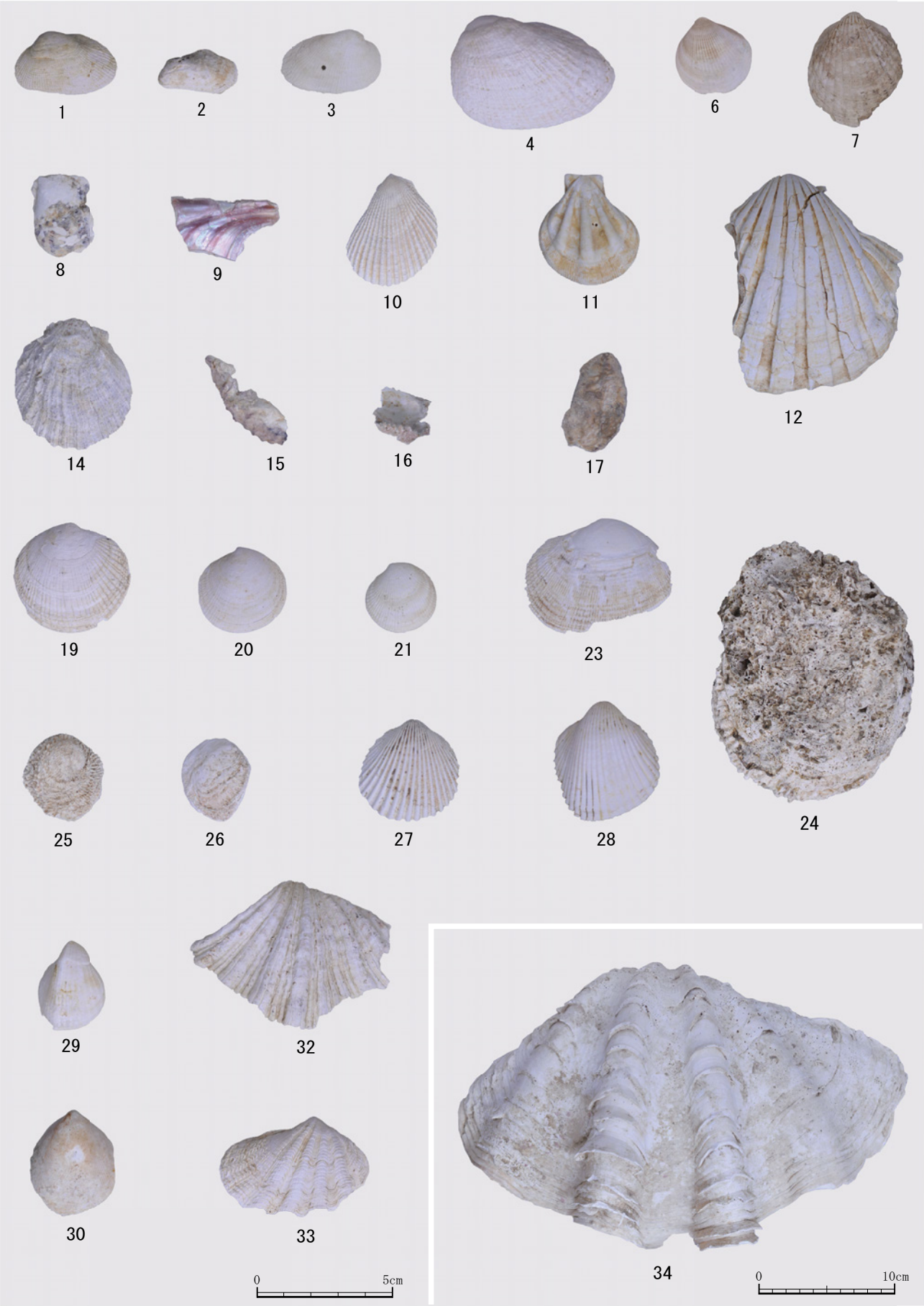




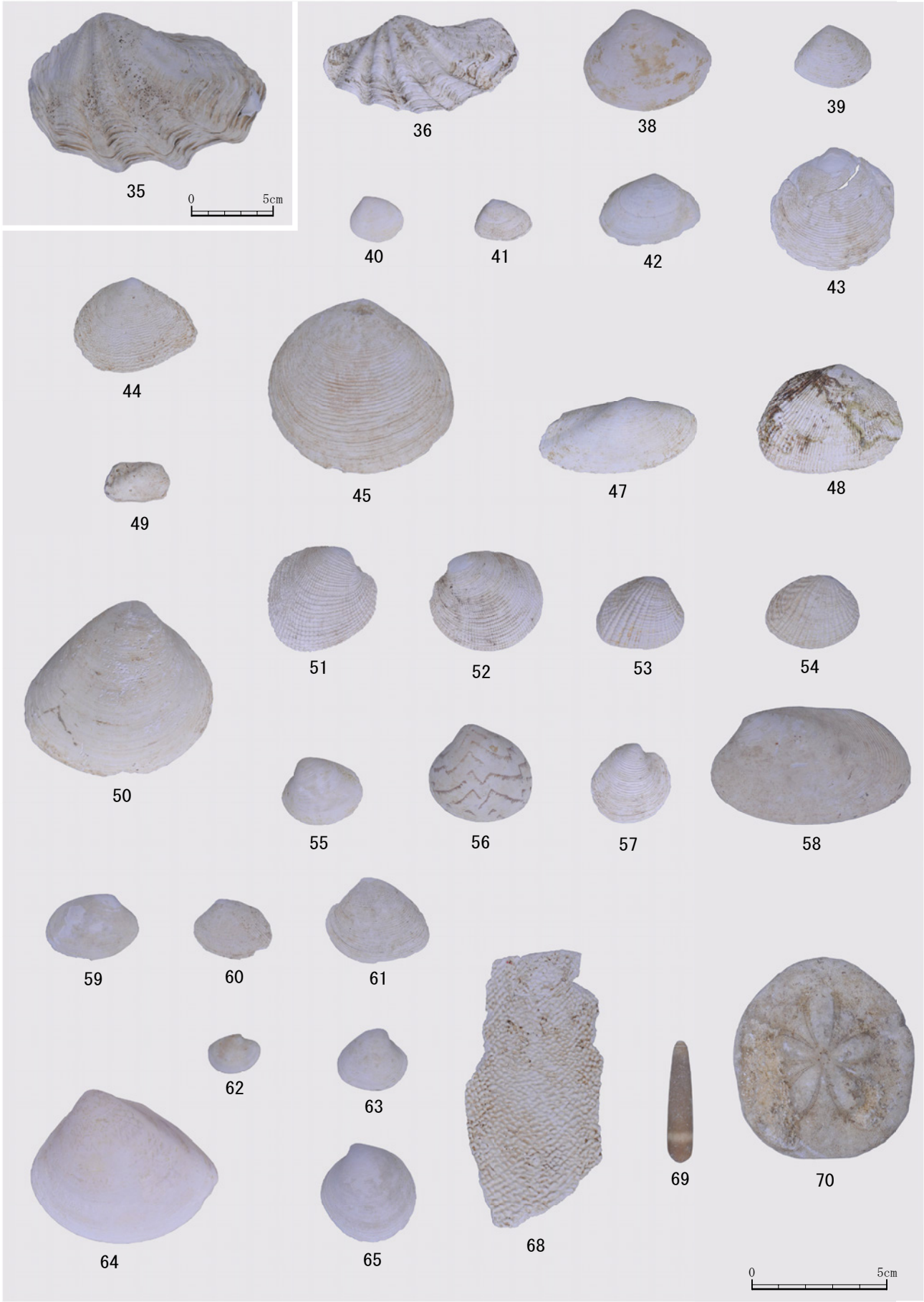
図版 37　貝類遺体　巻貝 4（番号は第18表と一致）



図版 38　貝類遺体　巻貝 5（番号は第18表と一致）



図版 39　貝類遺体　二枚貝 1（番号は第19表と一致）



図版 40　貝類遺体　二枚貝 2（番号は第19表と一致）

第２項　中城御殿跡（首里高校内）出土の植物遺体

鹿児島大学国際島嶼教育研究センター：高宮広土

1）遺跡調査の概要

a:　遺跡の所在　沖縄県那覇市首里真和志町２丁目４３
b:　遺跡の名称　中城御殿跡（首里高校内）
c:　調査機関　　沖縄県立埋蔵文化財センター
d:　調査担当者　羽方誠　亀島慎吾
e:　発掘日時　　平成25（2013）年7月～平成27（2015）年2月
f:　文化　　グスク文化、琉球王国文化
g:　遺跡の年代　15～16世紀、16～17世紀、18世紀末～19世紀

２）バックグラウンド

中城御殿は琉球王国の王位継承者である世子が居住した邸宅であり、今回発掘調査対象となった首里高校内中城御殿跡は尚豊王代（1621～1640）にその次男である尚文のために創建された。同遺跡は、1980年に建設された沖縄県立首里高等学校の校舎老朽化に伴い、2011年に新校舎改築のための工事が校内グラウンドで開始された際に確認された。2011年には那覇市教育委員会により試掘調査がなされ、2013年7月から2015年2月にかけて沖縄県立埋蔵文化財センターによって本格的な発掘調査が実施された。その結果、中城御殿創建以前、当時、および中城御殿移転後の遺物や遺構が出土している（沖縄県立埋蔵文化財センター　2015)。今回植物遺体分析のために回収された土壌サンプルはこれら3時期に属しており、それぞれの時期の植物食利用を理解することを主な目的とした。

３）取り扱った資料

フローテーションのための土壌は、SK22、SK51、SM9、SM12、SM13およびSX14よりサンプリングを行った（遺構の年代や用途に関しては第20表参照のこと)。第21表～第24表にそれぞれの遺構より回収された浮遊物量（g）および検出された植物遺体を記載した。なお、サンプルされた土壌量は不明である。第25表は今回検出された植物遺体をまとめたものである。計149（粒／片）の植物遺体が回収された。それらは、イネ、コムギ、オオムギ、アワ、キビ、シマサルナシ、ナス科および同定不可能であった。

４）検出された植物遺体（第21表～第24表）

イネ　*Oryza sativa* L.

イネ穎果がSK22から6（粒／片)、SK51（8-2層）から3（粒／片)、SM12から1（片)、SM13から2（粒）およびSX14から3(片)検出された。計15(粒／片)である。また、イネ穎果と思われるが保存状態が悪く、

第20表　土壌をサンプリングした遺構、それらの用途および年代（発掘担当者による見解）

	用途	年代	時代	備考
SK22	廃棄土坑	15～16世紀	グスク時代	発掘担当者によると、15世紀末～16世紀中葉の可能性が高い。 貝類遺体・脊椎動物遺体が出土、前者が量的に多い。
SK51	廃棄土坑	15～16世紀	グスク時代	発掘担当者によると16世紀代。 貝類遺体・脊椎動物遺体が多量に出土。
SM9	不明	18世紀末 ～19世紀	近代	
SM12	廃棄土坑あるいは 排水関連遺構	17世紀前半	近世	遺構最下層には炭化物を混入する層が堆積。
SM13	同上	17世紀前半	近世	
SX14	土取り跡あるいは 排水溝遺構	16～17世紀代	グスク時代 ～近世	マイマイが部分的に集中していた。 詳細な用途は不明

写真1　イネ穎果実

写真2　イネ（籾）

写真3　イネ小穂軸？

写真4　オオムギ穎果

写真5　コムギ穎果

写真6　アワ穎果

写真7　アワ内外穎

写真8　キビ穎果

写真9　シマサルナシ種子

写真10　ナス科種子

第178図　中城御殿跡より回収された植物遺体

第21表　SK22より検出された植物遺体

遺構	LF No.	区	グリッド	層序	サンプル量 (ℓ)	浮遊物量 (g)	イネ		コムギ	ムギ類		アワ		アワ (内外穎)	UNI	
							粒	片	粒	粒	片	粒	片	片		計(粒／片)
SK22	±86	V	H-2・3	4	-	1.68	1	5	2	1	1	50	14	1	8	83

第22表　SK51より検出された植物遺体

遺構	LF No.	区	グリッド	層序	サンプル量 (ℓ)	浮遊物量 (g)	イネ		イネ?		イネ 小穂軸？	イネ (モミ)	オオムギ？	コムギ	コムギ？	アワ		アワ (内外穎)	キビ	シマサルナシ	ナス科	UNI	
							粒	片	粒	片	片	片	粒	粒	粒	粒	片	片	粒		粒	片	計(粒／片)
SK51	±159	Ⅲ	F-7	4	-	1.96			2	2		1	1	1	2	4	2		1			12	28
SK51	±183	Ⅲ	F-7	8-2	-	3.35	2	1			1					5	2	2				4	17
SK51	±187	Ⅲ	F-7	12	-	0.87										1				1	1	1	4
					計	6.18	2	1	2	2	1	1	1	1	2	10	4	2	1	1	1	17	49

第23表　SM9,12,13より検出された植物遺体

遺構	LF No.	区	グリッド	層序	サンプル量 (ℓ)	浮遊物量 (g)	イネ		ムギ類	UNI	
							粒	片	粒	片	計(粒／片)
SM9	±26	Ⅰ	D-5	2	-	2.42					
SM12	±37			底面	-	1.74		1		2	3
SM13	±46	V	I-5	底面 (炭層)	-	2.61	2		2	2	6
					計	6.77	2		2	4	9

第24表　SX14より検出された植物遺体

遺構	LF No.	区	グリッド	層序	サンプル量 (ℓ)	浮遊物量 (g)	イネ	イネ 小穂軸?	オオムギ	アワ	UNI	
							片	片	粒	粒	片	計(粒／片)
SX14	±114	V	H-5	廃棄	-	2.11	3	1	1	1	2	8

第25表　中城御殿出土の植物遺体（まとめ）

遺構	サンプル量 (ℓ)	浮遊物量 (g)	イネ		イネ?		イネ 小穂軸？	イネ (モミ)	オオムギ	オオムギ？	コムギ	コムギ？	ムギ類		アワ		アワ (内外穎)	キビ	シマサルナシ	ナス科	UNI	
			粒	片	粒	片	片	片	粒	粒	粒	粒	粒	片	粒	片	片	粒		粒	片	計(粒／片)
SK22	-	1.68	1	5							2		1	1	50	14	1				8	83
SK51	-	6.18	2	1	2	2	1	1		1	1	2			10	4	2	1	1	1	17	49
SM9 SM12 SM13	-	6.77	2	1									2								4	9
SX14	-	2.11		3			1		1						1						2	8
	計	16.74	5	10	2	2	2	1	1	1	3	2	3	1	61	18	3	1	1	1	31	149

イネ穎果と同定できなかったものをイネ？とした。イネ？はSK51（4層）から4（粒／片）回収されている。また、イネ小穂軸と思われるものがSK51（8-2層）より1片およびSX14から1片の計2（片）得られているが、これらも保存状態が悪く、今回はイネ小穂軸？として報告する。イネのモミも1片SK51（4層）より1片出土している。計測可能なイネ穎果はなかった。写真1イネ穎果実の残存部のサイズは(長さ×幅×厚さ：3.1×2.6×1.6mm)、写真2イネ（籾）のモミのサイズは（長さ×幅：2.4×0.6mm)、写真3イネ小穂軸？のサイズは（長さ×幅×厚さ：1.3×1.5×0.8mm）である。

オオムギ　*Hordeum vulgare* L.

オオムギ穎果がSX14から1（粒）検出されている。また、オオムギと思われるが保存状態が悪く、オオムギと同定できなかった植物遺体をオオムギ？とし、SK51(4層)から1（粒）回収されている。写真4オオムギ穎果のみ計測可能で、そのサイズは（長さ×幅×厚さ：3.9×1.8×1.6 mm）である。

コムギ　*Triticum aestivum*　L.

コムギ穎果がSK22から2（粒）およびSK51（4層）から1（粒）より回収された。また、コムギと思われるが保存状態が悪く、コムギと同定できなかった植物遺体をコムギ？とし、SK51(4層)から2（粒）得られている。計測可能な穎果は検出されていない。写真5のコムギ穎果サイズは（長さ×幅×厚さ:3.3×2.0×2.1 mm）である。

ムギ類

コムギかオオムギであるが、保存状態が悪く、その何れにも分類し難い植物遺体をムギ類とした。SK22から2（粒／片)、SM13から2（粒）回収されている。

アワ　*Setaria italica*（L.）Beauvois

アワ穎果がSK22から64（粒／片)、SK51（4層）から6（粒／片)、SK51(8-2層)から7（粒／片)、SK51(12層)から1粒およびSX14から1（粒）の計79（粒／片）検出されている。また、アワの内外穎と思われるものがSK22より1（片）およびSK51(8-2層)より2（片）得られている。グスク時代に属する遺構より検出された計14（粒）のアワ穎果が計測可能で、その平均は（長さ×幅×厚さ：1.1×1.0×0.7mm）であった（第26表)。その他の時期ではSX14より回収されたアワが1粒のみ計測可能で、そのサイズは1.0×1.0×0.6mm　であった。写真6はアワ穎果でそのサイズは（長さ×幅×厚さ：1.1×1.1×0.8mm）で、アワ内外穎（写真7）のサイズは（長さ×厚さ：1.5×0.8mm）である。

キビ　*Panicum miliaceum* L.

キビ穎果が1(粒)SK51(4層)より回収されている。そのサイズは(長さ×幅×厚さ:1.9×1.4×1.0mm)であった。(写真8)

シマサルナシ　*Actinidia rufa*

シマサルナシの種子が1（粒）SK51(12層)より検出されている。写真9はシマサルナシ種子でそのサイズは（長さ×幅×厚さ：2.2×1.0×0.8mm）である。

ナス科　Solanaceae

ナス科の種子が1（粒）SK51(12層)より回収されている。種子は腎臓状円形、背腹両面は扁平、表面は網目模様により覆われている。写真10ナス科種子のサイズは（長さ×幅×厚さ:1.1×1.1×0.4mm）である。

第26表　アワのサイズ

	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)
1	1.2	1.1	1.1
2	1.2	1.1	0.7
3	1.1	1.1	0.7
4	1.3	1.1	0.9
5	1.2	1	0.7
6	1	1	0.6
7	1	0.9	0.5
8	1.3	0.9	0.6
9	0.9	0.7	0.5
10	1.2	1.1	0.7
11	1.1	0.9	0.5
12	0.7	0.6	0.4
13	1	1	0.8
14	1.1	1.1	0.8
平均(mm)	1.1	1.0	0.7

同定不可能

計31（片）の植物遺体は保存状態が悪く、同定することが困難なためこのカテゴリーに含めた。

５）まとめ

中城御殿跡（首里高校内）からは大別すると、グスク時代末（15世紀～16世紀）、グスク時代～近世（16世紀～17世紀）および近代（18世紀末～19世紀）に属する遺構より土壌をサンプリングし、それぞれの時期の植物食利用の復元を試みた。各遺構よりどれほどの土壌をサンプリングしたか記録がなされていないため、遺構間（および遺跡間）の比較をすることは難しいが、この点を考慮して今回回収された植物遺体の全体的な傾向をまとめると以下のようになる。まず、SK22およびSK51のグスク時代末の遺構が近世･近代の遺構（SM9･12･13、SX14）より多くの植物遺体を含んでいた。発掘担当者の観察によると前者は廃棄土坑で貝類遺体や脊椎動物遺体が顕著であったという。今回の植物遺体分析もこれらの遺構の用途に関する解釈を支持するものと思われる。また、近世・近代の遺構は用途不明あるいは過去における食性には直接関係のない排水遺構関連と解釈されている遺構であり、そのため植物遺体もそれほど回収されなかったのであろう。

グスク時代末の遺構が食料などの廃棄の遺構であったとすると、この時期はアワを含む雑穀が主食料源であったことがうかがえる。首里城淑順門西地区（13世紀～15世紀後半）においても数からいえばアワが最も多く、イネがそれに次ぎ、重さからはイネが優先でアワがそれに次ぐ傾向が示唆されたが（高宮・千田　2016)、今回の分析結果もそれを支持するような結果のように思える。続く近世および近代の遺構からは少量の植物遺体しか回収されず、その傾向を読み取ることはできない。中城御殿（首里高校内）は今後も発掘調査がなされるという。今後もフローテーションを活用することにより、今日考古学的にほとんど理解されていないグスク時代末、近世および近代の植物食利用が明らかになることであろう。それに加えて、世子らがどのようなものを食していたかも考古学的に初めて明らかにすることができると思われる。

謝辞

中城御殿跡（首里高校内）より出土した植物遺体を分析するという機会をくださった沖縄県立埋蔵文化財センター亀島慎吾さんおよび千葉県立中央博物館黒住耐二さんに心より感謝します。

参考文献

沖縄県立埋蔵文化財センター

2015 『沖縄県立埋蔵文化財センター企画展　ふたつの中城御殿跡』沖縄県立埋蔵文化財センター：西原町

高宮広土・千田寛之

2016 「付章　首里城跡淑順門西地区より出土した植物遺体について：最終報告」『首里城跡-銭蔵東地区発掘調査報告書-』沖縄県立埋蔵文化財センター（編）pp.253-260、沖縄県立埋蔵文化財センター：西原町

第５章　自然科学分析

第１節　中城御殿跡（首里高校内）の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

中城御殿は、沖縄県那覇市首里に所在し、首里城から北へ250mほど離れた台地上に位置する。台地は第四紀更新世の琉球層群の那覇層を構成する砕屑性石灰岩いわゆる琉球石灰岩からなる。（氏家・兼子，2006）発掘調査では、琉球国王の世子の邸宅とされる中城御殿に関わる多数の遺構や遺物が確認されている。

本報告では、調査区の遺構より採取された覆土試料、漆製品、ガラス製品、陶器などを対象に、遺構や遺物に関する情報を得ることを目的として、分析を実施する。以下、対象別に述べる。

Ⅰ.遺構覆土

１.試料

土壌試料は、平成25年度調査のⅤ区より検出したSM13の8層（炭層）、および平成27年度調査のⅢ区より検出したSK51の8-2層、12層の、計3点である。これらの土壌および土壌より抽出した炭化物を対象に、放射性炭素年代測定2点、花粉分析・寄生虫卵分析2点、植物珪酸体分析1点、微細物分析3点、土壌理化学分析2点を実施する。なお、試料の詳細は、結果と併せて表に示す。

２.分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

分析試料はAMS法で実施する。試料表面の汚れや付着物をピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。次に塩酸や水酸化ナトリウムを用いて、試料内部の汚染物質を化学的に除去する（酸―アルカリ―酸処理：AAA)。その後超純水で中性になるまで洗浄し、乾燥させる。なお、アルカリ処理は、0.001M ～ 1Mまで濃度を上げ、試料の様子をみながら処理を進める。1Mの水酸化ナトリウムで処理が可能であった場合はAAAと記す。一方、試料が脆弱で1Mの水酸化ナトリウムでは試料が損耗し、十分な炭素が得られないと判断された場合は、薄い濃度の水酸化ナトリウムの状態で処理を終える。その場合はAaAと記す。

精製された試料を燃焼してCO_2発生させ、真空ラインで精製する。鉄を触媒とし、水素で還元してグラファイトを生成する。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスし、測定試料とする。

測定はタンデム加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置を用いて、^{14}Cの計数、^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C)、^{14}C濃度（^{14}C/^{12}C）を測定する。AMS測定時に、標準試料とバックグラウンド試料の測定も行う。

δ^{13}Cは試料炭素の^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表したものである。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma;68%）に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う（Stuiver and Polach,1977)。また､暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。

暦年較正に用いるソフトウエアは、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.1.0、較正曲線はIntcal13（Reimer *et al.*,2013）である。

暦年較正とは、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の

宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、及び半減期の違い（^{14}Cの半減期5,730±40年）を較正することによって、暦年代に近づける手法である。較正のもとになる直線は暦時代がわかっている遺物や年輪（年輪は細胞壁のみなので、形成当時の^{14}C年代を反映している）等を用いて作られており、最新のものは2013年に発表されたIntcal13（Reimer *et al.*,2013）である。また、較正年代を求めるソフトウエアはいくつか公開されているが、今回はCALIBを用いる。なお、年代測定値に関しては、国際的な取り決めにより、測定誤差の大きさによって値を丸めるのが普通であるが（Stuiver and Polach,1977）、将来的な較正曲線ならびにソフトウエアの更新に伴う再計算ができるようにするため、表には丸めない値（1年単位）を記す。また、中央値は、確率分布の面積が二分される値を年代値に換算したものである。

(2) 花粉分析・寄生虫卵分析

試料10ccを正確に秤り取る。これについて水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛，比重2.3）による有機物の分離の順に物理・化学的処理を施し、花粉・胞子および寄生虫卵を分離・濃集する。処理後の残渣を定容してから一部をとり、グリセリンで封入してプレパラートを作製し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査して出現する全ての花粉・胞子と寄生虫卵について同定・計数する。同定に際しては、当社保有の現生標本の他、花粉化石は島倉（1973）、中村（1980）、藤木・小澤（2007）、三好ほか（2011）等を、寄生虫卵は佐伯ほか（1998）、斉藤・田中（2007）等を参考にする。

結果は、花粉・胞子化石については同定および計数結果の一覧表として、寄生虫卵については1ccあたりに含まれる寄生虫卵の個数として表示する。寄生虫卵の個数については有効数字を考慮し、10の位を四捨五入して100単位に丸める。また、100個体未満は「<100」で表示し、合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸める。なお、表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは種類間の区別が困難なものを示す。

(3) 植物珪酸体分析

今回の調査では、珪化組織片の産出に注目する。植物体の葉や茎に存在する植物珪酸体は、珪化細胞列などの組織構造を呈している。植物体が土壌中に取り込まれた後は、ほとんどが土壌化や撹乱などの影響によって分離し単体となる。しかし、植物が燃えた後の灰には組織構造が珪化組織片などの形で残されている場合が多い（例えば、パリノ・サーヴェイ株式会社,1993）。そのため、珪化組織片の産状により当時の燃料材などの種類が明らかになると考えられる。

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム，比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤（2010）の分類を参考に同定し、計数する。

分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量を正確に計量し、乾土1gあたりの植物珪酸体含量（同定した数を乾土1gあたりの個数に換算）を求める。

結果は、植物珪酸体含量と珪化組織片の一覧表で示す。その際、100個/g未満は「<100」で表示する。各分類群の含量は10の位で丸め（100単位にする）、合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている。また、各分類群の植物珪酸体含量と珪化組織片の産状を図示する。

(4) 微細物分析

試料から炭化種実等の微細な遺物を分離・抽出するために、試料を48時間常温乾燥後、水を満たした容器内に投入し、速やかに容器を傾けて浮いた炭化物を粒径0.5㎜の篩に回収する。容器内の残土に水を入れて軽く撹拌し、容器を傾けて炭化物を回収する作業を炭化物が浮かなくなるまで繰り返す

(20回程度)。残土を粒径0.5mmの篩を通して水洗する。

水洗後、水に浮いた試料（炭化植物主体）と水に沈んだ試料（砂礫･骨貝主体）を、粒径別に常温乾燥させる。乾燥後、粒径の大きな試料から順に双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて、同定が可能な種実や葉などの大型植物遺体と炭化材（主に径2mm以上）の他、主に状態良好な遺物を抽出する。

大型植物遺体の同定は、現生標本や中山ほか（2010)、鈴木ほか（2012）等を参考に実施し、部位･状態別の個数を数えて、結果を一覧表で示す。SK51の8-2層より多産したイネの灰化穎は、脆弱なため、可能な範囲で抽出し、残りをイネ灰化穎主体として重量を求める。同定された分類群は、写真図版に示して同定根拠とする。また、栽培種等一部の種実遺体を対象として、デジタルノギスで長さ、幅、厚さを計測し、結果を一覧表で示す。

その他の遺物は重量を表示し、炭化材は最大径を併記する。分析残渣は、炭化材主体、砂礫主体（骨貝類含む）に大まかに分け、粒径別重量を表示する。分析後は、抽出物と分析残渣を容器に入れて保管する。

(5) 土壌理化学分析

土壌理化学分析は、pH(H_2O)、電気伝導率、有機炭素、全窒素、全リン酸、全カルシウム、リン酸吸収係数、全マンガン、MI（Melanic index）を行う。pH(H_2O）はガラス電極法、電気伝導率は白金電極法、有機炭素量はチューリン法、全窒素量は硫酸分解－水蒸気蒸留法、全リン酸は硝酸・過塩素酸分解－バナドモリブデン酸比色法、全カルシウムは硝酸・過塩素酸分解－原子吸光法、リン酸吸収係数は2.5%リン酸アンモニウム液法、全マンガンはフッ化水素酸分解－原子吸光法（土壌標準分析・測定法委員会,1986)、MIは腐植簡易分析法（本名・山本,1992）に従う。

試料調製は、試料を風乾後、土塊を軽く崩して2mmの篩で篩い分ける。この篩通過試料を風乾細土試料とし、分析に供する。また、風乾細土試料の一部を振動ミル（平工製作所製TI100；10ml容タングステンカーバイト容器）で微粉砕し、微粉砕試料を作成する。風乾細土試料については、105℃で4時間乾燥し、分析試料水分を求める。

pH(H_2O)は、風乾細土10.0gをはかりとり、25mlの蒸留水を加えてガラス棒で撹拌する。30分間放置後、再びガラス棒で懸濁状態とし、pHメーター（ガラス電極法）でpH(H_2O）を測定する。

電気伝導率[EC]は、風乾細土試料10.0gを秤りとり、50mlの純水を加えて1時間振とうする。振とう後、すみやかに電気伝導率計（白金電極法）で電気伝導率（dS/m）を測定する。

有機炭素は、粉砕土試料0.010 ～ 2.000gを100ml三角フラスコに正確に秤とり、0.4Nクロム酸・硫酸混液10mlを正確に加え、約200℃の砂浴上で正確に5分間煮沸する。冷却後、0.2%フェニルアントラニル酸液を指示薬に0.2N硫酸第一鉄アンモニウム液で滴定する。滴定値および加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの有機炭素量（Org-C乾土%）を求める。これに1.724を乗じて腐植含量（%）を算出する。

全窒素は、粉砕土試料1.000 ～ 2.000gをケルダール分解フラスコに秤とり、分解剤約3.0gと硫酸10mlを加え加熱分解する。分解後、蒸留水約30mlを加え放冷した後、分解液全量を供試し水蒸気蒸留法によって窒素を定量する。この定量値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの全窒素量（T-N%）を求める。また、有機炭素量を全窒素量で除し、C/N（炭素率）を算出する。

全リン酸・全カルシウムは、粉砕土試料1.00gをケルダール分解フラスコに秤量し、はじめに硝酸(HNO_3）約10mlを加えて加熱分解する。放冷後､過塩素酸（$HClO_4$）約10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で100mlに定容し、ろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸（P_2O_5）濃度を測定する。別にろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光光度計によりカルシウム（Ca）濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量（P_2O_5mg/g）とカルシウム含量（CaOmg/g）を求める。

リン酸吸収係数は、乾土として10.00gになるように風乾細土試料を遠沈管にはかり、2.5%リン酸ア

ンモニウム液（pH7.0）20mlを加え、時々振り混ぜながら室温で24時間放置する。乾燥ろ紙を用いてろ過し、そのろ液100μlを50mlメスフラスコに正確にとり、水約35mlとリン酸発色ａ液10mlを加えて定容し、よく振り混ぜる。発色後30分間放置し、420nmで比色定量する。定量された試料中のリン酸量を2.5%リン酸アンモニウム液（pH7.0）のリン酸量から差引き、リン酸吸収係数（mg/100g）を求める。

全マンガンは、微粉砕試料約0.50gをテフロンビーカーに精秤し、硝酸（HNO_3）5mlおよび過塩素酸（$HClO_4$）5mlを加え、時計皿で覆い、サンドバス上で有機物を分解する。過塩素酸の白煙が激しく出てきた後、過塩素酸5mlとフッ化水素酸（HF）10mlを加え、内容物を蒸発乾固させる。放冷後、6N塩酸（HCl）5ml、硝酸1mlを加え加熱し、内容物を軽く溶解させた後、蒸留水30mlを加え、内容物を完全に溶解させる。放冷後、100mlに定容する。この定容液を適宜希釈し、原子吸光光度計によりマンガン(Mn)の濃度を測定する。測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのマンガン（Mn%）の含量を求める。

MI(Melanic Index)による腐植簡易分析は、炭素50mgに相当する微粉砕試料(但し、5.0gを上限とする)を50ml容遠心管に入れ、分注器で0.5% NaOH溶液約25mlを加える。遠心管に蓋をしてテープで密封し、室温で1時間振とうした後、0.1%高分子凝集剤溶液1～2滴を加え、よく振り混ぜた後、4,000rpm、15minの遠心分離で抽出腐植溶液を得る。吸光度の測定は、得られた抽出腐植溶液約1mlを試験管にとり、0.1% NaOH溶液20mlを分注器で加え（NaOHの濃度は約0.1%となる）、分光光度計により450、520nmの吸光度を測定する（450nmの吸光度が1を越えた試料は、さらに0.1% NaOH溶液で希釈して測定）。測定は抽出後、3時間以内に行い、結果の表示をMI（$=K_{450}/K_{520}$）で示す。

３.結果

(1) 放射性炭素年代測定

同位体効果による補正を行った測定結果を第27表に、暦年較正結果を第28表に示す。試料の測定年代（補正年代）は、Ⅴ区SM13の8層（炭層）が470±20BP、Ⅲ区SK51の12層が480±20BPの値を示す。

測定誤差を2σとして計算させた結果、Ⅴ区SM13の8層（炭層）はcalAD 1,417～1,451、Ⅲ区SK51の12層はcalAD 1,414～1,446である。暦年較正の中央値はⅤ区SM13の8層（炭層）がcalAD 1,435、Ⅲ区SK51の12層がcalAD 1,430である。なお、Ⅴ区SM13の8層（炭層）試料は、炭素含有率が19%と少なかった。

第27表　放射性炭素年代測定結果

区・遺構名	層位	種類	処理	補正年代 BP	$\delta^{13}C$ (‰)	測定年代 BP	Code No.
Ⅴ区SM13	8層(炭層)	炭化物	AaA	470±20	-21.29±0.21	410±20	IAAA-161168
Ⅲ区SK51	12層	炭化物	AaA	480±20	-27.30±0.20	520±20	IAAA-161169

1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5,568年を使用。
2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
3) 付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。
4) AAAは酸－アルカリ－酸処理、AaAはアルカリの濃度を薄くした処理を示す。

第28表　暦年較正結果

試料名	補正年代 (BP)	暦年較正年代					Code No.
			年代値		相対比	中央値	
Ⅴ区SM13 8層(炭層)	467±23	σ	cal AD 1,429 - cal AD 1,444	cal BP 521 - 506	1.000	calAD 1,435	IAAA-161168
		2σ	cal AD 1,417 - cal AD 1,451	cal BP 533 - 499	1.000		
Ⅲ区SK51 12層	482±22	σ	cal AD 1,424 - cal AD 1,440	cal BP 526 - 510	1.000	calAD 1,430	IAAA-161169
		2σ	cal AD 1,414 - cal AD 1,446	cal BP 536 - 504	1.000		

1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.1.0を使用。
2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。
3) 1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
4) 統計的に真の値が入る確率はσは68%、2σは95%である。
5) 相対比は、σ、2σのそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。
6) 中央値は、確率分布図の面積が二分される値を年代値に換算したもの。

(2) 花粉分析・寄生虫卵分析

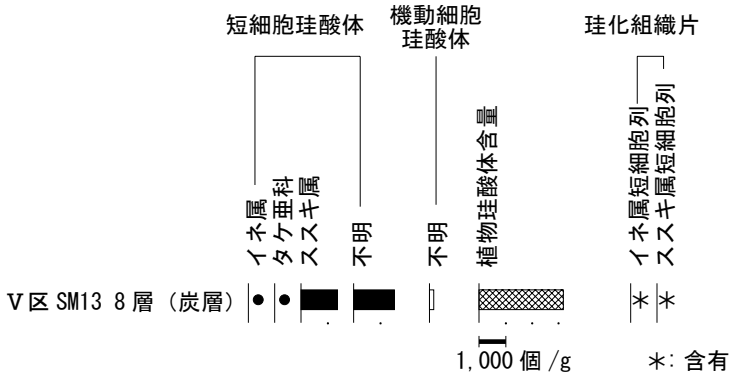
結果を第29表に示す。花粉化石の産状はいずれも悪く、堆積物1ccあたりの花粉・胞子数は、Ⅴ区SM13の8層（炭層）が100個未満、Ⅲ区SK51の12層が約500個であった。

検出された花粉化石についてみると、Ⅴ区SM13の8層（炭層）からは、保存状態の悪い草本花粉のタンポポ亜科が確認されたのみであった。Ⅲ区SK51の12層も保存状態が悪く、花粉外膜が破損・分解されているものが多く認められた。検出された種類は、木本花粉ではマツ属が、草本花粉ではイネ科、アカザ科、アブラナ科、ヨモギ属、ベニバナ属、キク亜科、タンポポ亜科である。この中ではイネ科が多く確認されている。

寄生虫卵についてみると、Ⅲ区SK51の12層から鞭虫卵が確認されたが、堆積物1ccあたり100個未満と極めて少ない。Ⅴ区SM13の8層（炭層）からは、寄生虫卵は1個体も検出されなかった。なお、いずれの試料においても、分析残渣中に微細な炭化植物片（いわゆる微粒炭）が確認された。その殆どは母材の推定が難しい不明型であったが、壁孔などの木材組織を有するタイプや、イネ科葉部に由来するとされる波状構造を持つタイプ（小椋，2007，2008など）、植物珪酸体（ススキ属？）を含有するタイプなども確認された。特にⅤ区SM13の8層（炭層）で、草本由来と考えられる微粒炭が比較的多く認められる。

(3) 植物珪酸体分析

結果を第30表、第179図に示す。Ⅴ区SM13の8層（炭層）からは、イネ属やススキ属の短細胞列が検出される。また、単体の植物珪酸体としてイネ属やススキ属、タケ亜科なども認められる。この中では、珪化組織片でも認められたススキ属の産出が目立つ。



乾土 1g あたりの個数で示す。●は 100 個未満を定性的に示す。

第179図　植物珪酸体含量

(4) 微細物分析

結果を第31表に、試料1kgあたりに換算した大型植物遺体群集組成を第180図に示す。また、大型植物遺体各分類群の写真を図版42に、主な炭化種実の計測値を第32表に示して同定根拠とする。

Ⅴ区SM13の8層（炭層）、およびⅢ区SK51の8-2層、12層の3試料について、全量2,490gを洗い出した結果、裸子植物1分類群（マツ属複維管束亜属）の炭化葉が1個、被子植物7分類群（栽培種のイネ、コムギ、

第29表　花粉分析・寄生虫卵分析結果

種　類	Ⅴ区 SM13 8層(炭層) ±45	Ⅲ区 SK51 12層 ±187
木本花粉		
マツ属	−	3
草本花粉		
イネ科	−	23
アカザ科	−	4
アブラナ科	−	8
ヨモギ属	−	2
ベニバナ属	−	3
キク亜科	−	1
タンポポ亜科	1	3
不明花粉		
不明花粉	−	4
シダ類胞子		
ヒカゲノカズラ属	−	1
他のシダ類胞子	2	130
合　計		
木本花粉	0	3
草本花粉	1	44
不明花粉	0	4
シダ類胞子	2	131
合計(不明を除く)	3	178
寄生虫卵(個/cc)		
鞭虫卵	0	<100
花粉・胞子数(個/cc)	<100	500

1) 寄生虫卵、花粉・胞子数については、10の位を四捨五入して100単位に丸めている。
2) <100：100個未満。

第30表　植物珪酸体含量

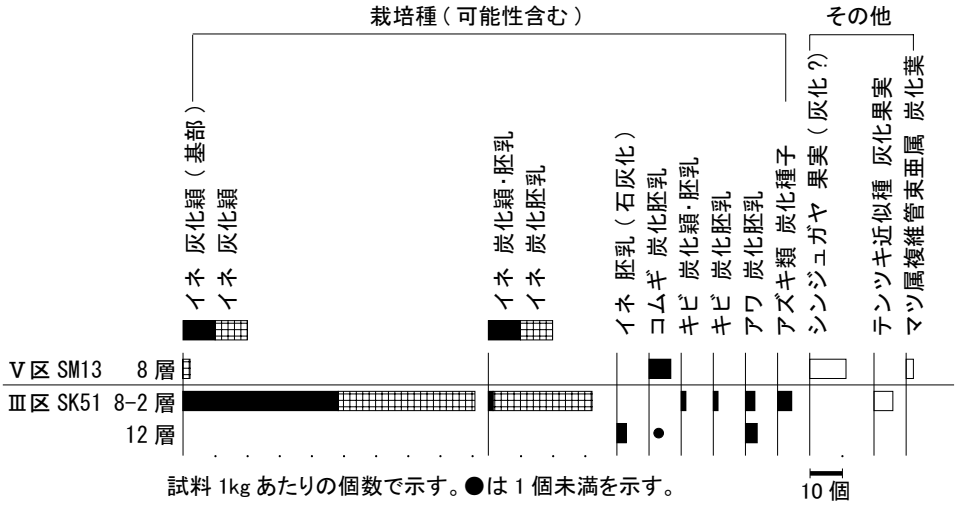
(個/g)

分 類 群	Ⅴ区 SM13 8層(炭層)
イネ科葉部短細胞珪酸体	
イネ属	<100
タケ亜科	<100
ススキ属	1,400
不明	1,500
イネ科葉身機動細胞珪酸体	
不明	200
合　計	
イネ科葉部短細胞珪酸体	3,000
イネ科葉身機動細胞珪酸体	200
植物珪酸体含量	3,200
珪化組織片	
イネ属短細胞列	＊
ススキ属短細胞列	＊

1) 含量は、10の位で丸めている（100単位にする）。
2) 合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている。
3) <100：100個/g未満。
4) ＊：含有。

第31表　微細物分析結果

分類群	部位・状態		Ⅴ区 SM13 8層 (炭層)	Ⅲ区 SK51 8-2層	Ⅲ区 SK51 12層	備考
木本						
マツ属複維管束亜属	炭化葉	破片	1	-	-	個数
草本						
イネ灰化穎主体		破片	-	0.7g	-	乾重(g)
イネ	灰化穎(基部)	破片	-	33	-	個数,脆弱なため可能な範囲で抽出
	灰化穎	破片	1	29	-	個数,脆弱なため可能な範囲で抽出
	炭化穎・胚乳	完形	-	1	-	個数
	炭化胚乳	完形	-	1	-	側面欠損,分析中欠損
		破片	-	20	-	個数
	胚乳(石灰化)	完形	-	-	3	個数
		破片	-	-	1	個数
コムギ	炭化胚乳	完形	1	-	1	個数
		破片	2	-	-	個数
キビ	炭化穎・胚乳	破片	-	1	-	個数
	炭化胚乳	完形	-	1	-	個数
アワ	炭化胚乳	完形	-	2	5	個数
シンジュガヤ	果実(灰化?)	破片	5	-	-	個数
テンツキ近似種	灰化果実	完形	-	2	-	個数
		破片	-	2	-	個数
アズキ類	炭化種子	破片	-	3	-	個数
不明	炭化種実?	完形	-	1	-	個数
		破片	-	-	3	断面柵状
炭化材		>2mm	10.2	10.6	15.1	最大径(mm)
			0.1	0.3	1.1	乾重(g)
炭化材主体		2-1mm	0.2	0.3	0.7	乾重(g),灰化植物片多量
		1-0.5mm	0.4	0.1	0.8	乾重(g),灰化植物片多量
砂礫主体(骨貝類含む)		>4mm	41.2	159.4	597.0	乾重(g)
		4-2mm	3.9	27.1	34.9	乾重(g)
		2-1mm	3.9	22.2	61.9	乾重(g)
		1-0.5mm	4.0	14.5	40.3	乾重(g)
骨片			5.2	0.4	1.8	乾重(g),主な遺物を抽出
歯			-	-	0.0	乾重(g),主な遺物を抽出
鱗			-	-	0.0	乾重(g),主な遺物を抽出
二枚貝類			-	0.7	-	乾重(g),主な遺物を抽出
巻貝類			0.0	1.8	0.8	乾重(g),主な遺物を抽出
貝類			0.1	6.5	-	乾重(g),主な遺物を抽出
ウニ類棘			0.0	-	-	乾重(g),主な遺物を抽出
土器片			-	-	0.0	乾重(g),主な遺物を抽出
金属製品			-	7.3	11.1	乾重(g),釘等主な遺物を抽出,磁着
分析量			443	682	1365	湿重(g)



試料 1kg あたりの個数で示す。●は１個未満を示す。

第180図　大型植物遺体群集組成

第32表　主な種実遺体の計測値

分類群	部位･状態				長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	図版 番号	簡易楕円 体積(mm³)	備考
イネ	炭化穎･胚乳	Ⅲ区	SK51	8-2層	4.9	3.0	2.1	5	-	基部に穎残存
イネ	胚乳(石灰化)	Ⅲ区	SK51	12層	5.8	3.1	2.0	7	-	
イネ	胚乳(石灰化)	Ⅲ区	SK51	12層	5.4	3.5	1.4	8	-	
コムギ	炭化胚乳	Ⅴ区	SM13	8層(炭層)	3.1	2.1	2.0	12	-	
コムギ	炭化胚乳	Ⅲ区	SK51	12層	3.7	2.1	1.9	11	-	
アズキ類	炭化種子	Ⅲ区	SK51	8-2層	3.7	2.3	1.4 +	22	12.2	半分厚,野生型

注）計測はデジタルノギスを使用し、欠損は残存値に「+」で示す
注)「簡易楕円体積（長さ/2×幅/2×厚さ/2×4/3×π）」は、那須ほか（2014;2015）の定義に従う。

キビ、アワ、栽培の可能性があるアズキ類、草本のシンジュガヤ、テンツキ近似種）の炭化（灰化）種実が110個、種実（石灰化）が4個の、計115個の大型植物遺体が抽出･同定された。

その他に、不明炭化種実?が4個、イネの灰化穎主体が0.7g、炭化材が1.4g、骨片が7.4g、歯が0.0g、鱗が0.0g、二枚貝類が0.7g、巻貝類が2.6g、貝類が6.6g、ウニ類の棘が0.0g、土器片が0.0g、金属製品（釘等）が18.4g確認された。分析残渣は、砂礫主体（骨貝片を含む）が1,010.3g、炭化材主体（灰化植物片含む）が2.5gを量る。以下、試料別出土状況を述べる。

・Ⅴ区SM13

8層(炭層)(試料443g)からは、栽培種のイネの灰化穎が1個、コムギの炭化胚乳が3個、草本のシンジュガヤの果実（灰化?）が5個、木本のマツ属複維管束亜属の炭化葉が1個と、炭化材が0.1g（最大1.0cm)、骨片が5.2g、巻貝類が0.0g、貝類が0.1g、ウニ類の棘が0.0gが確認された。分析残渣は、砂礫主体（骨貝類含む）が53.0g、炭化材主体が0.6gを量る。

・Ⅲ区SK51

12層（試料1,365g）からは、栽培種のイネの石灰化した胚乳が4個、コムギの炭化胚乳が1個、アワの炭化胚乳が5個と、断面柵状の不明炭化種実?が3個、炭化材が1.1g（最大1.5cm)、骨片が1.8g、歯が0.0g、鱗が0.0g、巻貝類が0.8g、土器片が0.0g、金属製品が11.1g確認された。分析残渣は、砂礫主体（骨貝片を含む）が734.1g、炭化材主体（灰化植物片多量含む）が1.5gを量る。

8-2層（試料682g）からは、栽培種のイネの灰化穎の破片が62個（基部33個含む)、炭化穎･胚乳が1個、炭化胚乳が21個、キビの炭化穎･胚乳が1個、炭化胚乳が1個、アワの炭化胚乳が2個と、栽培の可能性があるアズキ類の炭化種子の破片が3個、草本のテンツキ近似種の灰化果実が4個と、不明炭化種実?が1個、炭化材が0.3g（最大1.1cm)、骨片が0.4g、二枚貝類が0.7g、巻貝類が1.8g、貝類が6.5g、金属製品が7.3g確認された。分析残渣は、炭化材主体（灰化植物片多量含む）が0.4g、砂礫主体（骨貝類含む）が223.3gを量る。

アズキ類の炭化種子に関して、計測値より求めた「簡易楕円体積(長さ/2×幅/2×厚さ/2×4/3×π)」（那須ほか,2014;2015）は12.2mm³となり、現生のヤブツルアズキに類似する「野生型（30mm³以下)」（那須ほか,2014;2015）のサイズ範囲に該当することが確認された（第32表)。

(5) 土壌理化学分析

結果を第33表に示す。土色はⅤ区SM13の8層（炭層）で5Y3/1オリーブ黒、Ⅲ区SK51の12層で2.5Y3/2

第33表　土壌理化学分析結果

区・遺構名	層位	野外土性	土色	pH (H_2O)	電気伝導率 dS/m	有機炭素 (%)	腐植 (%)	全窒素 (%)	C/N	腐植形態(簡易法) Melanic Index [MI]	腐植形態(簡易法) 腐植酸の型	全リン酸 P_2O_5 (mg/g)	全カルシウム CaO (mg/g)	リン酸吸収係数 (mg/100g)	Mnt (%)
Ⅴ区SM13	8層(炭層)	SiL	5Y3/1オリーブ黒	8.0	0.22	1.97	3.40	0.11	18	1.87	B/Po	27.0	97.6	1600	0.21
Ⅲ区SK51	12層	SCL	2.5Y3/2黒褐	8.1	0.21	1.31	2.26	0.12	11	1.73	B/Po	40.2	262	1300	0.10

1) 土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖(農林省農林水産技術会議監修,1967)による。
2) 土性：土壌調査ハンドブック改訂版(日本ペドロジー学会編,1997)の野外土性による。
SiL･･･シルト質壌土(粘土0 ～ 15%、シルト45 ～ 100%、砂0 ～ 55%)
SCL･･･砂質埴壌土(粘土15 ～ 25%、シルト0 ～ 20%、砂5 ～ 85%)
3) 腐植：有機炭素×1.724。
4) C/N：有機炭素/全窒素。
5) Mnt：全マンガン(フッ化水素酸分解による)。

黒褐である。野外土性（ペドロジー学会編,1997）は、8層でSiL（シルト質壌土）、12層でSCL（砂質埴壌土）である。どちらも粘質な試料ではない。

pH(H_2O) は、どちらの試料も8.0-8.1と同様である。電気伝導率も0.21-0.22dS/mと一定である。石灰に富むが、塩類の集積はしてないことが示される。腐植含量は8層で3.40％、12層で2.26％と土色に相応する。全窒素は0.11-0.12％と一定であり、C/N比は8層で18、12層で11である。8層でやや未分解有機物や炭の影響があると捉えられる。MIは両試料共に検出され、B/Po型である。また発達度は12層の方が進んでいる。

全リン酸は8層で27.0mg/g、12層で40.2mg/gと特徴的に多い。全カルシウムは8層で97.6mg/g、12層で262mg/gと石灰岩由来である、もしくは骨片などの混入が考えられる。リン酸吸収係数は8層で1600mg/100g、12層で1300mg/100gと8層で火山灰土壌に匹敵する大きさをもつ。これは腐植による影響が大きいと捉えられる。全マンガンは8層で0.21%、12層で0.10％と炭層で多く含有される。8層では、試料確認時に赤褐色の斑紋がみられたことから、マンガンの濃集が起こった可能性がある。

４.考察

(1) 遺構の年代観

Ｖ区SM13の8層（炭層）、およびⅢ区SK51の12層より抽出した炭化物について、放射性炭素年代測定を実施した結果、補正年代で470±20BP ～ 480±20BP、暦年代でcalAD 1,414 ～ 1,451と、非常に近い値が得られた。Ｖ区SM13の8層（炭層）は、炭素含有率が19％と少ないことから、データの信頼性に不安が残るものの、概ね同時期の値を示すことから、SM13とSK51は15世紀頃の遺構と考えられる。

(2) 遺構の用途推定

寄生虫卵分析からは、Ⅲ区SK51の12層より鞭虫卵が確認されたものの、含有量は堆積物1ccあたり100個未満と少ない。一般的に、糞便の堆積物からは、1cm^3あたり数千～数万個の寄生虫卵が検出されている事例が多く（たとえば金原・金原,1994;金原ほか,1995aなど)、1cm^3あたり100個未満については、ある程度の人口密度を持つ集落による汚染の範囲内とみなされている（金原ほか,1995a,b)。また、トイレ遺構でよく確認されるアブラナ科などの花ごと食べる種類、ベニバナ属などの栽培種も確認されているが、顕著な多産は認められない。これらのことを考慮すると、Ⅲ区SK51がトイレ遺構であったとは言い難い。ただし､寄生虫卵の分解に対する抵抗性が花粉化石と同程度とされており(黒崎ほか,1993)、花粉化石の産状・保存状態ともに悪いことも踏まえると、寄生虫卵も分解・消失した可能性もある。

植物珪酸体分析からは、Ｖ区SM13の8層（炭層）よりイネ属やススキ属の短細胞列が検出されたことから、炭層の中にイネ属やススキ属の葉部が火を受けた後の灰が混入していたことが伺える。イネ属の植物体は、コメの収穫後に容易に入手でき、古くから燃料材や住居構築材などの生活資材として利用されることが多い。またススキ属は集落周辺に生育することが多く、容易に入手できる。集落の周辺から入手可能な植物体が、燃料材のひとつとして利用された可能性が考えられる。なお、これらの植物体は火が着きやすいものの、火力が弱く、燃焼時間も短い。そのため、薪炭材への火付け材として利用された可能性が考えられる。花粉分析の残渣に含まれていた微粒炭についても、イネ科葉部に由来するとされる波状構造を持つタイプや、ススキ属の可能性がある植物珪酸体を含有するタイプなども確認され、植物珪酸体分析の結果と調和的である。

微細物分析の結果からは、Ｖ区SM13の8層（炭層）と、Ⅲ区SK51の8-2層、12層より、栽培種の炭化種実を主体とする大型植物遺体群の他、炭化材、動物遺存体（骨片、歯、鱗、二枚貝類、巻貝類、貝類、ウニ類の棘など)、土器片、金属製品（釘等）などの遺物が検出された。いずれの遺物も、当時利用された生活残滓と推測される。

栽培種は、穀類のイネ、コムギ、キビ、アワの他、栽培の可能性があるアズキ類が確認され、特に

Ⅲ区SK51の8-2層より、灰化したイネの穎の破片が多産する傾向が得られた。

土壌理化学分析からは、Ⅴ区SM13の8層（炭層）と、Ⅲ区SK51の12層において水溶性塩類の集積は見られないものの、腐植化の進んだ腐植が多く、8層（炭層）ではさらに、植物炭化による炭の混在や未分解有機物などの混入も示唆される。また、リン酸も顕著に多い。カルシウムの由来は不明であるが、骨片や食品残渣によるものとも考えられる。

以上のことから、Ⅴ区SM13およびⅢ区SK51の両遺構は、動植物食料残渣や炭・灰などの生活残渣が含まれており、人為による影響が大きいことから、ゴミ捨て場や焼却所などとして利用された可能性が高いと考えられる。

(3) 古植生

Ⅴ区SM13の8層（炭層）、およびⅢ区SK51の12層のいずれの試料からも、定量解析が行えるだけの花粉化石が検出されなかった。わずかに検出された花粉化石には、花粉外膜が破損していたり、溶解していたりと保存状態が悪いものが多く含まれるほか、分解に強い種類、ある程度分解の影響を受けても同定可能な種類が検出されている。一般的に花粉やシダ類胞子の堆積した場所が、常に酸化状態にあるような場合、花粉は酸化や土壌微生物によって分解・消失するとされている（中村,1967;徳永・山内,1971;三宅・中越,1998など）ことから、堆積後の経年変化により花粉が分解・消失した可能性がある。

少なからず検出された植物化石についてみると、木本類ではⅤ区SM13の8層（炭層）から、マツ属複維管束亜属の炭化した葉が、Ⅲ区SK51の12層からマツ属の花粉が確認された。いずれも植栽樹の可能性を含めて調査地周辺に生育していたリュウキュウマツに由来すると考えられる。

草本類位では、Ⅴ区SM13の8層（炭層）、ススキ属やタケ亜科などのイネ科、シンジュガヤ、タンポポ亜科などが、Ⅲ区SK51からイネ科、テンツキ近似種、アカザ科、アブラナ科、ヨモギ属、キク亜科、タンポポ亜科などの花粉、植物珪酸体、種実遺体が確認された。これらは明るく開けた草地環境に生育していたと考えられ、調査地点周囲の草本植生に由来すると思われる。

Ⅱ.ガラス製品および陶器の青色顔料

１.試料

試料は、平成25 ～ 28年度調査で出土したガラス製品6点（試料番号1 ～ 6）と、陶器から採取されたガラス質の青色顔料1点（試料番号7）である（第34表）。これらのガラス製品および陶器の青色顔料について、蛍光Ｘ線分析による元素分析を実施し、材質に関する知見を得る。

第34表　ガラス製品および陶器（青色顔料）の試料一覧

試料番号	調査年度	記載事項				サンプル種類
		遺構	層位	No.	No.	
1	H25	SK51	最下層	94	37	ガラス製品(緑地に黄色の縞)
2	H28	SJ3	1層	649	309	青色ガラス製品
3	H25	SK51	最下層	93	36	ガラス製品(緑地に太い黄色の縞)
4	H28	SX34		998	37	青色ガラス製品
5	H25	SK51		92	45	円形青色ガラス製品
6	―	SE1		211	12	透明ガラス製品 容器
7	H25			700 (写真管理)	736	陶器(青色顔料)

２.分析方法

蛍光Ｘ線分析はサンプリングが困難な文化財の材質調査に広く用いられている手法であるが、ごく表面層を測定対象としているため、出土遺物表面が風化の影響を受けている場合、遺物本来の化学組成を導くことは難しく、本来の化学組成を知るためには風化層を除去しなければならない。ただし、遺物保存の観点から考えれば、外観上の変化を伴わない本分析法は概略の化学組成を知るためには極

めて有効な手法となる。

本調査では、セイコーインスツルメンツ（株）製エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置（SEA2120L）を利用した非破壊分析により、化学組成を求める。本装置は、下面照射型の装置であり、Ｘ線管球はRh，コリメーターサイズは10mmφである。このため、形状の小さな試料の測定においてはマイラー膜（2.5μm）（ケンプレックス製CatNo107）を介した上で測定を実施する。なお、緑地に黄色の縞が入る試料番号1,3については縞の無い内側の緑地部分を測定対象とした。

第35表　測定条件

測定装置	SEA2120L	
管球ターゲット元素	Rh	
コリメータ	φ10.0mm	
フィルター	なし	
雰囲気	真空	
励起電圧（kV）	15	50
管電流（μA）	自動設定	自動設定
測定時間（秒）	300	300
定性元素	Na ～ Ca	Sc ～U

得られた特性Ｘ線スペクトルは元素定性を実施した後、FP法（ファンダメンタルパラメーター法）を用いたスタンダードレス分析により定量演算を行い、相対含有率（wt%）を求めている。本調査における測定条件の詳細を第35表に示す。

３.結果

蛍光Ｘ線スペクトルを第181図に、FP法により求めた化学組成を第36表に示す。なお、本調査では網目形成酸化物であるSiO_2や、修飾酸化物となり得るNa_2O、MgO、K_2O、CaO、また中間酸化物となり得るAl_2O_3やPbO等について一応の定量化は行ってはいるものの、基本的に表面風化層の除去を行っていないことから、本来の材質を反映した結果とは成り得ていないことに注意する必要がある。以下に材質傾向別に結果を記載する。

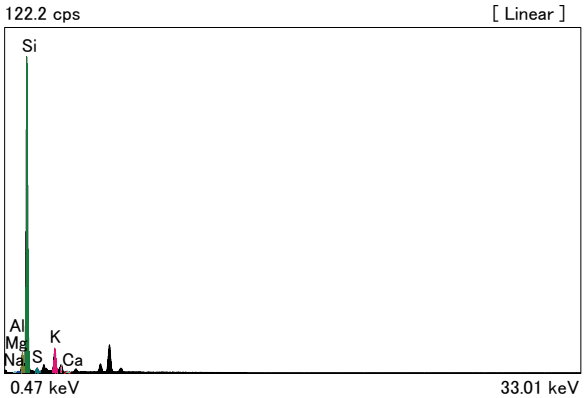
化学組成によれば、試料番号1,3,5,6のガラス製品は主としてSiO_2、Al_2O_3、CaO、MgO、Na_2O、K_2Oなどの酸化物によって構成される。なお、緑地ガラスの試料番号1,3はSO_3として約1％の硫黄を、青色ガラスの試料番号5はCuOで約0.7％の銅が検出されている点に特徴がある。試料番号2,4は主としてSiO_2、Al_2O_3、CaO、K_2O、PbOなどの酸化物によって構成される青色ガラスであり、CuOとして1％前後の銅を伴う特徴がある。一方、陶器の青色顔料の試料番号7は、主にSiO_2、Al_2O_3、K_2Oなどの酸化物によって構成され、CuO、PbO、MnO、CoOを特徴的に含むほか、SnO_2を伴う点に特徴が見られる。

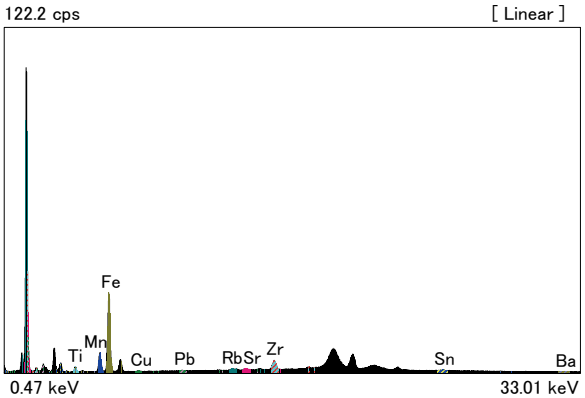
４.考察

(1) ガラス製品（試料番号1 ～ 6）

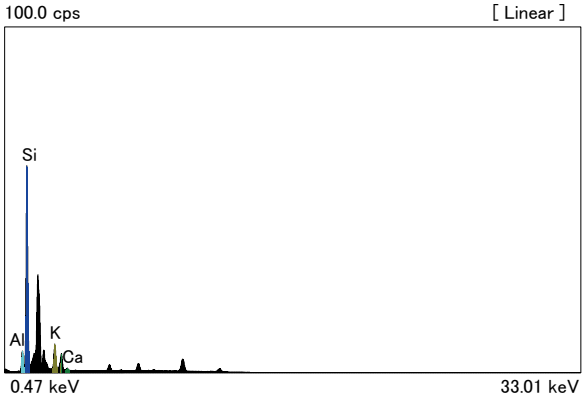
ガラスは珪酸原料に融剤および着色剤を調合し、溶融・冷却という過程を経て製品となる。古代ガラスの材質は、肥塚（1995,1999,2001）によれば、融剤の種類によってアルカリ珪酸塩ガラス、鉛珪酸塩ガラス、アルカリ鉛珪酸塩ガラスのグループに分類され、さらに構成酸化物の種類と量から、アルカリ珪酸塩ガラスはK_2O-SiO_2系・Na_2O-CaO-SiO_2系・K_2O-CaO-SiO_2系・Na_2O-Al_2O_3-CaO-SiO_2系・(Na_2O/K_2O)-CaO-SiO_2系に、鉛珪酸塩ガラスはPbO-SiO_2系・PbO-BaO-SiO_2系に、アルカリ鉛珪酸塩ガラスはK_2O-PbO-SiO_2系に分類される。また、肥塚（1999）はガラスの風化表面と内部新鮮面を調査し、風化による成分変動を検討し、K_2O-SiO_2系やK_2O-PbO-SiO_2系では風化表面でK_2Oが減少し、SiO_2、Al_2O_3の増加（K_2O-SiO_2系）ないしPbOの増加（K_2O-PbO-SiO_2系）する傾向が、Na_2O-CaO-SiO_2系やNa_2O-Al_2O_3-CaO-SiO_2系では風化表面でNa_2Oが減少し、SiO_2、Al_2O_3が増加する傾向があることを指摘している。

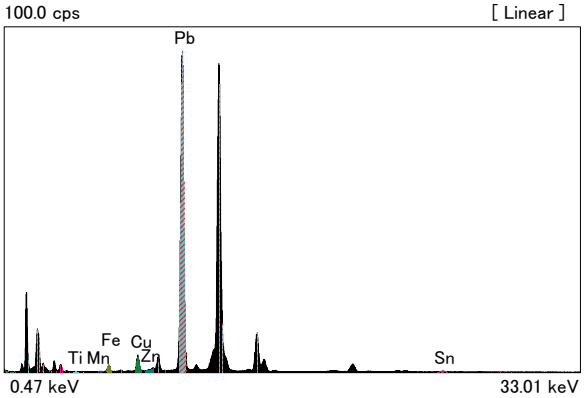
蛍光Ｘ線分析による非破壊表面分析では、構成酸化物の定量値が半定量的な値であることに加え、ガラス表面の風化変質による化学組成の変化も無視できないために詳細な分類まで言及することは難しいが、試料番号1,3,5,6はアルカリ珪酸塩ガラスに、試料番号2,4は鉛珪酸塩ガラスないしアルカリ鉛珪酸塩ガラスに相当する材質と見られる。この内、試料番号5は比較的多くのK_2OとCaOを含む特徴からK_2O-CaO-SiO_2系、試料番号6はNa_2OとCaOを比較的多く含む特徴からNa_2O-CaO-SiO_2系である可能性が高い。さらに、Na_2O-CaO-SiO_2系はアルカリ原料にナトロンを用いたナトロンガラスと植物灰を用いた



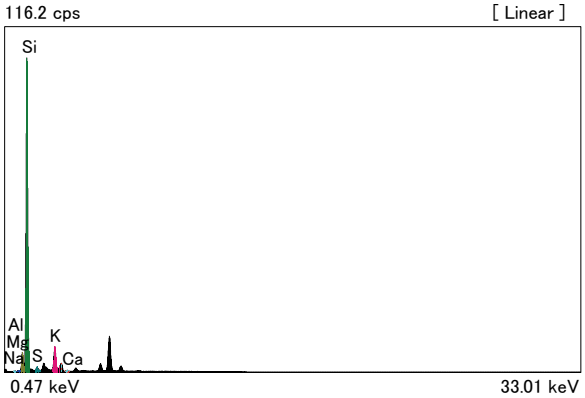


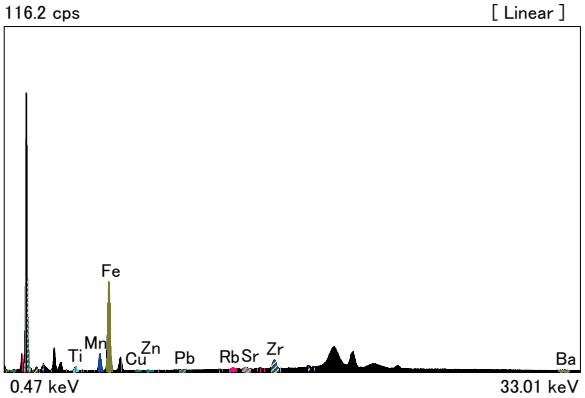
試料番号1（左:励起電圧15kV、右:50kV）



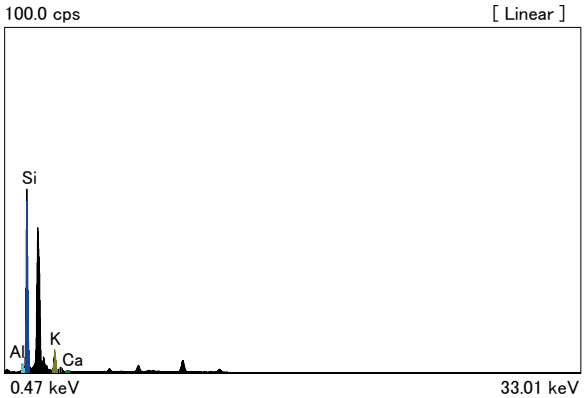


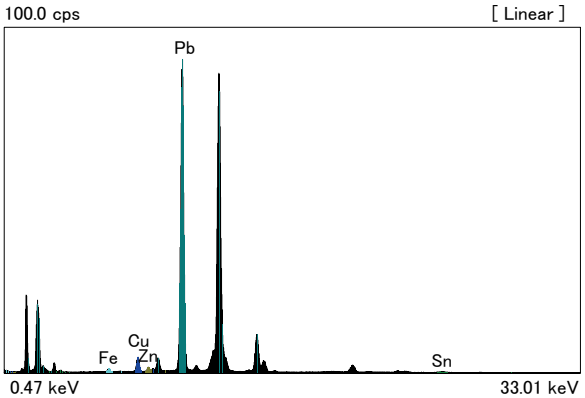
試料番号2（左:励起電圧15kV、右:50kV）





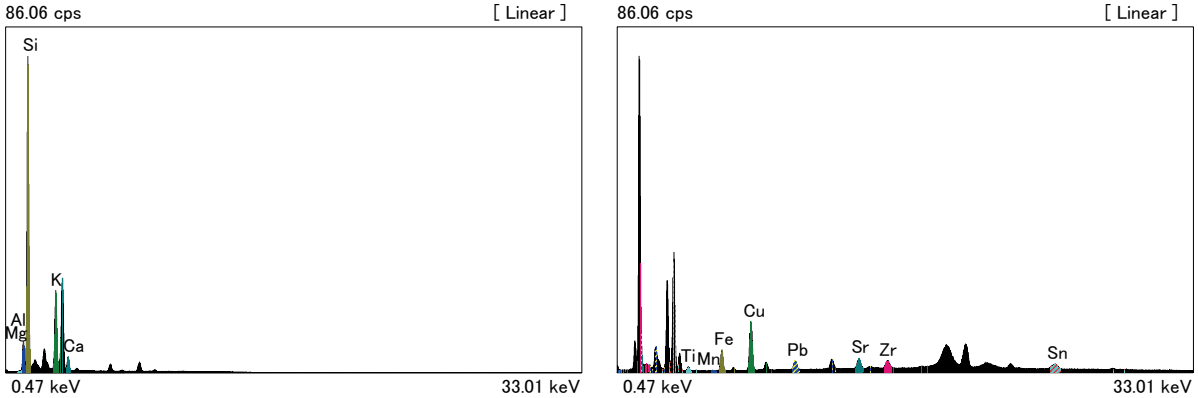
試料番号3（左:励起電圧15kV、右:50kV）



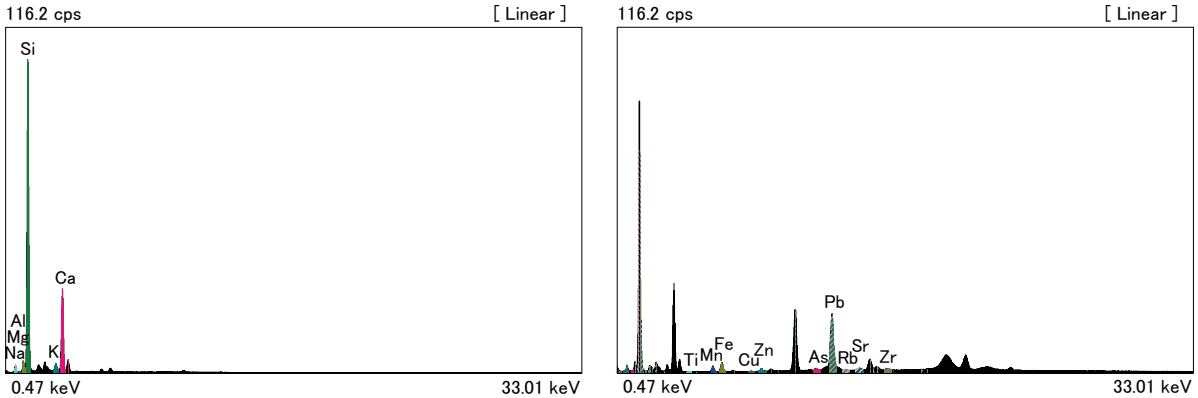


試料番号4（左:励起電圧15kV、右:50kV）

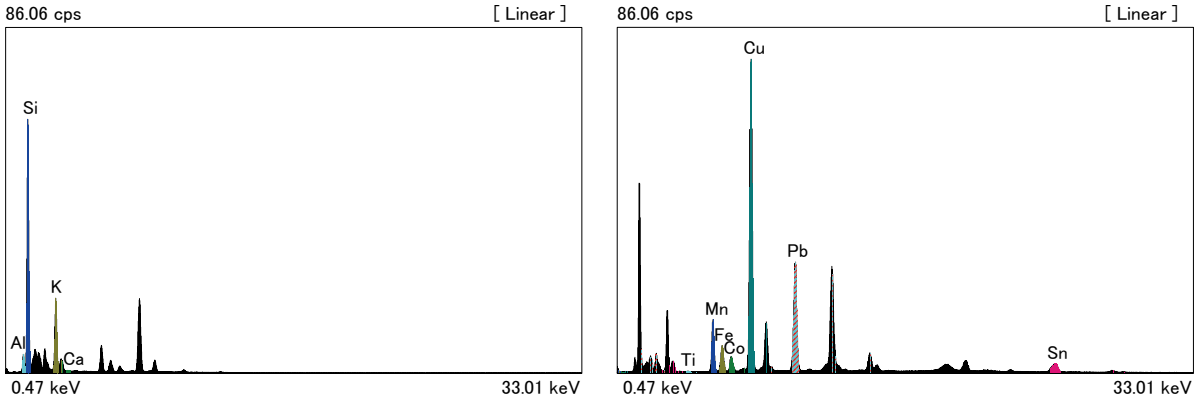
第181図　各試料の蛍光X線スペクトル(1)



試料番号5（左:励起電圧15kV、右:50kV）



試料番号6（左:励起電圧15kV、右:50kV）



試料番号7（左:励起電圧15kV、右:50kV）

第182図　各試料の蛍光X線スペクトル(2)

植物灰ガラスに区分され、ナトロンガラスはMgOとK_2Oの含有量がともに1.5%以下という基準が設けられている（肥塚,2010）。試料番号6には1.5%を上回る程のMgOとK_2Oは検出されていないことより、ナトロンガラスである可能性が高く評価される。

なお、試料番号1,3の色調は緑色を呈するが、銅はCuOとして0.01 ～ 0.02%検出されているにすぎないことより、銅に発色が支配されているとは捉えがたい。試料番号1,3には鉄がFe_2O_3として3%程度含まれる点から、鉄の還元発色による可能性が高いと見られる。一方、青色を呈する試料番号2,4,5に関しては1%付近含まれる銅が発色に寄与していると判断される。

ところで、試料番号1,3は、大分市の中世大友府内町跡第88次調査において出土した、南ヨーロッパで生産されたと推定されるガラス製品との類似性が指摘されている。このガラス製品も同様な成分分析が行われており、緑地の分析結果ではナトリウムが多いという特徴を持つ珪酸塩ガラスと報告さ

れている。一方、本報告の分析値は、Na_2Oの値が1％前後に過ぎず、中世大友府内町跡の9.37％と比較して低値である。さらに、中世大友府内町跡第88次調査において出土したガラス製品ではCuOが4.18％検出されており、着色に影響していると考えられているのに対し、試料番号1,3はCuOによる発色とは捉えがたく、特徴が異なる。これらのことを考慮すると、材質的に類似したものである可能性を指摘することは難しい。

今後、ガラス内部の新鮮部分での化学組成を確認した上で、材質を見極めることが肝要であるとともに、試料番号1,3の黄色の縞部分の材質に関する情報を得ることも必要と考える。

第36表　蛍光X線分析結果(化学組成)

試料番号		ガラス製品						青色顔料
		1	2	3	4	5	6	7
化学組成（wt%）	Na_2O	0.70	−	1.20	−	−	9.15	−
	MgO	0.95	−	0.89	−	0.76	0.32	−
	Al_2O_3	8.59	9.81	8.50	3.75	12.50	4.89	9.37
	SiO_2	79.11	50.78	77.99	44.94	66.63	70.47	65.13
	SO_3	1.10	−	1.08	−	−	−	−
	K_2O	4.12	4.33	4.22	5.12	8.20	1.37	9.11
	CaO	0.86	2.19	0.88	1.78	9.97	11.51	0.26
	TiO_2	0.57	0.12	0.55	−	0.33	0.07	0.07
	MnO	0.86	0.04	0.82	−	0.01	0.29	2.33
	Fe_2O_3	2.97	0.73	3.67	0.49	0.56	0.39	0.85
	CoO	−	−	−	−	−	−	0.45
	CuO	0.01	0.91	0.02	1.11	0.72	0.01	7.67
	ZnO	−	0.05	0.01	0.25	−	0.05	−
	As_2O_5	−	−	−	−	−	0.15	−
	Rb2O	0.01	−	0.01	−	−	0.01	−
	SrO	0.01	−	0.02	−	0.05	0.02	−
	ZrO_2	0.06	−	0.06	−	0.03	0.01	−
	SnO_2	0.01	0.23	−	0.24	0.09	−	0.51
	BaO	0.05	−	0.07	−	−	−	−
	PbO	0.02	30.80	0.02	42.32	0.16	1.30	4.26

(2) 青色顔料（試料番号7）

ガラス質の青色顔料は、SiO_2、Al_2O_3、K_2Oを主とし、CuO、PbO、MnO、CoOを特徴的に含むほか、SnO_2を伴う。ガラスの色は遷移元素のイオン発色ないしコロイド着色であるが、検出された元素の中で青色発色に関係する元素としては､銅（CuO）,コバルト（CoO）,鉄（Fe_2O_3）が挙げられる。第36表における化学組成は蛍光Ｘ線分析におけるバルク条件（無限厚）を満たしていないため量比目安程度ではあるが、銅がCuOとして7％を超えて多量に含まれることが指摘され、青色の発色に銅が関与している可能性が高く評価される。一方で、同時に検出されたコバルトが0.45％と比較的多い特徴も見られる。アルカリ珪酸塩ガラスにおいては微量で着色することを踏まえれば、コバルトの寄与も疑われる。

引用文献

土壌標準分析・測定法委員会編1986『土壌標準分析・測定法』博友社 354p.
『土壌肥料用語辞典 第2版』2010農山漁村文化協会 304p.
藤木利之・小澤智生2007『琉球列島産植物花粉図鑑』アクアコーラル企画 155p.
本名俊正･山本定博1992『腐植の簡易分析法.土壌構成成分解析法』博友社 7-35.
金原正明・金原正子1994「鴻臚館跡の土坑（便所遺構）における寄生虫卵・花粉・種実の同定分析」『福岡市埋蔵文化財調査報告書　第372集 鴻臚館跡4』福岡市教育委員会 25-38.
金原正明・金原正子・中村亮仁1995a「大宮坊跡（厠跡）における自然科学的分析」『史跡石動山環境整備事業報告Ⅱ』石川県鹿島町教育委員会 51-70.
金原正明・金原正子・中村亮仁1995b「川合遺跡八反田地区SE402・SE405における寄生虫卵・植物遺体分析」『川合遺跡 八反田地区Ⅱ 本文編』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第63集 静岡県埋蔵文化財調査研究所 341-354.
肥塚隆保1995「古代ガラスの材質」『古代に挑戦する自然科学.クバプロ』94-108.
肥塚隆保1999「出土遺物の材質調査-日本で出土した古代ガラスの研究-」『理学電気ジャーナル』30 1.理学電気工業,33-40.
肥塚隆保2001「古代ガラスの材質と鉛同位体比」『同位体・質量分析法を用いた歴史資料の研究』国立歴史民族博物館研究報告　第86集 財団法人歴史民族博物館振興会 233-268.

肥塚隆保2010「材質とその歴史的変遷古代ガラスの材質」『古代ガラスと考古科学』月刊文化財566号 13-25.

近藤錬三2010「プラント･オパール図譜」北海道大学出版会 387p.

黒崎 直・松井 章・金原正明・金原正子1993「糞便堆積物の分析－特に寄生虫卵分析について－」『日本文化財科学会第10回大会研究発表要旨集』日本文化財科学会115-115.

三宅 尚・中越信和1998「森林土壌に堆積した花粉・胞子の保存状態」『植生史研究』6,15-30.

三好教夫・藤木利之・木村裕子2011『日本産花粉図鑑』北海道大学出版会 824p.

中村純1967「花粉分析」古今書院 232p.

中村純1980「日本産花粉の標徴ⅠⅡ（図版)」『大阪市立自然史博物館収蔵資料目録第12,13集』大阪市立自然科学博物館91p.

中山至大・井之口希秀・南谷忠志2010『日本植物種子図鑑（改訂版）』東北大学出版会 678p.

那須浩郎･中沢道彦･中村　豊･森泉かよ子･会田　進2014「縄文-弥生移行期におけるアズキ亜属の大型化」『第29回日本植生史学会大会講演要旨集』38.

那須浩郎・会田 進・佐々木由香・中沢道彦・山田武文・輿石 甫2015「炭化種実資料からみた長野県諏訪地域における縄文時代中期のマメの利用」『資源環境と人類第5号』明治大学黒耀石研究センター 37-52.

農林省農林水産技術会議事務局監修1967『新版標準土色帖』

小椋純一2007「微粒炭の母材植物特定に関する研究」『植生史研究15』85-95.

小椋純一2008「釧路湿原北東陸地部における微粒炭分析」『日本植生史学会第23回大会講演要旨集』46-47

パリノ・サーヴェイ株式会社1993「自然科学分析からみた人々の生活（1)」慶應義塾藤沢校地埋蔵文化財調査室編『湘南藤沢キャンパス内遺跡 第1巻 総論』慶應義塾347-370.

ペドロジー学会編1997『土壌調査ハンドブック改訂版』博友社.

Reimer, P. J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J. W., Blackwell, P. G., Bronk Ramsey, C., Grootes, P. M., Guilderson, T. P., Haflidason, H., Hajdas, I., Hatté, C., Heaton, T. J., Hoffmann, D. L., Hogg, A. G., Hughen, K. A., Kaiser, K. F., Kromer, B., Manning, S. W., Niu, M., Reimer, R. W., Richards, D. A., Scott, E. M., Southon, J. R., Staff, R. A., Turney, C. S. M., and van der Plicht, J.,2013,IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon,55,1869-1887.

佐伯秀治・升 秀夫・早川典之1998『臨床検査シリーズ　寄生虫鑑別アトラス－オールカラー版－』株式会社メディカルサイエンス社 162p.

斉藤崇人・田中義文2007「寄生虫卵殻の形態分類」『徳永重元博士献呈論集』パリノ・サーヴェイ株式会社407-416.

島倉巳三郎1973「日本植物の花粉形態」『大阪市立自然科学博物館収蔵目録　第5集』60p.

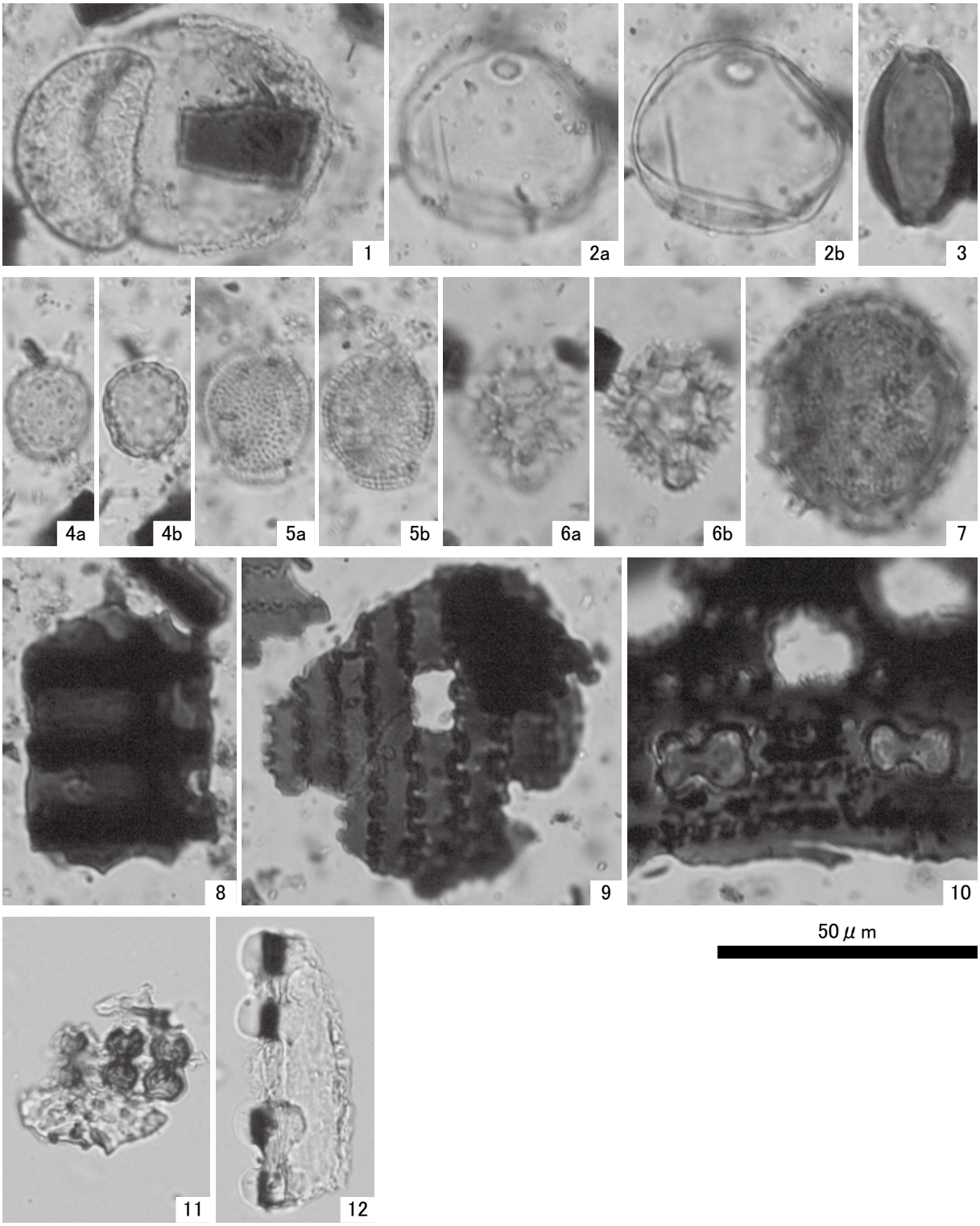
Stuiver, M., and Polach, H. A.,1977,Discussion Reporting of 14C Data. Radiocarbon ,19, 355-363.

鈴木庸夫・高橋 冬・安延尚文2012『ネイチャーウォッチングガイドブック 草木の種子と果実－形態や大きさが一目でわかる植物の種子と果実632種－』誠文堂新光社272p.

竹原弘展2013『豊後府内17（第2分冊）中世大友府内町跡第88･95次調査 一般国道10号古国府拡大事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』大分県教育庁埋蔵文化財センター 443-445.

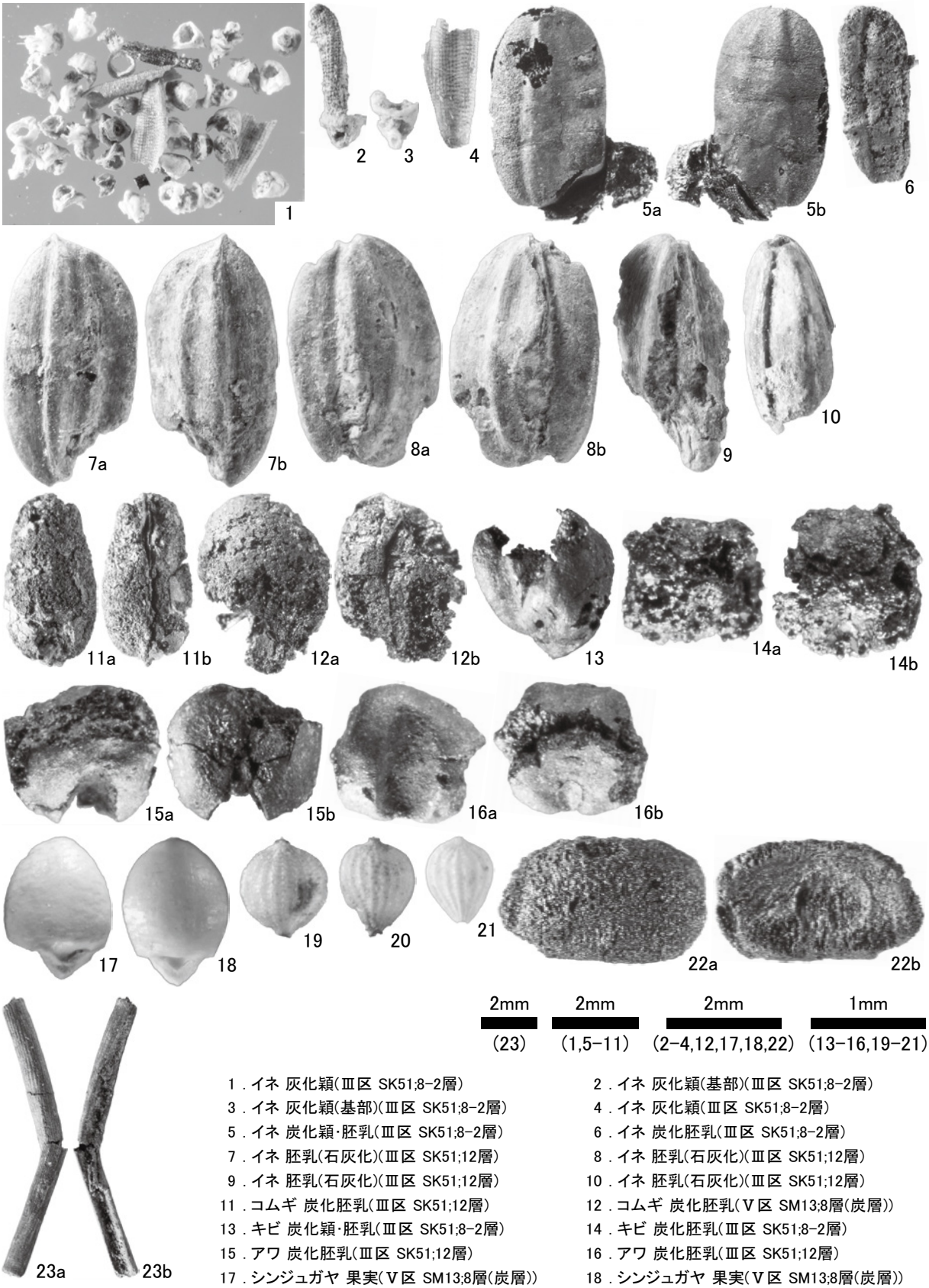
徳永重元・山内輝子1971『花粉・胞子・化石の研究法』共立出版株式会社 50-73.

氏家　宏・兼子尚知2006『地域地質研究報告（5万分の1地質図幅）　那覇及び沖縄市南部地域の地質』独立行政法人産業技術総合研究所　地質調査総合センター 48p.



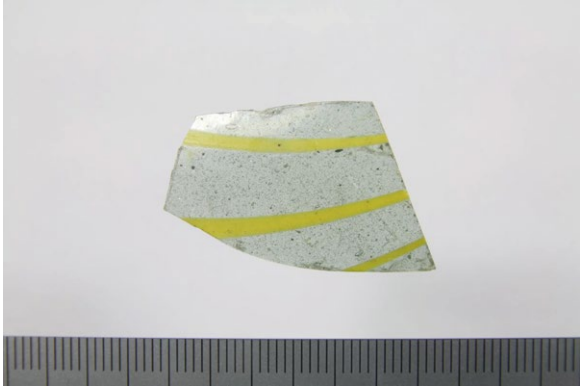
1．マツ属(Ⅲ区SK51;12層)
2．イネ科(Ⅲ区SK51;12層)
3．鞭虫卵(Ⅲ区SK51;12層)
4．アカザ科(Ⅲ区SK51;12層)
5．アブラナ科(Ⅲ区SK51;12層)
6．タンポポ亜科(Ⅲ区SK51;12層)
7．ベニバナ属(Ⅲ区SK51;12層)
8．微粒炭(木本由来)(Ⅲ区SK51;12層)
9．微粒炭(草本由来)(Ⅴ区SM13;8層(炭層))
10．微粒炭(草本由来;ススキ属?)(Ⅴ区SM13;8層(炭層))
11．イネ属短細胞列(Ⅴ区SM13;8層(炭層))
12．ススキ属短細胞列(Ⅴ区SM13;8層(炭層))

図版41　花粉化石・寄生虫卵・微粒炭・珪化組織片

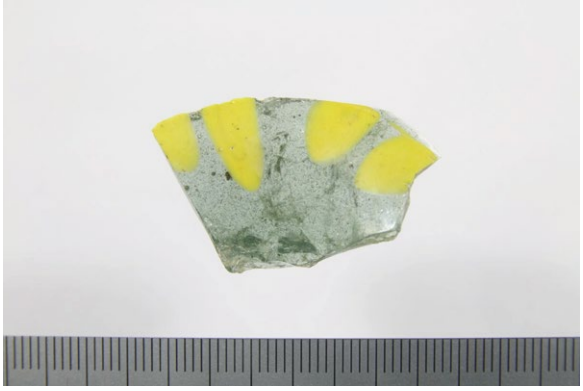


1．イネ 灰化穎(Ⅲ区 SK51;8-2層)
2．イネ 灰化穎(基部)(Ⅲ区 SK51;8-2層)
3．イネ 灰化穎(基部)(Ⅲ区 SK51;8-2層)
4．イネ 灰化穎(Ⅲ区 SK51;8-2層)
5．イネ 炭化穎･胚乳(Ⅲ区 SK51;8-2層)
6．イネ 炭化胚乳(Ⅲ区 SK51;8-2層)
7．イネ 胚乳(石灰化)(Ⅲ区 SK51;12層)
8．イネ 胚乳(石灰化)(Ⅲ区 SK51;12層)
9．イネ 胚乳(石灰化)(Ⅲ区 SK51;12層)
10．イネ 胚乳(石灰化)(Ⅲ区 SK51;12層)
11．コムギ 炭化胚乳(Ⅲ区 SK51;12層)
12．コムギ 炭化胚乳(Ⅴ区 SM13;8層(炭層))
13．キビ 炭化穎･胚乳(Ⅲ区 SK51;8-2層)
14．キビ 炭化胚乳(Ⅲ区 SK51;8-2層)
15．アワ 炭化胚乳(Ⅲ区 SK51;12層)
16．アワ 炭化胚乳(Ⅲ区 SK51;12層)
17．シンジュガヤ 果実(Ⅴ区 SM13;8層(炭層))
18．シンジュガヤ 果実(Ⅴ区 SM13;8層(炭層))
19．テンツキ近似種 灰化果実(Ⅲ区 SK51;8-2層)
20．テンツキ近似種 灰化果実(Ⅲ区 SK51;8-2層)
21．テンツキ近似種 灰化果実(Ⅲ区 SK51;8-2層)
22．アズキ類 炭化種子(Ⅲ区 SK51;8-2層)
23．マツ属複維管束亜属 炭化葉(Ⅴ区 SM13;8層(炭層))

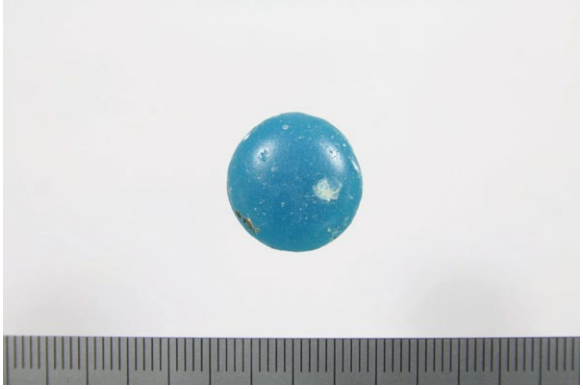
図版42　大型植物遺体


試料番号1 （第151図 37）

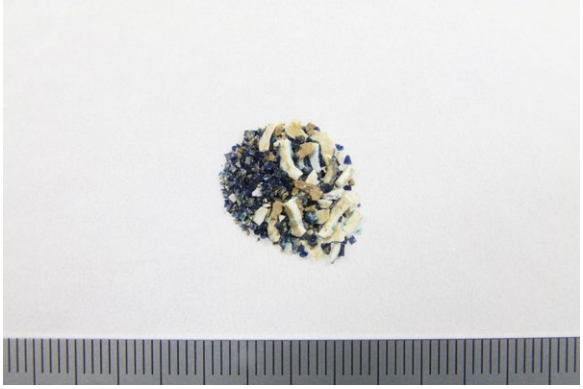
試料番号2 （第70図 218）


試料番号3 （第151図 36）

試料番号4 （第31図 23）


試料番号5 （第152図 45）

試料番号6 （第14図 12）


試料番号7 （第163図 139の青色顔料）

図版43　ガラス製品および陶器試料

第６章　遺構の現地保存

第１節　現地保存に至る経緯

遺構保存の断念　平成23年12月に校舎改築工事が中断されたことは第1章に述べた。県教育庁は、平成24年7月6日に那覇市都市景観条例（以下、景観条例）を所管する那覇市都市計画課都市デザイン室（以下、都市デザイン室）と遺構保存のための設計変更について意見交換を行うなど、首里高校校舎改築と埋蔵文化財の取り扱いについて検討を進めたが、設計段階において都市デザイン室等との調整によりグラウンド側に校舎を改築することとなった経緯や、景観条例に基づいて設置された那覇市都市景観審議会（以下、景観審）の答申との兼ね合い、さらには、老朽化した校舎で、グラウンドも使用できず、校外で体育の授業を行うために変則的なカリキュラムを強いられている首里高校側の窮状等から、校舎改築の設計変更は難しいとの結論に至った。

首里高校保護者等説明会　平成24年9月8日、県施設課と県文化財課は、首里高校の保護者と学校関係者を対象とし、今後行われる発掘調査の概要等を伝えるための説明会を開いた。会場からは、窮状を訴える声や、短期間での発掘調査実施、工事の早期再開等を求める声が上がる一方で、「遺跡が大事で、発掘調査に時間がかかることも理解できる。現校舎の耐震補強工事等を行って、生徒の安全を確保しつつ、発掘調査をしっかり行ってほしい」旨の発言もあった。

校舎改築の早期実現を求める要請　工事再開時期が不透明な状況の中、首里高等学校校舎改築の早期実現を求める会（首里高等学校校長、首里高等学校ＰＴＡ会長、養秀同窓会会長、元首里高校校長有志の会）は、平成24年11月19日付けで、県教育委員会教育長（以下、県教育長）あてに、「首里高校校舎改築の早期実現を求める要請」を提出し、一日も早い校舎完成を求めた。

発掘調査着手後の要請等　埋蔵文化財センターは、平成25年7月29日に記録保存のための発掘調査に着手することとなるが、発掘調査が進み、遺構の保存状況等が明らかになっていく中、遺構保存と校舎改築早期実現に関する要請等が以下のとおり行われる状況となった。

○「首里高校敷地内における埋蔵文化財発掘調査の公開および遺跡の取扱いについて（要請）」（平成26年5月30日付、沖縄考古学会会長名、県教育長あて）

○「首里高校内中城御殿跡の保存･活用について（要請）」（平成26年12月22日付､沖縄考古学会会長名、県教育長あて）

○「首里高校内中城御殿跡の保存･活用について（要請）」（平成27年3月10日付､沖縄考古学会会長名、県議会議長あて）

○「県立首里高校グラウンドから発掘された中城御殿跡遺構の保存に関する陳情」（平成27年3月13日付、個人より、県議会議長あて）

○「首里高校校舎改築の早期実現を求める要請」（平成27年3月13日付、首里高等学校校舎改築の早期実現を求める会より、県議会議長あて）

再検討の指示　県議会議長あてに提出された3件の要請･陳情を受け、県議会の文教厚生委員会（以下、文厚委）は、平成27年3月23日に現場視察を行い、翌24日、県教育庁の記録保存を前提とした処理方針に対して、遺跡の保存方法を含めた再検討を求めた。同月31日に、県教育庁総務課、県文化財課、県施設課と沖縄考古学会との意見交換が行われた後、県教育長より県施設課と県文化財課に遺構の保存方法を含めた再検討の指示が出された。

現地保存案の検討　平成27年4月、県文化財課と県施設課は、グラウンド部分において検出された遺構の保存と校舎改築の早期着手に向けた具体的検討に着手し、盛土により遺構を現地保存した上で、遺構の上に校舎改築を行う案（以下、現地保存案）をまとめた。平成27年5月15日には、県文化財課から沖縄考古学会へ説明を行い、助言等をいただいた。また、現地保存により校舎が当初設計か

ら約5m高くなることについて都市デザイン室と調整を行い、景観審での再審議に向けた方向性に関する感触を得ることができた。

なお、平成27年5月15日には、首里高等学校校舎改築の早期実現を求める会から県教育長あてに「首里高校校舎改築の早期実現を求める要請」が提出されている。

処理方針の変更　平成27年7月3日に開催された県議会6月定例会文厚委において、前述の3件の要請・陳情について継続審議が行われた。県教育庁は、現地保存案に基づく処理方針の変更について説明を行い、文厚委の理解を得ることができたことから、設計変更に向けた準備を進めることとした。

日本考古学協会からの要望　一般社団法人日本考古学協会埋蔵文化財保護対策委員会（以下、日本考古学協会）は、県教育庁が設計変更に向けた準備に着手した直後の7月6日に現地視察および県文化財課への事情聴取を行い、同月27日付けで県教育長あてに「那覇市首里高校内中城御殿跡の保存と活用についての要望書」を提出した。要望書には､遺跡の調査成果を県民に対して広く周知を図ること、遺構の保存と活用を図ること、首里地区全体の整備計画の中に位置づけること等が記されていた。県教育委員会は、日本考古学協会の要望に対し、平成27年8月7日付けで、今後も積極的に普及活動を行い、関係機関と調整を図りながら対応していく旨の回答を行った。なお、平成27年9月4日には、日本考古学協会の要望に呼応する形で、沖縄考古学会から県教育長あてに「首里高校内中城御殿跡の保存と活用について（要請)」が提出され、その場で意見交換が行われた。

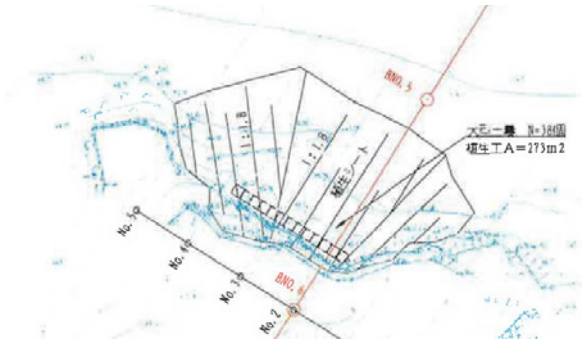
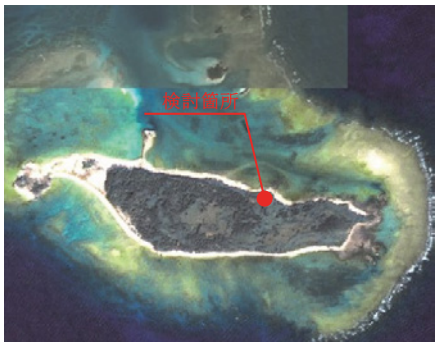
文厚委による処理方針採択と設計変更　平成27年10月8日に開催された県議会9月定例会文厚委において、現地保存案に基づく処理方針について再審議があり、処理方針が採択された。同月21日には、県施設課から分任を受けた県施設建築課と国吉設計ＪＶとの間で「首里高校管理・特別教室棟等改築工事設計業務」の契約が締結され、設計変更に着手することとなった。毎週行われる設計業務の定例会議に県文化財課も参加し、校舎の安全性を確保しつつ、遺構への影響が最小限となる工法の検討を重ね、都市デザイン室との度重なる調整、市文化財課との意見交換、景観審議会での審議等を経て実施設計が完成した。

第２節　遺構の保護

遺構保護対策　遺構の現地保存についての調整・作業を進める一方で、風雨にさらされている遺構の保護対策が急務となっていた。埋蔵文化財センターは、平成27年9月18日に株式会社大洋土木コンサルタントに設計業務を委託し、遺構保護の方法や、使用する資材、数量等を確定した上で、平成27年12月24日に金秀グリーン株式会社に遺構保護業務を委託し、遺構保護対策を行った。入学試験当日の作業を中止するなど、学校環境に配慮しながら作業を進め、平成28年3月31日に遺構保護業務を完了した。

保護方法の検討　発掘調査において検出した遺構を保護するにあたり、様々な方法の検討を株式会社大洋土木コンサルタントと調整を行いながら遺構保護設計書の作成を実施した。埋蔵文化財センターは平成21年度に伊是名村具志川島遺跡群復旧設計業務委託、平成26年度に県内遺跡詳細分布調査（船越原遺跡）に伴う法面保護設計業務委託を実施している。その際の遺構保護方法を参考にしながら検討を進めた（第37・38表)。

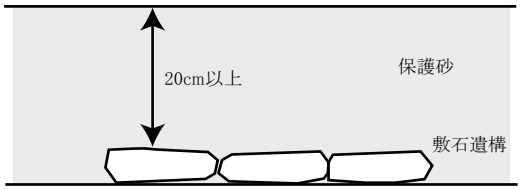
第 37 表　遺跡保護埋戻し事例 1

位　　置	伊是名村具志川島
履行期間	平成 21 年 11 月 4 日～平成 21 年 11 月 30 日
概 要 図	 
現場条件	現場は伊是名村具志川島、現在は無人島となっている。遺跡保護のために埋戻し土が必要となるが、島内や周辺環境保護のため、島内での材料の調達は行わず、島外から輸送した。仮設道路も、環境保護への負荷を最小限とするため舗装は行わず、切土と盛土で設置した。
保護対象	遺跡発掘跡
保護の概要	・遺跡を直接埋め戻す材料は「砂」を用いた（再発掘しやすい）。 ・遺跡発掘箇所を盛土転圧する重機の荷重から保護する目的で、大型土嚢を設置 ・大型土嚢は環境に配慮し「生分解素材」を採用 ・盛土法面は安定勾配（1：1.8）とし、浸食防止として植生シートを実施 ・埋戻し土被りは地形を見て判断 ・埋戻し材料は島内で確保できなかったので、すべて島外から調達 （大型土嚢や施工機械もすべて島外から） ・埋戻し材料は一般的な材料（海砂）

第 38 表　遺構保護埋戻し事例 2

位　　置	渡嘉敷村 渡嘉敷島
履行期間	平成 26 年 5 月 14 日～平成 26 年 6 月 30 日
概 要 図	
現場条件	現場は渡嘉敷村渡嘉敷島の南側の東海岸に位置し、地質は砂質系で構成されており、降雨浸食により現場周辺に崩壊がみられた。渡嘉敷村は平成 26 年 3 月 5 日に慶良間諸島国立公園に指定されており、島内の生態系及び環境保護に留意する必要があった。このため、遺跡保護には島外から土木材料を持ち込まずに島内の資材を流用し、植栽は可能な限り移植することとした。土器等が埋まっている層があり、重機等で盛土する場合には十分な配慮が必要であった。
保護対象	遺跡発掘跡
保護の概要	・遺跡保護のために埋め戻し、並びに施工箇所の法面保護も行った。 ・遺跡を保護する土は、島内護岸建設現場から発生する残土を流用した。 ・法尻保護のための栗石についても、島内護岸建設現場から流用した。 ・砂質土であることより法面勾配は安定勾配（1：1.8）とし、浸食防止材(シート)を実施。 ・植生は飛来種子の活着に期待し、種子吹きつけは行わない。 ・国立公園内であることから、景観に配慮し構造物(トンブロック)等は設置せず、自然に近い形の法面で復旧した。

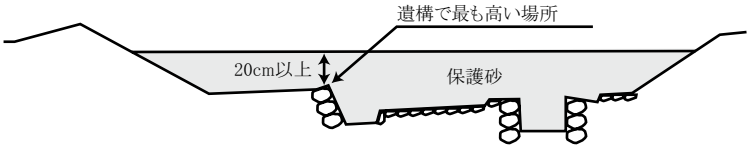
具志川島遺跡群と船越原遺跡の遺跡保護方法を参考にして、以下のような遺跡保護方法を採用することとした。そのなかで、遺構の形状や検出状況によって敷石、窪地にある遺構、石積み・石垣の3タイプに分類を行い、それぞれに適した保護方法を検討した。



第183図 敷石遺構の保存方法

敷石　敷石等は保護砂による土被りが20㎝以上確保する。（第183図）

窪地にある遺構　窪地に残存している遺構は基本的に窪地を保護砂で埋め戻すこととする。このとき、遺構より埋戻しの土被りが20㎝以上確保できるように、埋戻し高は遺構の最も高い位置より20㎝上部になるように設定している。（第184図）

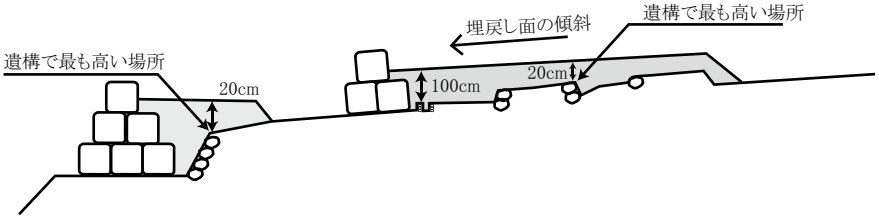


第184図 窪地にある遺構の保護方法

石積み　石積みなどの遺構は、埋戻し及び造成時の水平荷重により損傷を受けないように、全面に大型土嚢を設置し、石積みと土嚢の間を保護砂で埋戻す。このとき、石積みなどの保護砂被りが20㎝以上確保できるように、埋戻し高は石積みの最も高い位置より20㎝上部になるように設定している。

また、一部では石垣後方に石敷き遺構が残存している複合する遺構がある。その場合は連続して保護することを目的として大型土嚢の配置を行った。（第185図）

保護対象となる遺構の配置状況では、遺構と遺構の距離が離れている部分も存在する。その際は、遺構毎に保護を行うこととした。



第185図 重複した遺構の保護方法

埋戻しの材料　遺構の保護を目的とした埋戻し材料は、砂（再生砂：JGS0051による分類の砂[S]又は礫質砂[SG]）を採用した。砂を選定した理由は、遺構周辺を全面充填して覆うことが可能であること、再度発掘調査を実施する際に認識しやすいことからである。遺構保護の実施時には、遺構が窪地に残存している場合などもあり、砂で遺構を完全に覆ったあとの窪地には、調査時に発生した土を埋土に使用した。調査発生土が不足する部分に関しては、購入土（粘性土）を用いた。

転圧方法　砂での充填は、通常の土と異なり、転圧を実施することが困難であった。そのため水締めを採用し、盛土を実施しながら適宜、水締めを行った。転圧機械も併用で用いた。

経過観察　遺構保護が完了した後、半年ほど経過観察を行った。その際に、砂が地表に露出している部分は風雨により表面から徐々に流れる状況が観察できた。また、降雨の際、雨水の通り道となる部分は抉れる部分もあった。今後、同様の遺構保護を採用する場合、砂が一定期間地表に露出する場

合は、上部を土で覆うなどの対策を行うことが適当であることが判明した。

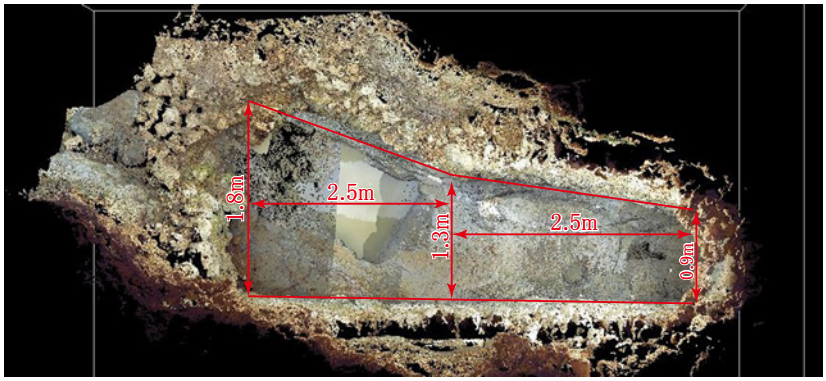
大型土嚢の選定　石積み遺構などの前面に設置する大型土嚢には、「耐候性大型土嚢（1㎥）3年対応品」を選定した。これは、沖縄県の紫外線の強さを考慮し、露出した状態で一定期間設置される際に崩れることがないようにするためである。一般タイプの土嚢を使用した場合、紫外線に弱く、屋外暴露した状態では半年程度で通常強度の10％以下に低下する実験データもあったことから上記土嚢袋を使用した。

土嚢　土嚢の充填には、調査発生土と購入土の両方を使用した。遺構保護の際に設置した土嚢は、校舎建築工事の造成時にも撤去せず、地中に埋めた状態である。今回使用した土嚢は科学繊維製品であることから、土中で完全に分解されることはないが、今後発掘調査を実施した際に残存しているかは不明である。

洞穴遺構の保護方法　Ⅴ区とⅥ区の境目で検出した洞穴遺構（第186・187図）は、一部で奥行部分などが残存しているため、遺構保護方法についての検討を行った。

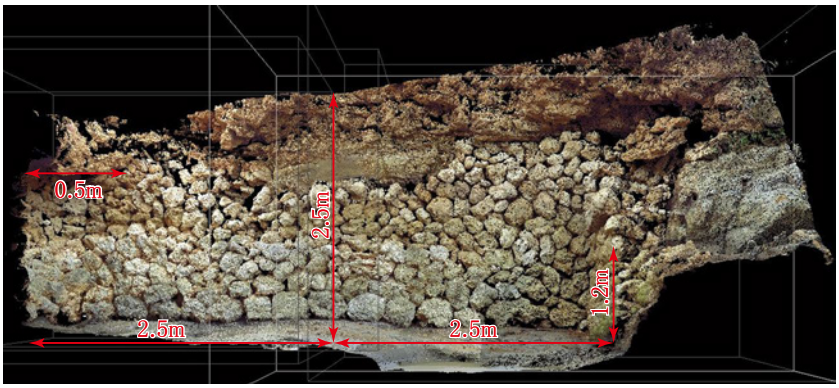
洞穴の天井部が残存し、奥行が存在している状況では、洞穴部の充填を十分に実施できないという問題点があった。洞穴遺構は記録保存調査が前提であったため、前面の記録作業が完了している状況であった。そのため、天井部分の0.5mは掘削を行い、その部分に砂を充填する方法を採用した。掘削を実施した天井部分の石は、掘削時に地面に落とした状態で砂を埋めた。

懸念事項　この洞穴遺構は常に周囲からの水が滲み出ており、水が溜まっている状態であった。当初、この水が遺構保護作業に与える影響を懸念していた。排水作業を行いながらクチャ層と岩盤の境目まで砂を充填した段階で周辺からの水が滲み出るのが遅くなった。埋戻し作業の後半は地面のぬかるみなどはない状態で埋戻し作業を実施することが出来た。砂で遺構を完全に覆ったあとは、購入土で埋戻しを実施し、遺構保護作業を完了した。



第186図 洞穴遺構の平面形態概略

設計図　上記内容を踏まえた設計図を第188 ～ 192図に示す。



第187図 洞穴遺構の内部形態概略

1 遺構保護前状況

2 土嚢作成

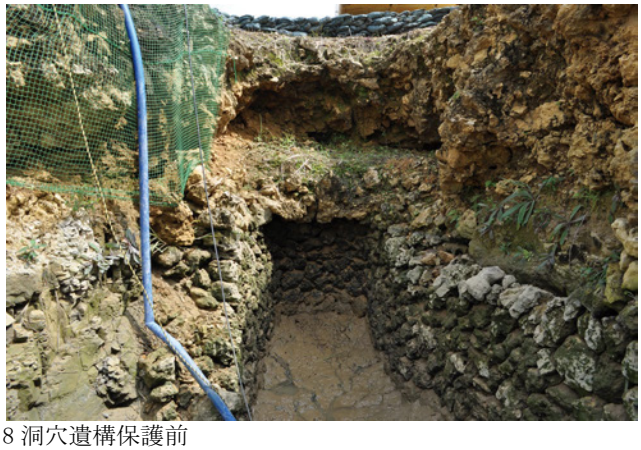
3 再生砂①

4 再生砂②

5 粘性土

6 水締め

7 保護埋戻


8 洞穴遺構保護前

図版44　遺構保護経過1

9 洞穴遺構天井除去

10 SS24 保護前

11 SS24 保護状況

12 SA2 保護前

13 SA2 保護状況

14 SA1、水場遺構保護前

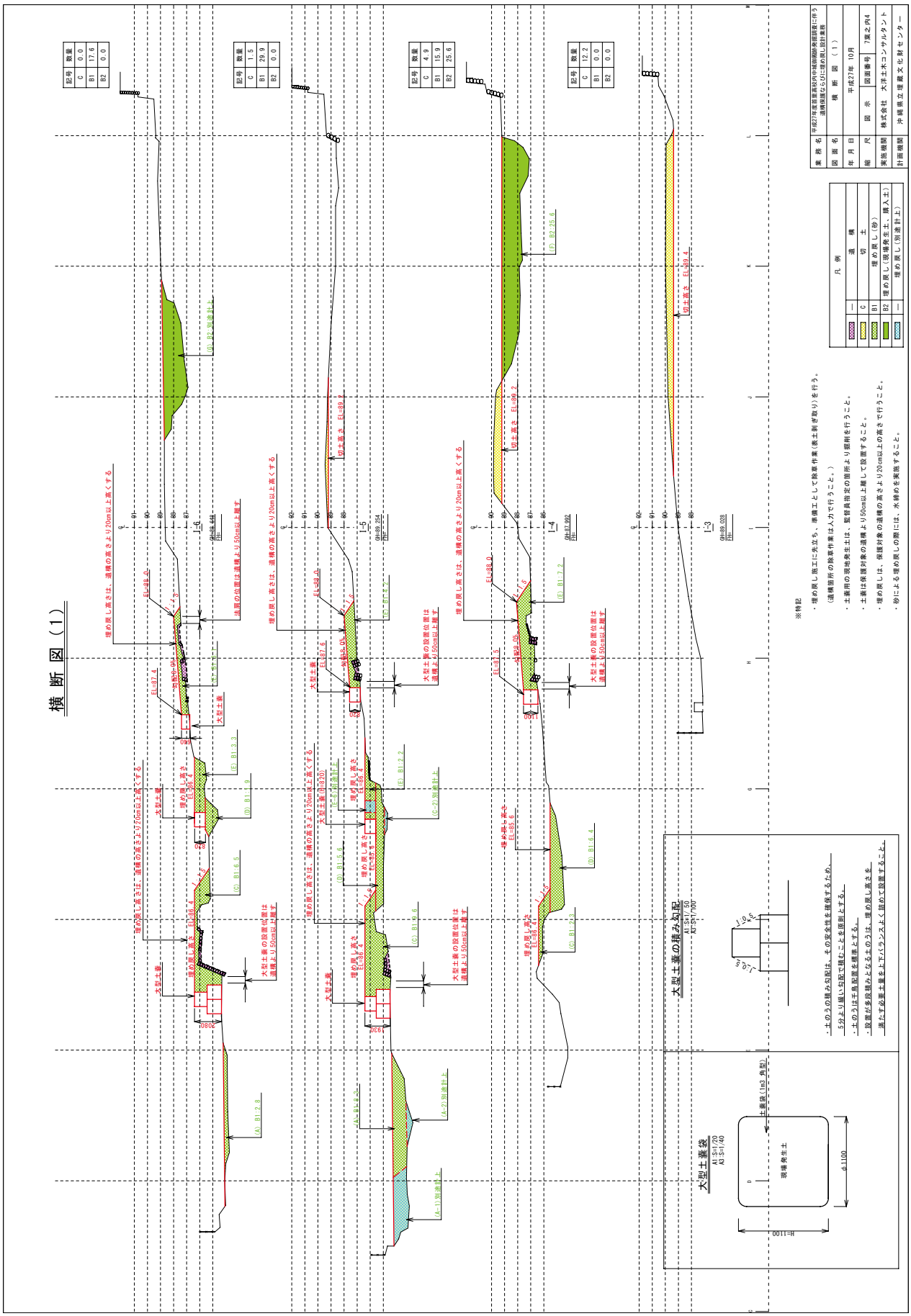
15 SA1、水場遺構保護状況

16 遺構保護完了状況

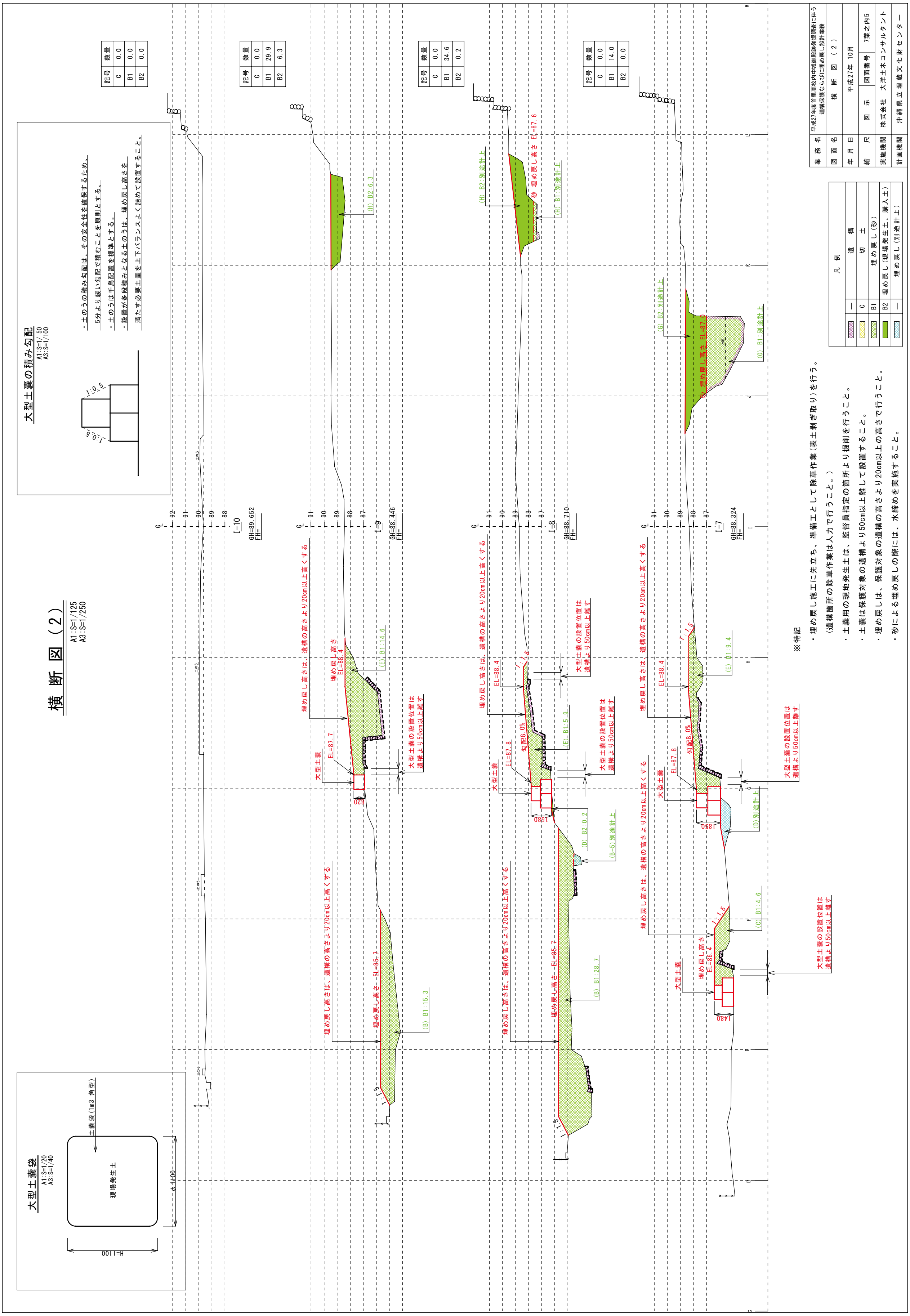
図版45　遺構保護経過2

第188図 埋め戻し計画平面図

第189図 造成計画平面図


横断図（1）
記号 数量
C 0.0
B1 17.6
B2 0.0
記号 数量
C 1.5
B1 29.9
B2 0.0
記号 数量
C 4.9
B1 15.9
B2 25.6
記号 数量
C 12.2
B1 0.0
B2 0.0
埋の戻し高さは、遺構の高さより20cm以上高くする
埋の戻し高さは、遺構の高さより170cm以上高くする
遺構の位置は遺構上より50cm以上離す
大型土嚢
大型土嚢の設置位置は遺構上より50cm以上離す
埋の戻し高さは、遺構の高さより20cm以上高くする
大型土嚢の設置位置は遺構上より50cm以上離す
埋の戻し高さは、遺構の高さより20cm以上高くする
大型土嚢の設置位置は遺構上より50cm以上離す
大型土嚢の構み図配
A1-S=1/50
A2-S=1/100
大型土嚢袋
A1-S=1/20
A2-S=1/40
土嚢袋(1m3 角型)
現場発生土
H=1100
0.1100
・土のうの積み方配は、その安全性を確保するため、
5分より緩い勾配で積むことを原則とする。
・土のうは千鳥配置を標準とする。
・設置が多段積みとなる土のうは、埋の戻し高さを
満たす必要土量を上下バランスよく詰めて設置すること。
※特記
・埋の戻し施工に先立ち、準備工として除草作業（表土剥ぎ取り）を行う。
（遺構面所の除草作業は入力で行うこと。）
・土嚢用の現地発生土は、監督員指定の箇所より個別を行うこと。
・土嚢は保護対象の遺構より50cm以上離して設置すること。
・埋の戻しは、保護対象の遺構の高さより20cm以上の高さで行うこと。
・砂による埋の戻しの際には、水締めを実施すること。
凡例
遺構
切土
埋の戻し（砂）
埋の戻し（現場発生土、購入土）
埋の戻し（別途計上）
業務名 平成27年度首里城跡の中城御殿跡発掘調査に伴う遺構保護ならびに埋の戻し設計業務
図面名 横断図（1）
年月日 平成27年10月
縮尺
図示
図面番号 7頁之内4
実施機関 株式会社 大洋土木コンサルタント
計画機関 沖縄県立埋蔵文化財センター

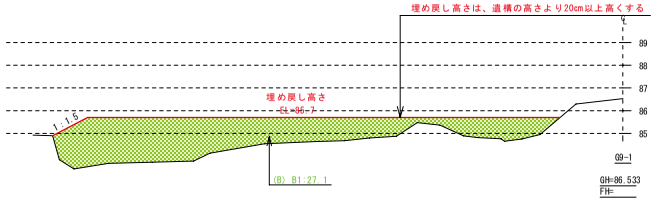
第190図 横断図(1)


横断図（２）
大型土嚢の積み勾配
A1:S=1/50
A3:S=1/100
1:0.5
・土のうの積み勾配は、その安全性を確保するため、5分より緩い勾配で積むことを原則とする。
・土のうは千鳥配置を標準とする。
・設置が多段積みとなる土のうは、埋め戻し高さを満たす必要土量を上下バランスよく詰めて設置すること。
大型土嚢袋
現場発生土
※特記
・埋め戻し施工に先立ち、準備工として除草作業（表土剥ぎ取り）を行う。
（遺構箇所の除草作業は人力で行うこと。）
・土嚢用の現地発生土は、監督員指定の箇所より掘削を行うこと。
・土嚢は保護対象の遺構より50cm以上離して設置すること。
・埋め戻しは、保護対象の遺構の高さより20cm以上の高さで行うこと。
・砂による埋め戻しの際には、水締めを実施すること。
凡例
— 遺構
C 切土
B1 埋め戻し（砂）
B2 埋め戻し（現場発生土、購入土）
— 埋め戻し（別途計上）
業務名 平成27年度首里高校内中城御殿跡発掘調査に伴う遺構保護ならびに埋め戻し設計業務
図面名 横断図（２）
年月日 平成27年 10月
縮尺 図示
図面番号 7葉之内5
実施機関 株式会社 大洋土木コンサルタント
計画機関 沖縄県立埋蔵文化財センター

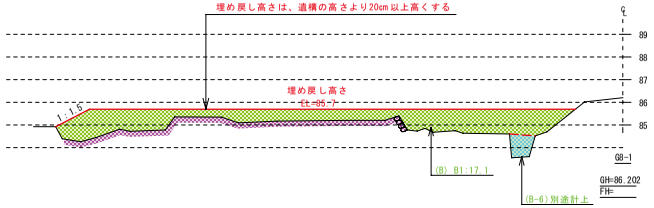
第191図 横断図(2)

横断図（補足）

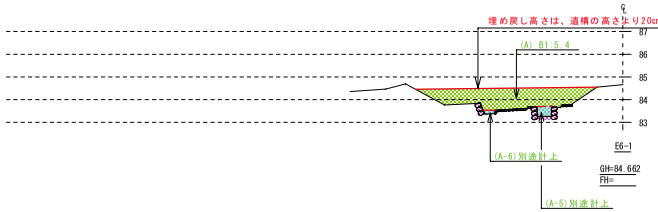
A1:S=1/100
A3:S=1/200



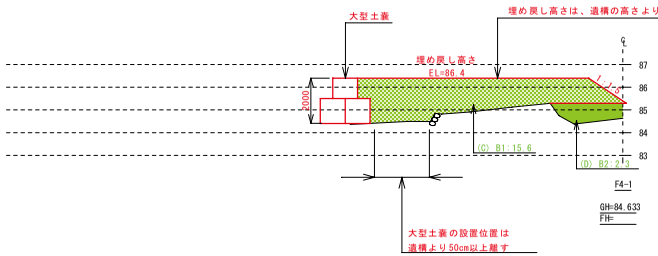
記号	数量
C	0.0
B1	27.1
B2	0.0



記号	数量
C	0.0
B1	17.1
B2	0.0



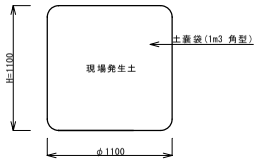
記号	数量
C	0.0
B1	5.4
B2	0.0



記号	数量
C	0.0
B1	15.6
B2	2.3

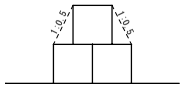
大型土嚢袋

A1:S=1/20
A3:S=1/40



大型土嚢の積み勾配

A1:S=1/ 50
A3:S=1/100



・土のうの積み勾配は、その安全性を確保するため、
　5分より緩い勾配で積むことを原則とする。
・土のうは千鳥配置を標準とする。
・設置が多段積みとなる土のうは、埋め戻し高さを
　満たす必要土量を上下バランスよく詰めて設置すること。

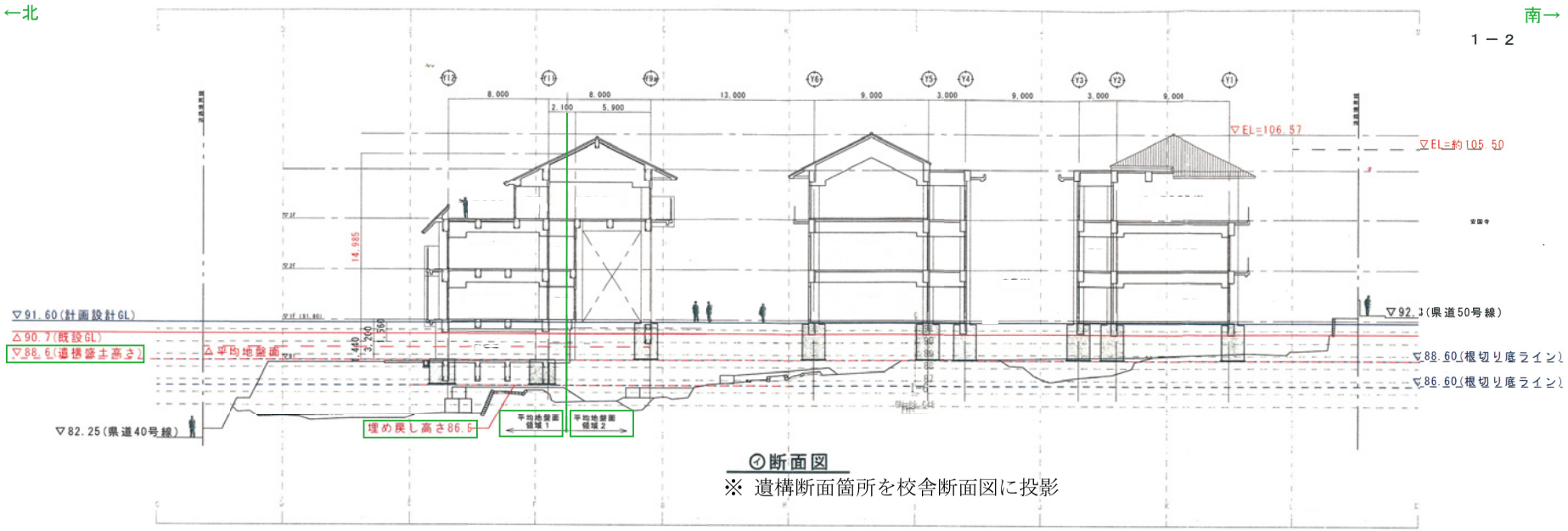
※特記

・埋め戻し施工に先立ち、準備工として除草作業（表土剥ぎ取り）を行う。
　（遺構箇所の除草作業は人力で行うこと。）
・土嚢用の現地発生土は、監督員指定の箇所より掘削を行うこと。
・土嚢は保護対象の遺構より50cm以上離して設置すること。
・埋め戻しは、保護対象の遺構の高さより20cm以上の高さで行うこと。
・砂による埋め戻しの際には、水締めを実施すること。

凡例		
	—	遺　構
	C	切　土
	B1	埋め戻し（砂）
	B2	埋め戻し（現場発生土、購入土）
	—	埋め戻し（別途計上）

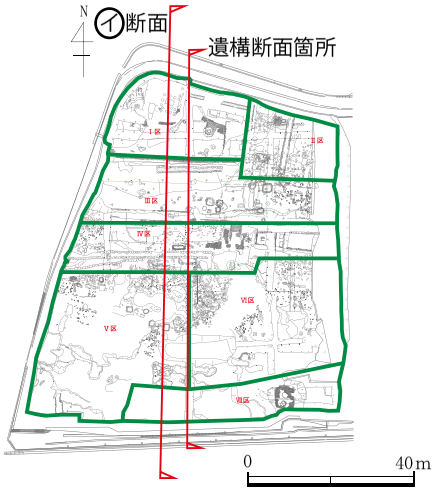
業務名	平成27年度首里高校内中城御殿跡発掘調査に伴う遺構保護ならびに埋め戻し設計業務		
図面名	横断図（補足）		
年月日	平成27年 10月		
縮尺	図示	図面番号	7葉之内6
実施機関	株式会社　大洋土木コンサルタント		
計画機関	沖縄県立埋蔵文化財センター		

第192図 横断図(補足)



※ 首里高校管理･特別教室棟等改築工事設務（H27）
第４回定例会議検討資料（平成 27（2015）年 12 月４日（金）開催）
緑色部分は埋蔵文化財センター加筆部分

※ 平均地盤面領域１：標高 86.6m 以下は遺構保護範囲
平均地盤面領域２：標高 88.6m 以下は遺構保護範囲



第193図 校舎断面図と遺構保護高さ（沖縄県教育庁施設課 提供）

第７章　基礎資料

第１節　各遺構出土遺物点数

各遺構の出土遺物　各遺構からの出土遺物を種類毎に集計したものが各遺構出土遺物点数表（第39表）である。各遺構出土資料の詳細については各種集計表として付属のCDに収めた。

遺物点数表　発掘調査時には、各遺構からの出土遺物は、出土遺構及び出土層位を記録して取り上げ作業を行った。遺構内の各層序は堆積時期に大きな時間差がある状況ではないと考えられるため、各層出土遺物を種類毎に合計した点数を記載している。

遺物分類　各遺構出土遺物点数表には、中国産青磁など種類毎までの記載に留め、細分類については記載していない。報告書に掲載した遺物はそれぞれ出土遺物観察一覧に詳細を記載している（第4～14表）。

第２節　出土遺物一覧

出土遺物一覧　遺物を種類毎にまとめて報告を行う。出土遺物は基本的に縮尺1/5で掲載しているが、大型製品等は縮尺変更して掲載している。出土遺物には遺物番号及び図番号を記載している。

陶磁器類　中国産陶磁器は、青磁・白磁・青花・褐釉陶器・色絵などが出土した。これらの分類については、沖縄出土分類（瀬戸・仁王・玉城・安座間・宮城・松原2007、瀬戸2010）、小野分類（小野1982）などを参照した。その他、タイ産陶磁器類、ベトナム産陶磁器類が出土している。本土産陶磁器は九州陶磁の編年（九州陶磁学会2000）などを参照とした。近代磁器等も出土している。沖縄産陶器には、施釉陶器、無釉陶器、初期沖縄産無釉陶器（沖縄県立埋蔵文化財センター 2010）が見られた。今回、沖縄産陶器の火入れ及び火取（ヒトゥイ）は沖縄での方言（佐賀県立九州陶磁文化館1998）などを参照して火取（ヒトゥイ）に統一した。

各種土器　陶質土器、瓦質土器、タイ産土器、宮古式土器、産地不明の蓋製品などが出土している。

石器・石製品・坩堝　中城御殿が創建される以前の遺構から、砥石、石杵、石製鉢？等が出土している。また、近・現代の遺構SE1からは硯が出土している。SA9下部から坩堝が出土している。

骨・貝製品　骨製品では舟をモチーフに描かれた製品が出土している。また、首里城跡などで出土する半円形状の骨製品が出土しており、梳き櫛などの用途が想定されている（大分県教育庁埋蔵文化財センター 2016）。貝製品では中城御殿跡（沖縄県立埋蔵文化財センター 2012）で出土類例があるマドガイ製品が出土している。

円盤状製品　遺構からの出土は少数で、碗の底部を使用した製品が出土している。

煙管　煙管の分類は御内原分類（沖縄県立埋蔵文化財センター 2010）を参照した。瓦質の円筒型雁首や陶製雁首などが出土している。

青銅製品　釘や飾り金具の一部、簪、ジーファー等が出土している。

金属製品　鉄釘が主に出土し、鉄鏃も見られる。その他、金属片などが出土しているが、錆が多く付着し、原型を保っていない状態のものが多く、器種などを想定することが困難である。

銭貨　近世の遺構からは、寛永通寶が多く見られ、無文銭も見られた。グスク時代の遺構からは、洪武通寶、永樂通寶、朝鮮通寶などが出土している。

ガラス玉･ガラス製品　SK56からガラス玉がまとまって出土している。SE1からはインク瓶が出土し、SJ3からは杯状製品が出土している。SK51からは器種不明製品が出土している。SK51出土のガラス製品は、蛍光Ｘ線分析を用いた自然科学分析を実施している。

瓦・塼　瓦は高麗系瓦、大和系瓦、明朝系瓦が破片も含めて多量に出土した。塼は主に破片が出土している。瓦は瓦当部分を中心に報告した。分類には、上原静分類（上原2013）、石井龍太分類（石井2006、2007、2008）を参照した。

第39表　各遺構出土遺物点数表a

時期	遺構	出土遺物										貝類遺体
近現代	SE1	中青磁	1	中白磁	－	中青花	－	中色絵	－	タイ褐	2	サラサバテイラ、ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、チョウセンサザエ、オニノツノガイ、マガキガイ
		他陶磁	3	本陶	9	沖施	58	初沖無	－	沖無	12	
		陶土	－	土器	－	円盤	－	鉄製品	2	骨・貝製	－	
		ガラス	14	石製品	52	瓦	82	青銅	4	その他	4	
	SG2	中青磁	－	中白磁	－	中青花	－	中色絵	－	タイ褐	－	イトマキボラ
		他陶磁	－	本陶	－	沖施	1	初沖無	5	沖無	3	
		陶土	1	土器	－	円盤	－	鉄製品	－	骨・貝製	－	
		ガラス	－	石製品	－	瓦	17	青銅	1	その他	6	
	SR12	中青磁	1	中白磁	－	中青花	1	中色絵	－	タイ褐	－	
		他陶磁	2	本陶	1	沖施	2	初沖無	－	沖無	－	
		陶土	－	土器	－	円盤	－	鉄製品	－	骨・貝製	－	
		ガラス	－	石製品	－	瓦	2	青銅	－	その他	－	
	SM2	中青磁	－	中白磁	－	中青花	1	中色絵	－	タイ褐	－	アラスジケマン、ユウカゲハマグリ
		他陶磁	－	本陶	－	沖施	1	初沖無	－	沖無	4	
		陶土	1	土器	－	円盤	－	鉄製品	－	骨・貝製	－	
		ガラス	－	石製品	－	瓦	－	青銅	－	その他	－	
	SM7	中青磁	－	中白磁	－	中青花	2	中色絵	1	タイ褐	－	
		他陶磁	1	本陶	－	沖施	8	初沖無	－	沖無	3	
		陶土	－	土器	－	円盤	－	鉄製品	2	骨・貝製	－	
		ガラス	－	石製品	－	瓦	34	青銅	－	その他	1	
	SM9	中青磁	－	中白磁	－	中青花	－	中色絵	－	タイ褐	－	チョウセンサザエ、カンギク、ヌノメガイ、アラスジケマン、ハマグリの一種
		他陶磁	－	本陶	1	沖施	5	初沖無	－	沖無	－	
		陶土	－	土器	－	円盤	1	鉄製品	8	骨・貝製	－	
		ガラス	－	石製品	－	瓦	7	青銅	1	その他	－	
近世1	SA4	中青磁	3	中白磁	－	中青花	3	中色絵	－	タイ褐	－	ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、オハグロガイ、マガキガイ、イトマキボラ、イソハマグリ、アラスジケマン
		他陶磁	4	本陶	3	沖施	14	初沖無	－	沖無	11	
		陶土	1	土器	－	円盤	－	鉄製品	6	骨・貝製	－	
		ガラス	－	石製品	－	瓦	38	青銅	－	その他	2	
	SA7	中青磁	－	中白磁	3	中青花	3	中色絵	－	タイ褐	－	ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、チョウセンサザエ、チョウセンサザエの蓋、マガキガイ、コオニコブシ、イトマキボラ、サヤガタイモ、巻貝不明 カワラガイ、シャコガイ科不明、アラスジケマン、ハマグリの一種、ダテオキシジミ
		他陶磁	－	本陶	1	沖施	3	初沖無	1	沖無	8	
		陶土	1	土器	－	円盤	1	鉄製品	8	骨・貝製	－	
		ガラス	－	石製品	－	瓦	77	青銅	－	その他	3	
	SD6	中青磁	－	中白磁	－	中青花	3	中色絵	－	タイ褐	－	ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、チョウセンサザエ、カンギク ウラキツキガイ、アラスジケマン、ダテオキシジミ
		他陶磁	1	本陶	－	沖施	11	初沖無	1	沖無	5	
		陶土	1	土器	1	円盤	1	鉄製品	8	骨・貝製	－	
		ガラス	－	石製品	－	瓦	7	青銅	3	その他	－	
	SM10	中青磁	1	中白磁	－	中青花	1	中色絵	－	タイ褐	－	ヤコウガイ、チョウセンサザエ、巻貝不明 ウラキツキガイ、アラスジケマン
		他陶磁	4	本陶	－	沖施	1	初沖無	－	沖無	3	
		陶土	3	土器	1	円盤	1	鉄製品	－	骨・貝製	－	
		ガラス	－	石製品	－	瓦	29	青銅	2	その他	2	
	SQ3	中青磁	－	中白磁	－	中青花	2	中色絵	－	タイ褐	－	
		他陶磁	－	本陶	－	沖施	1	初沖無	－	沖無	2	
		陶土	－	土器	－	円盤	－	鉄製品	－	骨・貝製	－	
		ガラス	－	石製品	－	瓦	28	青銅	－	その他	1	
	SQ11	中青磁	6	中白磁	1	中青花	2	中色絵	－	タイ褐	4	ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、チョウセンサザエ、チョウセンサザエの蓋、カンギク、マガキガイ、ハナビラダカラ、ハナマルユキ、ガンゼキボラ、ツノテツレイシ、コオニコブシ、オキナワヤマタニシ メンガイの一種、ウラキツキガイ、カワラガイ、オオシラナミ(シラナミ)、リュウキュウバカガイ、シレナシジミ、アラスジケマン、スダレハマグリ
		他陶磁	16	本陶	1	沖施	－	初沖無	－	沖無	－	
		陶土	－	土器	－	円盤	－	鉄製品	－	骨・貝製	－	
		ガラス	－	石製品	－	瓦	6	青銅	－	その他	－	

※凡例…中青磁:中国産青磁　中白磁:中国産白磁　中青花:中国産青花　中色絵:中国産色絵　タイ褐:タイ産褐釉陶器
他陶磁:その他陶磁器　本陶:本土産陶磁器　沖施:沖縄産施釉陶器　初沖無:初期沖縄産無釉陶器　沖無:沖縄産無釉陶器
陶土:陶質土器　土器:各種土器　円盤:円盤状製品　鉄製品:金属製品　骨・貝製:骨製品・貝製品　ガラス:ガラス玉・ガラス製品
石製品:各種石製品　瓦:明朝系瓦（平・丸）　青銅:青銅製品（銭貨含む）　その他:その他製品
貝類については、出土種を記載。

第39表　各遺構出土遺物点数表b

時期	遺構	出土遺物										貝類遺体
近世1	SS8	中青磁	－	中白磁	－	中青花	1	中色絵	－	タイ褐	－	ヤコウガイの蓋、チョウセンサザエ、チョウセンサザエの蓋、オハグロガイ、マガキガイ、巻貝不明 ヒレジャコガイ、イソハマグリ、二枚貝不明
		他陶磁	－	本陶	1	沖施	14	初沖無	－	沖無	6	
		陶土	2	土器	－	円盤	－	鉄製品	23	骨･貝製	－	
		ガラス	－	石製品	－	瓦	53	青銅	－	その他	－	
	SX2	中青磁	2	中白磁	－	中青花	2	中色絵	－	タイ褐	1	サラサバテイラ、ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、カンギク、オハグロガイ、マガキガイ、コオニコブシ ウラキツキガイ、ヒレジャコガイ、シレナシジミ、アラスジケマン
		他陶磁	3	本陶	－	沖施	－	初沖無	1	沖無	1	
		陶土	－	土器	－	円盤	－	鉄製品	3	骨･貝製	－	
		ガラス	－	石製品	－	瓦	31	青銅	－	その他	2	
	SX34	中青磁	－	中白磁	1	中青花	－	中色絵	1	タイ褐	－	ヌノメガイ、ハマグリの一種
		他陶磁	－	本陶	1	沖施	－	初沖無	1	沖無	1	
		陶土	－	土器	－	円盤	－	鉄製品	2	骨･貝製	－	
		ガラス	1	石製品	－	瓦	10	青銅	1	その他	－	
	SD2 水場遺構	中青磁	－	中白磁	－	中青花	1	中色絵	－	タイ褐	－	チョウセンサザエ
		他陶磁	2	本陶	5	沖施	13	初沖無	－	沖無	13	
		陶土	3	土器	1	円盤	2	鉄製品	－	骨･貝製	－	
		ガラス	－	石製品	－	瓦	42	青銅	2	その他	－	
	SE3	中青磁	－	中白磁	1	中青花	－	中色絵	－	タイ褐	－	ヤコウガイの蓋、オハグロガイ ウラキツキガイ
		他陶磁	1	本陶	－	沖施	1	初沖無	－	沖無	2	
		陶土	－	土器	－	円盤	－	鉄製品	－	骨･貝製	－	
		ガラス	－	石製品	－	瓦	4	青銅	1	その他	－	
	水場遺構（水溜め）	中青磁	－	中白磁	－	中青花	－	中色絵	－	タイ褐	－	チョウセンサザエ
		他陶磁	－	本陶	－	沖施	－	初沖無	－	沖無	－	
		陶土	－	土器	－	円盤	－	鉄製品	1	骨･貝製	－	
		ガラス	－	石製品	－	瓦	－	青銅	1	その他	－	
近世2	SA1・SA29	中青磁	－	中白磁	－	中青花	2	中色絵	－	タイ褐	－	
		他陶磁	－	本陶	3	沖施	－	初沖無	1	沖無	3	
		陶土	－	土器	－	円盤	－	金属	－	骨･貝製	－	
		ガラス	－	石製品	－	瓦	2	青銅	－	その他	－	
	SA1	中青磁	5	中白磁	6	中青花	52	中色絵	2	タイ褐	3	ギンタカハマ、サラサバテイラ、ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、チョウセンサザエ、カンギク、オニノツノガイ、マガキガイ、スイショウガイ科不明、ホシダカラ、ハナビラダカラ、キイロダカラ、オニコブシ科不明、イトマキボラ、ツノマタモドキ、マダライモ、オキナワヤマタニシ、巻貝不明 ウラキツキガイ、カワラガイ、ヒレジャコガイ、シャコガイ科不明、イソハマグリ、アラスジケマン、ハマグリの一種、ダテオキシジミ
		他陶磁	13	本陶	67	沖施	105	初沖無	10	沖無	125	
		陶土	20	土器	5	円盤	5	鉄製品	19	骨･貝製	1	
		ガラス	－	石製品	－	瓦	399	青銅	2	その他	9	
	SA22	中青磁	4	中白磁	2	中青花	17	中色絵	－	タイ褐	－	サラサバテイラ、ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、チョウセンサザエ、オニノツノガイ、イワカニモリ、オハグロガイ、マガキガイ、シラクモガイ、シマベッコウバイ、イトマキボラ、イモガイ科不明、巻貝不明 ヒレジャコガイ、アラスジケマン、ハマグリの一種
		他陶磁	11	本陶	23	沖施	28	初沖無	7	沖無	48	
		陶土	1	土器	－	円盤	－	鉄製品	7	骨･貝製	－	
		ガラス	－	石製品	1	瓦	155	青銅	2	その他	6	
	SA29	中青磁	－	中白磁	－	中青花	1	中色絵	－	タイ褐	－	
		他陶磁	3	本陶	1	沖施	－	初沖無	1	沖無	1	
		陶土	－	土器	－	円盤	－	鉄製品	－	骨･貝製	－	
		ガラス	－	石製品	－	瓦	19	青銅	－	その他	－	
	SA30	中青磁	2	中白磁	－	中青花	1	中色絵	－	タイ褐	－	ヤコウガイの蓋、チョウセンサザエ
		他陶磁	5	本陶	－	沖施	－	初沖無	－	沖無	－	
		陶土	－	土器	－	円盤	－	鉄製品	－	骨･貝製	－	
		ガラス	－	石製品	－	瓦	16	青銅	－	その他	－	
	SA33	中青磁	10	中白磁	－	中青花	1	中色絵	2	タイ褐	1	サラサバテイラ、ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、チョウセンサザエ、マガキガイ、イボシマイモ ヌノメガイ、アラスジケマン
		他陶磁	6	本陶	5	沖施	－	初沖無	－	沖無	1	
		陶土	1	土器	1	円盤	－	鉄製品	－	骨･貝製	－	
		ガラス	－	石製品	－	瓦	16	青銅	－	その他	－	

※凡例…中青磁:中国産青磁　中白磁:中国産白磁　中青花:中国産青花　中色絵:中国産色絵　タイ褐:タイ産褐釉陶器
他陶磁:その他陶磁器　本陶:本土産陶磁器　沖施:沖縄産施釉陶器　初沖無:初期沖縄産無釉陶器　沖無:沖縄産無釉陶器
陶土:陶質土器　土器:各種土器　円盤:円盤状製品　鉄製品:金属製品　骨・貝製:骨製品・貝製品　ガラス:ガラス玉・ガラス製品
石製品:各種石製品　瓦:明朝系瓦（平・丸）　青銅:青銅製品（銭貨含む）　その他:その他製品
貝類については、出土種を記載。

第39表　各遺構出土遺物点数表c

時期	遺構	出土遺物										貝類遺体
近世2	SD7	中青磁	4	中白磁	11	中青花	21	中色絵	4	タイ褐	4	ニシキウズ、ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、チョウセンサザエ、オハグロガイ、マガキガイ、クチムラサキダカラ、ヤナギシボリダカラ、タカラガイ科不明、ツノレイシ、シラクモガイ、イトマキボラ、マダライモ カワラガイ、ヒレジャコガイ、イソハマグリ、シレナシジミ、アラスジケマン、ハマグリの一種、ダテオキシジミ、二枚貝不明
		他陶磁	9	本陶	13	沖施	192	初沖無	10	沖無	78	
		陶土	62	土器	4	円盤	9	鉄製品	3	骨・貝製	－	
		ガラス	－	石製品	－	瓦	291	青銅	7	その他	6	
	SJ3	中青磁	3	中白磁	2	中青花	119	中色絵	13	タイ褐	－	ギンタカハマ、ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、チョウセンサザエ、コシダカサザエ、カンギク、クワノミカニモリ、マガキガイ、イトマキボラ、チトセボラ ウラキツキガイ、ヒレジャコガイ、オオシラナミ(シラナミ)、ハマグリの一種、二枚貝不明
		他陶磁	4	本陶	21	沖施	7	初沖無	－	沖無	5	
		陶土	－	土器	－	円盤	－	鉄製品	－	骨・貝製	－	
		ガラス	1	石製品	－	瓦	1	青銅	－	その他	－	
	SK15	中青磁	－	中白磁	－	中青花	2	中色絵	－	タイ褐	－	チョウセンサザエ、マガキガイ、イトマキボラ ヒレジャコガイ
		他陶磁	－	本陶	1	沖施	2	初沖無	1	沖無	10	
		陶土	－	土器	－	円盤	－	鉄製品	－	骨・貝製	－	
		ガラス	－	石製品	－	瓦	13	青銅	－	その他	1	
	SM3	中青磁	－	中白磁	1	中青花	－	中色絵	－	タイ褐	－	ヤコウガイ、チョウセンサザエ アラスジケマン、ダテオキシジミ
		他陶磁	－	本陶	－	沖施	10	初沖無	－	沖無	3	
		陶土	3	土器	－	円盤	－	鉄製品	2	骨・貝製	－	
		ガラス	－	石製品	－	瓦	9	青銅	2	その他	1	
	SM16	中青磁	－	中白磁	－	中青花	1	中色絵	－	タイ褐	1	ヤコウガイ、チョウセンサザエ、マガキガイ
		他陶磁	－	本陶	－	沖施	－	初沖無	2	沖無	－	
		陶土	－	土器	1	円盤	－	鉄製品	－	骨・貝製	－	
		ガラス	－	石製品	－	瓦	157	青銅	－	その他	－	
	SP6	中青磁	－	中白磁	－	中青花	－	中色絵	－	タイ褐	－	
		他陶磁	－	本陶	－	沖施	3	初沖無	－	沖無	－	
		陶土	－	土器	－	円盤	－	鉄製品	2	骨・貝製	－	
		ガラス	－	石製品	－	瓦	6	青銅	－	その他	－	
	SP8	中青磁	2	中白磁	2	中青花	5	中色絵	－	タイ褐	2	ヤコウガイの蓋 ウラキツキガイ
		他陶磁	2	本陶	－	沖施	3	初沖無	－	沖無	3	
		陶土	－	土器	－	円盤	－	金属	－	骨・貝製	－	
		ガラス	－	石製品	－	瓦	13	青銅	－	その他	－	
	SP915	中青磁	－	中白磁	－	中青花	－	中色絵	－	タイ褐	－	
		他陶磁	2	本陶	2	沖施	5	初沖無	1	沖無	1	
		陶土	2	土器	－	円盤	－	鉄製品	－	骨・貝製	－	
		ガラス	－	石製品	－	瓦	2	青銅	－	その他	－	
	SP922	中青磁	－	中白磁	1	中青花	2	中色絵	－	タイ褐	－	
		他陶磁	－	本陶	1	沖施	1	初沖無	－	沖無	1	
		陶土	－	土器	－	円盤	－	鉄製品	－	骨・貝製	－	
		ガラス	－	石製品	－	瓦	5	青銅	－	その他	－	
	SR14	中青磁	2	中白磁	－	中青花	－	中色絵	－	タイ褐	1	アラスジケマン
		他陶磁	1	本陶	－	沖施	－	初沖無	－	沖無	－	
		陶土	－	土器	－	円盤	－	鉄製品	－	骨・貝製	－	
		ガラス	－	石製品	－	瓦	4	青銅	－	その他	－	
	洞穴遺構	中青磁	－	中白磁	－	中青花	－	中色絵	－	タイ褐	－	ヤコウガイの蓋
		他陶磁	－	本陶	－	沖施	－	初沖無	－	沖無	－	
		陶土	－	土器	－	円盤	－	鉄製品	－	骨・貝製	－	
		ガラス	－	石製品	－	瓦	－	青銅	－	その他	－	
近世2～近世3	SA2	中青磁	16	中白磁	6	中青花	25	中色絵	2	タイ褐	12	ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、チョウセンサザエ、オニノツノガイ、マガキガイ、ハナマルユキ、ミツカドボラ、イトマキボラ、アンボンクロザメ、マダライモ カワラガイ、ヒレジャコガイ、アラスジケマン、ハマグリの一種
		他陶磁	35	本陶	35	沖施	75	初沖無	5	沖無	60	
		陶土	43	土器	3	円盤	1	鉄製品	4	骨・貝製	－	
		ガラス	－	石製品	1	瓦	260	青銅	2	その他	7	

※凡例…中青磁:中国産青磁　中白磁:中国産白磁　中青花:中国産青花　中色絵:中国産色絵　タイ褐:タイ産褐釉陶器
他陶磁:その他陶磁器　本陶:本土産陶磁器　沖施:沖縄産施釉陶器　初沖無:初期沖縄産無釉陶器　沖無:沖縄産無釉陶器
陶土:陶質土器　土器:各種土器　円盤:円盤状製品　鉄製品:金属製品　骨・貝製:骨製品・貝製品　ガラス:ガラス玉・ガラス製品
石製品:各種石製品　瓦:明朝系瓦（平・丸）　青銅:青銅製品（銭貨含む）　その他:その他製品
貝類については、出土種を記載。

第39表　各遺構出土遺物点数表d

時期	遺構	出土遺物										貝類遺体
近世2～近世3	SA3	中青磁	11	中白磁	2	中青花	7	中色絵	1	タイ褐	5	サラサバテイラ、ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、チョウセンサザエ、カンギク、イワ(ウミニナ)カニモリ、クワノミカニモリ、マガキガイ、ハナマルユキ、イトマキボラ、マダライモ、巻貝不明 カリガネエガイ、ウラキツキガイ、イソハマグリ、アラスジケマン、ホソスジイナミ、ハマグリの一種、二枚貝不明
		他陶磁	13	本陶	―	沖施	30	初沖無	―	沖無	23	
		陶土	7	土器	―	円盤	―	鉄製品	2	骨・貝製	―	
		ガラス	―	石製品	―	瓦	45	青銅	2	その他	8	
	SA12・15間	中青磁	―	中白磁	―	中青花	1	中色絵	1	タイ褐	―	
		他陶磁	3	本陶	1	沖施	―	初沖無	1	沖無	4	
		陶土	―	土器	―	円盤	―	鉄製品	―	骨・貝製	―	
		ガラス	―	石製品	1	瓦	12	青銅	―	その他	1	
	SA14	中青磁	2	中白磁	1	中青花	1	中色絵	―	タイ褐	2	
		他陶磁	3	本陶	―	沖施	―	初沖無	―	沖無	―	
		陶土	―	土器	―	円盤	―	鉄製品	―	骨・貝製	―	
		ガラス	―	石製品	―	瓦	1	青銅	―	その他	―	
	SA24	中青磁	8	中白磁	―	中青花	―	中色絵	―	タイ褐	1	ムラサキウズ、サラサバテイラ、ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、チョウセンサザエ、カンギク、カンギクの蓋、マングローブアマガイ、アマオブネ、イワ(ウミニナ)カニモリ、マガキガイ、アカイガレイシ ウラキツキガイ、ヒメツキガイ、ヌノメガイ、アラスジケマン、スダレハマグリ
		他陶磁	10	本陶	3	沖施	―	初沖無	―	沖無	1	
		陶土	―	土器	1	円盤	―	鉄製品	3	骨・貝製	―	
		ガラス	―	石製品	―	瓦	12	青銅	1	その他	1	
	SA25	中青磁	17	中白磁	―	中青花	4	中色絵	―	タイ褐	6	サラサバテイラ、ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、チョウセンサザエの蓋、オニノツノガイ、マガキガイ、ツノレイシ、コオニコブシ、巻貝不明 ヒレジャコガイ、ハマグリの一種、ダテオキシジミ
		他陶磁	13	本陶	1	沖施	―	初沖無	―	沖無	―	
		陶土	―	土器	―	円盤	―	鉄製品	―	骨・貝製	―	
		ガラス	―	石製品	―	瓦	17	青銅	1	その他	―	
	SS28	中青磁	―	中白磁	―	中青花	―	中色絵	―	タイ褐	―	
		他陶磁	―	本陶	―	沖施	―	初沖無	―	沖無	1	
		陶土	―	土器	―	円盤	―	鉄製品	―	骨・貝製	―	
		ガラス	―	石製品	―	瓦	93	青銅	―	その他	1	
	階段状遺構埋土	中青磁	1	中白磁	―	中青花	2	中色絵	―	タイ褐	―	サラサバテイラ、ヤコウガイの蓋、チョウセンサザエ、チョウセンサザエの蓋 ウラキツキガイ
		他陶磁	―	本陶	3	沖施	11	初沖無	1	沖無	12	
		陶土	―	土器	9	円盤	1	金属	―	骨・貝製	―	
		ガラス	―	石製品	―	瓦	102	青銅	1	その他	1	
	SS24	中青磁	8	中白磁	―	中青花	6	中色絵	―	タイ褐	6	ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、イワ(ウミニナ)カニモリ、巻貝不明 ヒレジャコガイ、アラスジケマン
		他陶磁	8	本陶	2	沖施	1	初沖無	―	沖無	2	
		陶土	9	土器	―	円盤	1	鉄製品	―	骨・貝製	―	
		ガラス	1	石製品	―	瓦	78	青銅	8	その他	4	
近世3	SA9	中青磁	105	中白磁	11	中青花	15	中色絵	1	タイ褐	33	ニシキウズ、サラサバテイラ、ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、チョウセンサザエ、チョウセンサザエの蓋、カンギク、オニノツノガイ、イワ(ウミニナ)カニモリ、クワノミカニモリ、マガキガイ、ヤクシマダカラ、ハナマルユキ、オキニシ、ムラサキイガレイシ、ツノレイシ、ツノテツレイシ、コオニコブシ、イトマキボラ、オオミノムシ、ササガタイモ、ヤナギシボリイモ、ヤセイモ、キヌカツギイモ、イボシマイモ、イモガイ科不明、オキナワヤマタニシ、巻貝不明 ウラキツキガイ、ヒレジャコガイ、シャコガイ科不明、イソハマグリ、シレナシジミ、ヌノメガイ、アラスジケマン、ユウカゲハマグリ、ハマグリの一種、ダテオキシジミ
		他陶磁	144	本陶	10	沖施	5	初沖無	1	沖無	4	
		陶土	―	土器	9	円盤	2	鉄製品	15	骨・貝製	―	
		ガラス	2	石製品	―	瓦	169	青銅	42	その他	16	
	SA9・16間 SA9・16構築層	中青磁	3	中白磁	―	中青花	―	中色絵	―	タイ褐	2	ヤコウガイ
		他陶磁	10	本陶	3	沖施	―	初沖無	―	沖無	―	
		陶土	―	土器	―	円盤	―	鉄製品	―	骨・貝製	―	
		ガラス	―	石製品	―	瓦	1	青銅	―	その他	―	
	SA9・16間	中青磁	32	中白磁	9	中青花	16	中色絵	1	タイ褐	80	サラサバテイラ、ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、チョウセンサザエの蓋、カンギク、マガキガイ、ハナマルユキ、ムラサキイガレイシ、コオニコブシ、イモガイ科不明 ヒレジャコガイ、アラスジケマン
		他陶磁	287	本陶	12	沖施	1	初沖無	2	沖無	2	
		陶土	―	土器	3	円盤	―	鉄製品	1	骨・貝製	―	
		ガラス	―	石製品	1	瓦	54	青銅	1	その他	27	
	SA16	中青磁	8	中白磁	―	中青花	4	中色絵	―	タイ褐	4	ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、チョウセンサザエ、イワ(ウミニナ)カニモリ メンガイの一種、ヒレジャコガイ、ヌノメガイ、アラスジケマン
		他陶磁	23	本陶	2	沖施	―	初沖無	―	沖無	―	
		陶土	1	土器	―	円盤	―	鉄製品	―	骨・貝製	―	
		ガラス	―	石製品	―	瓦	24	青銅	1	その他	14	

※凡例…中青磁:中国産青磁　中白磁:中国産白磁　中青花:中国産青花　中色絵:中国産色絵　タイ褐:タイ産褐釉陶器
他陶磁:その他陶磁器　本陶:本土産陶磁器　沖施:沖縄産施釉陶器　初沖無:初期沖縄産無釉陶器　沖無:沖縄産無釉陶器
陶土:陶質土器　土器:各種土器　円盤:円盤状製品　鉄製品:金属製品　骨・貝製:骨製品・貝製品　ガラス:ガラス玉・ガラス製品
石製品:各種石製品　瓦:明朝系瓦（平・丸）　青銅:青銅製品（銭貨含む）　その他:その他製品
貝類については、出土種を記載。

第39表　各遺構出土遺物点数表e

時期	遺構	出土遺物										貝類遺体
近世3	SA19	中青磁	3	中白磁	1	中青花	3	中色絵	－	タイ褐	1	ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、マガキガイ、コオニコブシ ウラキツキガイ、ヒレジャコガイ
		他陶磁	10	本陶	2	沖施	－	初沖無	8	沖無	－	
		陶土	－	土器	2	円盤	－	鉄製品	1	骨･貝製	－	
		ガラス	－	石製品	－	瓦	31	青銅	－	その他	2	
	SA23	中青磁	29	中白磁	15	中青花	35	中色絵	1	タイ褐	8	サラサバテイラ、ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、チョウセンサザエ、チョウセンサザエの蓋、カンギク、アマオブネ、オニノツノガイ、イワ(ウミニナ)カニモリ、クワノミカニモリ、マガキガイ、ハナマルユキ、スクミウズラガイ、コオニコブシ、イモガイ科不明 ヒレジャコガイ、シャコガイ科不明、アラスジケマン、ホソスジイナミ
		他陶磁	76	本陶	2	沖施	3	初沖無	2	沖無	5	
		陶土	－	土器	7	円盤	1	鉄製品	－	骨･貝製	－	
		ガラス	1	石製品	2	瓦	83	青銅	3	その他	1	
	SE2	中青磁	2	中白磁	3	中青花	3	中色絵	－	タイ褐	1	ヤコウガイ、カンギク、マガキガイ 二枚貝不明
		他陶磁	5	本陶	1	沖施	1	初沖無	－	沖無	3	
		陶土	－	土器	1	円盤	1	鉄製品	－	骨･貝製	－	
		ガラス	－	石製品	－	瓦	161	青銅	－	その他	－	
	SL2	中青磁	－	中白磁	－	中青花	－	中色絵	－	タイ褐	－	ヤコウガイの蓋、カンギク、クワノミカニモリ ウラキツキガイ、シャコガイ科不明、イソハマグリ、アラスジケマン、ハマグリの一種
		他陶磁	4	本陶	－	沖施	－	初沖無	3	沖無	－	
		陶土	－	土器	1	円盤	1	鉄製品	4	骨･貝製	－	
		ガラス	－	石製品	－	瓦	53	青銅	－	その他	1	
	SM1	中青磁	3	中白磁	1	中青花	－	中色絵	－	タイ褐	－	ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、オハグロガイ、ハナマルユキ ウラキツキガイ
		他陶磁	2	本陶	1	沖施	14	初沖無	－	沖無	12	
		陶土	4	土器	－	円盤	2	鉄製品	1	骨･貝製	－	
		ガラス	－	石製品	－	瓦	27	青銅	1	その他	－	
	SM8	中青磁	1	中白磁	8	中青花	10	中色絵	－	タイ褐	4	サラサバテイラ、ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、チョウセンサザエ、カンギク、巻貝不明 シャゴウ、シャコガイ科不明、リュウキュウマスオ、アラスジケマン、ホソスジイナミ、ハマグリの一種
		他陶磁	8	本陶	－	沖施	－	初沖無	－	沖無	1	
		陶土	－	土器	12	円盤	1	鉄製品	1	骨･貝製	－	
		ガラス	－	石製品	－	瓦	432	青銅	1	その他	2	
	SM11	中青磁	2	中白磁	－	中青花	7	中色絵	－	タイ褐	1	サラサバテイラ、ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、チョウセンサザエ、チョウセンサザエの蓋、カンギク、ネジマガキ、マガキガイ メンガイの一種、カワラガイ、オオシラナミ(シラナミ)、イソハマグリ、リュウキュウシラトリ、アラスジケマン、ホソスジイナミ、ハマグリの一種、ダテオキシジミ
		他陶磁	4	本陶	－	沖施	1	初沖無	2	沖無	4	
		陶土	－	土器	5	円盤	－	鉄製品	－	骨･貝製	－	
		ガラス	－	石製品	2	瓦	100	青銅	－	その他	2	
	SM12	中青磁	6	中白磁	2	中青花	5	中色絵	1	タイ褐	－	ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、チョウセンサザエ ハマグリの一種
		他陶磁	4	本陶	－	沖施	－	初沖無	－	沖無	－	
		陶土	－	土器	6	円盤	－	鉄製品	4	骨･貝製	－	
		ガラス	－	石製品	－	瓦	73	青銅	1	その他	－	
	SM14	中青磁	1	中白磁	－	中青花	1	中色絵	－	タイ褐	1	ヤコウガイの蓋 ウラキツキガイ、イオウハマグリ、ハマグリの一種
		他陶磁	1	本陶	－	沖施	1	初沖無	3	沖無	2	
		陶土	－	土器	－	円盤	2	鉄製品	4	骨･貝製	－	
		ガラス	－	石製品	－	瓦	44	青銅	－	その他	1	
	SM20	中青磁	11	中白磁	40	中青花	18	中色絵	1	タイ褐	54	ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、オニノツノガイ、ユキゲイモ シャコガイ科不明、イソハマグリ、ヌノメガイ、アラスジケマン
		他陶磁	300	本陶	2	沖施	－	初沖無	1	沖無	2	
		陶土	－	土器	1	円盤	－	鉄製品	－	骨･貝製	－	
		ガラス	－	石製品	－	瓦	7	青銅	1	その他	2	
	SS10	中青磁	2	中白磁	－	中青花	－	中色絵	－	タイ褐	－	ヤコウガイ、カンギク、イワ(ウミニナ)カニモリ、クワノミカニモリ、ハナマルユキ ウラキツキガイ、ヒレジャコガイ、アラスジケマン
		他陶磁	－	本陶	－	沖施	－	初沖無	－	沖無	－	
		陶土	－	土器	2	円盤	－	鉄製品	3	骨･貝製	－	
		ガラス	－	石製品	－	瓦	1	青銅	3	その他	1	
	SS16	中青磁	5	中白磁	－	中青花	1	中色絵	－	タイ褐	－	ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、チョウセンサザエ、カンギク、オニノツノガイ、イワ(ウミニナ)カニモリ、クワノミカニモリ、マガキガイ、スイショウガイ科不明、タカラガイ科不明、ホラガイ、シマベッコウバイ、イトマキボラ科不明、マダライモ、イモガイ科不明、巻貝不明 ウラキツキガイ、アラスジケマン
		他陶磁	2	本陶	－	沖施	－	初沖無	－	沖無	1	
		陶土	－	土器	－	円盤	－	鉄製品	2	骨･貝製	－	
		ガラス	2	石製品	－	瓦	8	青銅	2	その他	2	

※凡例…中青磁:中国産青磁　中白磁:中国産白磁　中青花:中国産青花　中色絵:中国産色絵　タイ褐:タイ産褐釉陶器
他陶磁:その他陶磁器　本陶:本土産陶磁器　沖施:沖縄産施釉陶器　初沖無:初期沖縄産無釉陶器　沖無:沖縄産無釉陶器
陶土:陶質土器　土器:各種土器　円盤:円盤状製品　鉄製品:金属製品　骨・貝製:骨製品・貝製品　ガラス:ガラス玉・ガラス製品
石製品:各種石製品　瓦:明朝系瓦（平・丸）　青銅:青銅製品（銭貨含む）　その他:その他製品
貝類については、出土種を記載。

第39表　各遺構出土遺物点数表f

時期	遺構	出土遺物										貝類遺体
近世3	SS17	中青磁	4	中白磁	－	中青花	2	中色絵	－	タイ褐	3	ヤコウガイ、オニノツノガイ、シマベッコウバイ、イトマキボラ科不明、イモガイ科不明、巻貝不明 イタヤガイ科不明、ヒレジャコガイ
		他陶磁	2	本陶	－	沖施	－	初沖無	－	沖無	－	
		陶土	－	土器	3	円盤	1	鉄製品	－	骨・貝製	－	
		ガラス	－	石製品	－	瓦	33	青銅	－	その他	1	
	SX37	中青磁	8	中白磁	2	中青花	6	中色絵	－	タイ褐	8	サラサバテイラ、ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、チョウセンサザエ、オニノツノガイ、マガキガイ ヒレジャコガイ
		他陶磁	48	本陶	1	沖施	－	初沖無	－	沖無	1	
		陶土	－	土器	1	円盤	－	鉄製品	－	骨・貝製	－	
		ガラス	－	石製品	－	瓦	11	青銅	1	その他	2	
近世3～グスク1	SK78	中青磁	－	中白磁	4	中青花	2	中色絵	－	タイ褐	2	チョウセンサザエ
		他陶磁	13	本陶	4	沖施	－	初沖無	－	沖無	－	
		陶土	－	土器	5	円盤	－	鉄製品	－	骨・貝製	－	
		ガラス	－	石製品	－	瓦	14	青銅	－	その他	－	
	SM6	中青磁	2	中白磁	－	中青花	－	中色絵	－	タイ褐	2	サラサバテイラ、カンギク、オニノツノガイ、イワ(ウミニナ)カニモリ、マガキガイ、オキナワヤマタニシ ウラキツキガイ、アラスジケマン、ハマグリの一種
		他陶磁	3	本陶	－	沖施	－	初沖無	－	沖無	－	
		陶土	－	土器	1	円盤	－	鉄製品	2	骨・貝製	－	
		ガラス	－	石製品	－	瓦	19	青銅	－	その他	－	
	SM13	中青磁	7	中白磁	4	中青花	5	中色絵	－	タイ褐	6	ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、チョウセンサザエ、カンギク、マガキガイ、シマベッコウバイ メンガイの一種、ヒレジャコガイ、アラスジケマン
		他陶磁	6	本陶	2	沖施	3	初沖無	－	沖無	－	
		陶土	－	土器	8	円盤	1	鉄製品	9	骨・貝製	－	
		ガラス	－	石製品	－	瓦	520	青銅	3	その他	5	
	SM25	中青磁	4	中白磁	2	中青花	1	中色絵	－	タイ褐	1	オオベッコウガサガイ、ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、チョウセンサザエ、巻貝不明 二枚貝不明
		他陶磁	1	本陶	1	沖施	－	初沖無	－	沖無	－	
		陶土	－	土器	－	円盤	－	鉄製品	－	骨・貝製	－	
		ガラス	－	石製品	－	瓦	9	青銅	－	その他	5	
	SX14	中青磁	28	中白磁	4	中青花	28	中色絵	3	タイ褐	27	ニシキウズ、ムラサキウズ、ギンタカハマ、サラサバテイラ、ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、チョウセンサザエ、チョウセンサザエの蓋、カンギク、オニノツノガイ、イワ(ウミニナ)カニモリ、クワノミカニモリ、オハグロガイ、ネジマガキ、マガキガイ、クモガイ、ヤクシマダカラ、ホシダカラ、ハナビラダカラ、ハナマルユキ、オキニシ、ミツカドボラ、ヒロウネレイシダマシ、キイロイガレイシ、ツノレイシ、ツノテツレイシ、コオニコブシ、シマベッコウバイ、ツノマタモドキ、クロフモドキ、コマダライモ、サヤガタイモ、アカシマミナシ、ユキゲイモ、ヤナギシボリイモ、キヌカツギイモ、イモガイ科不明、カワニナ、オキナワヤマタニシ、シュリマイマイ エガイ、ベニエガイ、フネガイ科不明、ウラキツキガイ、ヒメツキガイ、リュウキュウザル、カワラガイ、ヒメジャコ、ヒレジャコガイ、ナガジャコ(トガリシラナミ)、イソハマグリ、ナミノコマスオ、シレナシジミ、ヌノメガイ、アラスジケマン、ホソスジイナミ、スダレハマグリ、ハマグリの一種
		他陶磁	100	本陶	5	沖施	－	初沖無	1	沖無	4	
		陶土	－	土器	3	円盤	1	鉄製品	14	骨・貝製	1	
		ガラス	1	石製品	－	瓦	220	青銅	1	その他	12	
グスク1	SJ2001	中青磁	－	中白磁	－	中青花	－	中色絵	－	タイ褐	－	ニシキウズ、ヤコウガイ、コシダカサザエ、カンギク、クワノミカニモリ、マガキガイ、チトセボラ アラスジケマン、ホソスジイナミ、ハマグリの一種
		他陶磁	－	本陶	－	沖施	－	初沖無	－	沖無	－	
		陶土	－	土器	－	円盤	－	鉄製品	2	骨・貝製	－	
		ガラス	－	石製品	－	瓦	－	青銅	－	その他	－	
	SK22	中青磁	18	中白磁	1	中青花	2	中色絵	－	タイ褐	4	ニシキウズ、ギンタカハマ、サラサバテイラ、ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、チョウセンサザエ、チョウセンサザエの蓋、カンギク、オニノツノガイ、イワ(ウミニナ)カニモリ、クワノミカニモリ、マガキガイ、キイロダカラ、ハナマルユキ、ツノレイシ、ツノテツレイシ、シラクモガイ、オニコブシ、コオニコブシ、イトマキボラ、ツノマタモドキ、サツマビナ、アンボンクロザメ、サラサモドキ、ヤナギシボリイモ、イボシマイモ、イモガイ科不明 ベニエガイ、リュウキュウサルボオ、ミドリアオリ、メンガイの一種、ウラキツキガイ、ヒメジャコ、ヒレジャコガイ、マスオガイ、シレナシジミ、ヌノメガイ、アラスジケマン、ホソスジイナミ、ユウカゲハマグリ、スダレハマグリ
		他陶磁	15	本陶	－	沖施	1	初沖無	－	沖無	－	
		陶土	－	土器	1	円盤	－	鉄製品	3	骨・貝製	－	
		ガラス	－	石製品	－	瓦	－	青銅	1	その他	－	
	SK51	中青磁	42	中白磁	5	中青花	50	中色絵	3	タイ褐	40	オオベッコウガサガイ、ニシキウズ、ギンタカハマ、サラサバテイラ、オキナワイシダタミ、ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、チョウセンサザエ、チョウセンサザエの蓋、カンギク、カンギクの蓋、マルアマオブネ、アマオブネ、オニノツノガイ、コオニノツノガイ、イワ(ウミニナ)カニモリ、クワノミカニモリ、リュウキュウウミニナ、ヘナタリ、カワアイ、オハグロガイ、ネジマガキ、マガキガイ、クモガイ、スイショウガイ科不明、ヤクシマダカラ、ホソヤクシマダカラ、ホシダカラ、ハナビラダカラ、キイロダカラ、ハナマルユキ、タカラガイ科不明、オキニシ、ガンゼキボラ、ムラサキイガレイシ、ツノレイシ、シラクモガイ、オニコブシ、コオニコブシ、シマベッコウバイ、ヤナギシボリイモ、イボシマイモ、イモガイ科不明、オキナワヤマタニシ、ツヤギセルガイ、シュリマイマイ ノコギリガキ、ウラキツキガイ、ヒメジャコ、ヒレジャコガイ、ナガジャコ(トガリシラナミ)、リュウキュウバカガイ、イソハマグリ、リュウキュウナミノコ、ニッコウガイ、サメザラ、モチヅキザラ、シレナシジミ、ヌノメガイ、アラスジケマン、ホソスジイナミ、ユウカゲハマグリ、イオウハマグリ、ハマグリの一種、ダテオキシジミ
		他陶磁	237	本陶	1	沖施	－	初沖無	－	沖無	1	
		陶土	－	土器	21	円盤	－	鉄製品	38	骨・貝製	2	
		ガラス	3	石製品	2	瓦	3	青銅	15	その他	57	

※凡例…中青磁:中国産青磁　中白磁:中国産白磁　中青花:中国産青花　中色絵:中国産色絵　タイ褐:タイ産褐釉陶器
他陶磁:その他陶磁器　本陶:本土産陶磁器　沖施:沖縄産施釉陶器　初沖無:初期沖縄産無釉陶器　沖無:沖縄産無釉陶器
陶土:陶質土器　土器:各種土器　円盤:円盤状製品　鉄製品:金属製品　骨・貝製:骨製品・貝製品　ガラス:ガラス玉・ガラス製品
石製品:各種石製品　瓦:明朝系瓦（平・丸）　青銅:青銅製品（銭貨含む）　その他:その他製品
貝類については、出土種を記載。

第39表　各遺構出土遺物点数表g

時期	遺構	出土遺物										貝類遺体
グスク1	SK52	中青磁	2	中白磁	－	中青花	－	中色絵	1	タイ褐	2	リュウキュウウノアシ、ニシキウズ、ギンタカハマ、サラサバテイラ、オキナワイシダタミ、ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、チョウセンサザエ、チョウセンサザエの蓋、コシダカサザエ、カンギク、カンギクの蓋、ヒメイシダタミアマオブネ、キバアマガイ、マルアマオブネ、アマオブネ、ニシキアマオブネ、アマオブネ科不明、オニノツノガイ、コオニノツノガイ、カヤノミカニモリ、イワ(ウミニナ)カニモリ、クワノミカニモリ、ゴマフニナ、リュウキュウウミニナ、カワアイ、オハグロガイ、マガキガイ、クモガイ、アツキクスズメ、ホソヤクシマダカラ、ハナビラダカラ、キイロダカラ、ハナマルユキ、ホウシュノタマガイ、ウズラガイ、シロシノマキ、シオボラ、ヒロウネレイシダマシ、アカイガレイシ、ツノレイシ、ツノテツレイシ、コイワニシ、コオニコブシ、シマベッコウバイ、イトマキボラ、ナンヨウクロミナシ、マダライモ、コマダライモ、サヤガタイモ、ヤナギシボリイモ、キヌカツギイモ、イモガイ科不明、オキナワヤマタニシ、ツヤギセルガイ ベニエガイ、リュウキュウサルボオ、イタヤガイ科不明、メンガイの一種、ウラキツキガイ、シロザル、キクザル科不明、リュウキュウザル、カワラガイ、ヒメジャコ、ヒレジャコガイ、リュウキュウバカガイ、イソハマグリ、ナミノコマスオ、リュウキュウナミノコ、サメザラ、リュウキュウシラトリ、モチヅキザラ、マスオガイ、シレナシジミ、アラヌノメ、ヌノメガイ、アラスジケマン、ホソスジイナミ、ユウカゲハマグリ、マルオミナエシ、オイノカガミ、ヒメリュウキュウアサリ、スダレハマグリ、イオウハマグリ、ハマグリの一種、ダテオキシジミ、二枚貝不明
		他陶磁	4	本陶	－	沖施	－	初沖無	－	沖無	－	
		陶土	－	土器	－	円盤	－	鉄製品	－	骨・貝製	－	
		ガラス	－	石製品	－	瓦	－	青銅	－	その他	－	
	SK53	中青磁	5	中白磁	－	中青花	2	中色絵	－	タイ褐	4	ニシキウズ、オキナワイシダタミ、ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、チョウセンサザエ、チョウセンサザエの蓋、コシダカサザエ、カンギク、カンギクの蓋、ヒメイシダタミアマオブネ、マングローブアマガイ、マルアマオブネ、オニノツノガイ、カヤノミカニモリ、イワ(ウミニナ)カニモリ、クワノミカニモリ、リュウキュウウミニナ、イボウミニナ、カワアイ、オハグロガイ、マガキガイ、ハナビラダカラ、ホウシュノタマガイ、ヒロウネレイシダマシ、ムラサキイガレイシ、ツノレイシ、ツノテツレイシ、コオニコブシ、シマベッコウバイ、リュウキュウツノマタガイ、ナンヨウクロミナシ、マダライモ、サヤガタイモ、キヌカツギイモ、オキナワヤマタニシ エガイ、ベニエガイ、ウラキツキガイ、カワラガイ、ヒメジャコ、ヒレジャコガイ、オオシラナミ(シラナミ)、リュウキュウバカガイ、イソハマグリ、モチヅキザラ、マスオガイ、シレナシジミ、ヌノメガイ、アラスジケマン、ホソスジイナミ、ユウカゲハマグリ、オイノカガミ、ヒメアサリ、スダレハマグリ、イオウハマグリ、ハマグリの一種、ダテオキシジミ
		他陶磁	12	本陶	1	沖施	1	初沖無	－	沖無	－	
		陶土	－	土器	23	円盤	－	鉄製品	3	骨・貝製	－	
		ガラス	－	石製品	1	瓦	－	青銅	2	その他	－	
	SK56	中青磁	1	中白磁	－	中青花	－	中色絵	－	タイ褐	1	カンギク、イワ(ウミニナ)カニモリ、クワノミカニモリ アラスジケマン
		他陶磁	1	本陶	－	沖施	－	初沖無	－	沖無	－	
		陶土	－	土器	－	円盤	－	鉄製品	9	骨・貝製	－	
		ガラス	409	石製品	－	瓦	－	青銅	36	その他	－	
	SK59	中青磁	4	中白磁	1	中青花	17	中色絵	－	タイ褐	5	ニシキウズ、ギンタカハマ、サラサバテイラ、オキナワイシダタミ、ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、チョウセンサザエ、チョウセンサザエの蓋、コシダカサザエ、カンギク、カンギクの蓋、オニノツノガイ、イワ(ウミニナ)カニモリ、クワノミカニモリ、イボウミニナ、カワアイ、オハグロガイ、マガキガイ、イボソデガイ、クモガイ、スイジガイ、スイショウガイ科不明、アツキクスズメ、ハナビラダカラ、オキニシ、ツノレイシ、シラクモガイ、コオニコブシ、シマベッコウバイ、イトマキボラ、ミカドミナシ、クロフモドキ、マダライモ、サヤガタイモ、イモガイ科不明、オキナワヤマタニシ、シュリマイマイ エガイ、ベニエガイ、メンガイの一種、ウラキツキガイ、カワラガイ、ヒメジャコ、ヒレジャコガイ、イソハマグリ、シレナシジミ、ヌノメガイ、アラスジケマン、ユウカゲハマグリ、スダレハマグリ、ハマグリ一の種、ダテオキシジミ、二枚貝不明
		他陶磁	104	本陶	2	沖施	－	初沖無	－	沖無	2	
		陶土	－	土器	2	円盤	－	鉄製品	1	骨・貝製	－	
		ガラス	－	石製品	－	瓦	2	青銅	－	その他	18	
	SK61	中青磁	3	中白磁	－	中青花	1	中色絵	－	タイ褐	－	サラサバテイラ、オキナワイシダタミ、ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、カンギク、カンギクの蓋、マルアマオブネ、アマオブネ、イワ(ウミニナ)カニモリ、クワノミカニモリ、ホウシュノタマガイ、ヒロウネレイシダマシ、アカイガレイシ、コオニコブシ、シマベッコウバイ、ツノマタモドキ ベニエガイ、クロチョウガイ、ウラキツキガイ、イソハマグリ、アラスジケマン
		他陶磁	1	本陶	－	沖施	－	初沖無	－	沖無	－	
		陶土	－	土器	－	円盤	－	鉄製品	－	骨・貝製	－	
		ガラス	－	石製品	－	瓦	－	青銅	－	その他	1	
	SK72	中青磁	3	中白磁	－	中青花	－	中色絵	－	タイ褐	3	サラサバテイラ、ヤコウガイ、オニノツノガイ、マガキガイ、オキニシ ヒレジャコガイ
		他陶磁	6	本陶	2	沖施	－	初沖無	－	沖無	1	
		陶土	－	土器	－	円盤	2	鉄製品	－	骨・貝製	－	
		ガラス	－	石製品	－	瓦	－	青銅	2	その他	3	
	SK73	中青磁	－	中白磁	－	中青花	－	中色絵	－	タイ褐	－	
		他陶磁	－	本陶	－	沖施	－	初沖無	－	沖無	－	
		陶土	－	土器	－	円盤	－	鉄製品	－	骨・貝製	－	
		ガラス	－	石製品	－	瓦	1	青銅	－	その他	－	

※凡例…中青磁:中国産青磁　中白磁:中国産白磁　中青花:中国産青花　中色絵:中国産色絵　タイ褐:タイ産褐釉陶器
他陶磁:その他陶磁器　本陶:本土産陶磁器　沖施:沖縄産施釉陶器　初沖無:初期沖縄産無釉陶器　沖無:沖縄産無釉陶器
陶土:陶質土器　土器:各種土器　円盤:円盤状製品　鉄製品:金属製品　骨・貝製:骨製品・貝製品　ガラス:ガラス玉・ガラス製品
石製品:各種石製品　瓦:明朝系瓦（平・丸）　青銅:青銅製品（銭貨含む）　その他:その他製品
貝類については、出土種を記載。

第39表　各遺構出土遺物点数表h

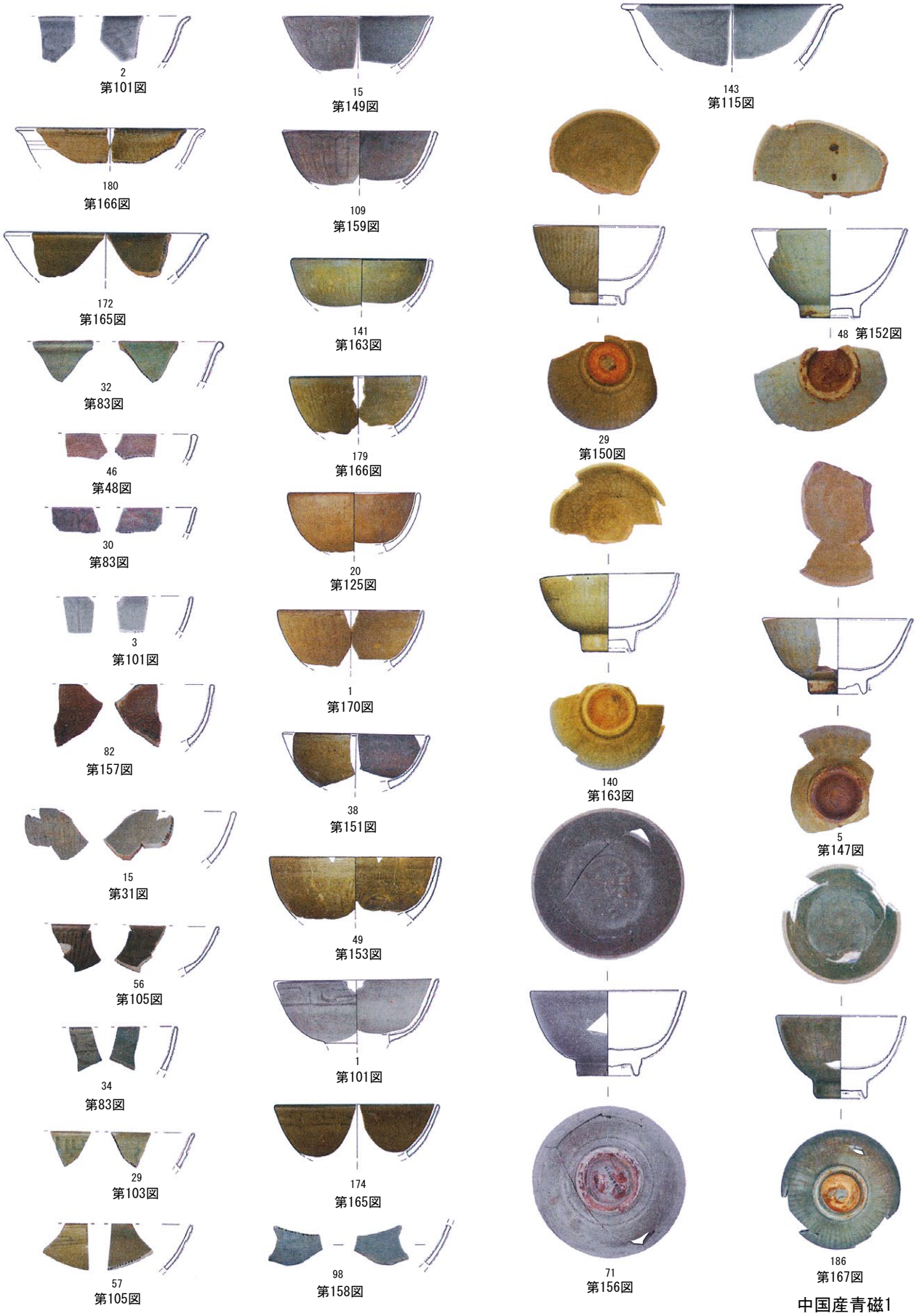
時期	遺構	出土遺物										貝類遺体
グスク1	SM18	中青磁	3	中白磁	－	中青花	－	中色絵	－	タイ褐	7	ニシキウズ、ムラサキウズ、ギンタカハマ、サラサバテイラ、オキナワイシダタミ、ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、チョウセンサザエ、チョウセンサザエの蓋、コシダカサザエ、カンギク、マルアマオブネ、アマオブネ、オニノツノガイ、カヤノミカニモリ、イワ(ウミニナ)カニモリ、クワノミカニモリ、リュウキュウウミニナ、イボウミニナ、ヘナタリ、カワアイ、オハグロガイ、マガキガイ、クモガイ、アツキクスズメ、ホシキヌタ、タルダカラ、ハナビラダカラ、キイロダカラ、ハナマルユキ、オキニシ、シオボラ、ガンゼキボラ、ヒロウネレイシダマシ、テツレイシ、コイワニシ、オニコブシ、コオニコブシ、シマベッコウバイ、ツノマタモドキ、ナンヨウクロミナシ、マダライモ、サヤガタイモ、ヤナギシボリイモ、キヌカツギイモ、イボシマイモ、イモガイ科不明、ブドウガイ類、ウスイロヘソドガイ エガイ、メンガイの一種、ウラキツキガイ、リュウキュウザル、カワラガイ、ヒレジャコガイ、オオシラナミ(シラナミ)、リュウキュウバカガイ、イソハマグリ、ナミノコマスオ、リュウキュウナミノコ、リュウキュウシラトリ、マスオガイ、リュウキュウマスオ、シレナシジミ、ヌノメガイ、アラスジケマン、ホソスジイナミ、ユウカゲハマグリ、オイノカガミ、スダレハマグリ、イオウハマグリ、ハマグリの一種、ダテオキシジミ
		他陶磁	32	本陶	－	沖施	－	初沖無	－	沖無	－	
		陶土	－	土器	1	円盤	－	鉄製品	1	骨・貝製	－	
		ガラス	－	石製品	－	瓦	－	青銅	－	その他	－	
	SM19	中青磁	25	中白磁	－	中青花	5	中色絵	1	タイ褐	36	ヒザラガイの一種、リュウキュウウノアシ、ニシキウズ、ムラサキウズ、ギンタカハマ、サラサバテイラ、ニシウズ科不明、ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、チョウセンサザエ、チョウセンサザエの蓋、コシダカサザエ、カンギク、カンギクの蓋、オオウラウズ、ヒメイシダタミアマオブネ、マングローブアマガイ、マルアマオブネ、アマオブネ、アマオブネ科不明、オニノツノガイ、コオニノツノガイ、メオニノツノガイ、カヤノミカニモリ、イワ(ウミニナ)カニモリ、クワノミカニモリ、リュウキュウウミニナ、イボウミニナ、フトヘナタリ、オハグロガイ、ムカシタモト、マガキガイ、イボソデガイ、スイショウガイ科不明、アツキクスズメ、ヤクシマダカラ、ホソヤクシマダカラ、ホシキヌタ、ヤナギシボリダカラ、ナツメモドキ、タルダカラ、コモンダカラ、ハナビラダカラ、キイロダカラ、ハナマルユキ、タカラガイ科不明、トミガイ、ヘソアキトミガイ、リスガイ、ホウシュノタマガイ、オキニシ、シノマキ、シオボラ、ハナワレイシ、ムラサキイガレイシ、アカイガレイシ、ツノレイシ、ツノテツレイシ、コイボテツレイシ、シラクモガイ、コオニコブシ、ウスイロバイ、シマベッコウバイ、リュウキュウツノマタガイ、ツノマタモドキ、シロオビヤタテ、ツムガタイモフデ、ナンヨウクロミナシ、アンボンクロザメ、マダライモ、コマダライモ、サヤガタイモ、ゴマフイモ、サラサモドキ、ヤナギシボリイモ、ヤセイモ、キヌカツギイモ、イボシマイモ、ベニイタダキイモ、アンボイナ、イモガイ科不明、オキナワヤマタニシ、巻貝不明 エガイ、ベニエガイ、ミノガイ、メンガイの一種、クチベニツキガイ、ウラキツキガイ、リュウキュウザル、カワラガイ、ヒメジャコ、ヒレジャコガイ、オオシラナミ(シラナミ)、ナガジャコ(トガリシラナミ)、シャコガイ科不明、リュウキュウバカガイ、イソハマグリ、ナミノコマスオ、サメザラ、リュウキュウシラトリ、リュウキュウマスオ、シレナシジミ、ヌノメガイ、アラスジケマン、ホソスジイナミ、ユウカゲハマグリ、マルオミナエシ、オイノカガミ、ヒメアサリ、スダレハマグリ、イオウハマグリ、ハマグリの一種、ダテオキシジミ、二枚貝不明
		他陶磁	41	本陶	2	沖施	－	初沖無	－	沖無	－	
		陶土	－	土器	21	円盤	1	鉄製品	45	骨・貝製	3	
		ガラス	4	石製品	－	瓦	1	青銅	37	その他	2	
	SM21	中青磁	4	中白磁	15	中青花	23	中色絵	－	タイ褐	6	ヤコウガイの蓋、チョウセンサザエ、巻貝不明 ヒレジャコガイ、ダテオキシジミ
		他陶磁	11	本陶	－	沖施	1	初沖無	－	沖無	－	
		陶土	－	土器	11	円盤	－	鉄製品	－	骨・貝製	－	
		ガラス	－	石製品	－	瓦	8	青銅	3	その他	5	
	SM24	中青磁	16	中白磁	6	中青花	44	中色絵	3	タイ褐	17	オキナワイシダタミ、ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、チョウセンサザエ、チョウセンサザエの蓋、カンギク、オハグロガイ、マガキガイ、ハナマルユキ、イトマキボラ ウラキツキガイ、カワラガイ、シャコガイ科不明、リュウキュウマスオ、シレナシジミ、ヌノメガイ、アラスジケマン、ハマグリの一種、ダテオキシジミ、パイプウニ
		他陶磁	42	本陶	－	沖施	－	初沖無	－	沖無	1	
		陶土	－	土器	5	円盤	－	鉄製品	4	骨・貝製	1	
		ガラス	1	石製品	3	瓦	12	青銅	6	その他	6	
	SP123	中青磁	－	中白磁	－	中青花	－	中色絵	－	タイ褐	－	
		他陶磁	－	本陶	－	沖施	－	初沖無	－	沖無	－	
		陶土	－	土器	－	円盤	－	鉄製品	－	骨・貝製	－	
		ガラス	－	石製品	－	瓦	－	青銅	1	その他	－	
	SP127	中青磁	1	中白磁	－	中青花	－	中色絵	－	タイ褐	－	
		他陶磁	－	本陶	－	沖施	－	初沖無	－	沖無	－	
		陶土	－	土器	－	円盤	－	鉄製品	－	骨・貝製	－	
		ガラス	－	石製品	－	瓦	－	青銅	－	その他	－	
	SP138	中青磁	2	中白磁	－	中青花	－	中色絵	－	タイ褐	－	
		他陶磁	－	本陶	－	沖施	－	初沖無	－	沖無	－	
		陶土	－	土器	1	円盤	－	鉄製品	－	骨・貝製	－	
		ガラス	－	石製品	－	瓦	－	青銅	－	その他	－	
	SP313	中青磁	1	中白磁	－	中青花	－	中色絵	－	タイ褐	－	
		他陶磁	－	本陶	－	沖施	－	初沖無	－	沖無	－	
		陶土	－	土器	－	円盤	－	鉄製品	－	骨・貝製	－	
		ガラス	－	石製品	－	瓦	－	青銅	－	その他	－	

※凡例…中青磁:中国産青磁　中白磁:中国産白磁　中青花:中国産青花　中色絵:中国産色絵　タイ褐:タイ産褐釉陶器
他陶磁:その他陶磁器　本陶:本土産陶磁器　沖施:沖縄産施釉陶器　初沖無:初期沖縄産無釉陶器　沖無:沖縄産無釉陶器
陶土:陶質土器　土器:各種土器　円盤:円盤状製品　鉄製品:金属製品　骨・貝製:骨製品・貝製品　ガラス:ガラス玉・ガラス製品
石製品:各種石製品　瓦:明朝系瓦（平・丸）　青銅:青銅製品（銭貨含む）　その他:その他製品
貝類については、出土種を記載。

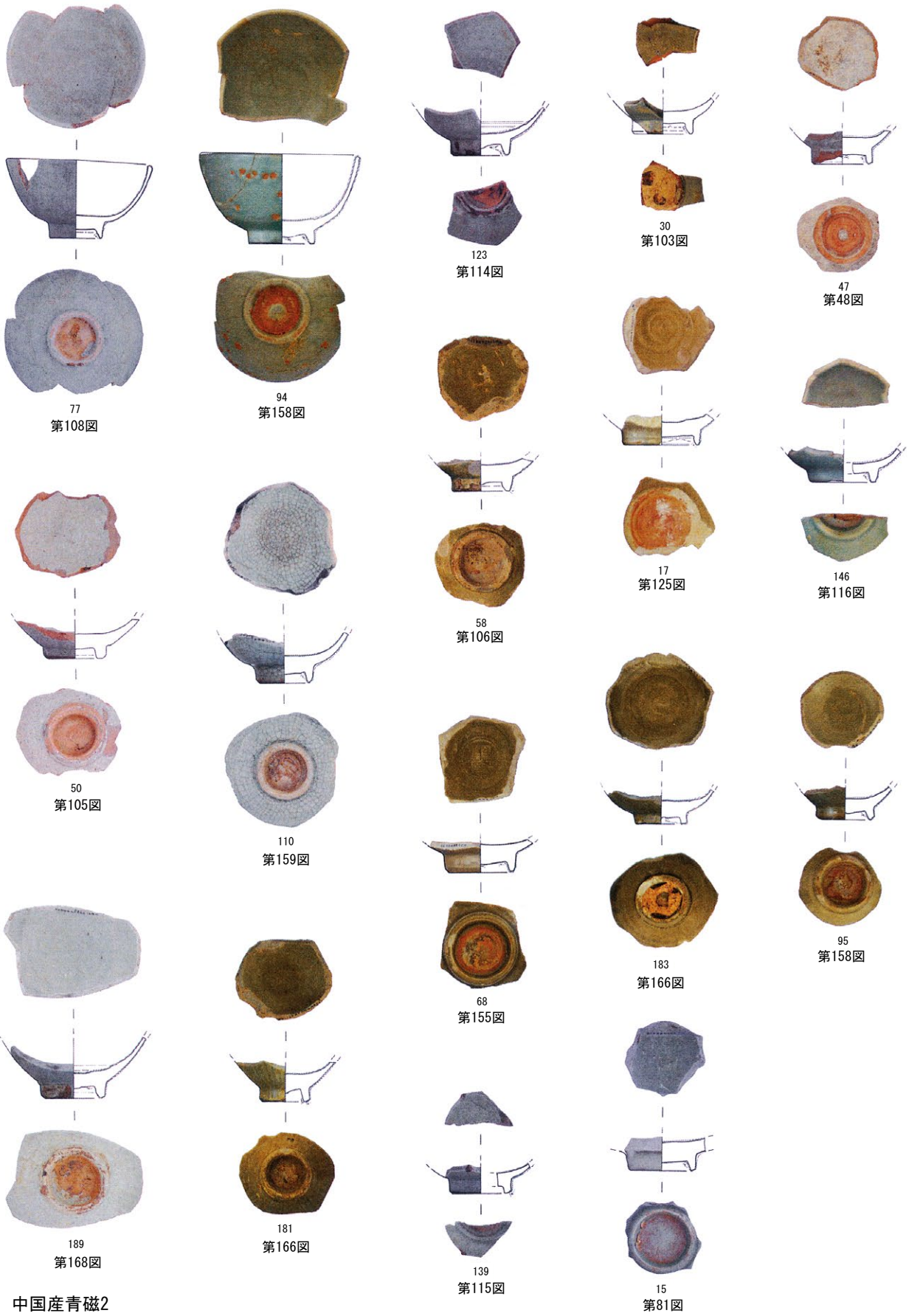
第39表　各遺構出土遺物点数表i

時期	遺構	出土遺物										貝類遺体
グスク1	SP410	中青磁	1	中白磁	－	中青花	－	中色絵	－	タイ褐	－	
		他陶磁	－	本陶	－	沖施	－	初沖無	－	沖無	－	
		陶土	－	土器	－	円盤	－	鉄製品	－	骨・貝製	－	
		ガラス	－	石製品	－	瓦	－	青銅	－	その他	－	
	SP559	中青磁	1	中白磁	－	中青花	－	中色絵	－	タイ褐	－	
		他陶磁	－	本陶	－	沖施	－	初沖無	－	沖無	－	
		陶土	－	土器	－	円盤	－	鉄製品	－	骨・貝製	－	
		ガラス	－	石製品	－	瓦	－	青銅	1	その他	－	
	SP560	中青磁	－	中白磁	－	中青花	－	中色絵	－	タイ褐	－	
		他陶磁	－	本陶	－	沖施	－	初沖無	－	沖無	－	
		陶土	－	土器	－	円盤	－	鉄製品	1	骨・貝製	－	
		ガラス	－	石製品	－	瓦	－	青銅	－	その他	－	
	SP561	中青磁	－	中白磁	－	中青花	－	中色絵	－	タイ褐	1	ニシキウズ、オニノツノガイ、クワノミカニモリ、マガキガイ、ハナマルユキ ウラキツキガイ、アラスジケマン
		他陶磁	1	本陶	－	沖施	－	初沖無	－	沖無	－	
		陶土	－	土器	－	円盤	－	鉄製品	－	骨・貝製	－	
		ガラス	－	石製品	－	瓦	－	青銅	2	その他	－	
	SP891	中青磁	3	中白磁	－	中青花	－	中色絵	－	タイ褐	－	クワノミカニモリ、マガキガイ アラスジケマン
		他陶磁	－	本陶	－	沖施	－	初沖無	－	沖無	－	
		陶土	－	土器	－	円盤	－	鉄製品	－	骨・貝製	－	
		ガラス	3	石製品	－	瓦	－	青銅	1	その他	－	
	SX3	中青磁	24	中白磁	1	中青花	6	中色絵	－	タイ褐	16	ニシキウズ、サラサバテイラ、ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、チョウセンサザエ、コシダカサザエ、カンギク、アマオブネ、オニノツノガイ、マガキガイ、ホシキヌタ、ハナビラダカラ、ハナマルユキ、タカラガイ科不明、ミツカドボラ、シラクモガイ、シマベッコウバイ、サヤガタイモ、ジュズカケサヤガタイモ、キヌカツギイモ ウラキツキガイ、ヒレジャコガイ、リュウキュウシラトリ、シレナシジミ、ヌノメガイ、アラスジケマン、ダテオキシジミ
		他陶磁	33	本陶	－	沖施	－	初沖無	－	沖無	5	
		陶土	－	土器	2	円盤	1	鉄製品	8	骨・貝製	－	
		ガラス	－	石製品	－	瓦	20	青銅	7	その他	3	
	SX28	中青磁	3	中白磁	－	中青花	－	中色絵	－	タイ褐	6	ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、チョウセンサザエ、チョウセンサザエの蓋 リュウキュウサルボオ、アラヌノメ、アラスジケマン、リュウキュウアサリ、ハマグリの一種
		他陶磁	6	本陶	－	沖施	－	初沖無	－	沖無	－	
		陶土	－	土器	－	円盤	－	鉄製品	－	骨・貝製	－	
		ガラス	－	石製品	－	瓦	－	青銅	－	その他	－	
	SX41	中青磁	7	中白磁	2	中青花	3	中色絵	1	タイ褐	3	ニシキウズ、サラサバテイラ、ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、チョウセンサザエ、チョウセンサザエの蓋、カンギク、オニノツノガイ、イワ(ウミニナ)カニモリ、クワノミカニモリ、オハグロガイ、マガキガイ、ヤクシマダカラ、オキニシ、ガンゼキボラ、ツノレイシ、コオニコブシ、マダライモ、サラサモドキ、ヤナギシボリイモ、オキナワヤマタニシ カワラガイ、ヒメジャコ、ヒレジャコガイ、オオシラナミ(シラナミ)、イソハマグリ、ナミノコマスオ、ヌノメガイ、アラスジケマン、オイノカガミ、イオウハマグリ、ハマグリの一種
		他陶磁	25	本陶	－	沖施	－	初沖無	－	沖無	－	
		陶土	－	土器	－	円盤	－	鉄製品	－	骨・貝製	－	
		ガラス	－	石製品	－	瓦	－	青銅	－	その他	1	
	SX42	中青磁	4	中白磁	1	中青花	4	中色絵	－	タイ褐	－	ニシキウズ、ギンタカハマ、サラサバテイラ、リュウテン、ヤコウガイ、ヤコウガイの蓋、チョウセンサザエ、コシダカサザエ、カンギク、カンギクの蓋、オニノツノガイ、イワ(ウミニナ)カニモリ、クワノミカニモリ、リュウキュウウミニナ、カワアイ、オハグロガイ、ネジマガキ、マガキガイ、クモガイ、クチムラサキダカラ、ハナビラダカラ、ハナマルユキ、チドリダカラ、オキニシ、ガンゼキボラ、ツノレイシ、ツノテツレイシ、シラクモガイ、テツレイシ、カブトサンゴヤドリ、オニコブシ、コオニコブシ、ウスイロバイ、シマベッコウバイ、イトマキボラ、ツノマタモドキ、チトセボラ、チョウセンフデ、ナンヨウクロミナシ、クロフモドキ、クロザメモドキ、マダライモ、サヤガタイモ、アカシマミナシ、ユキゲイモ、ヤナギシボリイモ、ヤセイモ、キヌカツギイモ、イボシマイモ エガイ、メンガイの一種、ウラキツキガイ、シロザル、キクザル科不明、リュウキュウザル、カワラガイ、ヒメジャコ、ヒレジャコガイ、オオシラナミ(シラナミ)、ナガジャコ（トガリシラナミ）、リュウキュウバカガイ、イソハマグリ、ナミノコマスオ、マスオガイ、リュウキュウマスオ、シレナシジミ、アラヌノメ、ヌノメガイ、アラスジケマン、ホソスジイナミ、ユウカゲハマグリ、マルオミナエシ、オイノカガミ、ヒメリュウキュウアサリ、スダレハマグリ、オキナワワスレ、イオウハマグリ、ハマグリの一種、ダテオキシジミ、二枚貝不明
		他陶磁	17	本陶	3	沖施	－	初沖無	－	沖無	－	
		陶土	－	土器	8	円盤	－	鉄製品	4	骨・貝製	－	
		ガラス	－	石製品	1	瓦	－	青銅	2	その他	1	
グスク2	SA31・32・23間	中青磁	2	中白磁	－	中青花	－	中色絵	－	タイ褐	－	ニシキウズ、ムラサキウズ、ギンタカハマ、サラサバテイラ、チョウセンサザエ、チョウセンサザエの蓋、カンギク、カンギクの蓋、オニノツノガイ、オハグロガイ、マガキガイ、イボソデガイ、クモガイ、ハナビラダカラ、イワカワトキワガイ、ツノレイシ、シラクモガイ、コオニコブシ、シマベッコウバイ、イトマキボラ、ツノマタモドキ、カバミナシ エガイ、メンガイ一の種、シャコガイ科不明、ヌノメガイ、アラスジケマン、ハマグリの一種
		他陶磁	5	本陶	－	沖施	－	初沖無	－	沖無	－	
		陶土	－	土器	4	円盤	－	鉄製品	－	骨・貝製	－	
		ガラス	－	石製品	－	瓦	－	青銅	－	その他	－	

※凡例…中青磁:中国産青磁　中白磁:中国産白磁　中青花:中国産青花　中色絵:中国産色絵　タイ褐:タイ産褐釉陶器
他陶磁:その他陶磁器　本陶:本土産陶磁器　沖施:沖縄産施釉陶器　初沖無:初期沖縄産無釉陶器　沖無:沖縄産無釉陶器
陶土:陶質土器　土器:各種土器　円盤:円盤状製品　鉄製品:金属製品　骨・貝製:骨製品・貝製品　ガラス:ガラス玉・ガラス製品
石製品:各種石製品　瓦:明朝系瓦（平・丸）　青銅:青銅製品（銭貨含む）　その他:その他製品
貝類については、出土種を記載。

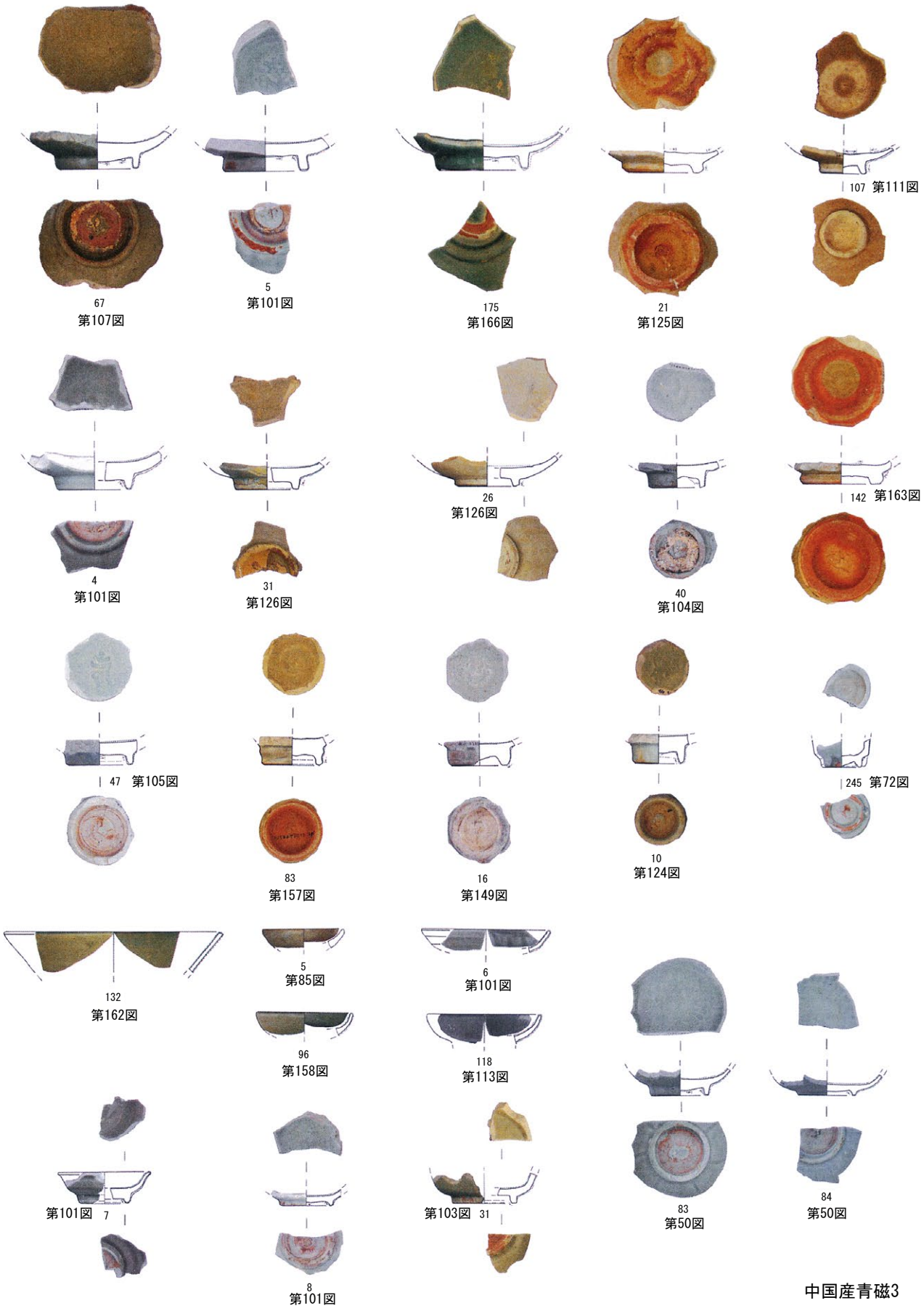


第194図 出土遺物一覧１

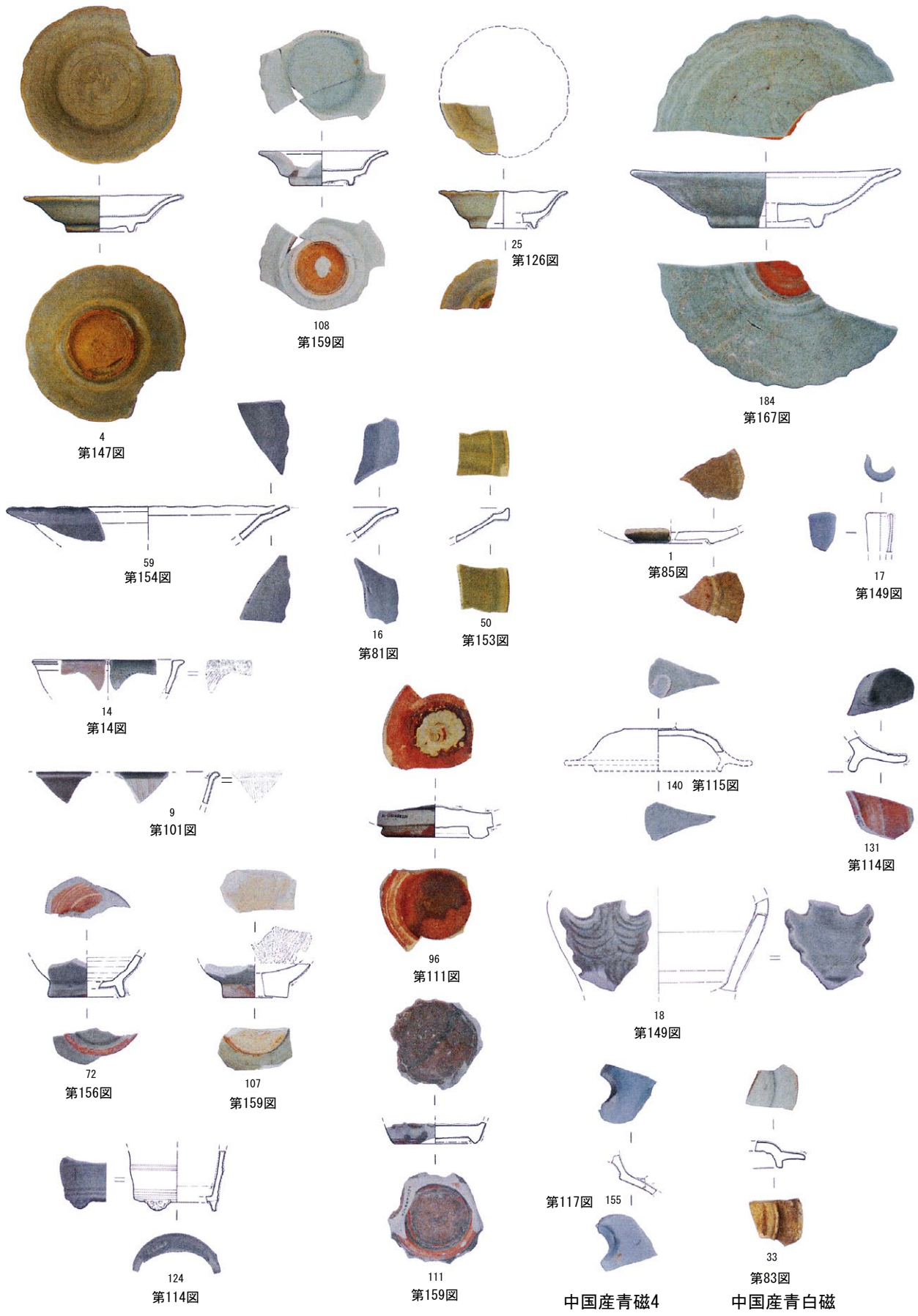


中国産青磁2

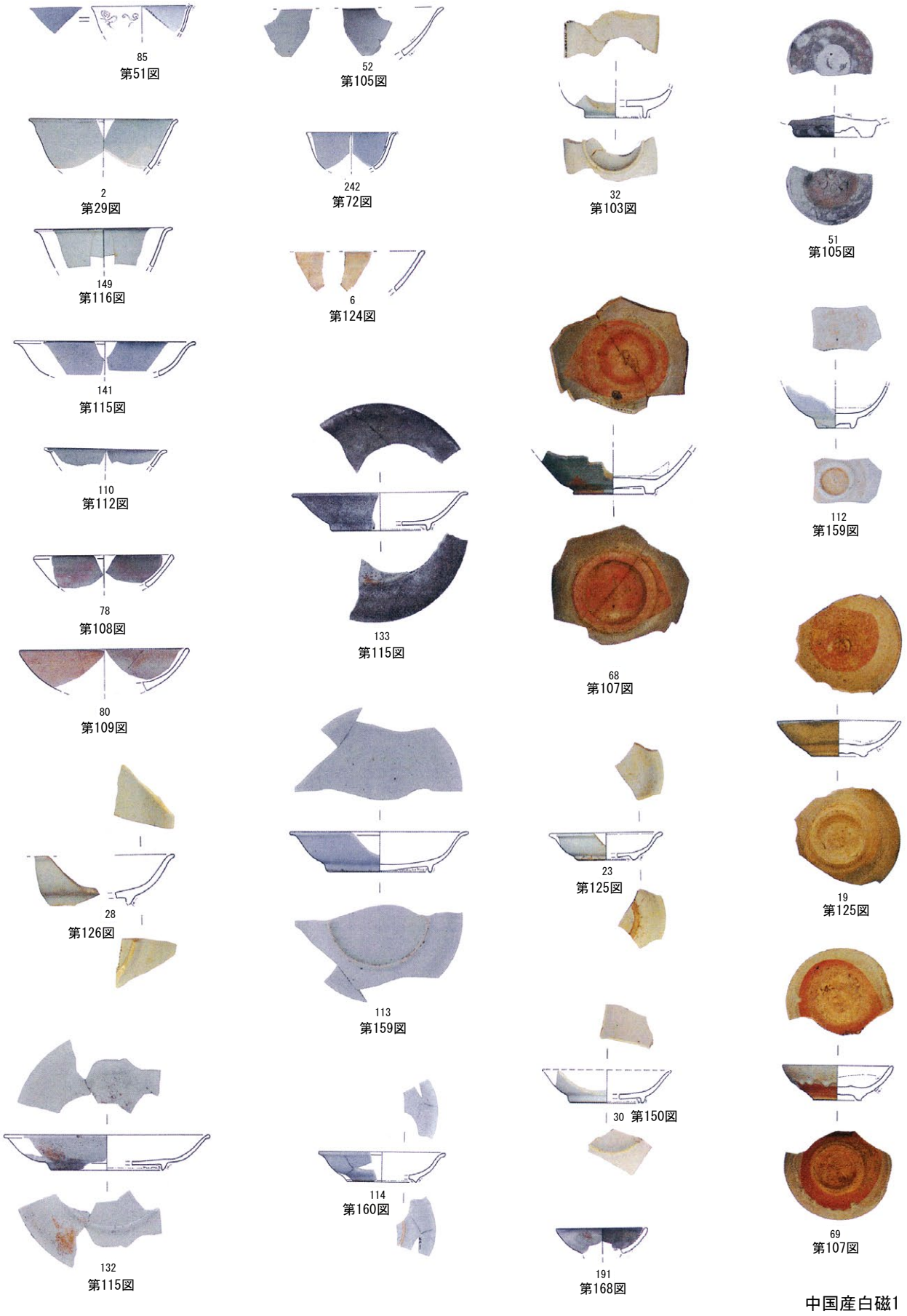
第195図 出土遺物一覧２



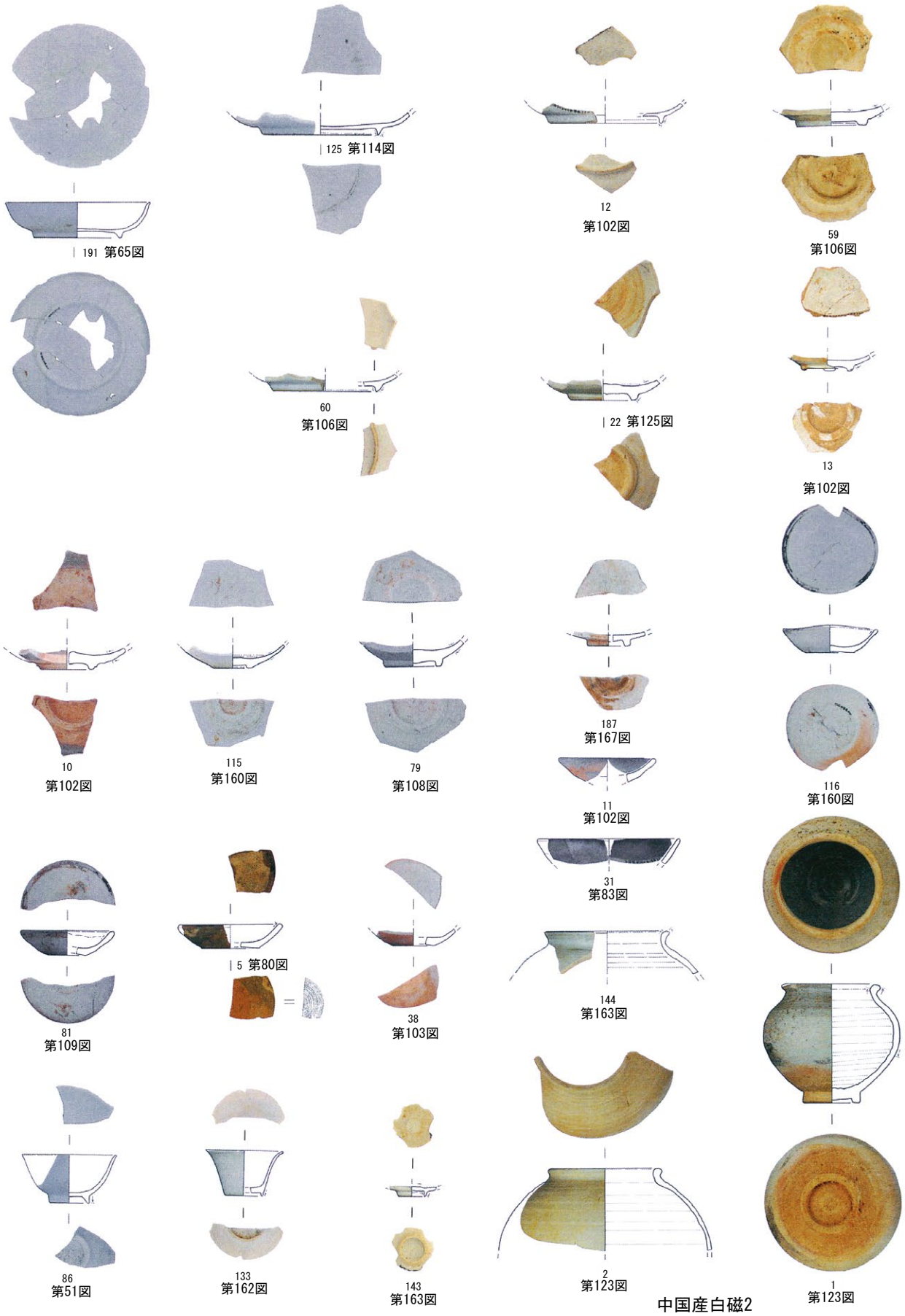
第196図 出土遺物一覧３



第197図 出土遺物一覧４

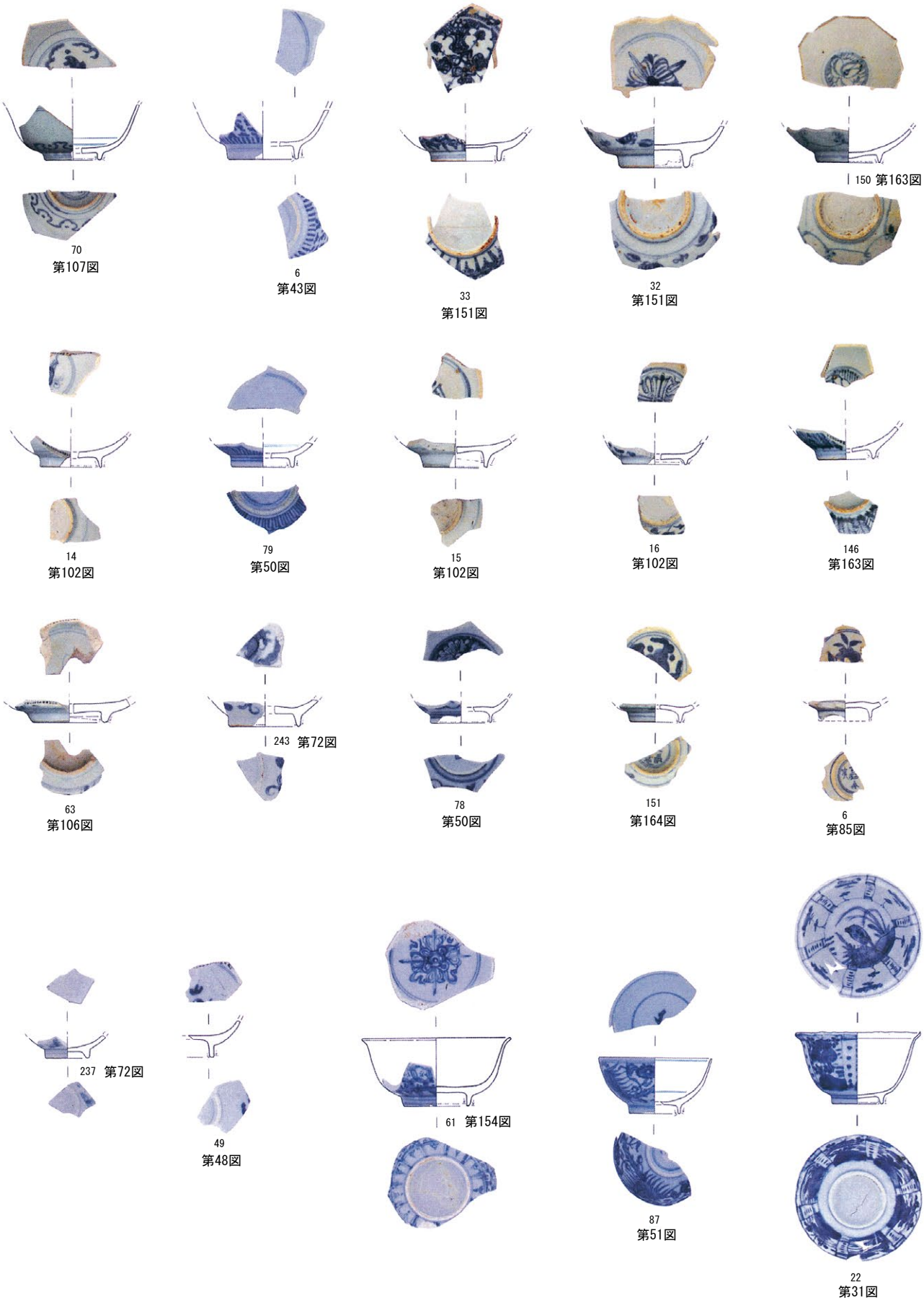


第198図 出土遺物一覧５



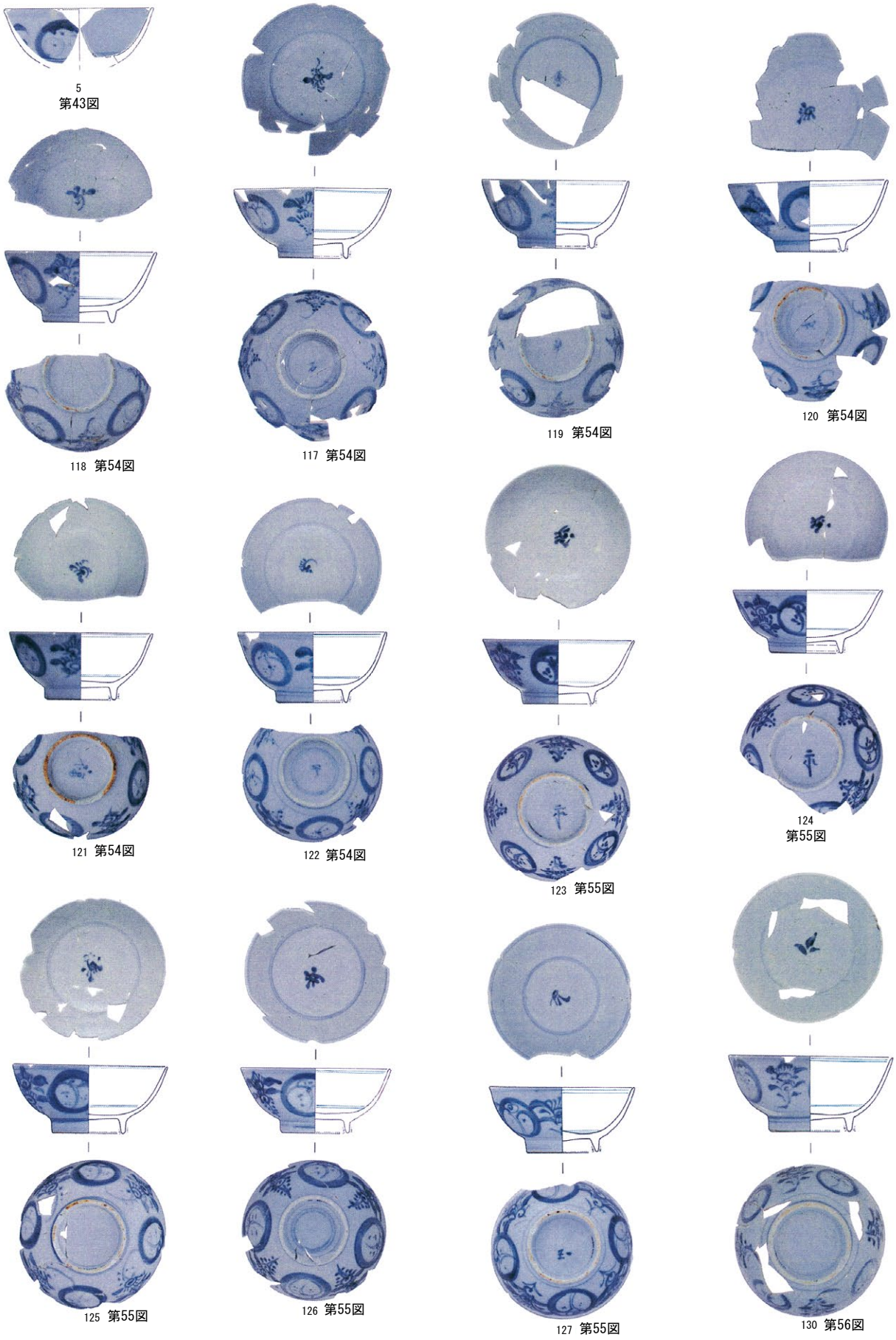
第199図 出土遺物一覧６

第200図 出土遺物一覧７



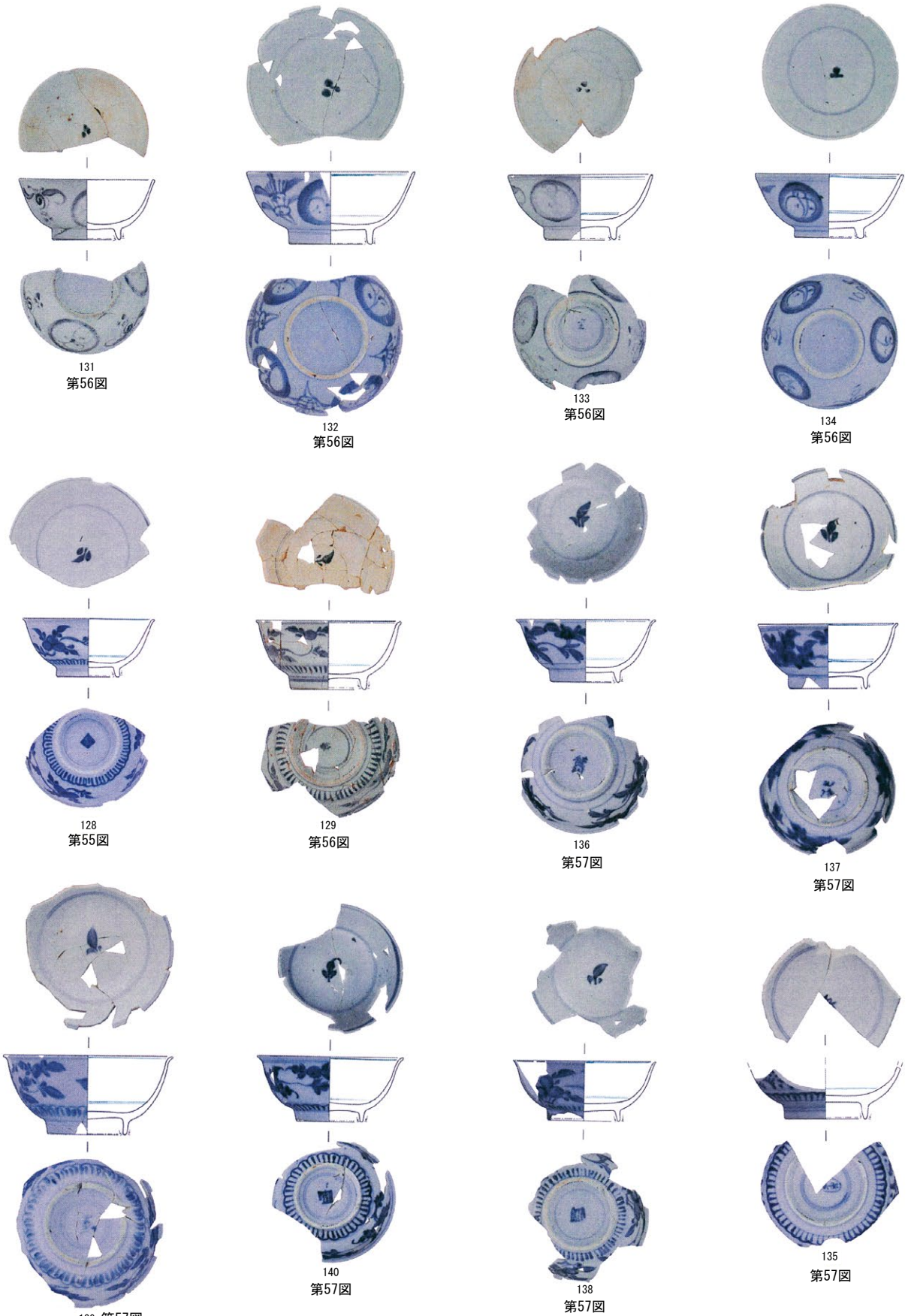
中国産青花2

第201図 出土遺物一覧８



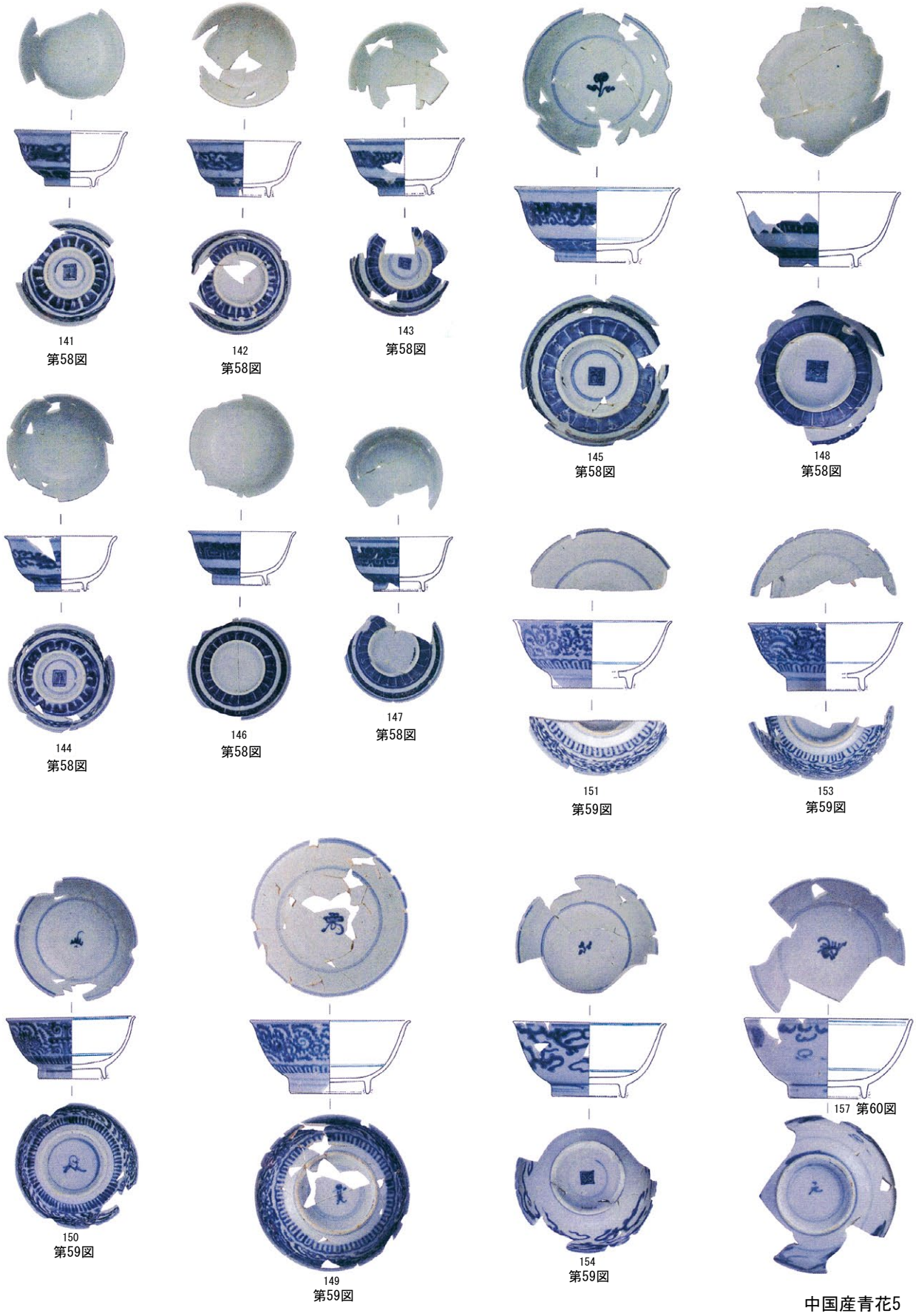
中国産青花3

第202図 出土遺物一覧９

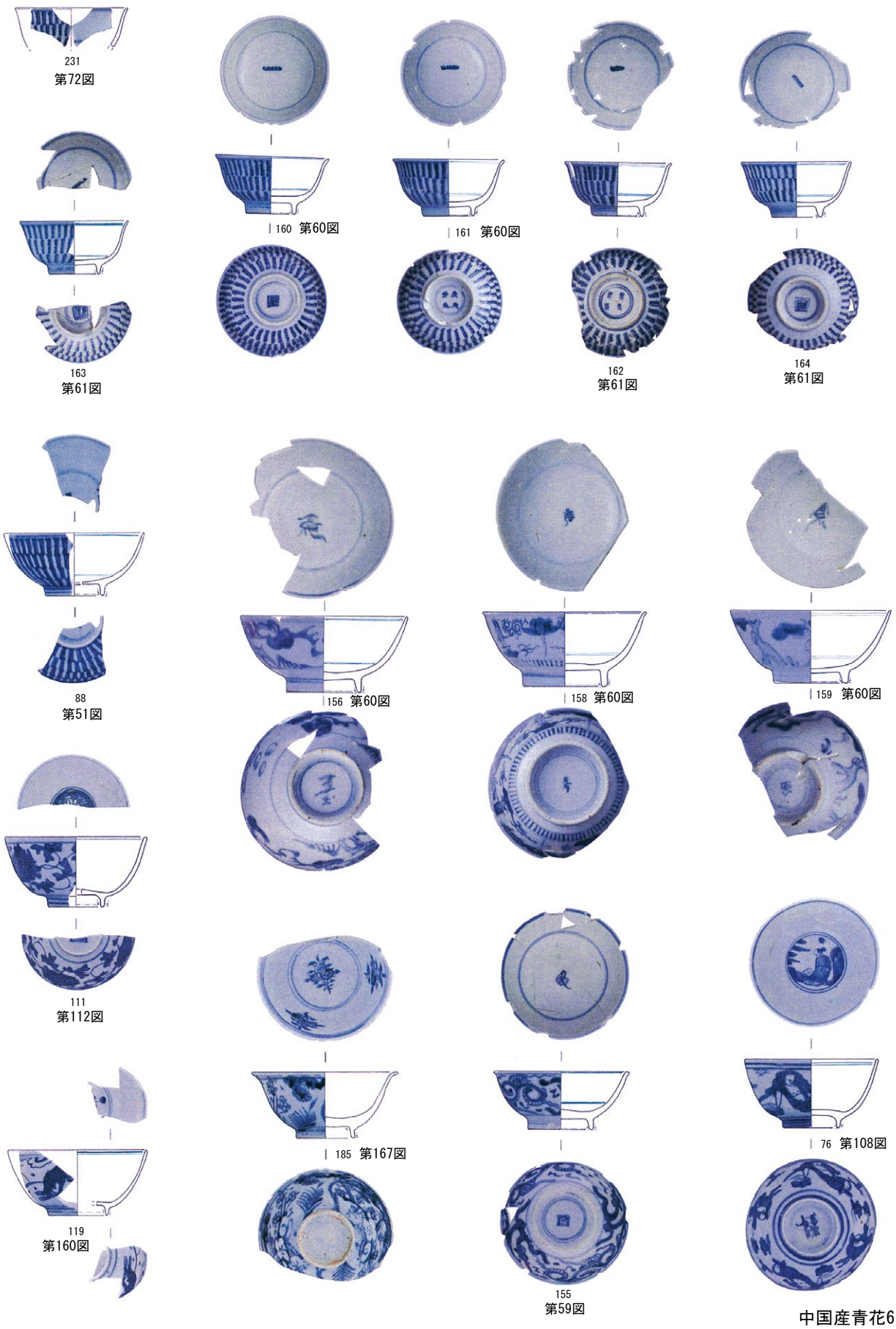


中国産青花4

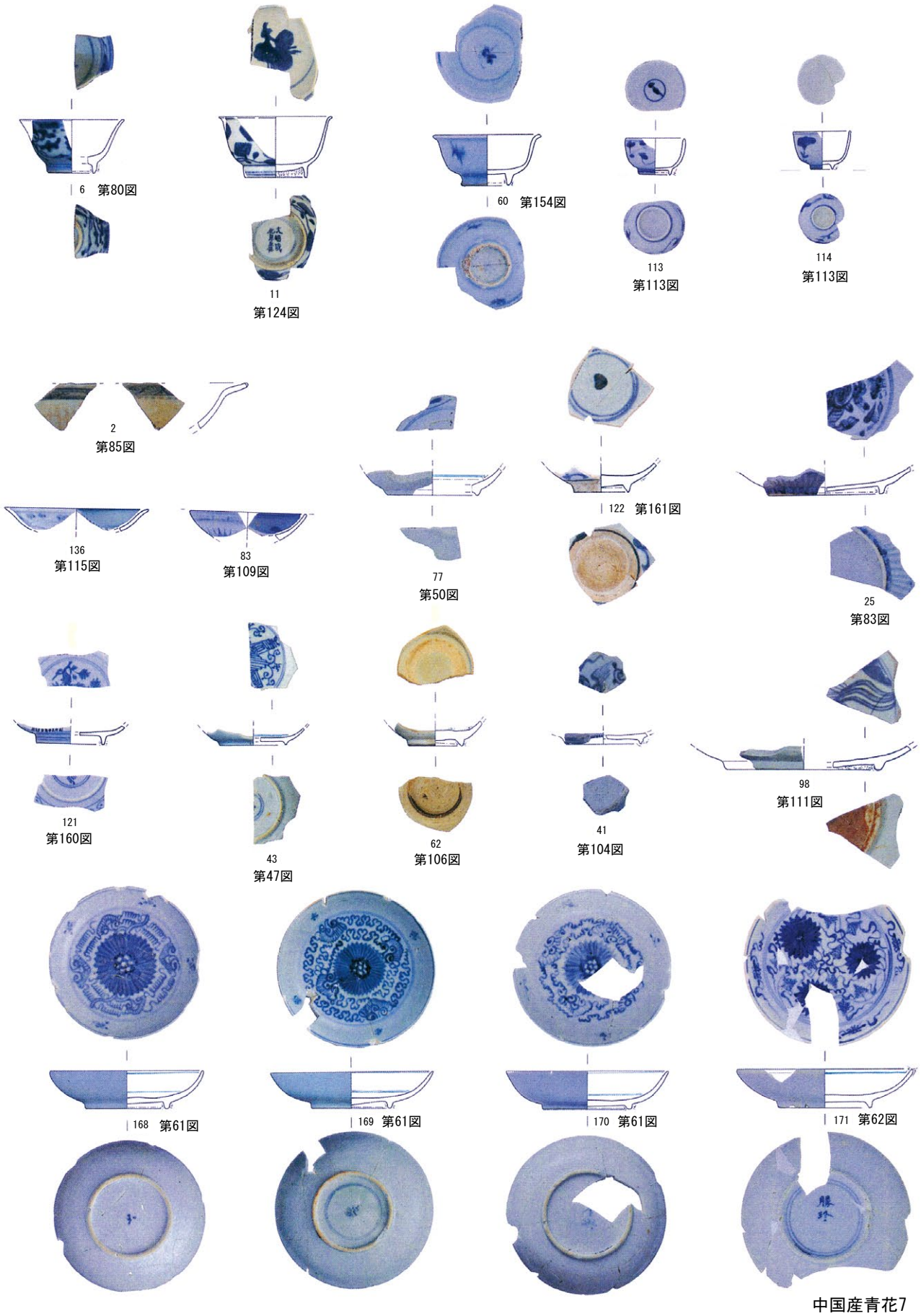
第203図 出土遺物一覧10



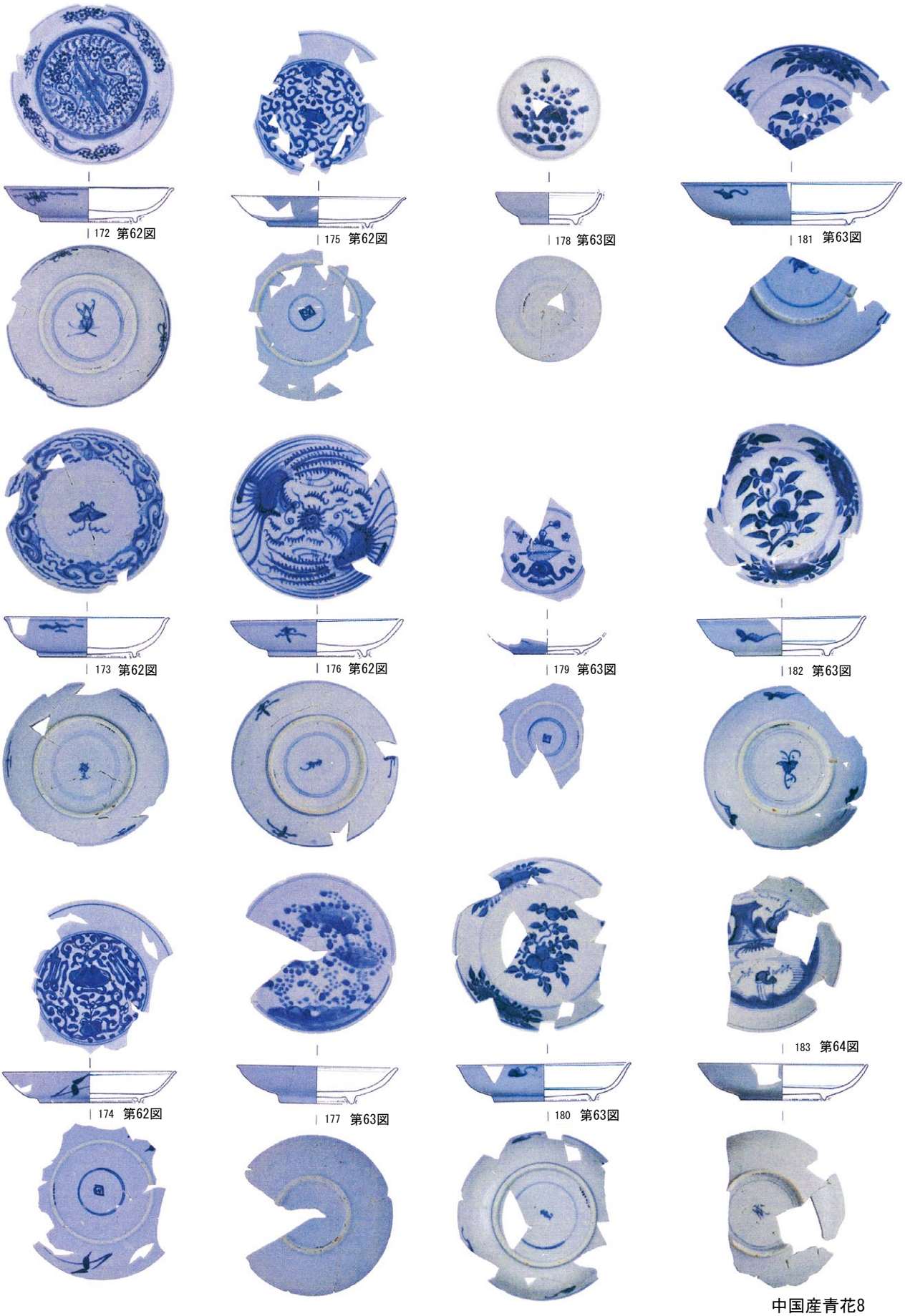
第204図 出土遺物一覧11



第205図 出土遺物一覧12

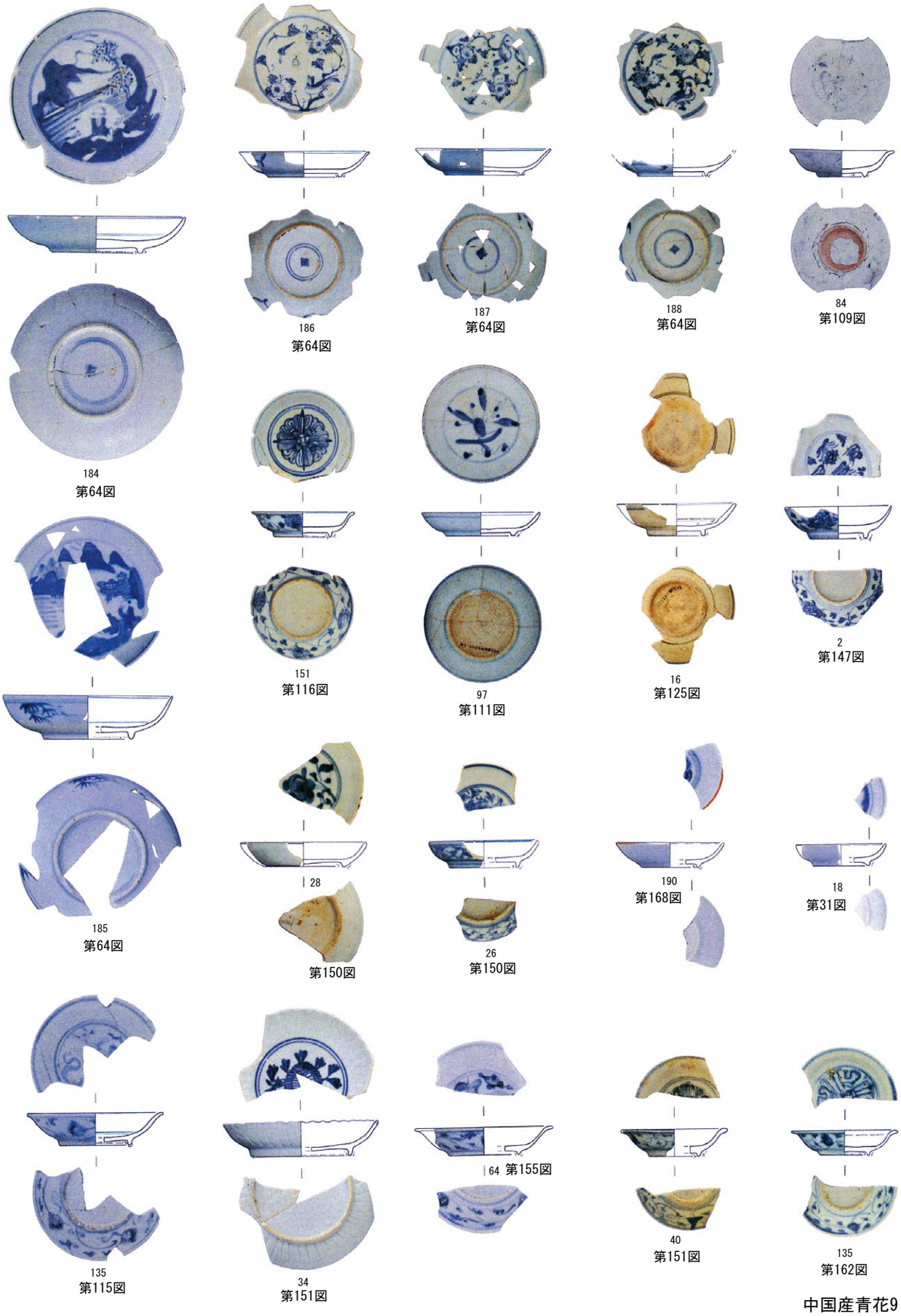


第206図 出土遺物一覧13



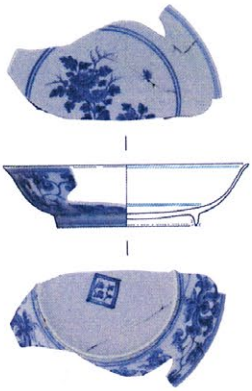
中国産青花8

第207図 出土遺物一覧14

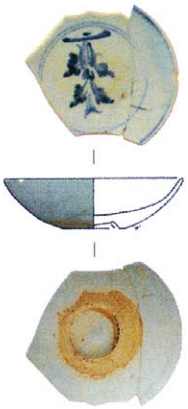


第208図 出土遺物一覧15

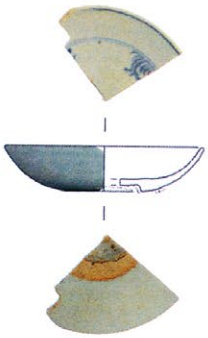
6 第148図



120
第160図

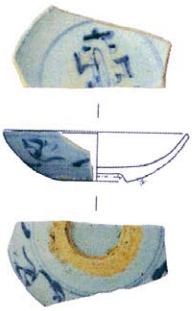


152
第164図



129
第162図

53 第153図

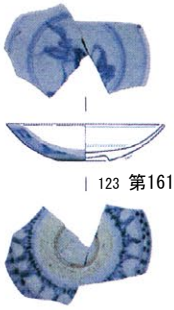


136
第162図

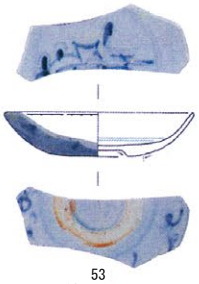
29 第126図

63 第155図

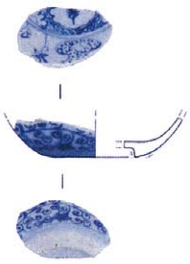
56 第154図



123 第161図



53
第105図



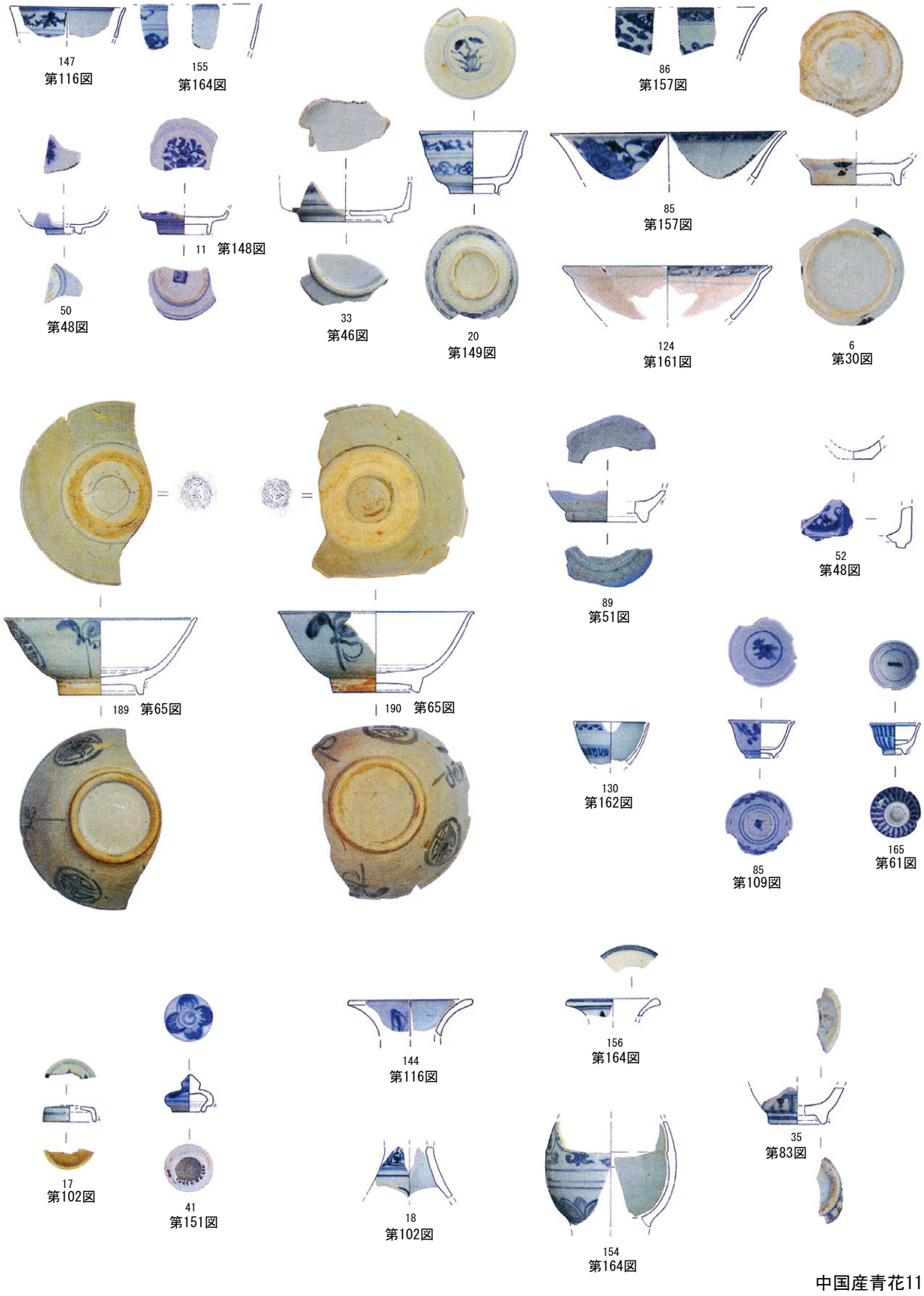
16
第31図

153
第164図

92
第51図

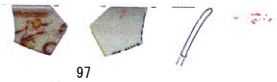
中国産青花10

第209図 出土遺物一覧16



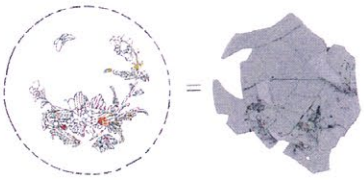
第210図 出土遺物一覧17

12
第148図



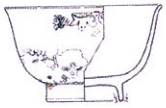
97
第158図

194 第65図



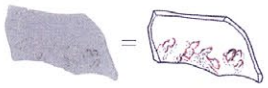
196 第66図

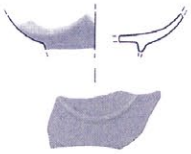
7 第148図



192 第65図

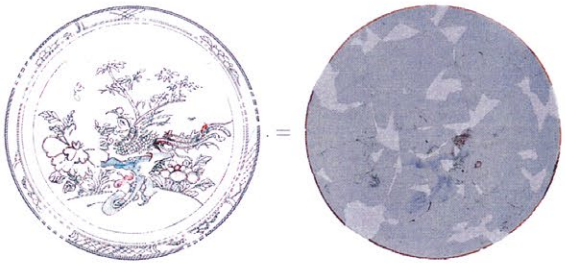
193 第65図



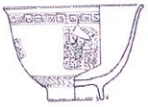


126
第114図

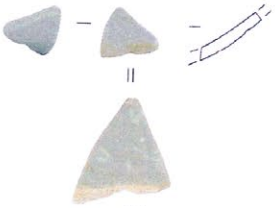
137
第162図



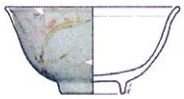
197
第66図



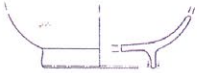
195
第66図



80
第50図

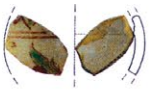


115 第113図



90
第51図

158
第164図



159
第164図

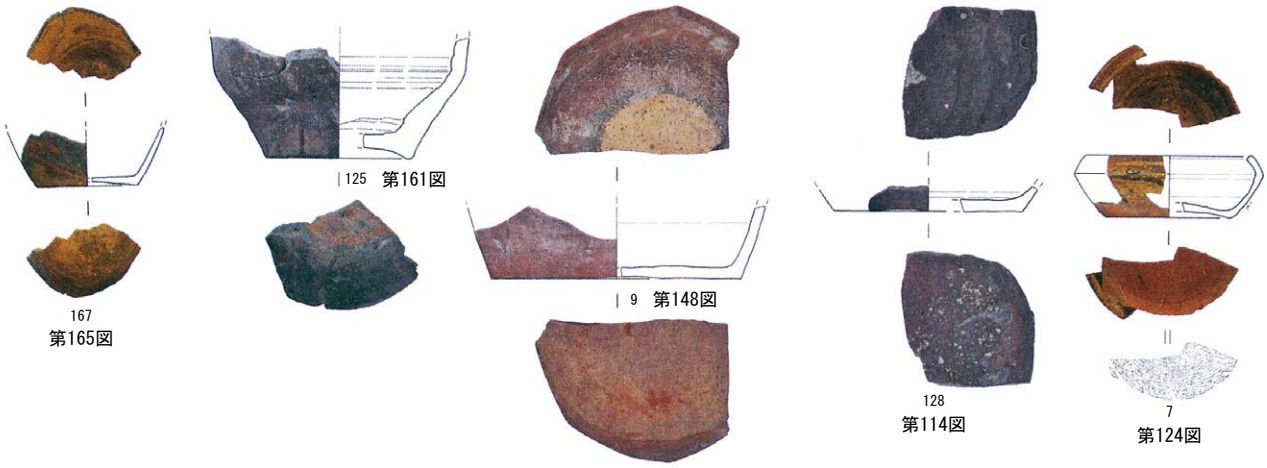
中国産色絵

第211図 出土遺物一覧18

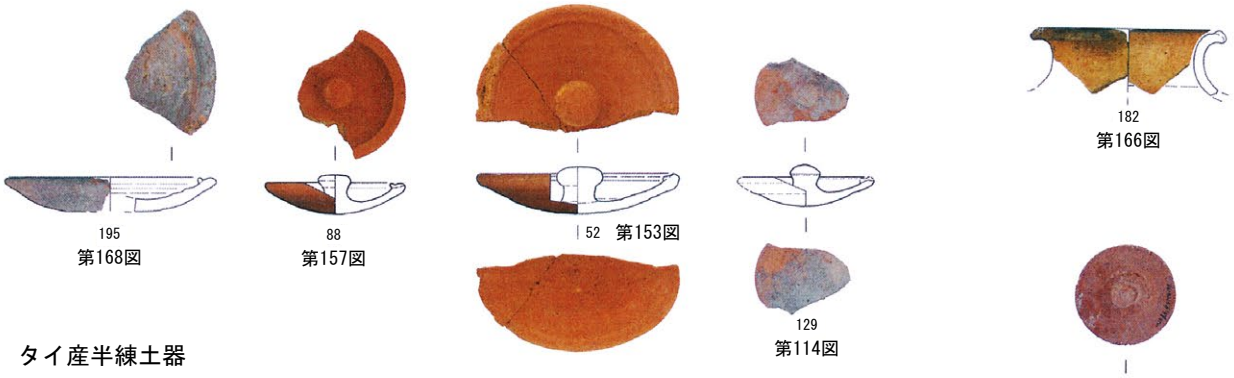
第212図 出土遺物一覧19

第213図 出土遺物一覧20

第214図 出土遺物一覧21

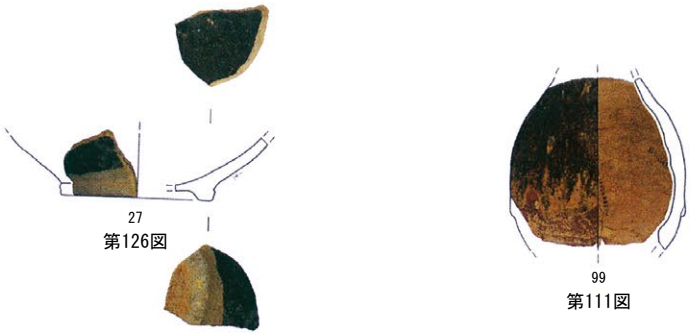


タイ産褐釉陶器２



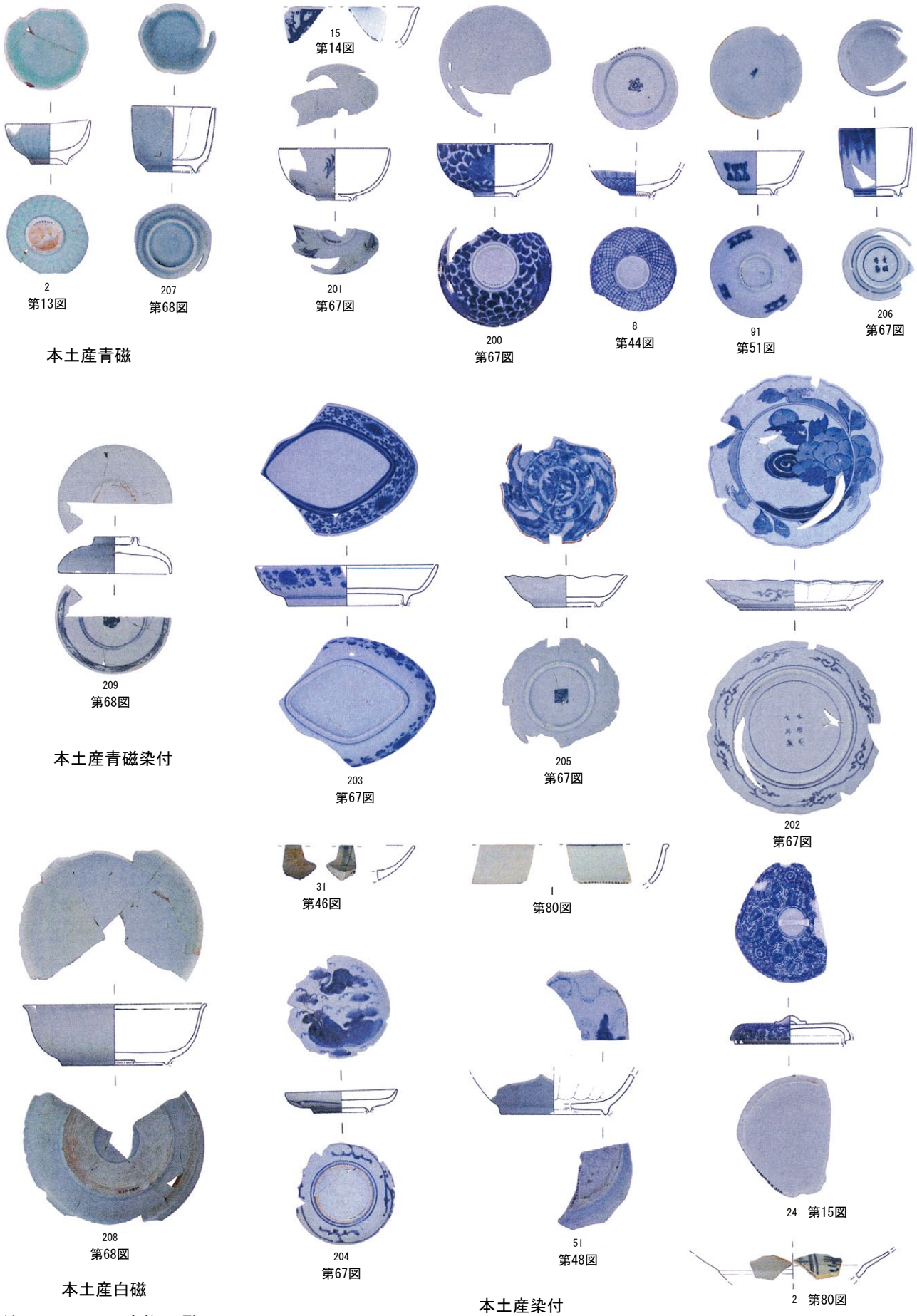
タイ産半練土器

タイ産土器

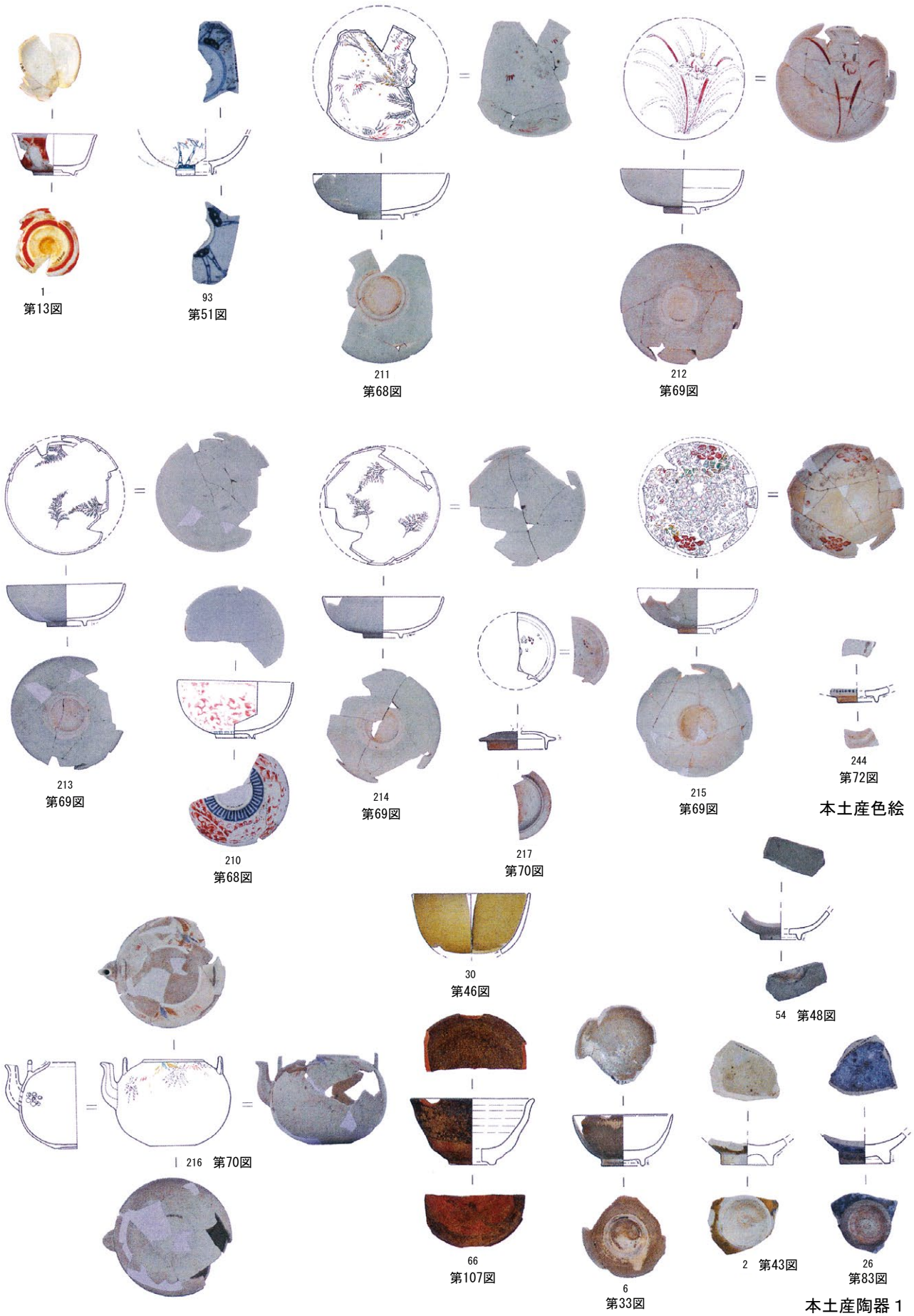


産地不明陶器

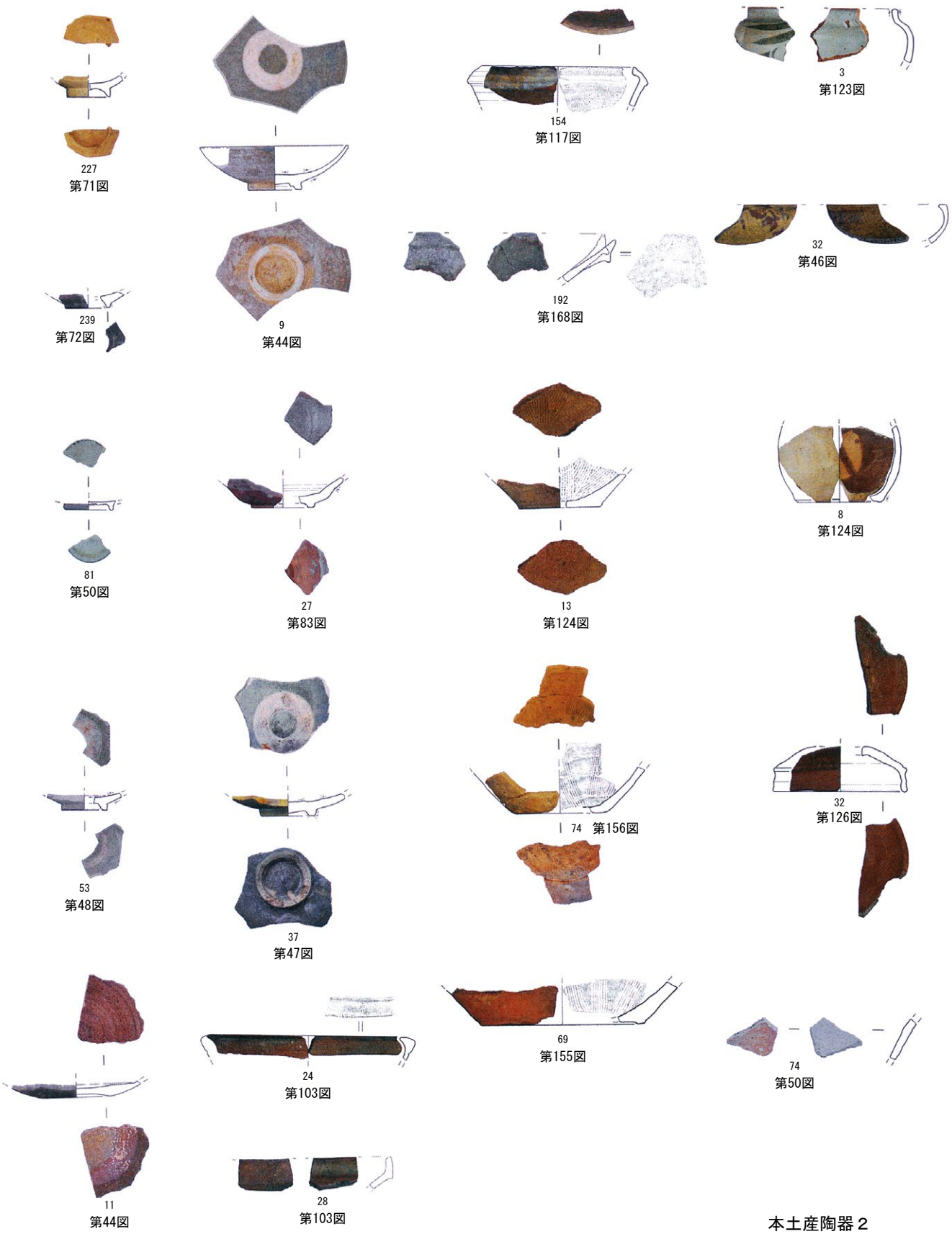
第215図 出土遺物一覧22



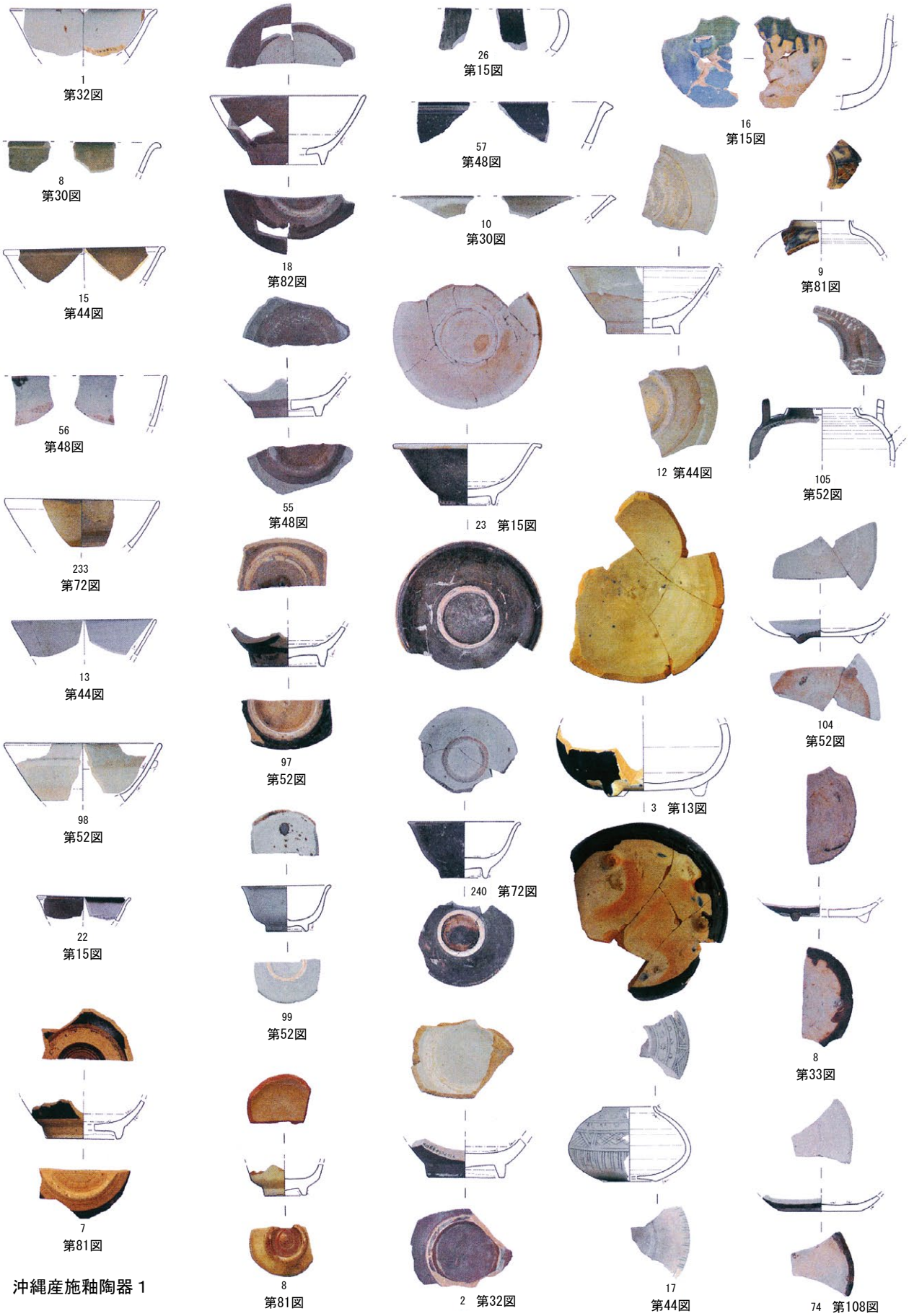
第216図 出土遺物一覧23



第217図 出土遺物一覧24



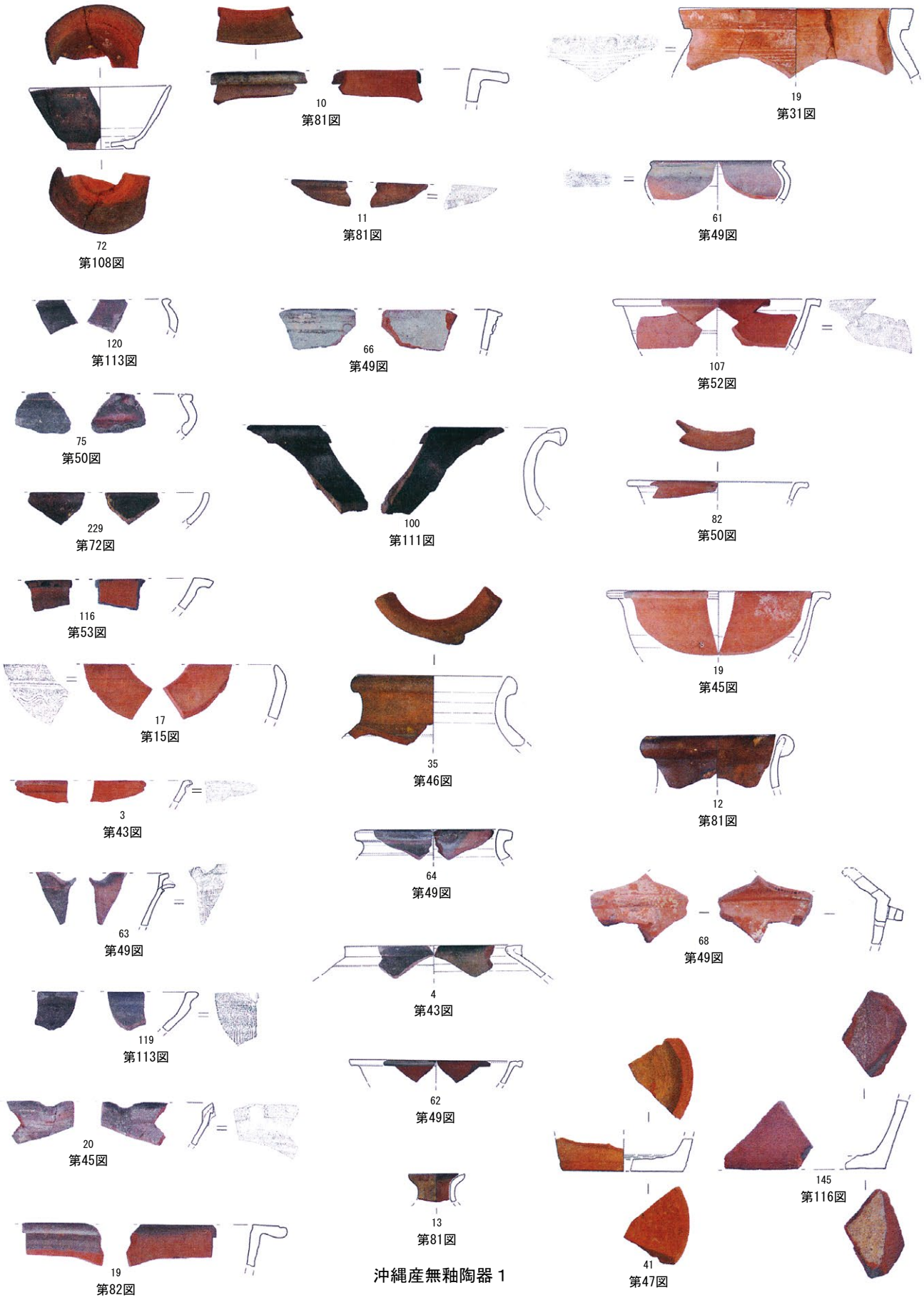
第218図 出土遺物一覧25



沖縄産施釉陶器１

第219図 出土遺物一覧26

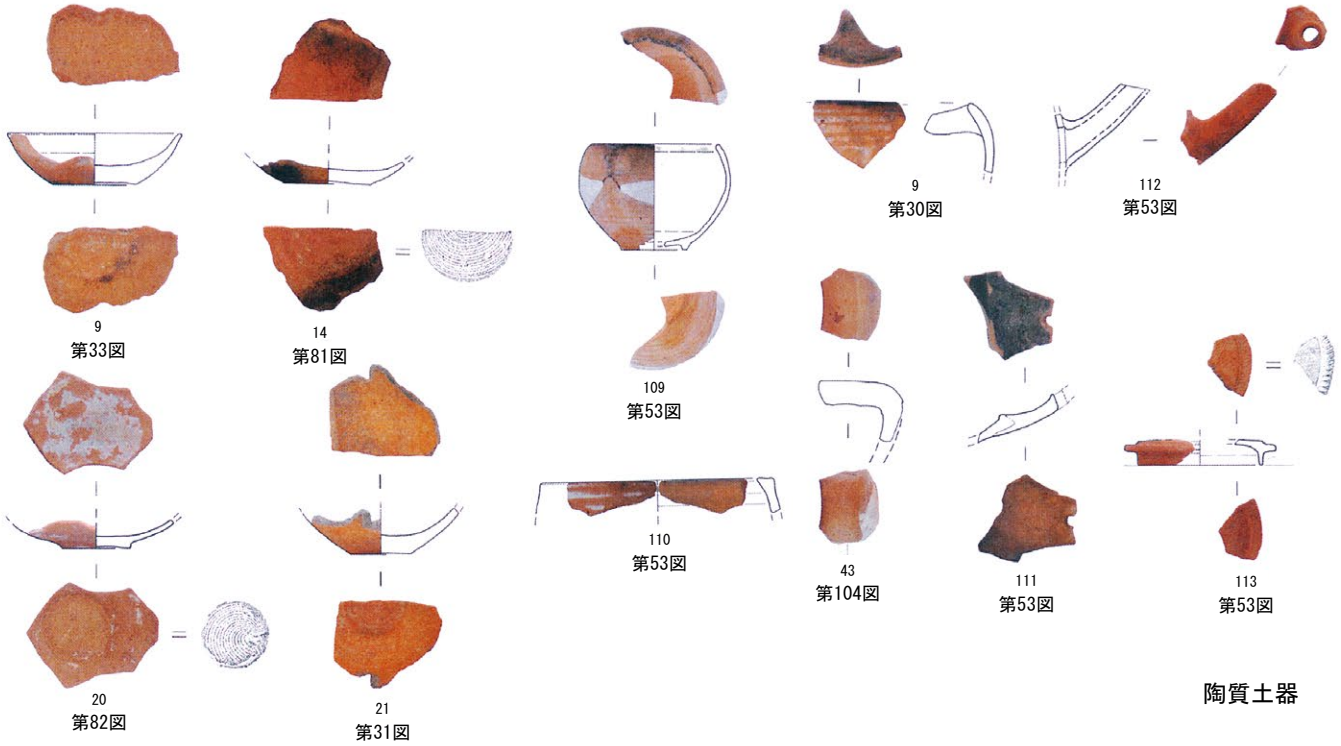
第220図 出土遺物一覧27



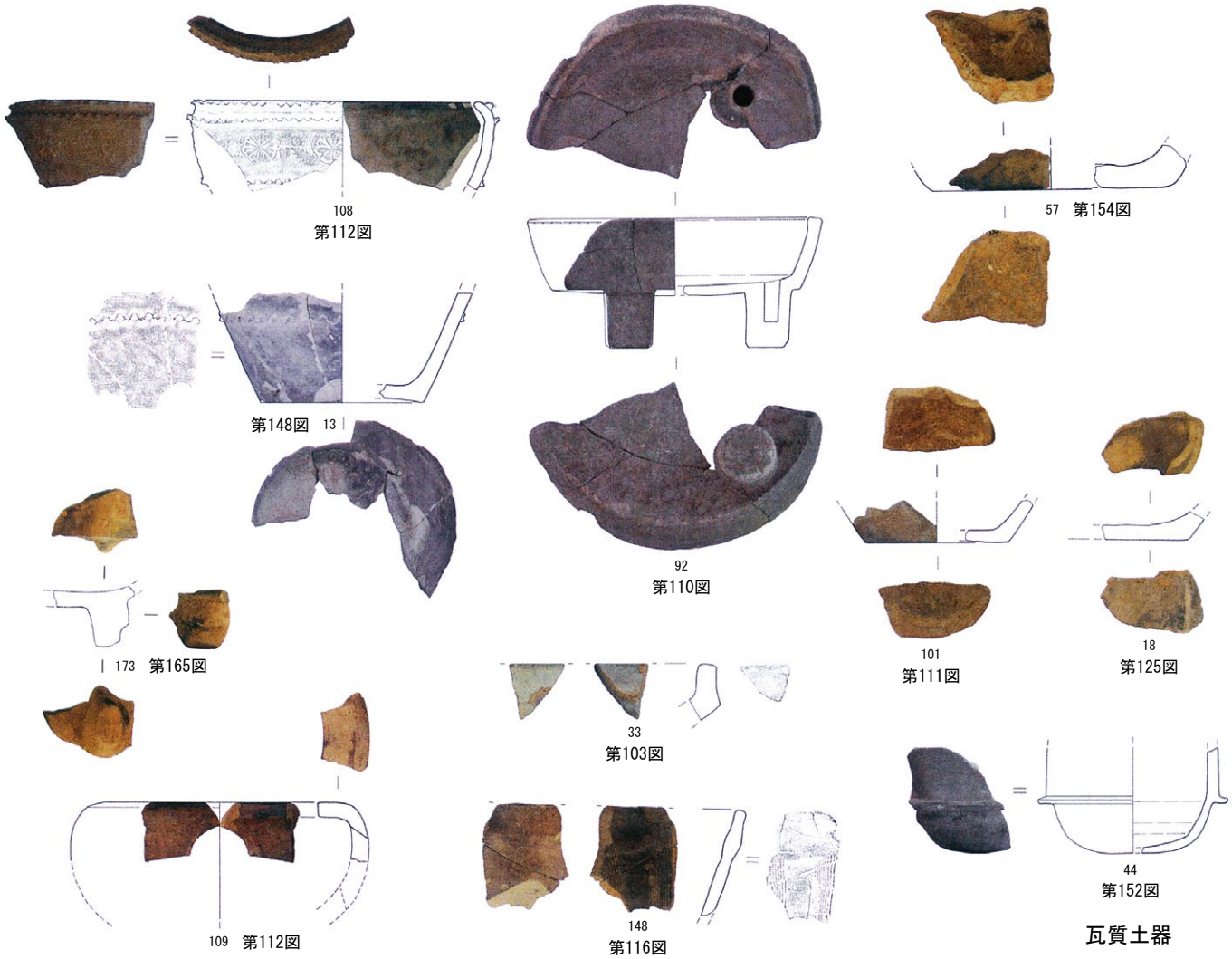
沖縄産無釉陶器１

第221図 出土遺物一覧28

第222図 出土遺物一覧29

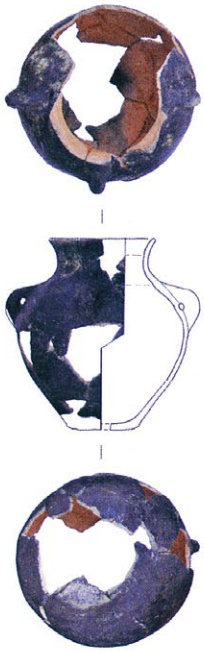


陶質土器

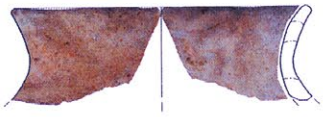


瓦質土器

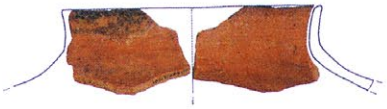
第223図 出土遺物一覧30



19
第149図

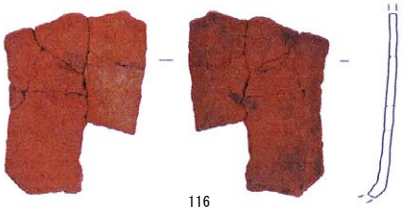


88
第109図



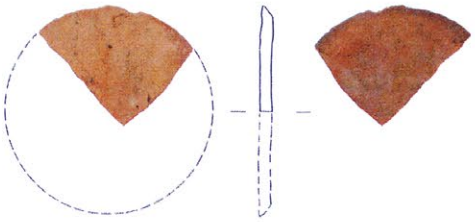
64
第106図

14
第124図

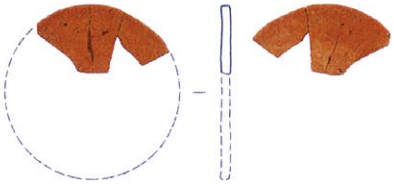


116
第113図

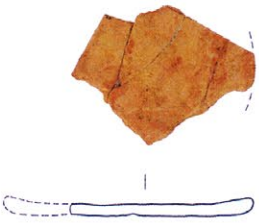
土器



193
第168図

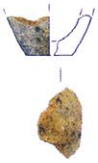


75
第156図



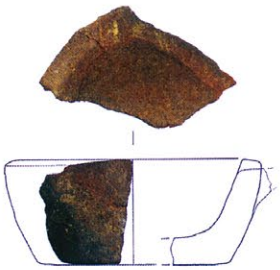
35
第151図

産地不明 土器



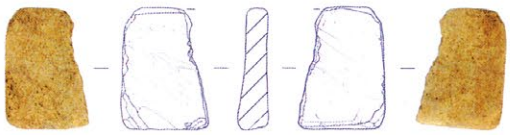
25
第103図

坩堝

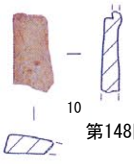


27　第150図

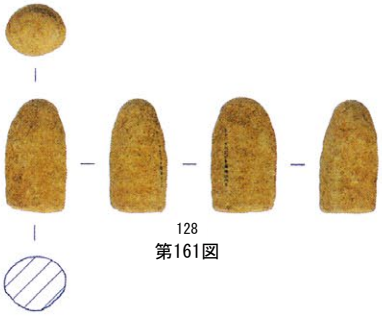
45
第47図



170
第165図



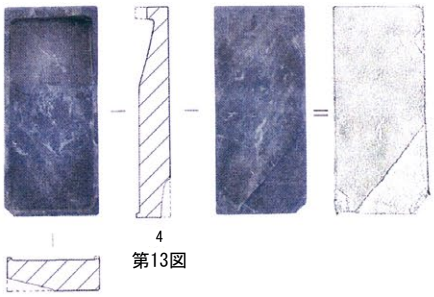
10
第148図

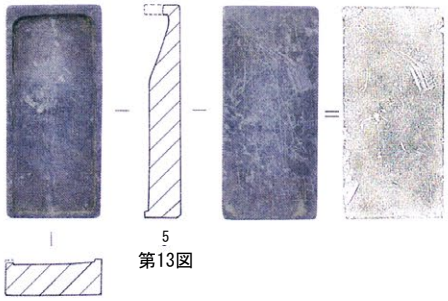


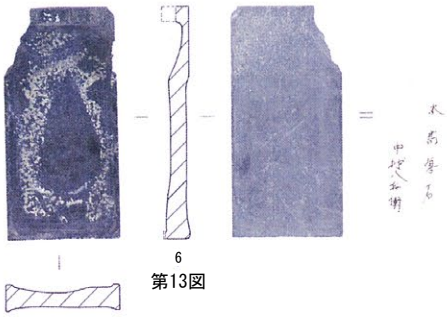
128
第161図

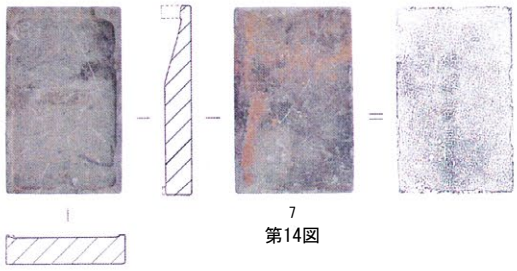
石製品

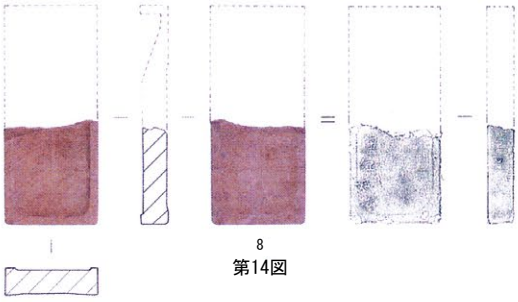
第224図 出土遺物一覧31


4
第13図


5
第13図

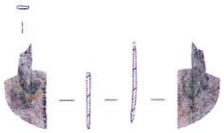

6
第13図


7
第14図


8
第14図

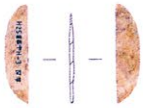
硯

1
第172図


3
第172図

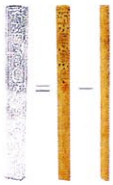
6
第172図

2
第172図

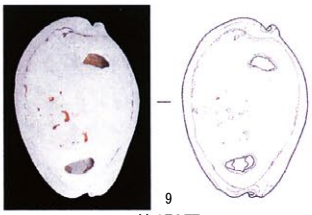

4
第172図

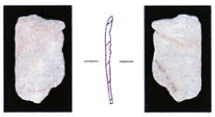
7
第172図

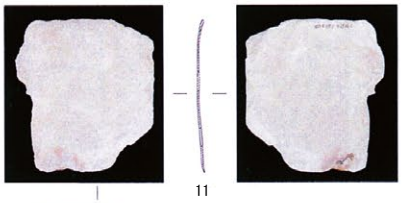
5
第172図


27
第46図

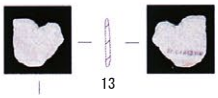
骨製品


9
第172図


10
第172図


11
第172図

12
第172図


13
第172図

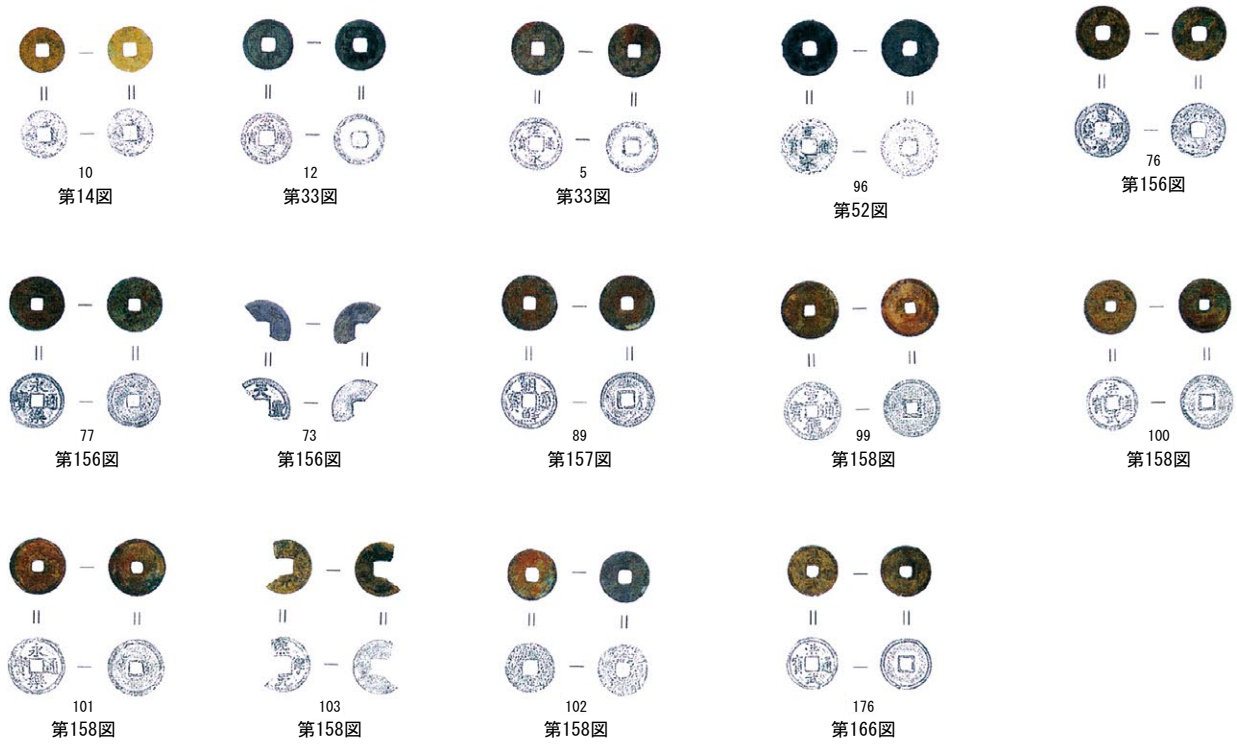
14
第172図

8 第172図

貝製品

第225図 出土遺物一覧32

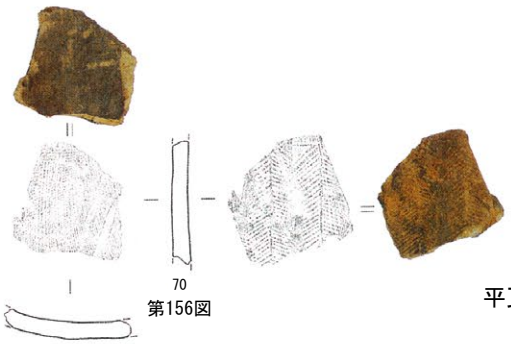
第226図 出土遺物一覧33



銭貨

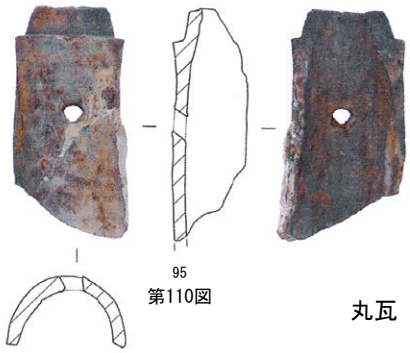
ガラス玉　　ガラス製品

第227図 出土遺物一覧34



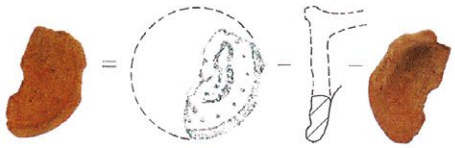
70
第156図

平瓦

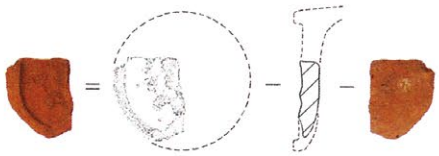


95
第110図

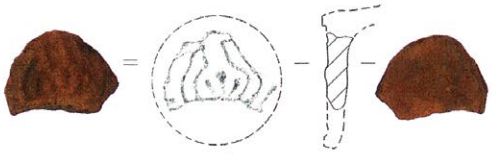
丸瓦



3
第85図

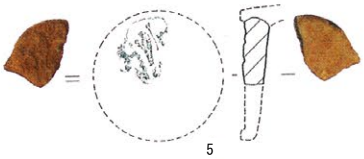


26
第46図

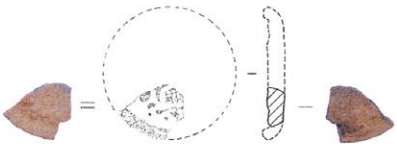


4
第85図

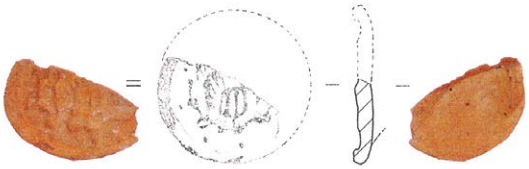
21
第82図



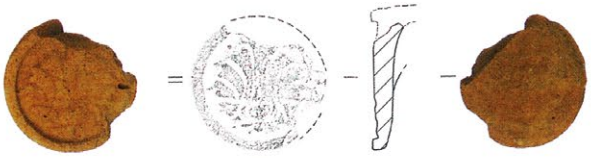
5
第123図



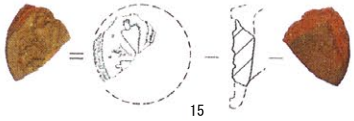
20
第15図



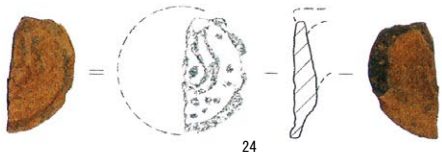
11
第30図



24
第45図

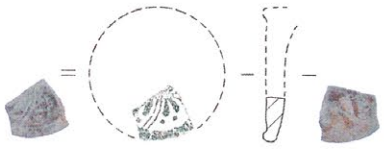


15
第124図



24
第125図

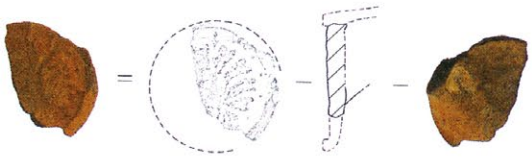
23
第45図

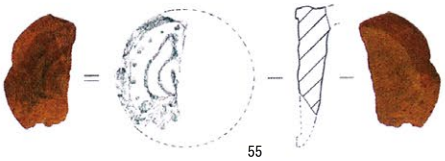


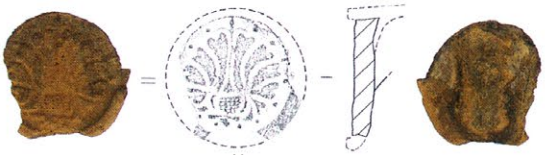
39
第104図

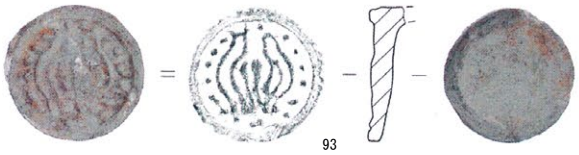
瓦１　　軒丸

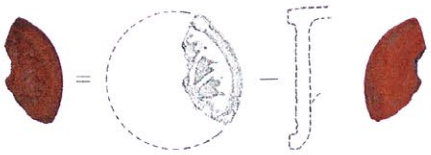
第228図 出土遺物一覧35

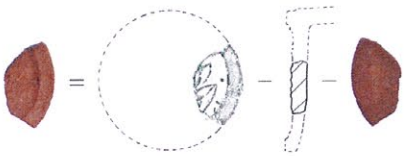

25
第45図

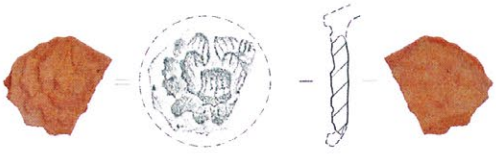

55
第105図

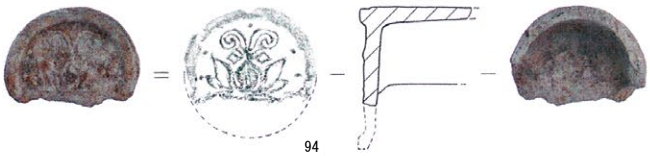

36
第46図

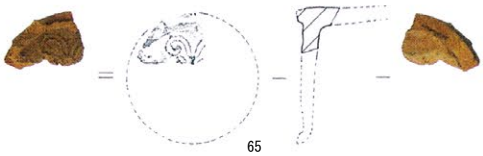

93
第110図

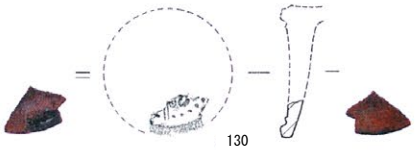

121
第113図


89
第109図

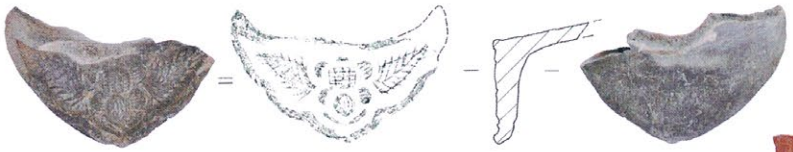

115
第53図


94
第110図

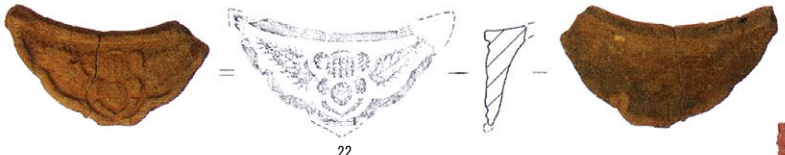

65
第106図


130
第114図

軒丸


4
第30図

37
第84図


22
第45図

38
第84図

38
第47図

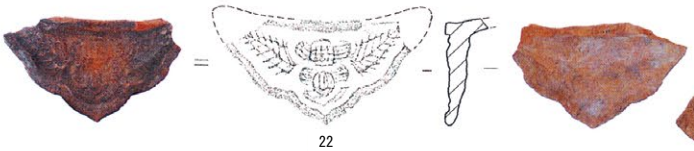
瓦２　　軒平

第229図 出土遺物一覧36

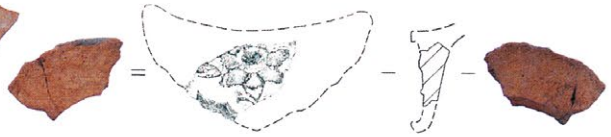
36
第84図

114
第53図

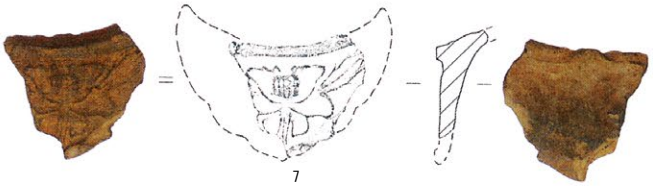
42
第47図



22
第82図

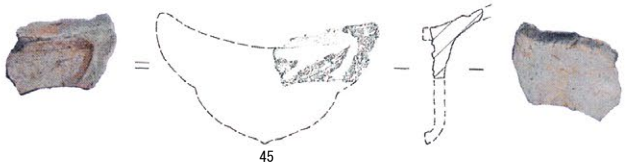


46
第104図



7
第85図

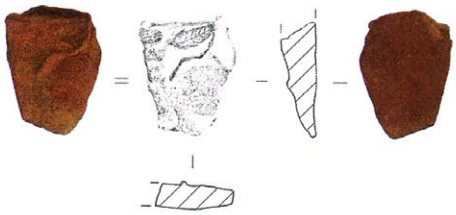
90
第109図



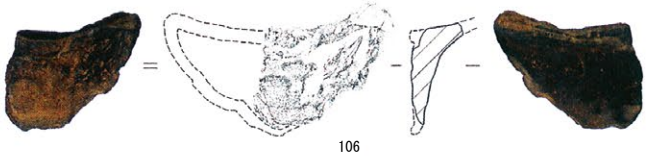
45
第104図

9
第124図

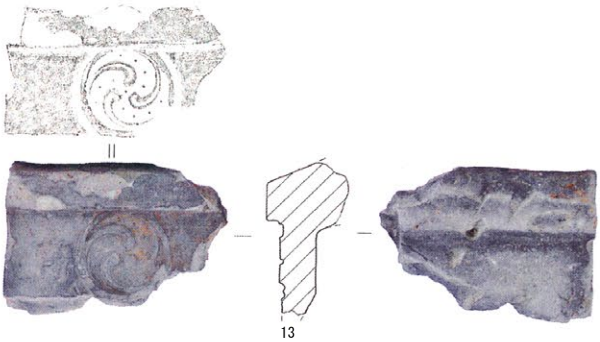
91
第109図



8
第85図



106
第112図



13
第14図

44
第104図

瓦３　　軒平

第230図 出土遺物一覧37

第８章　総括

遺跡概要　以上、中城御殿跡の発掘調査成果を述べてきた。本章では特筆すべき遺物及び遺構について再度整理を行い、調査で判明した本遺跡の変遷をまとめて調査成果とする。加えて、遺構の現地保存や今後の課題について述べ、総括とする。

今回の発掘調査地は、首里古地図に照らし合わせると、中城御殿が描かれている。中城御殿は、時期国王の世子殿として尚豊王代（在位1621 ～ 1640年）に創建され､明治8（1875）年まで居住していた。発掘調査によって、中城御殿の遺構を中心として、中城御殿創建以前の遺構、中城御殿移転後の遺構が確認された。このことから、グスク時代から近・現代までの遺構が残存する複合遺跡であることが判明した。

検出遺構数　発掘調査によって確認され、遺構番号を付与した遺構は、石積み38基、溝状遺構20基、井戸3基（内1基（SE2）は後に廃棄土坑と判明)、集石遺構53基、遺物埋設遺構3基、土坑78基、炉跡2基、石組土坑25基、柱穴跡・ピット1000基以上、石組柱跡23基、石列17基、石敷27基（内1基（SS24）は後に井戸跡が付随する施設と判明)、不明遺構42基である。これらの遺構が複合し、何らかの施設として確認できるものは、水場遺構、階段状遺構、洞穴遺構として名称を付与した。検出した遺構は、主に北側は残存状況が良く、南側は判然としない状況だった。これは客土の堆積状況から、北側は盛土造成により遺跡が埋められたが、南側は大きく削平が行われたためであることが判明した。

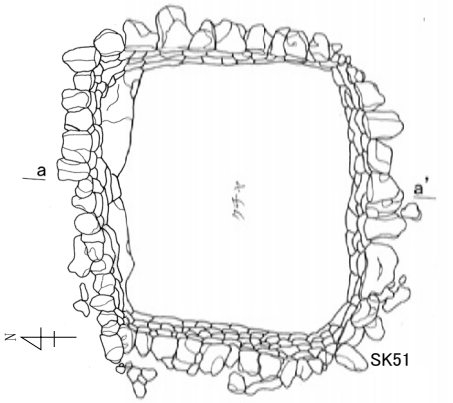
第１節　時期区分の設定と遺物

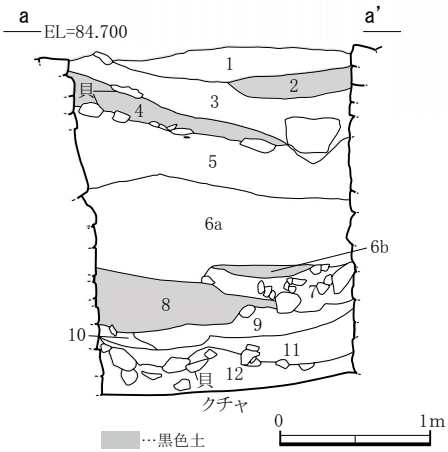
時期区分基準遺構　今回の調査で、遺構の時期区分等を行う上で基準とした遺構はⅢ区で検出したSK51（第129図）とⅠ区で検出したSJ3（第37図）である。

SK51の年代観　SK51は、様々な陶磁器類や貝・骨などの自然遺物が多量に確認され、遺構内埋土の堆積状況から石組の廃棄土坑と判断した。SK51の出土遺物は第148 ～ 152図に示しており、特徴的な遺物を抽出したものが第231図である。出土遺物の産地別割合は中国産陶磁器類が80％以上を占め、次いでタイ産、沖縄産となっている。器種別の破片数でみると、壺が最も多い。これは壺の破片数が多いことによるが、次いで碗や皿、蓋類などが多い。埋土中の出土陶磁器類を見ると、最下層からは、青磁Ⅵ-1類の遺物に伴い、青花明Ⅱ-1類などが確認され、年代幅が見られる。6層からはベトナム産染付などが出土している。5層からは青磁Ⅴ-1類やⅥ類が見られ､1層からは青花明Ⅱ-1類が見られる。これらの状況から年代幅を見ると、15世紀後半から16世紀後半頃までの遺構と想定できるが、出土遺物の新しい様相を示す一群の存在から、遺構廃棄年代は16世紀中葉から後半頃であると判断した。各層の遺物出土状況から、遺構内埋土は堆積した時期に大きな差がないことが想定される。

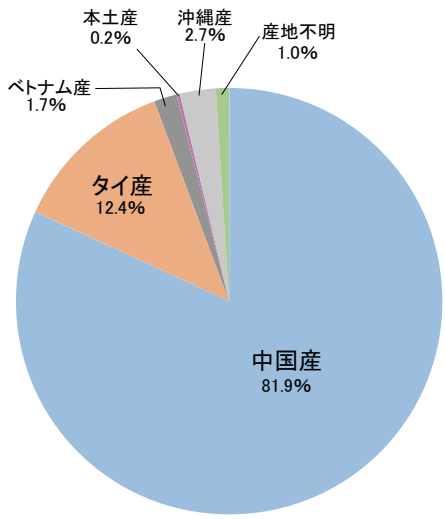
なお、SK51の最下層である12層検出の炭化物を用いて放射性炭素年代測定を実施した。その結果、試料測定年代（補正年代）は480±20BPの値を示した。暦年較正年代はcalAD1414 ～ 1446年であり、15世紀頃の年代が得られている。これらの差は今後の課題とするが、今回は出土陶磁器の年代観を用いる。

SJ3の年代観　SJ3は、造成4の上層部分に陶磁器類のみがまとめて廃棄された遺構である。SJ3からの出土遺物は第54 ～ 71図に示しており、特徴的な遺物を抽出したものが第232･233図である。出土遺物の産地別割合は、中国産陶磁器類が80％を占め、次いで本土産、沖縄産となっている。器種別の破片数でみると、碗が多く、次いで皿が多い。碗や皿を中心とした供膳類は中国産、本土産の陶磁器が主体である。灯明皿や火取などは沖縄産の陶器類で占められている。出土陶磁器類を見ると、中国産の製品では、福建･広東系製品が多く、景徳鎮窯系製品も見られる。特に福建･広東系製品は、18世紀後半～ 19世紀に位置づけられる一群である（新垣2014)。本土産陶磁器では、九州陶磁編年の磁器碗Ⅳ期、磁器皿Ⅳ期のものが多く、1690 ～ 1780年代のものが中心となる。一部では1660年代のものや

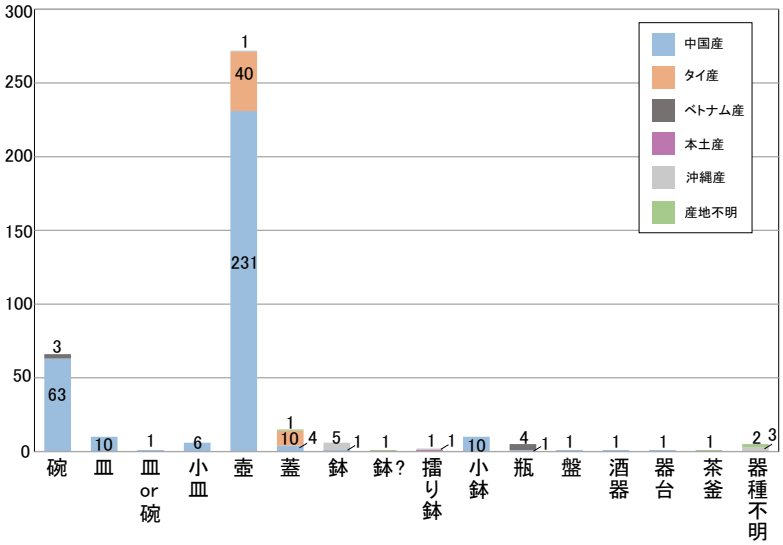




※6a･6b 層出土遺物：6 層
12 層中の遺構底部付近：最下層

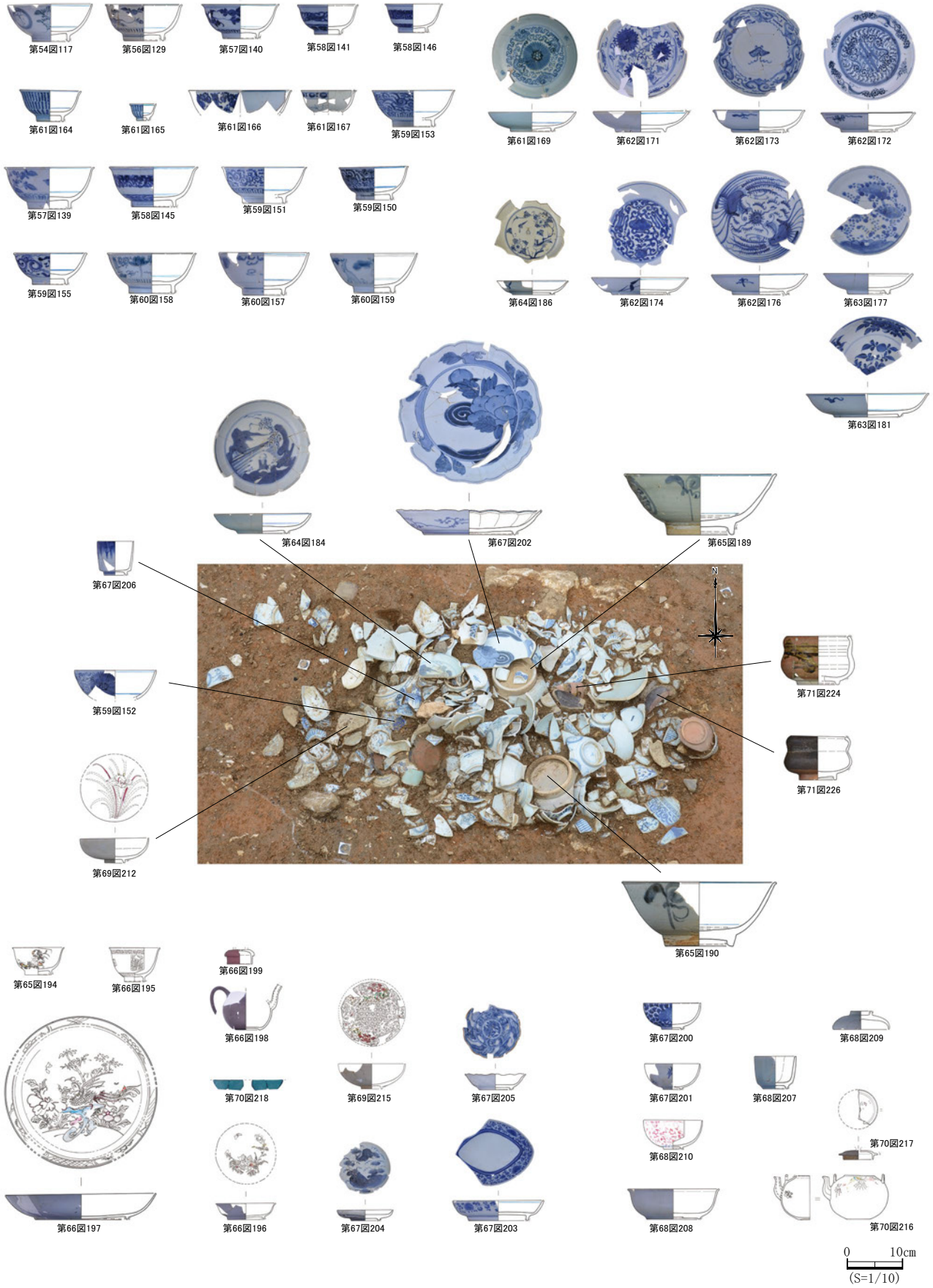


SK51 産地別割合

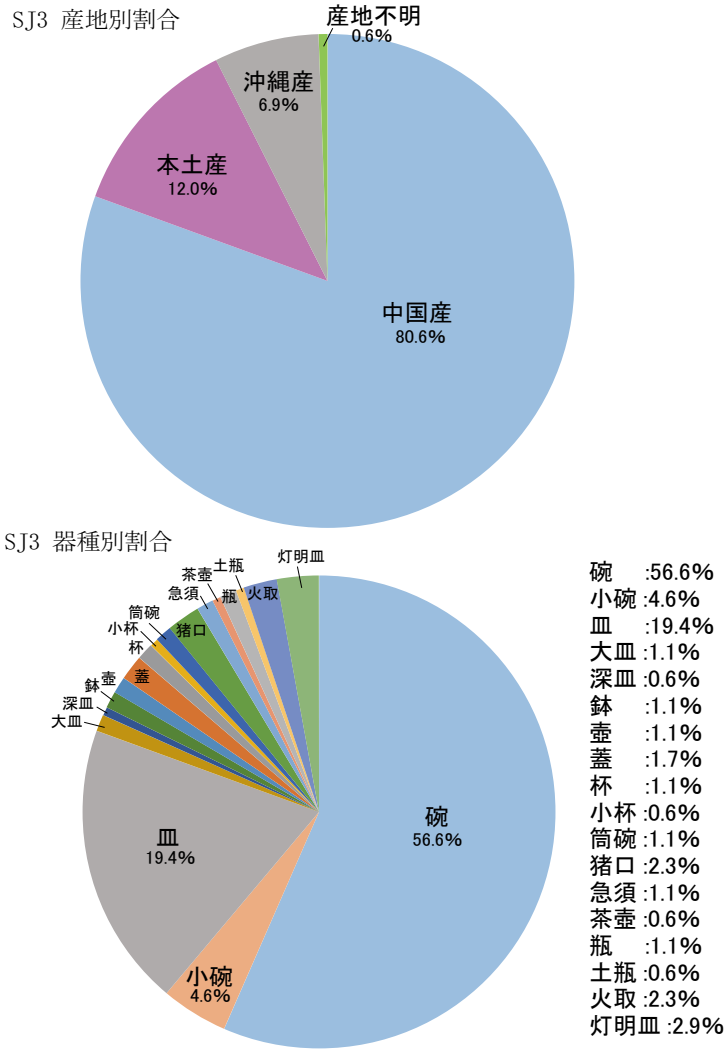


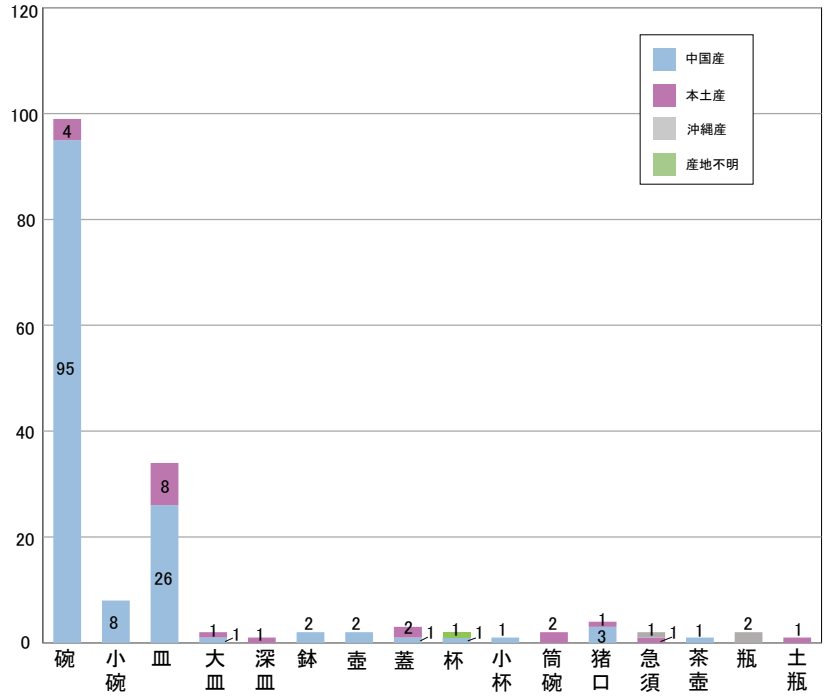
SK51 産地別器種点数（破片数）

第231図 SK51 主な出土遺物と割合



第232図 SJ3 主な出土遺物



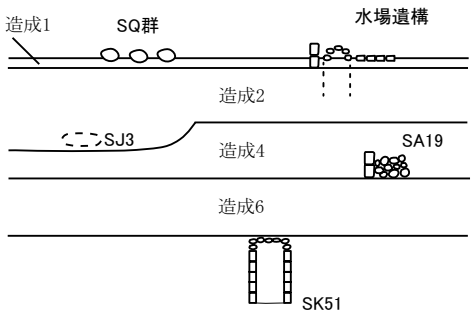


SJ3 産地別器種点数（破片数）

第233図 SJ3 出土遺物割合

関西系の製品も見られる。これらの状況から、17世紀後半から19世紀代までの年代幅をもつが、中国産製品の年代観と本土産陶磁器類で19世紀代の製品が見られない状況から、18世紀後半頃の遺構と判断した。

堆積状況　SK51は岩盤を掘り込む石組土坑で、Ⅲ区で検出し、遺構上部には造成6が覆っている状態だった。造成6は岩盤上に堆積しており、基盤となる地山（マージ）層が確認できなかったため、造成6段階で地山掘削及び岩盤整形を行っていると判断した。SK51の年代観から造成6に伴う岩盤整形などは16世紀後半以降に行われたと想定できる。造成6にはSA19（第88図）などが伴い、16世紀後半以降の年代から、創建当初の中城御殿関係の石積と考えられる。SK51は造成6に覆われていたので、中城御殿が機能した時期には地表に露出した状態ではなかったと判断した。造成6の上には、クチャ、マージ粒混じりの暗褐色土と石灰岩礫が混入する土が交互に堆積する造成4が堆積していた。Ⅱ区では造成4の一部が掘削され、造成2が堆積していた。SJ3は造成4上部で検出され、造成2に覆われている状態だった。このことから、造成2を造成する段階でSJ3は廃棄されたものと考えられ、SJ3の廃棄年代が18世紀後半頃の時期であることから、造成4、6が16世紀後半から18世紀後半、造成2が18世紀後半以降の堆積と考えられる。造成2上層部分にはⅠ区の水場遺構が造成1と共に築造されている状況が確認できた。以上の堆積状況を模式的に表したのが第234図である。これらの堆積状況を示すのは主にⅠ区からⅢ区である。Ⅳ区からⅦ区までは、堆積土が薄く、上部は撹乱されている状況が確認されたが、Ⅳ



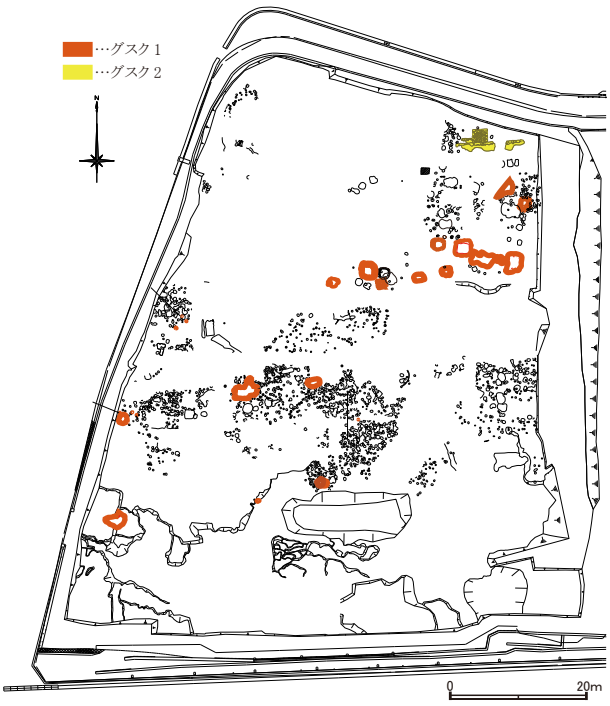
第234図 模式図

層（グスク時代）は残存状態が良く、Ⅳ層及びⅣ層下部の地山面（マージ）で柱穴跡などが多く確認された。

時期区分　上記の堆積状況から、Ⅳ層やSK51と同様な出土状況の遺構群はグスク1（15 ～ 16世紀代）と区分した。なお、SA31･32・35は石積の一部がⅣ層に覆われていた状況から、グスク2（15 ～ 16世紀代）と区分した。SK51を覆う造成6やⅡ区のみに堆積する造成6下層の造成7、調査区南側で確認された造成8に伴う遺構を近世3（中城御殿創建～17世紀代）とした。造成6上に堆積した造成4、造成2といったSJ3前後の造成土に伴う遺構を近世2（18世紀代）とした。近世2は、造成4及び造成2が属する。これらの造成土はSJ3を挟んで時期差が考えられ、さらに区分が可能であるため、今後の検討課題である。造成2の上部及び造成1に伴う遺構を近世1（18世紀末～中城御殿移転まで）とした。SM9はSQ群に隣接して形成されており、遺構内埋土には、沖縄産施釉陶器、本土産磁器が見られた。出土陶磁器から、近･現代に埋められていることが判明したため、中城御殿移転後には、この部分は盛土造成などが行われたことが想定できる。それより上部の土に伴う遺構は近･現代の遺構として区分を行った。それぞれの年代観は主にSK51とSJ3の年代観を基礎とし、各遺構出土の陶磁器類を指標とした。また、各造成土に伴う状況が判然としない遺構もあった。その場合、付近の遺構等から区分したものもあり、出土陶磁器と年代観に差がある場合もある。

第２節　グスク時代

概要　グスク時代の遺構は、柱穴跡や土坑、石組土坑などが確認された。SK51の年代観や、各遺構の出土遺物に15世紀より古くなる遺物はほとんど見られないことから、15 ～ 16世紀頃の遺構と考えられる（第235図）。



グスク1･2の遺構

第235図 グスク時代

柱穴跡　柱穴跡が非常に多く、密接した状況で検出された。そのため、同じ地域内での建物建て替えが多く実施されたことが想定される。そのような状況もあり、建物様相を把握することが困難であった。柱穴跡は、調査区の南側と北東側で多く見られた。Ⅱ区やⅢ区の部分は、近世段階で大きく地形が改変されていたことから、柱穴跡の有無を確認することが出来なかった。

土坑･石組土坑　主に素掘りの土坑や、石組土坑が確認され、遺構内から陶磁器類や貝・骨などの自然遺物が多量に検出された状況から、ほとんどが廃棄土坑であると考えられる。特に石組土坑は、Ⅲ区に集中している状況があり、この部分に廃棄区域があったと考えられる。Ⅲ区の石組土坑は、ほとんどが岩盤まで掘り込まれており、上部は造成6に覆われている状況であった。そのため、中城御殿が機能している時期には、遺構使用が終了しているものと考えることができる。特にSK51からの出土遺物が多数

であったため、時期決定の基準資料としたが、他遺構も同様の年代観を示している。これらの廃棄土坑の年代観は15世紀後半から16世紀後半の年代幅が考えられる。

土坑･石組土坑内の廃棄物　遺構内の自然遺物を見ると、SK22（素掘土坑）･SX42(石組土坑)はマガキガイが多く、SM18･19、SK51･52(石組土坑)はアラスジケマンが多いという2タイプが存在する結果となった。(第4章第5節参照)。これらの様相に加え、他遺跡の状況も含めて分析を行い、SK22等のサンゴ礁貝類のマガキガイが優占する遺構から、SM18等、内湾等のアラスジケマンへの貝類利用の変化の可能性を指摘している（第4章第5節)。

出土骨類では、ウシ、ブタなどの動物骨に加え、フエフキダイ科やハタ科、ブダイ科の魚骨が大量に出土している状況が見られた。

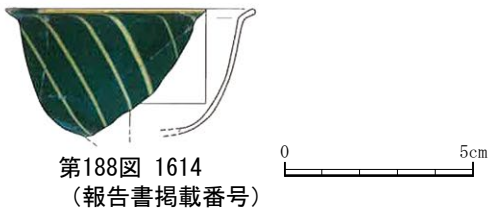
SK51の12層から採集した土壌サンプルを用いて寄生虫卵分析を行った(第5章第1節参照)。その結果、堆積物1ccあたり100個未満と報告されている。トイレ遺構等でよく確認される栽培種等の顕著な多産が認められない状況や、花粉化石等の保存状態も悪いことから、寄生虫卵も分解･消失した可能性もあるが、トイレ遺構と考えることは難しいとされている。

植物遺体　SK22及びSK51では、植物遺体の分析結果から、近世･近代の遺構に比べ多くの植物遺体を含んでいたことが判明した（第4章第2項参照)。これらの遺構は、出土遺物や堆積状況から廃棄土坑としての機能を想定しており、植物遺体分析からもこれを支持する結果が得られた。SK22とSK51からはアワが多く得られており、アワを含む雑穀が主食糧源であったことが窺える。この結果は首里城淑順門西地区と同様である。また、SK51の8層（8-2層）からは、イネが多く得られている状況も確認できる（第5章第1節参照)。これについては、首里城跡淑順門西地区の報告で、イネが検出重量ではアワを上まわっており、イネが重要であった可能性を指摘している（高宮2013)。類例資料を含め、今後食料事情等を検討するうえで興味深い結果が得られている。

SK51出土のガラス製品　SK51の最下層から出土したガラス製品（第151図36･37）は、緑色を呈し、黄色の文様が入る。県内では管見の限り、類例資料がなく、初事例となる可能性がある。

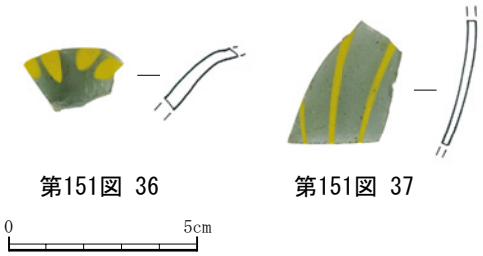
ガラス製品類例資料　類例資料として、第236図に掲載した大分県の中世大友府内町跡出土のガラス製品が挙げられる（大分県教育庁埋蔵文化財センター 2013)。このガラス製品は、ガラス製の器の坏部破片と報告されている。表面の緑色や黄色文様等が中城御殿跡出土品と類似している状況があった（第237図)。そこで、中世大友府内町跡出土品と、本遺跡出土品の自然科学分析結果を比較するため、蛍光Ｘ線分析を行い、化学組成の比較を行った（第40･41表)。

自然科学分析結果の比較　中世大友府内町跡出土のガラス製品は、南ヨーロッパで生産されたガラス製品と指摘されており、緑地部分の測定結果からは、ナトリウムが多いという特徴を持つ珪酸塩ガラスと報告されている。一方で、今回出土したガラス製品の分析値は、Na_2Oの値が1％前後で、中世大友府内町跡の9.37%と比較して低値である。また、中世大友府内町跡のガラス製品ではCuOが4.18%、Fe_2O_3が2.20％検出されており、着色には、鉄イオン及び銅イオンが大きく影響していると考えられているのに対し、中城御殿跡出土のガラス製品は2点ともCuO値が1％以下、Fe_2O_3が2.97％と3.67％と



第188図 1614
（報告書掲載番号）

第236図 中世大友府内町跡出土ガラス製品
（大分県教育庁埋蔵文化財センター 2013から転載）



第151図 36　第151図 37

第237図 SK51出土のガラス製品

第40表　ガラス製品の判定量分析結果（mass%）（大分県教育庁埋蔵文化財センター 2013 444頁より抜粋）

分析№	位置	Na_2O	Mgo	Al_2O_3	SiO_2	P_2O_5	SO_3	K_2O	CaO	TiO_2	Cr_2O_3	MnO	Fe_2O_3	CuO	ZnO	Rb_2O	SrO	ZrO_2	SnO_2	BaO	PbO
9	地（緑）	9.37	1.62	3.66	69.96	0.61	0.77	4.65	1.57	0.40	0.07	0.34	2.20	4.18	0.02	0.01	0.02	0.04	0.06	0.03	0.43
	模様（黄）	3.99	1.03	7.26	69.67	0.89	－	5.66	0.93	0.35	0.10	0.20	1.64	0.65	0.01	－	0.01	0.04	1.03	0.03	6.51

※説明部分への着色は、沖縄県立埋蔵文化財センターが行った。

第41表　中城御殿跡（首里高校内）SK51出土のガラス製品　蛍光X線分析結果（化学組成）

分析№	位置	Na_2O	Mgo	Al_2O_3	SiO_2	－	SO_3	K_2O	CaO	TiO_2	－	MnO	Fe_2O_3	CuO	ZnO	Rb_2O	SrO	ZrO_2	SnO_2	BaO	PbO
1	地（緑）	0.70	0.95	8.59	79.11	－	1.10	4.12	0.86	0.57	－	0.86	2.97	0.01	－	0.01	0.01	0.06	0.01	0.05	0.02
（第151図37）	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
3	地（緑）	1.20	0.89	8.50	77.99	－	1.08	4.22	0.88	0.55	－	0.82	3.67	0.02	0.01	0.01	0.02	0.06	－	0.07	0.02
（第151図36）	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－

いう結果が得られている。この結果、中城御殿跡出土のガラス製品は発色に影響するものが中世大友府内町跡から出土した製品と異なることが判明した（第5章第1節参照）。

ガラス製品の年代観　中世大友府内町跡から出土したガラス製品は、SD120という遺構から出土しており、廃絶時期は、1570年代の後半から末と報告されている（大分県教育庁埋蔵文化財センター2013）。中城御殿跡から出土したガラス製品は、SK51の最下層から出土しており、遺構内出土陶磁器類から、16世紀中葉から後半頃に廃棄されたという年代観が得られている。年代観については、ほぼ同時期が想定される。

検討事項　今回出土した資料は､類例資料が少ないことに加え､明確な口縁部などが確認できなかったため、遺物の傾きなどが不明な状況がある。そこで、想定で傾きを設定し、断面図を実測したものを掲載した。器種などについては不明であるため、今後類例資料を確認及び検討する必要がある。

小結　グスク時代の遺構は、柱穴跡、石組土坑などの廃棄土坑などが確認された。特にSK51は様々な遺物が出土し、貝類遺体や植物遺体など、多くの分析を実施することができた。

当該地に中城御殿が創建されたのは、尚豊王代（在位：1621 ～ 1640年）とされ、近世初期に創建とされている。今回、グスク時代の遺構や遺物が確認出来たことから、中城御殿の創建以前から、何らかの施設等があったことが判明した。特に、SK51を含めたⅢ区のグスク時代の遺構は、中城御殿の造成土に覆われていたことが調査成果により判明した。このことは、中城御殿創建のために土地改良を行ったことに加え、当該地の人々を別の場所へ移転させた可能性も窺える。

中城御殿が創建される以前の文献史料などは、首里古地図以外の情報が少なかったが、発掘調査により、これらの情報を得ることが出来た。当該地の周辺には、首里城、大美御殿、天界寺などの施設が存在しており、これらの施設との関係性などについて検討する上で重要な成果と考えられる。

第３節　近世

概要　近世の遺構は、石積みや井戸跡など、中城御殿に関連する遺構を数多く確認した。中城御殿は大規模な削平及び造成工事を行い、屋敷範囲を拡張していく様相が見られた。そのため発掘調査では、それらの造成土に伴い、遺構が確認できた。

石積み　石積みは数多く見られ、土留めのための石積み、屋敷区画のための石積みが確認された。これらの石積みは、根石が形成されている造成土から、複数の時期に区別できた。また、複数の石積みが組み合わさって機能するものもあり、中城御殿を構築する際に用いた石積み構築技術が窺える。特に、SA1･22･29は、石積み前面の石は表面加工され、石積み後方は造成土を支えるための土留めの役割を果たしており、様々な技術を用いていたことが想定できる。この石積みを境にして、南側が高く、北側が低い屋敷配置をしており、当時の石工技術の高さを垣間見ることが出来た。傾斜した地形を計画的に改変しながら、階段状に屋敷を配置していた状況が窺える。SA4やSA9などの石積みは、片面石積みではなく､前方及び後方の両方に石積み加工面をもつ両面石積みである。これらのことから、

土留めとしての石積みではなく、屋敷区画などの役割を担う石積みである可能性が高い。

SS24　井戸の跡で石敷きを伴う井戸で、周辺を岩盤に囲まれ、一段深い部分で確認した。また、岩盤部分に、傾斜に合わせて配置されたスロープ状の石敷きが確認されたことから、一段低い場所へ降りて井戸を使用したと考えられる。井戸周辺の石敷きは南側から北側にかけて傾斜しており、北側には排水穴が設けられている。石敷きに用いられた石が小型で、表面の凹凸が残存している状況だった。

階段状遺構　階段状遺構は、石積みや石敷、溝跡などが組み合わさったものを総称している。遺構の構築状況から大きく2時期に区分した。1期は石敷き（SS25･28など）を伴って階段が機能していた時期で、2期は、SA3を造成土で埋め、SA2の東側を構築して範囲を拡張した時期である。SA2の東側部分を構築する際に、SS28は削平されており、SA2の裏込に埋まっている状況が確認できた。それぞれ構築した前後関係は判明したが、新しい石積みが形成された際に当初からあった石積みの使用が終了したのか、機能し続けたのかについては、判然としない状況であった。これらの状況から、少なくとも何らかの改築があった可能性が想定でき、SA2の前面に造成2が広がる状況や造成4が大きく関わることから、18世紀代に改築が行われたことが窺える。

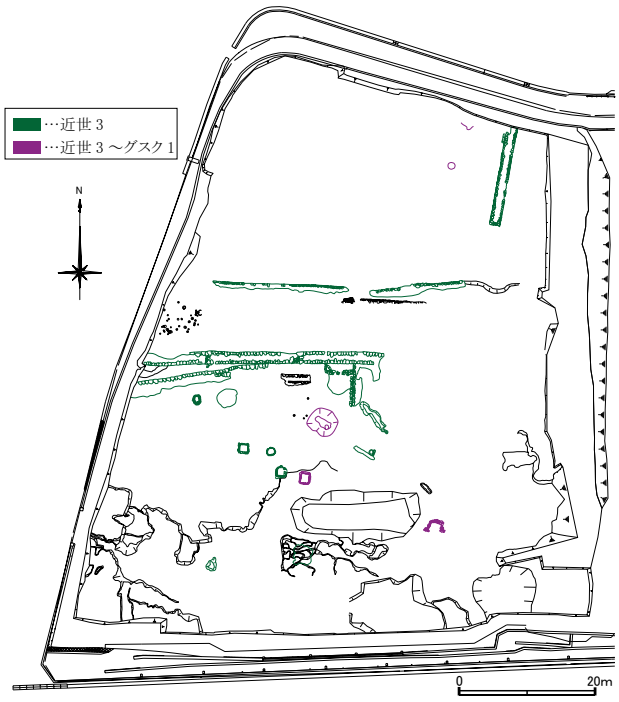
水場遺構　水場遺構は、Ⅰ区で確認された遺構で、井戸及びそれに伴う排水施設などが組み合わさったものの総称である。井戸本体は、石積みに囲まれ、井戸北側には石敷きで広場が設けられている。排水溝も設置され、排水した水は水溜部に溜まるようになっている。このように、井戸から水を汲み、排水までの一連の流れが確認できる遺構である。石敷き部分は、井戸正面とその東側の2段の広場を設け、東側部分が一段高くなっている。段差部分の石積みは、段差下部の石積みと目地が重なるように設置しており、装飾性の高さが窺える。この水場遺構は、造成2上層部分に形成されており、西側で検出されたSQ群とほぼ同時期に機能していたことが考えられる。造成2はSJ3の上部に堆積しており、18世紀後半以降の造成土であることから、水場遺構も18世紀後半以降に構築されたものと想定できる。なお、移転先の中城御殿の古写真で井戸を撮影したものが残存しており、その井戸とも構造が類似している（図版10）。これらのことを踏まえて、中城御殿が移転する直前まで機能しており、構築技術などは移転先の中城御殿へ引き継がれた可能性が窺える。

洞穴遺構　洞穴遺構は、調査区の南側、Ⅴ区とⅥ区の間で確認された遺構である。石灰岩岩盤下部のクチャ層まで掘り込まれており、クチャ層に石積みが形成されていた。調査中も岩盤とクチャの境目から水が湧きだし、排水作業を実施しないと調査出来ない状況だった。洞穴遺構東側は、石積みで閉じられている。遺構内部の埋土は、非常に軟質で粘性が高く、遺物などは混入しない状況であった。このことから、遺構内の埋土は、流れ込んできた土砂などが時間をかけて堆積したものと判断した。遺構内にほとんど遺物が混入しない状況や水が湧く状況から、水溜めとしての施設である可能性が高い。

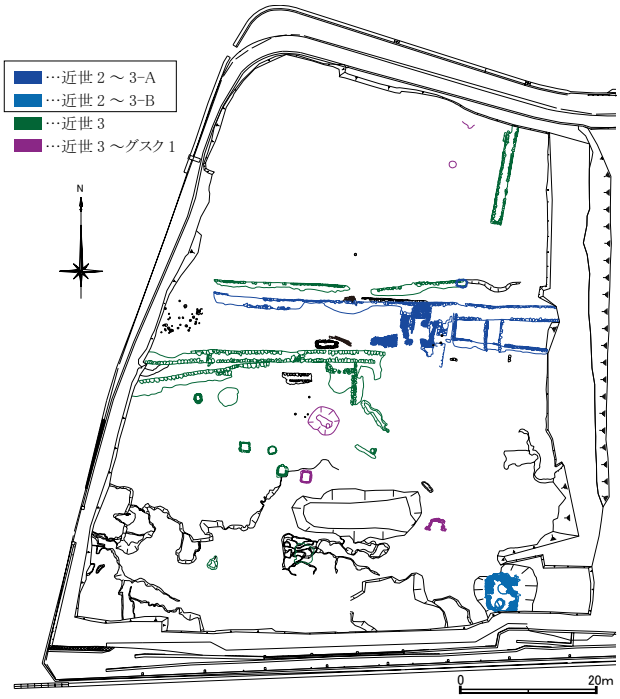
石組土坑　グスク時代の遺構で検出した石組土坑と構造が類似する遺構が確認されている。これらの石組土坑は、遺構内の堆積状況や検出状況、出土遺物などから近世の遺構であると判断した。特に、堆積状況に違いが見られた。グスク時代の石組土坑は、陶磁器に加え、多量の貝類・骨類などの自然遺物が多くみられるが、近世の遺構では、陶磁器及び瓦などは多量に出土したが、骨・貝類などの自然遺物はほとんど含まれていなかった。特にSM8は、灰色瓦が多量に廃棄されている状況だった。また、遺構内埋土は、掘り返された痕跡などがほとんど見られず、短期間の間で埋められていることが想定できたため、石組土坑内には土がない状態で機能していた遺構と考えられる。遺構底部には石敷きなどの痕跡はなく、岩盤や地山（マージ）が露出した状態である。パリノ･サーヴェイの分析結果からは、SM8なども廃棄土坑としての可能性が指摘されている。グスク時代の廃棄土坑との相違点もあることから、廃棄土坑以外の役割も想定できるため、今後の検討を要する。

近世の遺構変遷　近世の遺構は、造成土との関連や遺構の重なりから、近世1から近世3に区別した。これらの遺構変遷を第238図に示す。近世3は、中城御殿創建時からの遺構を示しており、近世2 ～ 3

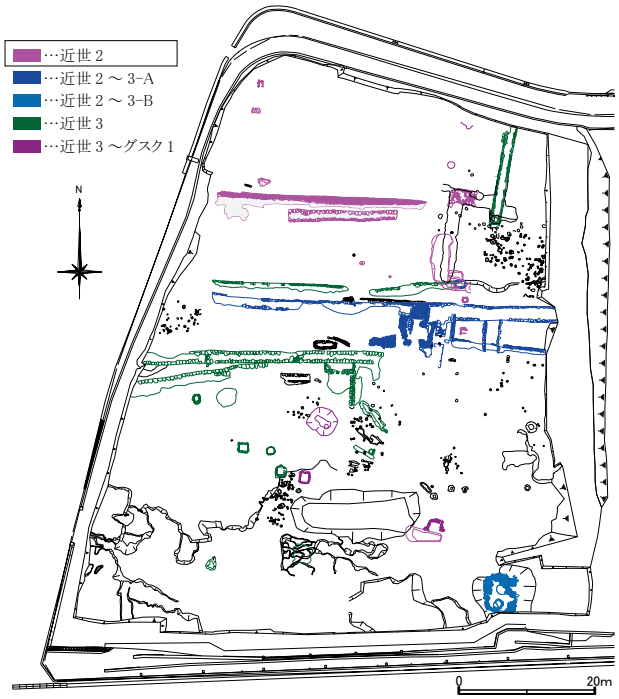
も中城御殿の遺構だと考えられる。この段階では、先述したグスク時代の遺構はほとんどが造成土に覆われ、埋没している状況であった。SA9など屋敷の区画と思われる石積みは確認されたが、建物様相などを把握するのは困難な状況であった。近世2は、最も遺構が多くなる時期で、大規模な造成を行い、屋敷改築などを行っていることが窺え、中城御殿が発展していった時期だと考えられる。北側のSA1が構築され、平場が拡張していったことが考えられる。近世1では、北側の水場遺構などが、機能している。このように、遺構の構築時期などで区別することが出来たが、近世2の段階に近世3の遺



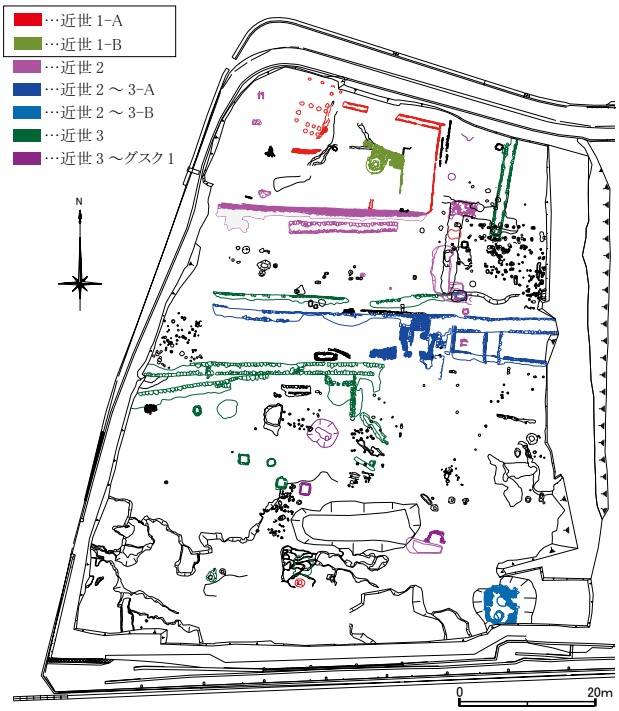
近世3・近世3～グスク1の遺構



近世2～3の遺構



近世2の遺構



近世1の遺構

第238図 近世の遺構変遷

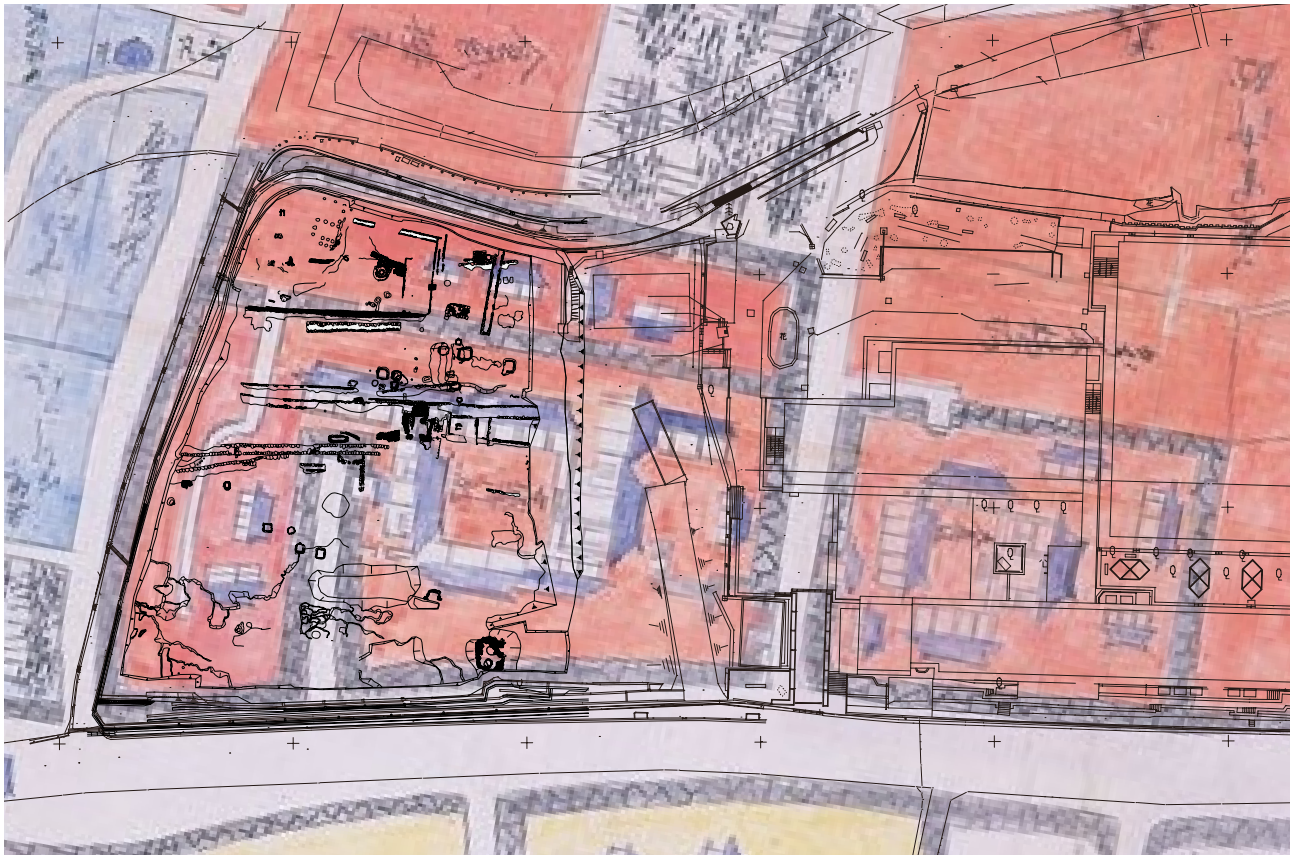
構が機能していた状況かは判然としない。造成4及び造成3によってSA19などは埋められていたことから、SA1が機能していた段階ではSA19は地表に露出していない可能性が高い。調査区中央にある階段状遺構などの上部には造成2に加え、近代頃の土も堆積していた状況から、どの段階で機能終了したか判然としない。

中城御殿の拡張　これらの状況ではあるが、遺構変遷としては、南側から北側にかけて拡張していく様子が窺える。中城御殿は、南側から北側にかけて傾斜している地形を、掘削及び盛土造成、土留め等の土木技術を用いて平地に改変していったことが判明した。造成2及び造成4は大規模な造成工事の痕跡で、SJ3を挟んで堆積していることから、今後細かな造成時期を区別可能であるが、いずれも18世紀代の造成であることが想定され、今後より細かな造成時期を検討する必要がある。18世紀代は、首里古地図が描かれたとされる年代とも一致しており、描かれた屋敷配置との関連性などについて検討する上で貴重な成果が得られている。また、康熙16（1677）年の例寄に玉城･豊見城両家の屋敷を繰り入れて取り広げたという記載があったと東恩納寛淳が述べている（東恩納1950「中城殿」『南島風土記』：再録　東恩納寛淳全集⑦238-240頁）。これらの文献史料との関係性について検討するうえで重要な成果と考えられる。

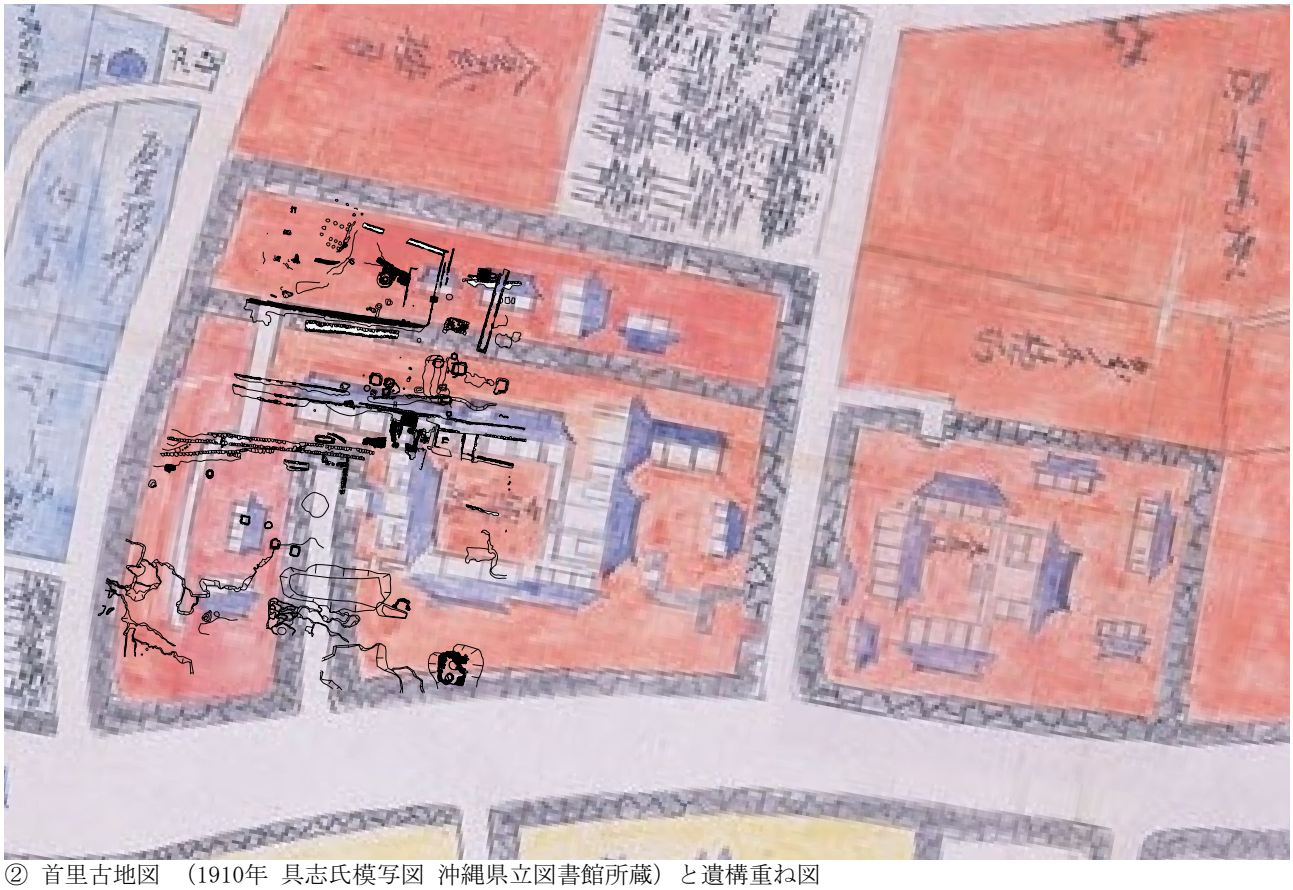
首里古地図と遺構　今回の発掘調査で確認された遺構を、首里古地図に重ねたのが第239図である。首里古地図に描かれた中城御殿を囲む石積みや周辺地形との様子、北側で確認した水場遺構の存在から、現首里高校を囲んでいた石積み、及び調査により得られた遺構の範囲は中城御殿に関連する遺構だと考えられる。地形等に合わせて遺構を重ねたものが第239図①である。この縮尺関係を基にして、遺構の状況と首里古地図を重ねたものが第239図②である。SA1の西側に切石があり、石積みが途切れていた様子が窺えることから、この部分が中城御殿内に東西に延びる石積みだったと想定した。調査区中央の階段状遺構周辺の遺構群は、中城御殿の中心部分の施設に関連する可能性が窺えるが、判然としない。中城御殿内部に描かれていないが、水に関連する遺構は、SS24、洞穴遺構、水場遺構を確認している。これらの関連性や建物様相など、今後検討すべき課題である。

中城御殿移転後の様相　中城御殿は明治8（1975）年に、龍潭池北側の地へ移転している。中城御殿が移転した後の遺構については、判然としない状況であった。屋敷区画などの石積みが残存しているが、建物本体に関連する礎石跡などがほぼ確認されなかったことから、資材の搬出なども含めて検討を行う必要がある。

小結　近世の遺構は、石積み、井戸跡、遺物廃棄遺構など、多種多様な遺構が多くみられ、ほとんどが中城御殿に関連する遺構である。確認された遺構から、中城御殿の拡張の様相や、造成工事の行われた年代など、貴重な成果が得られている。中城御殿が創建され、移転するまでの情報が多く残されており、18世紀代に大きな造成工事が行われていたことが判明した。これらのことは、中城御殿の変遷の様子や、現存している首里古地図、文献史料との関連性を検討するうえで重要な成果といえる。



① 首里古地図　（1910年 具志氏模写図 沖縄県立図書館所蔵）と遺構重ね図
（※周辺地形と合わせて重ねた例）



② 首里古地図　（1910年 具志氏模写図 沖縄県立図書館所蔵）と遺構重ね図
（※遺構と合わせて重ねた例）

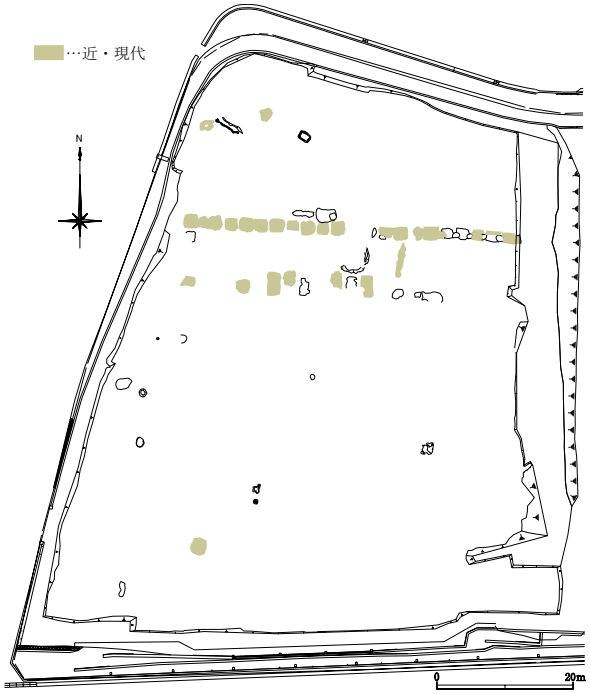
第239図 首里古地図と遺構重ね図

第４節　近･現代

概要　近･現代の遺構は、戦前の沖縄県立第一中学校及び戦後の首里高校に関連する遺構が確認された。調査開始前は、グラウンドとして使用されていたことから、校舎の基礎部分などのほとんどが地中に残存している状況だったと考えられる。今回の発掘調査では、中城御殿が移転した後の利用変遷について確認するため、近･現代の遺構も可能な限り記録作業を実施した（第240図）。

SE1　調査区南東側のＶ区で検出した井戸跡である。検出時には、井戸部分の地表に露出する部分はほぼ残存しておらず、井戸石積みと井戸の掘り方が確認できた。この井戸は基盤層であるクチャ層まで掘りこんだ井戸で、直線的に掘りこまれている。井戸枠の石積みは崩壊が激しく、一部のみが残存している状況だった。

SE1内出土遺物　本土産、中国産の陶磁器、ジーファーを含む青銅製品、明朝系瓦、硯、インク瓶等が確認された。特に硯とインク瓶はSE1内から集中して出土している。硯は51点、インク瓶は12点出土しており、「CAW'S INK 11347」と底面にエンボス加工されたもの（第14図 11）と、胴部円形のもの（第14図 12）の2タイプが出土している。前者のタイプは1点のみの出土だが、11点は胴部円形の形状をしている。SE1から出土した硯とインク瓶は、井戸の使用期間や廃棄年代、学校施設に関連する遺物であるため、重要な資料である。硯には沖縄第一中学校時代を窺わせる「一中」や英字のサイン、使用者の氏名や所属を表すと考えられる線刻が見られる。



近･現代の遺構

第240図 近･現代

類例資料　今回出土したインク瓶の2タイプと同類資料の出土事例は、宮城県仙台市に所在する仙台城二の丸跡の発掘調査報告で確認できる。これらの資料は、第一次大戦頃（1914 ～ 1918年）に形成された廃棄物層内から出土している（東北大学埋蔵文化財調査研究センター編1999）。

廃棄年代　昭和10（1935）年5月時点の沖縄県立第一中学校の校地･校舎配置図と照らし合わせると、SE1は建築物に被っており、昭和5（1930）年には地学室兼用の図書館や校舎等が落成している（養秀同窓会1980）。このことから、沖縄県立第一中学校と改称した1911年から、井戸上部に校舎等が落成する1930年の間でSE1内に物品が廃棄された可能性がある。これらの事をふまえ、廃棄年代や使用者を検討することができる資料といえる。

SM9　Ｉ区で検出した石組土坑で、遺構内には近代頃の土が堆積していた。この土坑内から卵殻の可能性のあるものが確認され、これらは、首里城跡御内原地区のシーリ遺構からも同様事例が確認されている（第4章第5節第1項参照）。今後注意を要する資料である。加えて、摩滅した海産微小貝類も確認されており、砂利敷き等の庭園造成等に関連する可能性があると指摘している。

近代以降の造成　近代以降の土と考えられるⅡ層を含めた上部の土には、モクハチアオイ、クロスジグルマ類、マクラザルなど、沖縄県内ではほぼ出土例がない資料が確認されている（第4章第5節第1項参照）。これらは、工事用の砂に混入するものに由来すると指摘されてている。近代以降の造成に用いられており、様々な場所から土砂を持ち込んでいることが想定できる。

小結　近･現代の遺構は、首里高校の前身となる沖縄県立第一中学校や戦後の首里高校の変遷等に関わることが想定できる。現在でも地域に親しまれている首里高校の歴史や変遷を考えることができる資料である。

第５節　遺構の現地保存

経緯　今回の発掘調査当初は、首里高校校舎改築と埋蔵文化財の取り扱いについて検討を進めていたが、校舎改築の設計変更は難しいとの結論に至り、記録保存調査として実施した。その後、遺構の保存状況等が非常に良く、歴史的意義の高さも評価され、遺構保存の要望が提出された。同時に、校舎改築の早期実現の要望もあった。そのため、関係機関との調整を行い、遺構を現地に保存しつつ、校舎改築を進めることとなった（第6章第1節参照）。

遺構保護　遺構の現地保存についての調整及び作業を進める一方で、調査終了後から地表に露出した状態の遺構の保護対策が急務となった。そこで、遺構保護に必要な資材や保護方法の検討、それらを反映した設計図を作成し、遺構保護対策を実施した（第6章第2節参照）。

遺構保護範囲　遺構保護状況を踏まえて、校舎改築と遺構保護について検討を実施し、基本的な考え方としたのが第193図である。この中で、校舎部分の北側と南側での遺構保護の高さとして、北側は標高86.6m以下、南側は88.6m以下を遺構保護範囲として、遺構を保存することとなった。

小結　これまで述べてきたように、中城御殿の様相や、中城御殿前後の様子、首里高校に至るまでの地域の歴史をもった当遺跡が現地に保存されることとなった。今後、これらの保存した遺構の活用等について検討していく必要がある。

第６節　総括

ここまで、中城御殿の創建前、中城御殿の機能していた時期、移転後の遺構について述べてきた。今回の発掘調査で得られた遺構及び遺物は、保存状況が良いものが多く、堆積状況などが判明し、廃棄年代などに明確に迫ることができるものもあった。その遺構のいくつかを年代観の基礎としながら、時期区分を行い、中城御殿の変遷を確認することが出来た。時期国王となる世子の暮らした邸宅については、文献史料等の情報が少ない状況であったが、今回の発掘調査によりこれらの情報を得られたと共に、首里城をはじめとする首里地域における関連施設等の様相を考える上でも貴重な成果となっている。関係機関との調整の結果、これらの情報を含んだ中城御殿の遺構は、現地で保存される事となった。今回の発掘調査により得られた成果は、首里地域を始め、沖縄県の歴史を解明するうえで、様々な検討材料となり得る。

今回の発掘調査では、おびただしい数の遺物が出土しており、調査で得られた全ての情報を掲載することが困難であった。特に今回、報告書中に掲載していない造成土中からの出土遺物にも、時期判別を行う際の良好な資料が数多く含まれていた。これらの分析を行うことで、より詳細に中城御殿の姿を解明することが可能だと考えられるため、今後の課題としたい。

最後に、発掘調査及び資料整理作業、様々な調整事項に際しては、多くの方々に力を貸していただき、指導･助言を賜った。ここに記して感謝申し上げる。

引用･参考文献（第4章第5節、第5章を除く）

新垣力　2003　「沖縄出土の清朝陶磁」『沖縄埋文紀要』1 沖縄県立埋蔵文化財センター

2013　「17世紀前半～中葉の琉球陶器について-「初期無釉陶器」にみる薩摩焼の影響-」『鹿児島考古』第43号 鹿児島考古学会

2014　「17 ～ 19世紀の琉球列島における貿易陶磁の様相」『琉球列島の貿易陶磁』第35回日本貿易陶磁研究集会（沖縄大会）発表要旨･資料集 日本貿易陶磁研究会

新垣力・瀬戸哲也 2005 「沖縄における14世紀～ 16世紀の中国白磁の再整理 付．14 ～ 16世紀の青磁の様相整理メモ」『沖縄埋文紀要3』沖縄県立埋蔵文化財センター

有銘倫子 2011 「沖縄県内における遺跡出土硯」『南島考古』第30号 沖縄考古学会

池田榮史･津波古聡 1991 「灰釉碗の話」『沖縄県立博物館紀要』第17号 沖縄県立博物館

石井龍太 2006 「琉球近世瓦の分類と編年～琉球近世瓦の研究その3 ～」『南島考古』第25号 沖縄考古学会

2007 「湧田古窯の再評価-湧田古窯跡の軒丸瓦-」『南島考古』第26号 前同

2008 「湧田古窯の再評価-湧田古窯跡の軒平瓦-」『南島考古』第27号 前同

2010 『島瓦の考古学-琉球と瓦の物語』新典社選書 39 新典社

上原靜　2013 『琉球古瓦の研究』榕樹書林

上原靜・仲宗根求・小原裕也・伊波勝美・上門大悟 2011 「喜名古窯跡（瓦編）」『読谷村立歴史民俗資料館紀要』第35号 読谷村立歴史民俗資料館

大分県教育庁埋蔵文化財センター 2013 『豊後府内 17 中世大友府内町跡第88･95次調査 一般国道10号古国府拡幅に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(8)（第2分冊)』大分県教育庁埋蔵文化財センター第63集 大分県教育庁埋蔵文化財センター

2016 『豊後府内を掘る～明らかになった戦国時代の都市～』豊の国考古学ライブラリー④

大橋康二 1987 「十六･十七世紀における日本出土の中国磁器について」『東アジアの考古と歴史 下』岡崎敬先生退官記念論集 岡崎敬先生退官記念事業会

沖縄県立博物館 1993『旧中城御殿-石牆工事地域にかかる第一次発掘調査-』沖縄県立博物館

1994 『旧中城御殿-旧中城御殿石垣工事にかかる第2次発掘調査』沖縄県立博物館

1995 『旧中城御殿-旧中城御殿石垣工事にかかる第3次発掘調査』沖縄県立博物館

1992 『旧中城御殿関係資料集』沖縄県立博物館

沖縄県立博物館・美術館 那覇市立壷屋焼物博物館 2011 『琉球陶器の来た道』沖縄県立博物館･美術館 那覇市立壷屋焼物博物館

沖縄県教育委員会 1993 『湧田古窯跡(Ⅰ)- 県庁舎行政棟建設に係る発掘調査』沖縄県文化財調査報告書第111集 沖縄県教育委員会

1998 『首里城跡-京の内跡発掘調査報告書（Ⅰ）-』同第132集

沖縄県立埋蔵文化財センター 2001 『首里城跡－下之御庭跡・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門跡発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第3集

2007 『渡地村跡』前同第46集

2009 『首里城跡-京の内跡発掘調査報告書（Ⅱ）-』前同第49集

2010a『中城御殿跡-県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書（Ⅰ）-』前同第53集

2010b『首里城跡-御内原地区発掘調査報告書(Ⅰ)-』前同第54集

2011 『中城御殿跡-県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書（2）-』前同第58集

2012a『首里城跡-京の内跡発掘調査報告書（Ⅳ）-平成6年度調査の遺物編(1)』前同第62集

2012b『中城御殿跡-県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書（3）-』前同第63集

2013a『中城御殿跡-県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書（4）-』前同第67集
2013b『首里城跡－淑順門・奉神門埋甕地区発掘調査報告書―』前同第68集
2013c『首里城跡-御内原地区発掘調査報告書(2)-』前同第69集
2014a『首里城跡-淑順門東地区発掘調査報告書-』前同第72集
2014b『首里城跡-京の内跡発掘調査報告書（Ｖ）-平成6年度調査の遺物編(2)』前同第73集
2015a『キャンプ瑞慶覧内病院地区に係る文化財発掘調査報告書1-普天間古集落遺跡-』前同第74集
2015b『首里城跡-銭蔵地区発掘調査報告書-』前同第77集
2015c『ふたつの中城御殿跡』沖縄県立埋蔵文化財センター平成27年度企画展図録
2016a『首里城跡-銭蔵東地区発掘調査報告書-』前同第80集
2016b『中城御殿跡-県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書（5）-』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第84集
小野正敏 1982 「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』第2号 日本貿易陶磁研究会
嘉手納宗徳 1970 『首里古地図』沖縄風土記研究会
亀井明徳ほか 2002 『明代前半期白瓷研究』亜州古陶瓷学会
九州陶磁学会 2000 『九州陶磁の編年』九州陶磁学会10周年記念 九州陶磁学会
球陽研究会（編）1974 『球陽 読み下し編』沖縄文化史料集成5 角川書店
京都市埋蔵文化財研究所 2004 『平安京左京北辺四坊－第2分冊（公家町）－』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第22冊
金武町誌編纂委員会 1983 『金武町誌』金武町役場
佐賀県立九州陶磁文化館 1998 『平成10年企画展 沖縄のやきもの-南海からの香り-』佐賀県立九州陶磁文化館
柴田圭子 2011 「今帰仁城跡出土明代青化瓷の研究（1)」『今帰仁城跡発掘調査報告書Ｖ』今帰仁村文化財調査報告書第29集 今帰仁村教育委員会
瀬戸哲也 2010 「沖縄における12 ～ 16世紀の貿易陶磁－中国産陶磁を中心とした様相と組成－」『貿易陶磁研究』第30号 日本貿易陶磁研究会
瀬戸哲也・仁王浩司・玉城靖・宮城弘樹・安座間充・松原哲志 2007 「沖縄における貿易陶磁研究－14 ～ 16世紀を中心に－」『沖縄埋文紀要』5 沖縄県立埋蔵文化財センター
高橋誠一 2000 『「首里古地図」と首里城下町の復原』東西学術研究所紀要 第33巻 関西大学東西学術研究所
田中克子 2003 「博多遺跡群出土陶磁に見る福建古陶磁（その3）宋・元代白磁をめぐる問題」『博多研究会誌』第11号
陳建中 1999 「徳化民窯青花」
東北大学埋蔵文化財調査研究センター 1999 『東北大学埋蔵文化財調査年報』11 東北大学埋蔵文化財調査研究センター 東北大学埋蔵文化財調査研究センター
都築晶子 2005 「龍のひそむ島-近世琉球の風水-」『沖縄県史各論編第4巻 近世』沖縄県教育委員会
永井久美男 1996 『日本出土銭総覧 1996年版』兵庫埋蔵銭調査会
仲座久宜 2009 「シーリ遺構から見る御内原のくらし-平成19年度首里城跡御内原北地区発掘調査から-」『紀要沖縄埋文研究』第6号 沖縄県立埋蔵文化財センター
那覇市教育委員会 1992 『壷屋古窯跡群Ⅰ-個人住宅建設工事に伴う緊急発掘調査-』那覇市文化財調査報告書第23集
2000 『ナーチュー毛古墓群-那覇新都心土地区画整備事業に伴う緊急発掘調査Ⅶ-』前同第

44集
2001 『銘刈古墓群（Ⅲ）-那覇新都心土地区画整備事業に緊急発掘調査報Ⅸ』前同第50集
2010 『那覇市内遺跡Ⅲ-首里旧金城村跡- -首里旧真和志村跡-』前同第82集
新島奈津子 2005 「古琉球における那覇港湾機能-国の港としての那覇港-」『専修史学』第39号 専修大学
東恩納寛淳 1950 『南島風土記-沖縄･奄美大島地名辞典-』: 再録1980『東恩納寛淳全集 7』琉球新報社
福島清 2000 「冊封儀式に見る琉球建築(下)」『首里城研究』№5 首里城研究会
福建博物館 1997 「漳州窯－福建漳州地区明清窯址発掘調査報告之一」福建人民社
三杉隆敏･榊原昭二 1998 『新装版 陶磁器染付文様事典』柏書房株式会社
森田勉 1982 「14 ～ 16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』第2号 日本貿易陶磁研究会
森達也 2014 「清朝輸出陶瓷の生産地について 巡回展「魅惑の清朝陶磁」に寄せて」『陶説』第734号公益社団法人日本陶磁協会
森毅 1995 「十六・十七世紀における陶磁器の様相とその流通－大阪の資料を中心に－」『ヒストリア』第149号
2005 「中世後期輸入陶磁器の分類と変化」『中世窯業の諸様～生産技術の展開と編年～』資料集第3分冊
向井亙 2003 「タイ黒褐釉四耳壷の分類と年代」『貿易陶磁研究』第23号 日本貿易陶磁研究会
養秀同窓会 1980 『養秀百年』養秀同窓会

報告書抄録

ふりがな	なかぐすくうどぅんあと しゅりこうこうない
書名	中城御殿跡（首里高校内）
副書名	首里高校校舎改築に伴う発掘調査
巻次	—
シリーズ名	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第93集
編著者名	亀島慎吾(編)　平良和輝　宮城淳一　大堀皓平　黒住耐二　高宮広土　パリノ・サーヴェイ株式会社
編集機関	沖縄県立埋蔵文化財センター
所在地	〒903-0125　沖縄県中頭郡西原町字上原193-7　TEL　098-835-8752
発行年月日	平成29（2017）年７月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
中城御殿跡 （首里高校内）	沖縄県那覇市 首里真和志町 ２丁目	472018	―	26° 13′ 10″	127° 42′ 45″	2013.07.29～ 2015.02.27	5,230	首里高校校舎改築に伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中城御殿跡	屋敷跡	グスク時代	柱穴、土坑、石組土坑	中国産陶磁器、東南アジア産陶磁器、石製品、ガラス製品、	中城御殿創建以前のグスク時代の遺構を検出した。 近世は検出した遺構や造成土の状況から3つに区分することが出来た。 中城御殿移転後の遺構も確認され、首里高校に関連する遺構及び遺物が見られた。
		近世	石積、一括廃棄遺物、柱穴、土坑、石組土坑、階段状遺構、石敷き、井戸	中国産陶磁器、東南アジア産陶磁器、本土産陶磁器、沖縄産無釉陶器、沖縄産施釉陶器、石製品、骨製品、貝製品、ガラス製品、青銅製品、金属製品、明朝系瓦、土器	
		近代～現代	井戸、集石遺構、石列、石組土坑	中国産陶磁器、沖縄産無釉陶器、沖縄産施釉陶器、本土産陶磁器、ガラス製品、石製品	

要約

中城御殿は国王の世子が暮らした邸宅跡で、近世初期に創建され、1875（明治8）年に那覇市首里大中町の龍潭池の北側に移転した。移転後の当地は、沖縄県立第一中学校を経て、現在の首里高校となっている。

首里高校校舎改築に伴い実施された発掘調査である。当初、記録保存調査として実施していたが、関係機関と調整を行い、一部の遺構を除き現地保存が決定した。

調査の結果、グスク時代、近世、近代～現代の遺構、遺物を確認した。グスク時代の遺構は柱穴や石組土坑がある。近世の遺構は中城御殿が機能していた時期の石積みや井戸など多種多様な遺構及び遺物を確認した。近代～現代の遺構は、首里高校校舎等に関連する遺構が確認された。

近世及びグスク時代の遺構は、遺構上部に造成土が覆う状況が確認され、遺構内に廃棄された遺物が後世の撹乱等を受けず保存状態が良かった。各種陶磁器等がまとまった状況で確認されたことから、遺構の年代観や遺構に伴う造成土の年代観を把握することができた。上記のことから中城御殿創建以前の状況や中城御殿の屋敷配置や平場拡張時期などを検討する上でも、重要な成果といえる。

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書　第 93 集

中 城 御 殿 跡（首里高校内）

－首里高校校舎改築に伴う発掘調査－

発行年　平成 29（2017）年7月
発　行　沖縄県立埋蔵文化財センター
編　集　沖縄県立埋蔵文化財センター
〒903-0125　沖縄県中頭郡西原町字上原 193－7
TEL　098（835）8751・8752

印　刷　有限会社 ダイヤプリント
〒901-0146　沖縄県那覇市具志 2 丁目 28-17
TEL　098（859）0909